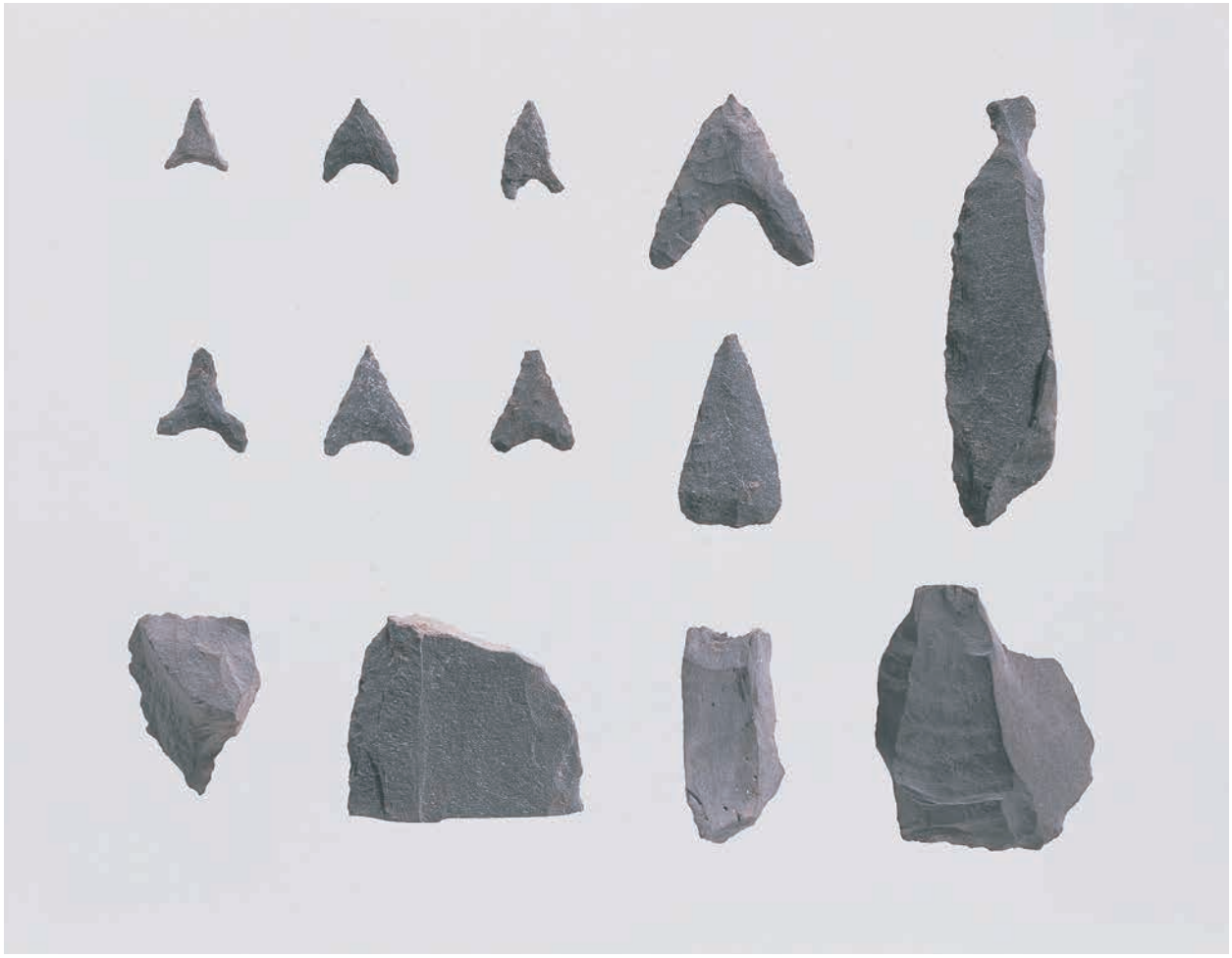
神子曽遺跡１区下層 SK230 出土縄文土器



神子曽遺跡１区出土石器

神子曽遺跡１区出土石器

神子曽遺跡１区出土石器

神子曽遺跡１区 SX212 出土弥生土器

神子曽遺跡１区方形周溝墓・土坑出土弥生土器

神子曽遺跡１区 SK238 出土土器

神子曽遺跡１区土坑他出土土器

神子曽遺跡１区 SK10 出土羽口・鉄滓

曽根遺跡出土旧石器

例　言

1　本書は南あわじ市に所在する才門遺跡、石田遺跡、神子曽遺跡、曽根遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は主要地方道洲本灘賀集線（阿万バイパス）道路改良事業に伴うもので、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所の依頼に基づき、現地調査については兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所を調査機関として実施した。出土品整理作業については平成23年度は兵庫県立考古博物館、平成24年度・平成25年度は公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部（兵庫県立考古博物館内）において実施した。

3　調査の推移

（発掘作業）

確認調査　平成９年６月17日～６月19日

平成13年３月１日～３月14日

平成14年10月23日・24日

平成15年10月23日・24日、10月27日～10月29日

実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

本発掘調査　平成９年12月15日～12月22日

平成10年10月26日～10月30日

実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

平成16年10月18日～平成17年３月18日（才門遺跡）

平成16年10月18日～平成17年３月18日（石田遺跡）

平成16年10月18日～平成17年３月18日（神子曽遺跡）

実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

工事請負：株式会社　森長組

平成 9年12月15日～平成 9年12月22日（曽根遺跡）

平成10年10月26日～平成10年10月30日（曽根遺跡）

実施機関：兵庫県淡路県民局洲本土木事務所

職員派遣：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

（出土品整理事業）

平成23年4月1日から平成24年3月31日

実施機関：兵庫県立考古博物館

平成24年4月1日から平成26年3月31日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4　才門遺跡・石田遺跡・神子曽遺跡の空中写真撮影ならびに図化作業は株式会社ウエスコに委託して実施した。

5　本書に掲載した遺物写真は株式会社タニグチフォトに委託して撮影した。

6　本書の編集は公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部鐵英記が担当し、各項目の執筆者については目次および文末に明記している。

7　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

8　本調査の期間、および本書の執筆・編集にあたっては下記の方々よりご指導を頂戴した。期して謝意を表したい（順不同・敬称略）

山崎　裕司　　坂口　弘貢　　定松　佳重　　的崎　薫

凡　例

1　本書で示した標高は、東京湾平均海水準（T.P.）を用いている。

2　本書の図で示した方位は、調査地点における座標北である。

3　本書で用いた地層の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による

4　本書で用いた遺構の略称は次のとおりである。

なお、遺構番号は原則として調査時のものをそのまま踏襲したため、一部の遺構については略称と異なるものもある。

SA　柵・垣
SB　掘立柱建物
SD　溝
SH　竪穴住居
SK　土坑
P　柱穴
SR　流路
SX　墓・不明遺構

5　本書に掲載した遺物の断面は以下のように表現している。

縄文土器・弥生土器	黒塗り
土師器	白抜き
須恵器	黒塗り
陶器	アミ掛け（薄）
磁器	アミ掛け（濃）
金属器	斜線
石器・玉	白抜き

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過（鐵）…… 1
　第１節　調査に至る経緯と分布調査
　第２節　確認調査
　第３節　本発掘調査
　第４節　整理作業
第２章　遺跡の位置と環境（鐵）…… 6
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
第３章　才門遺跡（森内）…… 11
　第１節　概　要（遺構の概要と層序）
　第２節　遺　構
　第３節　遺　物（石器：藤田）
　第４節　小　結
第４章　石田遺跡（森内）…… 13
　第１節　概　要（遺構の概要と層序）
　第２節　遺　構
　第３節　遺　物（石器：藤田）
　第４節　小　結
第５章　神子曽遺跡…… 19
　第１節　概　要（遺構の概要と層序）
　第２節　遺　構（鐵・森内）
　第３節　遺　物（土器：篠宮・森内、石器：藤田、金属器関連：村上泰樹）
　第４節　小　結（鐵・森内）
第６章　曽根遺跡（鐵）…… 67
　第１節　概　要（遺構の概要と層序）
　第２節　遺　構
　第３節　遺　物（石器：藤田）
　第４節　小　結
第７章　自然科学的調査…… 74
　第１節　神子曽遺跡出土土器の胎土分析（縄文土器・弥生土器）……パリノ・サーヴェイ株式会社(74)
　第２節　神子曽遺跡出土サヌカイト製石器の産地分析……株式会社パレオ・ラボ(86)
　第３節　神子曽遺跡出土製鉄滓の分析調査……九州テクノリサーチ・TACセンター(90)
　第４節　土壌洗い出し微細遺物の同定……パリノ・サーヴェイ株式会社(96)
　第５節　才門遺跡、石田遺跡、及び神子曽遺跡の地形環境……青木哲哉（98）
第８章　総　括（鐵）……114
報告書抄録……116

巻首写真図版目次

巻首写真図版１　調査地点遠景（南南東から）／調査地点遠景（西から）

巻首写真図版２　才門遺跡調査区全景（南西から）／石田遺跡調査区全景（南西から）

巻首写真図版３　神子曽遺跡北半全景（北から）／神子曽遺跡南半全景（東北東から）

巻首写真図版４　神子曽遺跡１区下層SK15土器出土状況（南から）

神子曽遺跡１区下層SK230土器出土状況（北から）

巻首写真図版５　神子曽遺跡１区下層全景（北から）

神子曽遺跡１区下層SX201（東から）

巻首写真図版６　神子曽遺跡１区下層SX203（南から）

神子曽遺跡１区下層SX203 東周溝土器出土状況（北から）

巻首写真図版７　神子曽遺跡１区下層SX204（南東から）

神子曽遺跡１区下層SX205・SX210（南西から）

巻首写真図版８　神子曽遺跡１区下層SX207（北東から）

神子曽遺跡１区下層SX207 東周溝土器出土状況（南東から）

巻首写真図版９　神子曽遺跡１区下層SK238 土器出土状況（南東から）

神子曽遺跡１区下層SK239 土器出土状況（南東から）

巻首写真図版10　神子曽遺跡６区SX604（手前）・SX603・SX602（北西から）

神子曽遺跡６区SX602（西から）

巻首写真図版11　神子曽遺跡６区SX801（南から）

神子曽遺跡８区SX801 西周溝土器出土状況（南から）

巻首写真図版12　神子曽遺跡１区下層SK230出土縄文土器　神子曽遺跡１区出土石器

巻首写真図版13　神子曽遺跡１区出土石器／神子曽遺跡１区出土石器

巻首写真図版14　神子曽遺跡１区SX212出土弥生土器／神子曽遺跡１区方形周溝墓・土坑出土弥生土器

巻首写真図版15　神子曽遺跡１区SK238出土土器／神子曽遺跡１区土坑他出土土器

巻首写真図版16　神子曽遺跡１区SK10出土羽口・鉄滓／曽根遺跡出土旧石器

図版目次

図版１　才門遺跡・石田遺跡・神子曽遺跡　調査区位置図

図版２　才門遺跡・石田遺跡　遺構全体図

図版３　才門遺跡　調査区全体図・土層断面図

図版４　才門遺跡　遺構平面図・断面図１

図版５　才門遺跡　遺構平面図・断面図２

図版６　才門遺跡　出土遺物

図版７　石田遺跡　調査区全体図・土層断面図

図版８　石田遺跡　遺構配置図

図版９　石田遺跡　遺構平面図・断面図１

図版10　石田遺跡　遺構平面図・断面図２

図版11　石田遺跡　遺構平面図・断面図３

図版12　石田遺跡　出土遺物１
図版13　石田遺跡　出土遺物２
図版14　石田遺跡　出土遺物３
図版15　神子曽遺跡　調査区全体図
図版16　神子曽遺跡　１区　下層　調査区全体図・土層断面図
図版17　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図１
図版18　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図２
図版19　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図３
図版20　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図４
図版21　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図５
図版22　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図６
図版23　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図７
図版24　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図８
図版25　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図９
図版26　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図10
図版27　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図11
図版28　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図12
図版29　神子曽遺跡　１区　下層遺構平面図・断面図13
図版30　神子曽遺跡　１区　上層　調査区全体図・土層断面図
図版31　神子曽遺跡　１区　上層遺構平面図・断面図１
図版32　神子曽遺跡　１区　上層遺構平面図・断面図２
図版33　神子曽遺跡　１区　上層遺構平面図・断面図３
図版34　神子曽遺跡　２区　調査区全体図・土層断面図
図版35　神子曽遺跡　３～５区　調査区全体図・土層断面図
図版36　神子曽遺跡　２区・３～５区　遺構平面図・断面図
図版37　神子曽遺跡　６・７区　調査区全体図・土層断面図
図版38　神子曽遺跡　６区　遺構平面図・断面図１
図版39　神子曽遺跡　６区　遺構平面図・断面図２
図版40　神子曽遺跡　６区　遺構平面図・断面図３
図版41　神子曽遺跡　８区　調査区全体図・土層断面図
図版42　神子曽遺跡　８区　遺構平面図・断面図１
図版43　神子曽遺跡　８区　遺構平面図・断面図２
図版44　神子曽遺跡　８区　遺構平面図・断面図３
図版45　神子曽遺跡　８区　遺構平面図・断面図４
図版46　神子曽遺跡　９区　調査区全体図・土層断面図
図版47　神子曽遺跡　９区　遺構平面図・断面図１
図版48　神子曽遺跡　９区　遺構平面図・断面図２
図版49　神子曽遺跡　出土土器１（縄文）

図版50　神子曽遺跡　出土土器２（縄文）
図版51　神子曽遺跡　出土土器３（縄文）
図版52　神子曽遺跡　出土土器４（縄文）
図版53　神子曽遺跡　出土土器５（弥生）
図版54　神子曽遺跡　出土土器６（弥生）
図版55　神子曽遺跡　出土土器７（弥生）
図版56　神子曽遺跡　出土土器８（弥生）
図版57　神子曽遺跡　出土土器９（弥生）
図版58　神子曽遺跡　出土土器10（弥生）
図版59　神子曽遺跡　出土土器11（弥生）
図版60　神子曽遺跡　出土土器12（古代・中世）１
図版61　神子曽遺跡　出土土器13（古代・中世）２
図版62　神子曽遺跡　出土土器14（古代・中世）３
図版63　神子曽遺跡　出土土器15（古代・中世）４
図版64　神子曽遺跡　出土土器16（古代・中世）５
図版65　神子曽遺跡　出土土器17（古代・中世）６
図版66　神子曽遺跡　出土石器１
図版67　神子曽遺跡　出土石器２
図版68　神子曽遺跡　出土石器３
図版69　神子曽遺跡　出土石器４
図版70　神子曽遺跡　出土石器５
図版71　神子曽遺跡　出土石器６
図版72　神子曽遺跡　出土石器７
図版73　神子曽遺跡　出土石器８
図版74　神子曽遺跡　出土石器９
図版75　神子曽遺跡　出土石器10
図版76　神子曽遺跡　１・６・８区　出土金属器
図版77　神子曽遺跡　１区SK10出土羽口
図版78　神子曽遺跡　１区SK10出土鉄滓１
図版79　神子曽遺跡　１区SK10出土鉄滓２
図版80　神子曽遺跡　ピット出土羽口　SX07・ピット出土鉄滓

写真図版目次

写真図版１　才門遺跡　調査区全景（南から）／SD02（南から）
写真図版２　才門遺跡　SD02断面（西から）／SR01（北から）／SR01断面（南から）／SK01（東から）
SK02断面（東から）
写真図版３　才門遺跡　土器・石器
写真図版４　石田遺跡　１・２区全景（北から）／２区全景（北から）／３区全景（北から）

写真図版５　石田遺跡　４区全景（北から）／５区全景（北から）
写真図版６　石田遺跡　SB01・SB02（北から）／SB01（北から）
写真図版７　石田遺跡　SB01（北から）／SD01-3 検出（南から）／SD01-3（南から）
SD01-2断面（東から）／SD04断面（南から）
写真図版８　石田遺跡　SK01・02（西から）／SK01・02土器出土状況（西から）／SK03（北から）
SK03炭化物出土状況（東から）／SK04（東から）／SK04断面（南から）
写真図版９　石田遺跡　１区土器１
写真図版10　石田遺跡　１区土器２
写真図版11　石田遺跡　２区土器１
写真図版12　石田遺跡　２区土器２・石器
写真図版13　神子曽遺跡　１区下層全景（北から）／１区SK230土器出土状況（北から）
写真図版14　神子曽遺跡　１区SK15上層（南から）／１区SK15下層（西から）
１区SK15断面（南から）／１区SK11下層（南から）
１区SK11断面（南から）
写真図版15　神子曽遺跡　１区SH201・SX203検出（南から）／１区SH201（西から）
写真図版16　神子曽遺跡　１区SX201検出（南から）／１区SX201（東から）
写真図版17　神子曽遺跡　１区SX201主体部（東から）／SX201第１主体部横断（東から）
SX201第１主体部縦断（南から）／SX201第２主体部横断（東から）
SX201第２主体部縦断（南から）／１区SX202検出状況（東から）
写真図版18　神子曽遺跡　１区SX202（北西から）／１区SX203（南西から）
写真図版19　神子曽遺跡　１区SX203（北西から）／１区SX203東周溝土器出土状況（北東から）
１区SX203西周溝土器出土状況（南西から）
１区SX203東周溝土器出土状況（北西から）
１区SX203東周溝土器出土状況（北東から）
写真図版20　神子曽遺跡　１区SX204検出状況（南から）／１区SX204（南東から）
写真図版21　神子曽遺跡　１区SX204西周溝土器出土状況（南東から）
１区SX204西周溝土器出土状況（南東から）／１区SX205（南から）
１区SX206（南から）
写真図版22　神子曽遺跡　１区SX207検出状況（東から）／１区SX207（東から）
１区SX207東周溝土器（南から）
１区SX207北周溝土器（西から）
写真図版23　神子曽遺跡　１区上層全景（北から）／１区上層全景（南から）
写真図版24　神子曽遺跡　１区P517（西から）／１区P517銅銭出土状況（西から）
１区P517出土銅銭（西から）／１区SK06上層（東から）
１区SK06下層（東から）／１区SK06完掘（東から）
１区SK10（南西から）／１区SK10断面（南から）

写真図版25　神子曽遺跡　1区SK12断面（東から）／1区SK13断面（北から）
1区SK02断面（東から）／1区SK03断面（南から）
1区SB106P10（南から）／1区SB106P11（南から）
1区SB106P26（南から）／1区包含層出土土器（南から）
写真図版26　神子曽遺跡　2区全景（南から）／2区全景（南から）／2区SK01（西から）
写真図版27　神子曽遺跡　2区SD201（東から）／2区SB201（東から）／2区P01（東から）
2区P04（東から）
写真図版28　神子曽遺跡　3区全景（南から）／4区全景（南から）
写真図版29　神子曽遺跡　4区SK01（東から）／5区SB501（南から）／6区全景（南から）
写真図版30　神子曽遺跡　6区SB601・SX604（西から）／6区SX601検出状況（南から）
写真図版31　神子曽遺跡　6区SX601（東から）／　6区SX601（南から）
写真図版32　神子曽遺跡　6区SX602検出状況（西から）／6区SX602（南から）
写真図版33　神子曽遺跡　左:6区SX602主体部検出状況（南から）
右:6区SX602主体部断面（南から）
6区SX602北周溝土器出土状況（南東から）
6区SX602北周溝土器出土状況（北東から）
写真図版34　神子曽遺跡　6区SX603検出状況（西から）／6区SX603（南東から）
写真図版35　神子曽遺跡　6区SX603第1主体部検出状況（南から）
6区SX603第1主体部断面（南から）
6区SX603第2主体部検出状況（南から）
6区SX603第2主体部断面（南から）
写真図版36　神子曽遺跡　6区SX604（南西から）／6区SX602～604（南から）
写真図版37　神子曽遺跡　8区全景（南から）／8区SB802～806（南西から）
写真図版38　神子曽遺跡　8区SB801（北から）／8区SB802（東から）
写真図版39　神子曽遺跡　8区SB803（南から）／8区SB804（西から）
写真図版40　神子曽遺跡　8区SX801検出状況（南から）／8区SX801（南から）
写真図版41　神子曽遺跡　8区SX801西周溝土器出土（南から）／8区SK802土器（西から）
写真図版42　神子曽遺跡　8区SK802土器（南から）／8区SK802断面（西から）
8区SR801（北から）／8区SR801（東から）
写真図版43　神子曽遺跡　8・9区全景（北から）／9区全景（南から）
写真図版44　神子曽遺跡　9区北半土坑群（東から）／9区南半土坑群（東から）
写真図版45　神子曽遺跡　9区SK902（東から）／9区SK903（東から）
9区SK909（東から）／9区SK910（南から）
写真図版46　神子曽遺跡　縄文土器1
写真図版47　神子曽遺跡　縄文土器2
写真図版48　神子曽遺跡　縄文土器3
写真図版49　神子曽遺跡　縄文土器4
写真図版50　神子曽遺跡　縄文土器5

写真図版51　神子曽遺跡　縄文土器６
写真図版52　神子曽遺跡　弥生土器１
写真図版53　神子曽遺跡　弥生土器２
写真図版54　神子曽遺跡　弥生土器３
写真図版55　神子曽遺跡　弥生土器４
写真図版56　神子曽遺跡　弥生土器５
写真図版57　神子曽遺跡　弥生土器６
写真図版58　神子曽遺跡　弥生土器７
写真図版59　神子曽遺跡　弥生土器８・玉
写真図版60　神子曽遺跡　弥生土器９
写真図版61　神子曽遺跡　弥生土器10・土師器
写真図版62　神子曽遺跡　弥生土器11
写真図版63　神子曽遺跡　弥生土器12
写真図版64　神子曽遺跡　土器１
写真図版65　神子曽遺跡　土器２
写真図版66　神子曽遺跡　土器３
写真図版67　神子曽遺跡　土器４
写真図版68　神子曽遺跡　土器・土製品・陶磁器１
写真図版69　神子曽遺跡　土器・陶磁器２
写真図版70　神子曽遺跡　石器１
写真図版71　神子曽遺跡　石器２
写真図版72　神子曽遺跡　石器３
写真図版73　神子曽遺跡　石器４
写真図版74　神子曽遺跡　石器５
写真図版75　神子曽遺跡　石器６
写真図版76　神子曽遺跡　石器７
写真図版77　神子曽遺跡　石器８
写真図版78　神子曽遺跡　石器９
写真図版79　神子曽遺跡　石器10
写真図版80　神子曽遺跡　金属製品
写真図版81　神子曽遺跡　羽口１
写真図版82　神子曽遺跡　鉄滓・羽口２
写真図版83　曽根遺跡　調査前（南東から）／旧河道（東から）／旧河道（北西から）
写真図版84　曽根遺跡　石器・土器

挿図目次

図１　調査地点位置図
図２　周辺遺跡分布図
図３　出土玉
図４　椀形鉄滓の大きさ（長さ・幅・厚さ）の傾向
図５　椀形鉄滓の密度
図６　曽根遺跡　調査区配置図
図７　曽根遺跡　A地区・B地区　遺構平面図
図８　曽根遺跡　土層断面図
図９　曽根遺跡　C地区　遺構平面図
図10　曽根遺跡　出土遺物
図11　粒度階における鉱物・岩石出現頻度
図12　砂の粒径組成
図13　砕屑物・基質・孔隙の割合
図14　胎土薄片（1）
図15　胎土薄片（2）
図16　胎土薄片（3）
図17　サヌカイト産地推定判別図（1）
図18　サヌカイト産地推定判別図（2）
図19　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(1)
図20　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(2)
図21　種実遺体
図22　調査区周辺の地形分類図
図23　調査区付近の完新世段丘における微地形分布
図24　才門遺跡における地質断面図
図25　石田遺跡２区における地質断面図
図26　石田遺跡１区における地質断面図
図27　神子曽遺跡２区における地質断面図
図28　神子曽遺跡３区における地質断面図
図29　神子曽遺跡８区における地質断面図
図30　神子曽遺跡９区における地質断面図

表目次

表１　周辺遺跡地名表
表２　才門遺跡　遺物一覧
表３　石田遺跡　遺物一覧
表４　神子曽遺跡　土器一覧１
表５　神子曽遺跡　土器一覧２

表６　神子曽遺跡　土器一覧３
表７　神子曽遺跡　土器一覧４
表８　神子曽遺跡　石器一覧１
表９　神子曽遺跡　石器一覧２
表10　神子曽遺跡　金属器一覧
表11　神子曽遺跡　鍛冶関連遺物一覧１
表12　神子曽遺跡　鍛冶関連遺物一覧２
表13　神子曽遺跡　鍛冶関連遺物一覧３
表14　神子曽遺跡　鍛冶関連遺物一覧４
表15　曽根遺跡　遺物一覧
表16　試料一覧および胎土分類結果
表17　薄片観察結果（1）
表18　薄片観察結果（2）
表19　分析対象一覧
表20　原石採取地と判別群名称
表21　分析値および産地推定結果
表22　供試材の履歴と調査項目
表23　供試材の化学組成
表24　出土遺物の調査結果のまとめ
表25　土壌洗い出し・種実同定結果

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と分布調査

洲本市塩屋と南あわじ市賀集八幡を結ぶ洲本灘賀集線（県道76号線）は淡路島南東部の幹線道路である。本州四国連絡道路の開通にともない、周辺交通路の整備が必要となったため、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所は南あわじ市（旧三原郡南淡町）において主要地方道洲本灘賀集線道路改良事業を計画した。

改良事業が実施される旧三原郡南淡町は三原平野の南部に当たり、事業計画地内には未知の埋蔵文化財包蔵地の存在が予想された。そこで兵庫県教育委員会では、洲本土木事務所の依頼により、平成９年および平成14年度に阿万から賀集間の分布調査を実施した。その結果、路線内の６個所（№1～№6地点）について遺物の分布が認められた。

各調査の概要と担当者は次のとおりである。なお、調査担当者の所属は調査時のものである。

第１次

調査期間　　平成９年４月９日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

　　調査第２課　　山上雅弘　　服部　寛

調査面積　　144,000㎡

第２次

調査期間　　平成15年２月４日～２月５日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

　　企画調整班　　深井　明比古

調査面積　　20,000㎡

第２節　確認調査

分布調査の結果に基づき、平成９年にNo.2地点の確認調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地が確認されたため、南淡町教育委員会と協議し、曽根遺跡と命名した。曽根遺跡については、工事により破壊される部分について、平成９年及び10年に本発掘調査を実施した。

平成12年度には中世城郭が存在する可能性があったNo.3地点の確認調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。

平成14年にはNo.1地点の確認調査を実施した。中世の遺物が確認され、周囲に中世遺跡の存在が予想されたものの、路線内は既に削平を受けていると判断された。

平成15年にはNo.6地点の確認調査を実施した。３個所の微高地で新たな埋蔵文化財包蔵地の存在が認められ、南あわじ市教育委員会との協議により北から才門遺跡、石田遺跡、神子曽遺跡と命名した。

なお、№４・５地点については平成15年・16年に確認調査を実施しているが、九蔵遺跡にかかる部分となるため、本書では触れない。

No.2地点（曽根遺跡）

調査期間　　平成９年６月17日～６月19日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第３班　　篠宮　正　　野村展右

調査面積　57㎡

No.3地点

調査期間　平成13年３月１日～３月14日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

企画調整班　　山田　清朝　　調査第３班　　上田健太郎

調査面積　426㎡

No.1地点

調査期間　平成14年10月23日・24日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第３班　　篠宮　正

調査面積　100㎡

No.6地点（才門遺跡、石田遺跡、神子曽遺跡）

調査期間　平成15年10月23日・24日、10月27日～10月29日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

企画調整班　　深井　明比古

調査面積　152㎡

第３節　本発掘調査

確認調査の結果を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では洲本土木事務所と協議を行い、事業計画との調整を経て本発掘調査を実施した。

曽根遺跡については、平成９年度と平成10年度に本発掘調査を実施した。才門遺跡、石田遺跡、神子曽遺跡の本発掘調査は平成16年度に一括して実施した。各遺跡・各年度の調査期間、調査担当者、調査面積は以下のとおりである。

曽根遺跡（第１次）

調査期間　平成９年12月15日～12月22日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第３班　　篠宮　正　　鐵　英記

調査面積　326㎡

曽根遺跡（第２次）

調査期間　平成10年10月26日～10月30日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

企画調整班　　柏原正民

調査面積　470㎡

才門遺跡

調査期間　平成16年10月18日～平成17年１月21日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第３班　　森内秀造　　藤田　淳

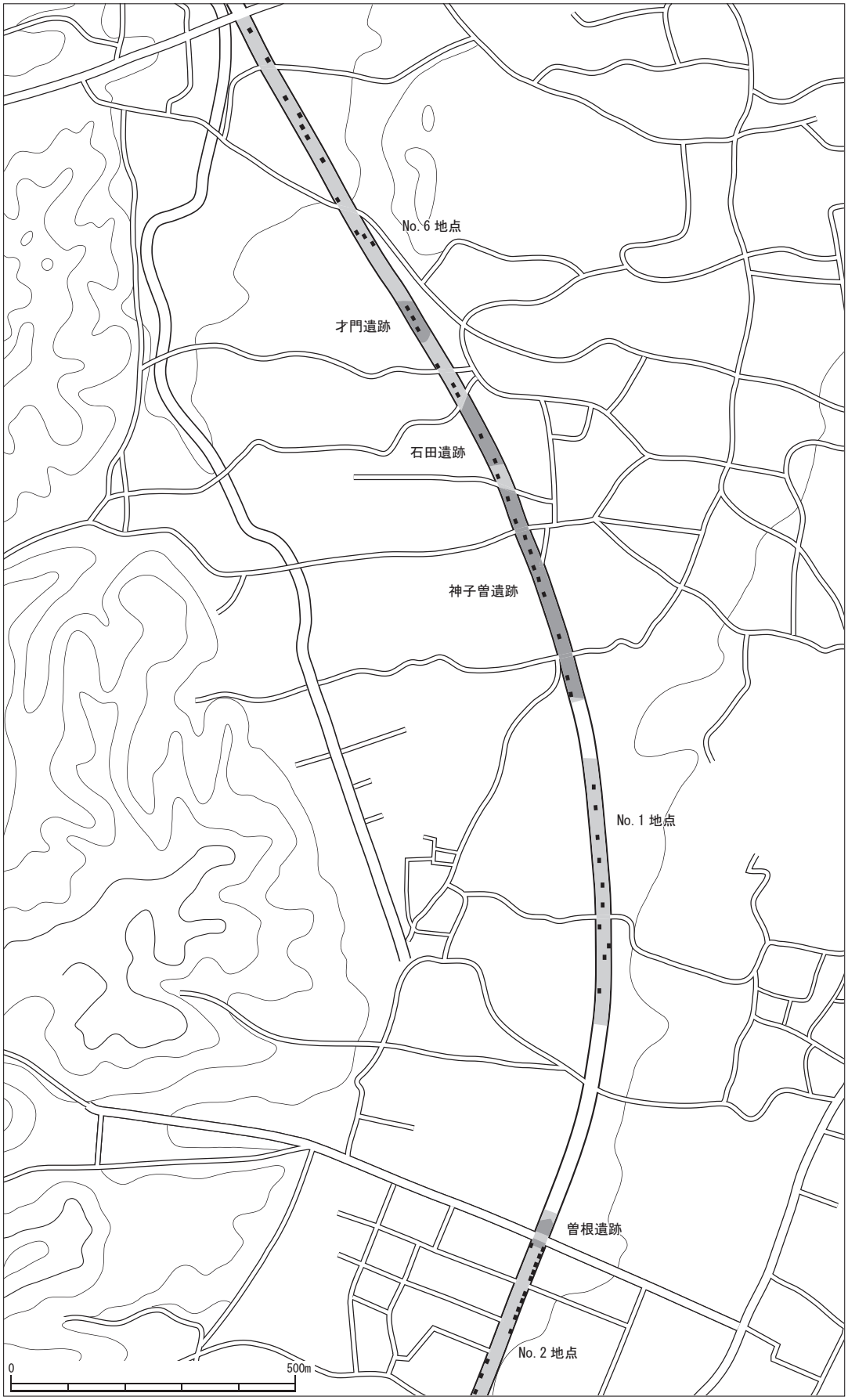


図１　調査地点位置図

調査面積　824㎡

石田遺跡

調査期間　平成16年11月22日～平成17年１月21日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第３班　森内秀造　藤田　淳

調査面積　1,732㎡

神子曽遺跡

調査期間　平成16年11月24日～平成17年３月18日

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第３班　西口和彦　森内秀造　藤田　淳

調査面積　4,785㎡

第４節　整理作業の経過

整理作業については、淡路県民局洲本土木事務所と兵庫県教育委員会との契約に基づき、平成23年度より作業を開始した。平成23年度については兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部が作業を担当した。平成24年度・平成25年度については兵庫県教育委員会からの委託を受けて、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が作業を実施した。

平成23年度

遺物の接合・補強、実測、金属器保存処理を実施した。

担当職員

整理保存課　村上泰樹　篠宮　正　山本　誠　深江英憲　岡本一秀

調査第２課　森内秀造

担当嘱託員

（接合・補強）

島村順子　荒木由美子　荻野麻衣　小野潤子　藤池かづさ　又江立子　宮野正子

（実測）

柏原美音　森本貴子　佐々木誓子　前山三枝子

（金属器保存処理）

浜脇多規子　桂　昭子　岡田美穂

平成24年度

実測図補正、レイアウト、遺物写真撮影、トレース、接合・補強、金属器保存処理を行った。また、出土遺物の分析鑑定を外部委託して実施した。

担当職員

整理保存課　村上賢治　篠宮　正　深江英憲　岡本一秀

調査第２課　森内秀造

担当嘱託員

（接合・補強）

島村順子　荻野麻衣　藤池かづさ　吉村あけみ

（実測図補正・トレース）

柏原美音　杉村明美　高瀬敬子　宮田麻子　加藤裕美　佐々木誓子

（金属器保存処理）

浜脇多規子　桂　昭子

平成25年度

金属器関連遺物の計測、レイアウト、本文執筆および編集を行った。なお、出土鉄滓の計測作業については、中学生２年生の職場体験実習「トライやる・ウィーク」（兵庫県教育委員会実施）に協力し、明石市立高丘中学校、加古川市立平岡中学校の生徒２名の補助を得て実施した。

担当職員

整理保存課　村上賢治　長濱誠司　深江英憲　岡本一秀

調査第１課　村上泰樹　鐵　英記

調査第２課　森内秀造

担当嘱託員

（レイアウト・編集）

柏原美音　古谷章子　高瀬敬子　宮田麻子　榎真菜美　浜脇多規子

（金属器関連遺物計測）

桂　昭子　梶原奈津子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本書で報告する才門遺跡、石田遺跡、神子曽遺跡、曽根遺跡が所在する兵庫県南あわじ市は淡路島の南端に位置する。また、それぞれの遺跡は平成17年の合併以前には南淡町と呼称された南あわじ市域の南東部に位置している。

淡路島は兵庫県の最南端に位置し、周囲約174㎞、面積約596㎢を測る瀬戸内海最大の島である。島の地形は断層活動により相対的に上昇した山地と、相対的に下降した丘陵と低地で構成されている。地質の面では、六甲山地から連続する領家帯の花崗岩類の岩体により構成される北部から中部の山地と、紀伊半島の和泉山脈から連続する和泉層群によって構成される花崗岩類からなる南部の諭鶴羽山地に分類することができる。これらの岩体を第三紀～第四紀初頭の大阪層群に属する砂礫・粘土層が覆っている。それぞれの遺跡が位置する諭鶴羽山地の北西側には三原川や大日川などの流域に低位段丘化した扇状地が広がり、島内最大の三原平野が形成されている。

第２節　歴史的環境

南あわじ市域では、近年道路や農業基盤整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査が兵庫県教育委員会あるいは南あわじ市教育委員会によって実施され、地域の歴史が明らかにされつつある。本節ではそれらの調査成果に基づき、時代ごとにこの地域の遺跡の状況を概述する。

旧石器時代

三原平野における人類の足跡は旧石器時代に遡る。本書で報告する曽根遺跡（４）ではサヌカイト製の国府型ナイフ形石器が出土し、淡路市丸山遺跡出土資料と合わせて、淡路島が国府型ナイフの文化伝統に位置づけられることが明らかとなった。浦壁池遺跡（20）でチャート製縦長剥片素材のナイフ形石器が出土している。

縄文時代

楠本遺跡（36）と長原遺跡（42）でサヌカイト製の有舌尖頭器が見つかっている。奥河内遺跡（65）では早期の押型文土器が出土している。南畑遺跡では前期、おのころ島遺跡では中期の船元式・里木式の土器、谷町筋遺跡では後期の縁帯文系の土器、叶堂遺跡では中期前葉から後期後葉、幡多遺跡では中期末から後期初頭の縄文土器が出土しており、本書で報告する神子曽遺跡（３）では中期の廃棄土坑が検出され、当時の集落の一端を垣間見ることとなった。九蔵遺跡（66）では晩期の廃棄土坑が検出されている。

弥生時代

井手田遺跡（61）では前期から中期にかけての竪穴住居の他、前期の小区画水田、中期後葉の方形周溝墓群が見つかっている。また、四国地方や紀伊半島との共通する遺物が出土している。九蔵遺跡（66）でも前期末の竪穴住居の他、前期から中期初頭にかけての土坑・溝も見つかっており、特に３箇所で検出された断面逆台形の溝は本来同一のもので集落の周りを囲んでいたと考えられている。

神代地頭方
神代富田
神代喜来
神代黒道
神代国衙
賀集八幡
賀集立川瀬
賀集野田
賀集銀冶屋
賀集牛内
賀集内ヶ原
賀集長原
北阿万新田北
北阿万新田中
北阿万稲田南
北阿万伊賀野
阿万上町
阿万下町
阿万東町
0
1500m

図２　周辺遺跡分布図

表１　周辺遺跡地名表

報告書遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の時代									遺跡の種類										調査歴	備考
		旧	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	散	集	貝	都	官	城	寺	古	穴	墓	産	他		
1	才門遺跡				●	●	●					●											1	
2	石田遺跡					●						●											1	
3	神子曽遺跡		●	●		●	●	●				●								●			1	
4	曽根遺跡	●					●		●			●											1	
5	木戸原遺跡			●	●	●	●	●				●								●	●		1	
6	山惣廃寺跡					●											●						0	
7	立石遺跡			●				●				●											1	
8	馬屋尻遺跡			●				●			●												0	
9	北池遺跡									●	●												0	
10	堂ノ上遺跡					●	●	●			●												1	
11	地頭方殿の土井館跡							●								●							0	
12	的場遺跡									●	●												0	
13	国衙廃寺跡					●											●						0	
14	経所遺跡			●				●				●											1	
15	鐘原遺跡			●						●	●												1	
16	喜来遺跡			●			●	●				●											1	
17	汁谷窯跡				●																●		1	
18	汁谷遺跡			●	●							●									●		1	
19	浦壁大池尻遺跡									●		●											1	
20	浦壁池遺跡	●				●	●				●												0	
21	嫁ヶ渕遺跡			●		●	●	●				●			●							●	1	
22	石ヶ坪遺跡			●	●	●	●	●	●			●											1	
23	西山北古墳				●													●					1	円墳、横穴式石室
24	西山中遺跡				●																	●	0	
25	佐々木土居城跡								●							●							0	
26	西山南古墳				●													●					0	横穴式石室
27	大野遺跡		●			●	●	●				●			●								1	
28	西山南土井館跡							●								●							0	
29	岸ノ上遺跡			●	●	●	●	●				●			●								1	
30	護国寺東遺跡			●			●	●	●			●					●						1	
31	護国寺跡						●	●	●								●						0	
32	城が丸城跡							●								●							0	
33	平松遺跡				●	●	●	●				●											1	
34	上久保遺跡							●				●											1	
35	小山古墳				●													●					1	円墳、横穴式石室
36	楠谷遺跡		●			●	●				●												1	
37	野田遺跡					●					●												0	
38	野田山古墳				●													●					1	円墳、横穴式石室
39	丹生山城跡							●								●							0	
40	戸川池窯跡					●	●														●		0	
41	戸川池遺跡			●							●												0	
42	長原遺跡		●	●							●												1	
43	城の土居城跡							●								●							0	
44	賀集城の腰城跡							●								●							0	
45	古城山城跡							●								●							0	多郭雑形
46	久保ノカチ遺跡			●				●				●											1	
47	高萩遺跡			●				●				●											1	
48	流遺跡							●				●											1	
49	西ノ開地遺跡			●				●				●											1	
50	祢つノ木遺跡			●				●				●											1	
51	細田遺跡			●							●												0	
52	有塚遺跡					●					●												1	
53	二本木遺跡		●	●							●												0	
54	中島遺跡							●	●			●											1	
55	珉平焼窯跡								●												●		1	
56	下中原遺跡							●				●											1	
57	白石遺跡			●							●												0	
58	北佐野遺跡							●				●											1	
59	郷殿城跡							●								●							0	
60	初田遺跡			●	●	●	●					●											1	
61	井手田遺跡			●	●	●	●	●				●								●		●	1	
62	正福寺跡						●	●									●						0	
63	河内遺跡			●				●				●											1	
64	佐古谷遺跡			●								●											1	
65	奥河内遺跡		●								●												1	
66	九蔵遺跡		●	●	●	●	●	●				●			●						●	●	1	
67	北田遺跡			●			●	●				●											1	

神子曽遺跡（３）でも本書でも触れるように中期の方形周溝墓群をはじめとする墓域と住居跡が検出されている。また、中期の住居跡や方形周溝墓群が確認されている幡多遺跡では大阪湾型銅戈も出土している。高萩遺跡（47）中期後半から後期の集落、木戸原遺跡（５）後期末の集落が調査されている。鐘原遺跡（15）では方形住居と島内で最大規模の円形大型住居が見つかっており、後期の大規模集落の一つと考えられている。護国寺東遺跡（30）は後期の小規模集落が調査されている。

古墳時代

古墳時代の前期に関しては、集落、古墳とも不明な点が多いが、古墳時代中期の集落遺跡である木戸原遺跡（５）では大型建物跡を含む竪穴住居20棟以上が検出されたほか、遺物としては滑石製石製品、鉄?、韓式系土器等が出土しており、中央政権と関わりを持つ首長層が住む拠点集落が営まれ始めたと考えられる。

墳墓では後期の横穴式石室を持つ古墳が三原平野を囲む西から北側の丘陵部を中心に存在する。西山北古墳（23）、小山古墳（35）、右片袖横穴式石室を持つ野田山古墳（38）などがあり、近年では市内で調査例の少ない後期から終末期群集墳の里丸山古墳群が調査されている。

古代

三原平野には古代淡路国の国府、淡路国分寺・尼寺が置かれ、政治的な中心地であった。国分寺の塔跡は国の史跡に指定されている。

淡路国分寺・尼寺とほぼ同時期に建立されたと推定されている山惣廃寺（６）とそれに関連する遺跡として木戸原遺跡（５）が調査されている。

大野遺跡（27）では飛鳥から奈良時代前半の建物跡が検出されている。岸ノ上遺跡（29）は総柱の掘立柱建物から構成される遺跡で、倉庫群と考えられる。なお、大野遺跡は岸ノ上遺跡の管理施設ではないかと考えられている。嫁ヶ渕遺跡（21）規格性の高い掘立柱建物群と蹄脚円面硯が検出されており、淡路国府成立以前の8世紀初頭の三原郡衙関連遺跡と考えられている。九蔵遺跡（66）では奈良時代後半の掘立柱建物群、製塩炉跡、和同開珎銀銭が検出されており、平城京出土木簡に調として塩３斗を納めたとある三原郡阿麻郷の中心地と考えられる。この他、木戸原遺跡でも奈良時代から平安時代にかけての集落が見つかっている。

生産遺跡としては7世紀後半の汁谷窯跡（17）で須恵器の焼成が行われ、隣接する汁谷遺跡（18）が工房跡ではないかと思われる。また、奈良時代に入ると戸川池窯跡（40）の操業が始まり、国分遺跡では国分寺の瓦を生産している。

中世

文献上では建久元年（1190）に最初の守護が任じられたと見られ、守護所は旧三原郡内に置かれたと考えられる。また、淡路国太田文によれば、国衙領の他、寺社の荘園が置かれ、三原平野において開発が進み、集落が増えていく。

九蔵遺跡（66）では12世紀後半から13世紀前半の掘立柱建物群や地鎮遺構が見つかっており、文献上の記録とも対応する状況が確認できる。木戸原遺跡（５）は前代に続いて集落が営まれ、唐銭が出土している。この他にも高萩遺跡（47）、護国寺東遺跡（30）、北佐野遺跡（58）等で中世前半の集落が見つ

かっているほか、久保ノカチ遺跡（46）、下中原遺跡（56）では室町時代の集落跡が調査されている。こうした集落の増加に対応するように、実態は不明ながら、平野を囲む丘陵部を中心に城館が多数築かれる。なかでも遺構は残っていないものの南北朝期に南軍・北軍が争奪した丹生山城跡（39）、土塁・掘割などの遺構が残されていた城の土居城跡（43）、賀集城の腰城跡（44）、郷殿城跡（59）などの城跡が残されている。

近世以降

新田開発に伴い、ため池が多く掘られて現在の景観に近い状態となる。18世紀前葉に創業した珉平焼とその流れをくむ陶器製造業は製品の内容を変えつつ、近代に入っても操業が続いていく。珉平焼窯跡の発掘調査では焼成用の木材を乾燥させたコーカシ窯が検出されたほか、製品・型が大量に出土した。

参考文献

南淡町教育委員会『岩谷遺跡発掘調査報告書』（1995）

南淡町教育委員会『河内遺跡発掘調査報告書』（1997）

三原郡広域事務組合『1995～1999年度　三原郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』（2001）

三原町教育委員会・三原郡広域事務組合教育委員会『国分遺跡発掘調査報告書』（2004）

兵庫県教育委員会『北田遺跡』（2003）

兵庫県教育委員会『珉平焼窯跡』（2005）

兵庫県教育委員会『汁谷窯跡群・汁谷遺跡』（2006）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成17年度　年報』（2007）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成18年度　年報』（2007）

南あわじ市教育委員会『2005年度　南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』（2009）

南あわじ市教育委員会『2006年度　南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』（2010）

南あわじ市教育委員会『2007年度　南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』（2011）

第３章　才門遺跡

第１節　概要（遺構の概要と層序）

遺跡は大日川により形成された扇状地が山路川によって段丘化した地形上に立地しており、遺構の基盤層は直径20㎜の礫を多く含んだ黄色砂質シルト層である。耕土・床土の直下はこの黄色砂質シルト層が広がり、遺物包含層は認められない。遺構面の標高は25.5m前後である。

第２節　遺構

流路

SR01（図版４：写真図版２）

東側から西側に向かって扇状に広がる落ち状地である。青木哲哉氏による断ち割り調査によってこの下層に埋没した旧河道の存在が明らかにされており、旧河道の肩口部の可能性が高い。埋土層は黒褐色シルト層（第４層）・黄灰色細砂質シルト層（第６層）・灰黄色シルト質砂（第７層）の大きく３層に分かれる。出土遺物の大半は土師器の供膳具を主体とした中世の遺物であるが、８世紀代の遺物も若干包含している。深さは最深部で0.4ｍを測る。図版４のA－A'断面に示したように、SR01に連接するSD02の底面は中層の黄灰色細砂質シルト層で検出される。

溝

SD02（図版４：写真図版１・２）

幅1.5m、深さ0.55ｍを測り、a－a'断面付近でＶ字形、b－b'断面付近でＵ字形の断面形状を呈する溝である。平面形状は調査区東端からＳＲ01肩口までが直線的、同肩口からは北方向に向きを変えてゆるやかにカーブを描く。断面形状および等高線に直交する方向性から人為的に掘削された溝と判断されるが、調査区内では堰等の施設は検出されていない。

埋土層は上層から黄灰色シルト細砂、黒褐色シルト質細砂、灰色シルト混じり細質の３層からなり、溝底のレベルはa－a'断面で25.10m、b－b'断面で25.13m、A－A'断面で25.13ｍである。出土遺物は須恵器甕などの貯蔵具を中心とした８世紀代の遺物が出土している。

その他の遺構（図版５：写真図版２）

土坑（SK01～03）などが検出されている。SK01から土師器高杯の小片が出土しているが、小片のため図化には至らなかった。その他の遺構からは遺物の出土はなかった。

第３節　遺物

１　土器

流路

SR01（図版６：写真図版３）

須恵器

いずれも杯Ｂ底部片で全体的な形状は不明である。１は高台径8.8㎝で、高台の断面形状は三角形状を呈する。２は高台径8.6㎝で、高台の断面形状は方形である。３は高台径11.9㎝で、高台は外方に踏ん張り、底部外面はヘラで調整されている。

５は片口鉢である。口縁部断面は三角形状で、外面は丸く肥厚する。口径25.8㎝。

土師器

4は鍋である。口径25.8㎝。口縁部は内傾し、短い鍔がつく。体部外面は叩き痕、内面に横方向のはけ目調整を行う。

SD02（図版６：写真図版３）

須恵器

6は壺である。底部のみで上部を欠く。底部は平底で、底部周縁にはヘラを回転させてろくろから切り離した痕跡を残す。体部外面は叩きの痕跡を残し、底部周縁はヘラ削りの痕跡を残す。底径12.0㎝。

7・8は甕である。7は縁部を大きく外反させ、端部を上方につまみ上げる。口径27.4㎝。

8は口縁部を欠くが、頸部径21.5㎝の大型甕である。体部外面は叩き整形を行った後、かき目調整を施す。肩部に緑色に発色した自然釉がかかり、別個体の破片が付着する。

2　石器（図版６：写真図版３）

機械掘削時と奈良時代のSR01から石器が出土している。

石核（Ｓ１）

不定形な立方体状を呈し、すべての面が剥離面で構成されている。頻繁に打面を転移させながら、このように2.5㎝角程度の大きさになるまで剥離を繰り返しているが、もとはこの数倍の大きさがあったであろう。黒曜石製である。

楔形石器（Ｓ２）

横長剥片の打面側に顕著な潰れ状の剥離が見られるので、横位に用いた楔形石器と判断したが、対になる打撃痕は不明瞭である。サヌカイト製である。

第４節　小結

調査区の南半部は西側へのゆるやかな落ち状地形（SR01）を呈し、遺構としては８世紀代の溝（SD02）と土坑・ピットがあるが、遺構の広がりは希薄である。SD02は東から西へ向かい、SR01の肩口を切って、10ｍ余りの入った地点で消滅するが、断面形状や地形の方向性から人為的水路と判断される。一方、SR01の埋土層には中世の遺物が多く含まれており、中世段階で埋没したものと思われる。

周辺では中世の城館などが散在するのみで周知の遺跡はあまり知られていなかった。しかしながら、今回の調査によって、集落関係の遺構は発見されていないものの、濯漑的要素の高い用水路の存在や８世紀および中世の遺物の出土から、当該地区の東に当時の集落が存在しているものと判断される。

表２　才門遺跡　遺物一覧表

報告番号	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	重量(g)	石材	調査番号	実測番号
1	6	3	須恵器	杯B	底部	SR01	－	－	(8.8)						2004218	S2
2	6	3	須恵器	杯B	底部	SR01	－	－	(8.6)						2004218	S6
3	6	3	須恵器	杯B	底部	SR01	－	－	(11.9)						2004218	S5
4	6	3	土師器	鍋	口縁部	SR01	(25.8)	－	－						2004218	S11
5	6	3	須恵器	片口鉢	口縁部	SR01	(25.8)	－	－						2004218	S3
6	6	3	須恵器	壺	底部	SD02	－	－	(12.0)						2004218	S8
7	6	3	須恵器	甕	口縁部	SD02	(27.4)	－	－						2004218	S7
8	6	3	須恵器	甕	頸部～肩部	SD02	－	－	－						2004218	S1
S1	6	3	石器	石核						23.5	23.6	18.5	8.2	黒曜石	2004218	S13
S2	6	3	石器	楔形石器		SR01				28.5	44.4	12.2	13.3	サヌカイト	2004218	S12

第４章　石田遺跡

第1節　概要（遺構の概要と層序）

周辺の水田の水利確保や通行の関係から用水路および農道を撤去することが不可能であったことから、５つの調査区に分割して調査を実施した。

遺跡地は西に張り出す標高28ｍの微高地上に立地する。遺構は調査区中央の南北区間約40ｍの範囲に集中し、調査１区南半は南へのゆるやかな落ち状地形となっている。耕土・床土の下にはシルト混じりの砂礫層を主体とした遺構ベース面が広がる。

第２節　遺構

掘立柱建物跡

SB01（図版９：写真図版６）

東西３間以上、南北２間以上の総柱建物である。南にもう１間分延びる可能性があるが、南側の柱列は現水路下にあるため、その存在については確認できなかった。柱間は2.2ｍを基本間とするが、柱穴Ｐ09とP13、柱穴P01とP06のように、それぞれ2.4ｍ、2.5ｍのようにやや広くなっている柱間もある。柱穴の掘り方は0.3ｍ前後である。柱穴P01・03・04・08・13の掘り方からSK03と同種類の土師器・須恵器片が出土している。

SB02（図版９：写真図版７）

SB01 から南７ｍ前後離れた位置にある掘立柱建物である。調査区内では南北２間、東西２間分が検出された。柱の並びから西側にもう１間分存在する可能性が高いが、西端の１間分は現水路下にあり、確認できなかった。柱間は南北方向の柱間が2.0～2.1ｍであるのに対して、東西方向の柱列は2.4ｍから2.7ｍと広くなっている。柱穴の掘り方は0.5ｍ前後である。柱穴Ｐ２から土師器杯片・製塩土器が出土している。SB01と建物主軸方向をほぼ同じくするが、両建物が同時期に存在していたかどうかは不明である。

溝

SD01（図版８・写真図版７）

２区北端から４区に至る延長51ｍ以上の幅0.65ｍ、深さ0.4ｍの小溝である。溝の方向は南北方向である。一部で現水路と重なる。埋土はシルト質細砂・シルト質細砂である。遺物は23・10・35である。

SD04（図版８・写真図版７）

２区の南端から１区の北端にかけて検出された溝状遺構であるが、溝というよりも浅い地形が低まったところに流土や遺物が堆積した性格の遺構である。遺物は21である。

流路

SR01/南落ち状地形（図版８）

当遺跡から南の神子曽遺跡の間は谷地形となっている。このため、1区の南半は南へのゆるやかな落ち状地形を呈する。埋土は砂質シルトを主体とし、奈良時代から平安時代の土師器・須恵器・輸入磁器等の遺物が出土している。

土坑

SK03（図版10：写真図版８）

南北長約７ｍ、東西長約５ｍ、深さ0.15ｍの不定形の浅い落ち込みである。埋土はSK04と同じ炭化

物・焼土を含んだ黄灰色シルト混じり細砂層で、層中に多数の８世紀中頃前後の遺物を包含する。埋土層には地山土も混じっており、土器の廃棄土坑の可能性が高い。

落ち込み１・SK04（図版11：写真図版８）

SK03の北に接して、径５m前後の不定形の落ち込みがあり、この落ち込みの埋土を掘り下げると、一部が深くなり、図版11に示した長径2.3m、短径1.15mの楕円形土坑となった。埋土および出土遺物は同一であることから、一部が深く掘りこまれものと判断される。深さはもっとも深い中央部で0.1m程度である。

埋土は炭化物を含んだ黄灰色シルト混じり細砂からなり、８世紀中頃前後の須恵器や土師器･製塩土器が大量に出土した。遺物は単一時期のもので時期的な幅は認められず、不定形な平面プランや炭化物を含んだ埋土の状況から土器の廃棄土坑の可能性が高い。

SK01・02・06（図版10・11：写真図版８）

現用水路で分断されているが、長径4.5m、短径1.7mの楕円状の１つの土坑になろう。埋土はシルト混じり細砂で、深さ0.15mを測る。図化していないが、布留式段階の壺と思われる破片が出土している。

SK07（図版11）

長径0.6m、短径0.4m、深さ0.1mの楕円状の浅い土坑である。シルト混じり細砂の埋土から製塩土器、杯Ｂの高台部の破片等の遺物が出土している。

SK05（図版11）

長径0.6m以上、短径0.5m、深さ0.1mの楕円状の浅い土坑で、埋土はシルト混じり細砂である。遺物は出土していない。

SK08（図版10）

長径2.6m以上、短径0.56m、深さ0.20mの細長い土坑である。埋土はシルト混じり細砂からなるが、遺物は出土していない。

第３節　遺物

１　土器・陶磁器

溝・流路

SD04（図版12：写真図版９）

須恵器

１は杯Ｂ蓋である。天井部は平坦で屈曲して口縁部に続く。つまみは宝珠形を呈し、頂部はヘラ切り後にナデ調整を施す。口縁部径15.7㎝。

４は口縁部を欠くが、体部はやや丸みをもって立ち上がる深手の杯Ｂである。内外面はナデ調整を施す。高台は径8.9㎝で、高さ7㎜である。５も口縁部を欠くが、底径9.9㎝の杯Ｂ身である。高台はわずかに踏ん張る。内外面はナデ調整を施す。

２は壺である。口径7.6㎝。椀の口縁部の可能性もあるが、小型の壺とした。外面はヘラ等で調整を行っている。

３は杯Ａである。口径17.8㎝、口縁端部を外反させる。内外面ともナデ調整を行う。

SR01（図版12：写真図版９）

須恵器

６は皿B蓋である。縁部径23.6㎝。天井部は平坦で、外面はていねいなヘラ削りを施す。縁部は屈曲するが、口縁端部の折り返しはほとんどない。

８・９は杯Ｂ身である。８は口縁部を欠く。高台は径10.8㎝で、高台は幅が1.2㎝と広いのに対して、高さは0.5㎝と低い。内外面はナデ調整を施す。底部外面には爪形圧痕を残す。９も底部片のみであるが、高台幅は7.1㎝と小さく、体部は高台脇から直ちに立ち上がる椀形態の杯である。底部外面の調整は雑である。

11は壺底部である。底部内面は成形時の指押さえ痕が残る。体部外面は横方向のヘラ削り調整を行う。底部外面には爪形圧痕が残り、輪高台が貼り付けてられていた痕跡が認められる。輪高台は焼成前に削り取られてものである。

土師器

10は椀である。口径16.5㎝、器高4.9㎝、底径8.8㎝。体部は高台脇から直線的に斜め上方に立ち上がり、高台は断面三角形状を呈し、外方に踏ん張る。内外面とも磨滅が著しい。赤褐色を呈する。

７は甕である。口径22.8㎝。屈曲する頸部から直立する口縁部をもつ。内面に煤状の痕跡を残す。

白磁

12は森田分類Ⅷ類の華南産白磁で、底部周囲は露胎である。見込み内面に沈線を施す。12世紀後半。13も白磁椀の体部破片である。

掘立柱建物跡

SB01（図版12）

土師器

14は椀である。体部を欠く。高台径6.6㎝で、高台は0.7㎝と高く外方に踏ん張る。

土坑

SK03（図版12：写真図版10）

須恵器

15・18・19は杯Ｂ蓋である。15は宝珠形のつまみ付す。天井部は平坦で、ナデ調整を行う。縁部は屈曲する。縁部径12.6㎝。18・19ともに偏平な笠形を呈し、天井部外面はヘラ削りが施されている。52は天井部外面に別個体の剥離痕跡を残す。

20は口径12.3㎝で杯Ａの可能性が高い。

21・22・25は杯Ｂである。21は体部を欠く。高台径9.4㎝で、高台高は0.7㎝、幅1.0㎝を測り、外方に踏ん張る。25は高台径8.0㎝の小型の杯Ｂ身である。22は焼成が甘く、色調は杯黄色を呈した土師質に近い仕上がりである。高台径は10.0㎝で、高台は外方に踏ん張るが、幅は狭く、高さも低い。

16・17・23は稜椀蓋・身である。16は小片で、全体の形状は不明であるが、天井部外面のヘラ削り痕跡と縁部の屈曲の形態的特徴から稜椀の蓋の可能性が高い。23は口縁部を外反させ、体部外面全体にヘラ磨きを施す。口径19.1㎝。17は土師質で、口縁部内面に強いナデによる段がある。口径15.3㎝。

24は長頸壺である。口縁部を欠く。頸部は成形時の段を残す。外面に淡い自然釉がかかる。

土師器

26・27は杯である。26は口径20.8㎝。口縁端部内面に段を持つ。内外面にヘラ磨きの痕跡を残す。底部外面はヘラ削りを行う。27は内外面とも磨滅により調整不明。

29は甕である。口径34.7㎝。口縁端面は平坦で、端部は内側に突出する。体部内面はヘラ削りを施し

た痕跡を残す。

28・30～33は製塩土器である。28は頸部が「く」の状に屈曲する甕形態の器形である。作り、胎土ともに粗製であり、製塩土器に分類した。30・32はいずれも口縁部は内傾する。外面の調整痕は磨滅により確認できないが、内面はヘラ削り痕が認められる。31・33は底部片で、31は平底、33は尖底形態である。

土坑

SK04（図版13：写真図版11・12）

須恵器

34は杯Ｂ蓋である。34は頂部のふくらみのない平蓋で、天井部はヘラ削りを施す。端部は直角に折り曲げる。つまみは扁平な宝珠形を呈する。内面は擦り痕があるが、墨痕は認められない。

35～38は杯Ｂである。35は口径13.1㎝、器高4.5㎝、高台径10.1㎝を測る。体部はやや丸みをもって直上方向に立ち上がる。底部外面はヘラ切り痕を比較的ていねいに調整している。38は口径13.4㎝、器高4.0㎝、高台径10.0㎝を測り、体部は高台脇から直線的に立ち上がる。35・36はともに暗褐色を呈し、胎土に白い砂粒を含む。36・37ともに体部を欠く。36は高台径11.3㎝、37は高台径8.6㎝で高台幅は0.3㎝で比較的小さく作られている。

39は稜椀である。口縁部を外反させ、体部外面全体にヘラ磨きを施す。体部の稜は下半部にある。口径19.7㎝。

40は水瓶である。口頸部を欠くが、倒卵形の体部の形状と頸部の径（12.7㎝）から水瓶と判断した。肩部はヘラ削り調整を行う。

41は長頸壺である。頸部のみで、口縁部および体部を欠く。頸部と口縁部の境に稜がつき、内面は段となっている。

49は稜椀蓋である。天井部はゆるやかなカーブを描いて口縁部に至る。天井部中央には環状つまみを付す。つまみ周辺はヘラ削り調整を行う。口径19.9㎝。

50は壺肩部の破片である。削り出しの突帯が巡らされている。器壁は丁寧に調整されている。内面には自然釉がかかる。

土師器

42は高杯である。皿部および脚端部を欠く。外面はヘラ削りが施され、10面の多面体に仕上げる。

43は口径16.2㎝、器高5.2㎝の椀形の製塩土器で、内面は強い横ナデにより仕上げている。44・45・46・48は口縁部が内傾するもので、外面はヘラ削りによって器面調整を行っている。48は33のような尖底になろう。47の口縁部は内傾しない。

51・52は蓋つまみである。径3.2㎝のボタン形である。

53は杯である。口径13.8㎝。口縁端部は内側に巻き込まれ、段がつく。体部下半から底部にかけてヘラ削り調整を行う。内面に暗文が施されていたかどうかについては、磨滅により不明である。

54は甕である。口径20.2㎝の甕である。全体が磨滅しており調整不明は不明である。

３区出土（図版14：写真図版12）

緑釉陶器

55は底径6.0㎝の蛇の目状の平高台をもつ硬質の緑釉陶器の皿である。内外面（底部も含む）全体に施釉されている。残存片の範囲では体部内面に目跡は認められない。

須恵器

56は輪高台をもつ壺底部であるが、輪高台を欠く。

2　石器（図版14：写真図版12）

機械掘削や人力掘削、遺構面精査時などに若干の石器が出土している。すべてサヌカイトである。

石鏃（S１・S２）

凹基式１点（S１）と平基式１点（S２）がある。S１は基部を明確に抉り込ませる。片面は全面調整、もう一面は周辺調整で仕上げる。S２も加工状況は同様である。

石錐（S３）

小剥片の打面側に若干の調整剥離により鋭い錐部を作り出す。素材の形状を利用した石錐である。

削器（S４）

横長剥片の末端側に連続した調整剥離による直線的な刃部を設ける。刃部以外の側辺はほとんどすべて折れである。表面の状況から讃岐産サヌカイトと推察される。

楔形石器（S５）

やや厚みのある剥片の長軸方向に沿って１対の打撃痕が認められる。

第４節　小結

遺構

石田遺跡は才門遺跡から谷を挟んで南100m離れた位置にあり、奈良時代を中心とした遺構が発見されている。

主な遺構としてはSK03・04、SB01・SB02、SD04がある。SB01はSK03およびSD04の埋土を掘り込んで建てられているので、少なくともSD04の年代、すなわち平安初期よりも新しい時期に建てられた掘立柱建物となる。SB02については、SB02の柱穴からSK03・04と同時期の遺物が含まれていることから、少なくとも８世紀中頃以降の建物施設であるが、SB01と02が同時に存在していたかどうかは不明である。

SK03・04については、生活関連遺構ではなく、土器類の廃棄土坑的要素が強い。調査区内では、該当時期の建物跡の発見はないが、東側に規模の大きな建物施設が存在している可能性が高い。

SD01については、ほぼ南北方向を向き、現在の地割とほぼ同じくする。溝内から８世紀代の遺物が出土しているが、遺物の年代がそのまま溝の存在時期に適用できるかどうかは不明である。

SK03・04出土遺物群の年代については、杯Ｂ蓋の天井部にヘラ削りが施されている点、稜椀は丁寧に作られ、器面のヘラ磨きが行われている点などの特徴から８世紀半ばを下らないと思われる。出土遺物は左記の磨きを施した稜椀や土師器杯などの特徴的な遺物のほか、製塩土器も多く含まれているのが特徴である。

SD04出土の遺物については、杯Ｂの蓋の天井のヘラ削りが省略され、縁部は屈曲して段がつく点や杯Ｂの高台が底部の周縁部に付き、器高も高くなるなど８世紀後半以降平安初期の須恵器の特徴をもつ。

SR01の遺物には、８世紀代の皿Ｂ蓋や杯Ｂのほか平安前期の須恵器椀（９）や土師器椀（10）、華南産の白磁(12)など幅広い年代の遺物が出土している。

表３　石田遺跡　遺物一覧表

報告番号	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	重量(g)	石材	調査番号	実測番号
1	12	9	須恵器	杯B蓋	口縁部～天井 部つまみ	1区	SD04	(15.7)	-							2004217	I1
2	12	9	須恵器	壺	口縁部	1区	SD04	(7.6)	-	-						2004217	I3
3	12	9	須恵器	杯A	口縁部	1区	SD04	(17.8)	-	-						2004217	I2
4	12	9	須恵器	杯B	体部～底部	1区	SD04	-	-	(8.9)						2004217	I5
5	12	9	須恵器	杯B	底部	1区	SD04	-	-	(9.9)						2004217	I4
6	12	9	須恵器	皿B蓋	口縁部～天井 部	1区	SR01	(23.6)	-							2004217	I6
7	12	-	土師器	甕	口縁部	1区	SR01	(22.8)	-	-						2004217	I11
8	12	9	須恵器	杯B	底部	1区	SR01	-	-	(10.8)						2004217	I8
9	12	9	須恵器	杯B	底部	1区	SR01	-	-	(7.1)						2004217	I7
10	12	9	土師器	椀	口縁部～底部	1区	SR01	(16.5)	4.9	(8.8)						2004217	I9
11	12	9	須恵器	壺	底部	1区	SR01	-	-	(9.8)						2004217	I10
12	12	11	白磁	碗	体部	1区	SR01	-	-	-						2004217	I61
13	-	9	白磁	碗	体部	1区	SR01	-	-	-						2004217	I62
14	12	-	土師器	椀	底部	2区	SB01 P10	-	-	(6.6)						2004217	I35
15	12	10	須恵器	杯B蓋	口縁部～天井 部つまみ	2区	SK03	(12.6)	-							2004217	I32
16	12	10	須恵器	稜椀蓋	口縁部	2区	SK03	-	-							2004217	I50
17	12	10	須恵器	稜椀蓋	口縁部	2区	SK03	(16.5)	-							2004217	I49
18	12	10	須恵器	杯B蓋	口縁部　天井 部	2区	SK03	(15.3)	-							2004217	I52
19	12	10	須恵器	杯B蓋	天井部　つま み	2区	SK03	-	-							2004217	I51
20	12	10	須恵器	杯A	口縁部	2区	SK03	(12.3)	-	-						2004217	I22
21	12	10	須恵器	杯B	体部～底部高台	2区	SK03	-	-	(9.4)						2004217	I54
22	12	-	須恵器	杯B	底部	2区	SK03	-	-	(10.0)						2004217	I25
23	12	10	須恵器	稜椀	口縁部	2区	SK03	(19.1)	-	-						2004217	I53
24	12	10	須恵器	長頸壺	頸部	2区	SK03	-	-	-						2004217	I23
25	12	-	須恵器	杯B	底部　高台	2区		-	-	(8.0)						2004217	I12
26	12	10	土師器	杯	口縁部～底部	2区	SK03	(20.7)	-	-						2004217	I24
27	12	-	土師器	杯	底部	2区	SK03	-	-	(10.5)						2004217	I31
28	12	10	土師器	製塩土器	口縁部	2区	SK03	(20.1)	-	-						2004217	I30
29	12	10	土師器	甕	口縁部	2区	SK03	(34.7)	-	-						2004217	I29
30	12	10	土師器	製塩土器	口縁部～体部	2区	SK03	(16.6)	-	-						2004217	I19
31	12	10	土師器	製塩土器	底部	2区	SK03	-	-	(8.2)						2004217	I28
32	12	10	土師器	製塩土器	口縁部～体部	2区	SK03	(16.5)	-	-						2004217	I27
33	12	10	土師器	製塩土器	体部～底部	2区	SK03	-	-	-						2004217	I26
34	13	11	須恵器	杯B蓋	口縁部～天井 部つまみ	2区	SK04	(15.8)	-							2004217	I38
35	13	11	須恵器	杯B	口縁部　底部	2区	SK04	(13.1)	4.5	(10.1)						2004217	I40
36	13	11	須恵器	杯B	底部	2区	SK04	-	-	(11.3)						2004217	I17
37	13	11	須恵器	杯B	底部	2区	SK04	-	-	(8.6)						2004217	I41
38	13	11	須恵器	杯B	口縁部～高台	2区	SK04	(13.4)	4.0	(10.0)						2004217	I20
39	13	11	須恵器	稜椀	口縁部	2区	SK04	(19.7)	-	-						2004217	I43
40	13	11	須恵器	水瓶	体部	2区	SK04	-	-	-						2004217	I39
41	13	11	須恵器	長頸壺	頸部	2区	SK04	-	-	-						2004217	I42
42	13	11	土師器	高杯	脚部	2区	SK04	-	-	-						2004217	I37
43	13	11	土師器	製塩土器	口縁部～体部	2区	SK04	(16.2)	-	-						2004217	I18
44	13	11	土師器	製塩土器	口縁部～体部	2区	SK04	(15.5)	-	-						2004217	I21
45	13	11	土師器	製塩土器	口縁部～体部	2区	SK04	(13.2)	-	-						2004217	I15
46	13	11	土師器	製塩土器	口縁部～体部	2区	SK04	(17.4)	-	-						2004217	I16
47	13	11	土師器	製塩土器	口縁部～体部	2区	SK04	(17.4)	-	-						2004217	I14
48	13	11	土師器	製塩土器	口縁部	2区	SK04	(17.3)	-	-						2004217	I36
49	13	12	須恵器	稜椀蓋	口縁部～天井部つまみ	2区	SK04	(19.9)	-							2004217	I56
50	13	12	須恵器	壺	肩部	2区	SK04	-	-	-						2004217	I55
51	13	11	土師器	杯蓋	天井部　つまみ	2区	SK04	-	-							2004217	I60
52	13	11	土師器	杯蓋	天井部　つまみ	2区	SK04	-	-							2004217	I59
53	13	11	土師器	杯	口縁部～底部	2区	SK04	(13.8)	-	-						2004217	I57
54	13	-	土師器	甕	口縁部～肩部	2区	SK04	(20.2)	-	-						2004217	I13
55	14	12	緑釉陶器	皿	底部	3区		-	-	(6.0)						2004217	I33
56	14	12	須恵器	壺	底部	3区		-	-	-						2004217	I34
S1	14	12	石器	石鏃		1区					15.6	14.0	2.9	0.5	サヌカイト	2004217	I45
S2	14	12	石器	石鏃		2区					19.4	14.4	2.99	0.6	サヌカイト	2004217	I48
S3	14	12	石器	石錐		1区					21.8	15.5	6.2	1.3	サヌカイト	2004217	I46
S4	14	12	石器	削器		1区					44.4	29.4	4.5	6.7	サヌカイト	2004217	I47
S5	14	12	石器	楔形石器		1区	南へのゆるやかな落込み				33.4	23.2	8.0	6.7	サヌカイト	2004217	I44

第５章　神子曽遺跡

第1節　概要（遺構の概要と層序）

調査対象となった南北延長300ｍの事業地内には用水路・農道等の既往施設が存在しており、撤去が不可能であったため、調査は９地区に分割して実施した。調査地点の地形は南から北、９区から１区にかけてなだらかに下っており、９区と１区の標高差は現地表面で約３ｍとなっていた。

１区は前述のように最も低い位置にあり、調査区北半で上下２層の遺構面が確認されている。層序は上から耕土、床土、暗灰黄色シルト層、黒褐色シルト層、黒色シルト層、黄灰色シルト層となっている。黒色シルト層から掘り込まれた上層遺構には奈良時代の溝、中世の掘立柱建物と柱穴群があり、黒色シルト層の下に堆積した黄灰色シルト層をベースとする下層遺構としては縄文時代の土坑、弥生時代の方形周溝墓、木棺墓、土器棺墓が検出されており、調査区南半では後世の削平により縄文時代から中世の遺構がほぼ同一面で検出されている。

２区の層序は上から耕土、床土、暗灰黄色シルト層、褐灰色シルト層、黒色シルト層、黒褐色シルト層、黄灰色シルト層となっている。遺構密度は１区と比較して薄くなるが、掘立柱建物と溝が検出されており、いずれも黒色シルト層から掘り込まれている。

３・４・５・区の層序は上から耕土、床土、黄褐色シルト層、灰黄褐色細砂質シルト層となっており、一部に砂礫層も認められる。遺構は掘立柱建物と土坑が認められる。

６区の層序は上から耕土、黄灰色シルト層、黒色シルト層、その下層には調査区北半で黒褐色シルト質砂礫、南半で黄灰色細砂質シルト層が堆積している。遺構は黒褐色シルト質砂礫層と黄灰色細砂質シルト層をベースに方形周溝墓、土坑、柱穴が検出されている。なお、６区に接した狭小な調査区である７区では遺構は検出されなかった。

８区の層序は上から耕土、褐灰色シルト層、暗褐色シルト質砂礫となっており、南半部には暗褐色シルト質砂礫の上に暗褐灰色細砂質シルトと黄灰色細砂質シルトが認められる。遺構としては方形周溝墓、掘立柱建物跡と土坑が認められるが、土坑の多くは近世の肥溜め・貯水施設と考えられる。

９区の層序は上から耕土、暗黄灰色シルト層（旧耕土）、黄褐色シルト層、黄灰色シルト層、灰色シルト質砂礫である。遺構としては土坑と柱穴が検出されている。

第２節　遺構

前節でも述べたように、調査は９地区に分けて実施された。遺構については各調査区を単位に記述していきたい。

１　１区の遺構（図版16：写真図版13）

(1) 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構には土坑が認められる。被熱礫、獣骨、土器片等が認められることから、食料残滓などを廃棄した土坑であると思われる。

土坑

SK06（図版17）

調査区南西隅で検出された歪な円形を呈する土坑である。一部が調査区外に伸びる。上面の直径が約1.2m、底面で約0.6ｍを測る。深さは約0.3mである。埋土は黒褐色シルト混じり砂礫で、被熱した径20

cm前後の礫が複数の縄文土器深鉢片（37～42）と一緒に廃棄されていた。

SK11（図版17：写真図版14）

調査区南端部中央で検出された歪な円形を呈する土坑である。長径約1.1m、短径約1.0mを測り、深さは約0.3mである。埋土は暗灰黄色シルト混じり細砂で、上層は下層に比べてマンガン斑が少ない。

SK15（図版17：写真図版14）

調査区南東隅で検出された歪な円形を呈する土坑である。中世の柱穴に一部を切られる。長径約1.2m、短径約1.1mを測り、深さは約0.5mである。埋土は黒褐色細砂質シルトで底面には黄灰色シルト質細砂が認められる。下層には拳大の礫、上層には拳大から人頭大の礫が放り込まれ、それらに混じって複数の縄文土器深鉢（１～14）・土製円板（15）が出土している。

SK17（図版17）

調査区南部中央で検出された歪な円形の土坑である。SX206、SD202、中世のピットに一部を切られる。長径約1.1m、短径約0.9mを測り、深さは約0.3mである。埋土は上層が骨片を含む暗灰黄色シルト質細砂、底面は黒褐色シルト混じり細砂である。骨片にはタイ科の歯と獣骨がある。

SK230（図版17：写真図版13）

調査区北東隅で検出された歪な円形の土坑である。半分以上が調査区外に延び、SX209によって一部が切られる。南北軸で1.3m、東西軸で0.6mが残存する。深さは約0.6mである。埋土は上層が黒色シルト、下層には灰黄褐色シルト、黒褐色シルト、暗灰褐色シルトが認められる。押しつぶされたような状態で出土した縄文土器深鉢（16）を含め、複数の縄文土器深鉢（17～36）が出土している。

SK245（図版17）

調査区中央付近で検出された不定形の土坑である。SK202と攪乱によって一部切られる。残存する長軸で約2.6m、短軸で2.5mを測り、深さは0.1mである。埋土は黒褐色シルト質細砂と黄褐色シルト質細砂である。

(2) 弥生時代の遺構

竪穴住居跡1棟のほか、周溝墓13基、木棺墓、土器棺墓、土坑を検出している。ただし、どの遺構も後世の削平を受けており、残存状況は悪い。

周溝墓

SH201（図版18：写真図版15）

調査区北東部で検出した円形の竪穴住居跡である。SX203、SX203によって一部が切られる。周壁溝外縁の直径約5.5m、深さは約0.1mである。中央土坑は直径約1.0m、床面からの深さは0.3mと浅い。主柱穴と思われるピットは直径約0.3から0.5mで４ヶ所に認められ、本来は５ヶ所であったものと考えられる。

SX201（図版19：写真図版16・17）

調査区北端で検出した円形周溝墓であり、直径約18mを測る。SK243によって主体部の一部が切られ、SK201によって周溝が切られていた可能性がある。周溝は途切れた円弧状で、南西部では消滅している。北周溝は幅0.7m、深さは約0.3m、東周溝は幅0.95m、深さ約0.4mで埋土は黒色細砂質シルト、黒褐色細砂質シルトである。北周溝から直口壺および広口壺の口縁部片（72・73）が出土している。

東西方向を長軸にする主体部が2基検出されている。第1主体部は掘方長辺1.95m、幅0.65mを測り、小口板の痕跡が残ることから組み合わせ式木棺が埋納されていたと考えられる。小口板の深さ22cm、

小口板間の長さは約1.6mである。第2主体部は掘方長辺約1.3、幅0.64mを測り、棺痕跡は長辺0.94m、幅0.38で、深さは12cmである。

SX202（図版20：写真図版18）

調査区北端近くで検出した。SX201の南東に隣接している。4,4mの間隔で２本の溝が平行しており、方形周溝墓と判断した。北周溝はSX203西周溝に切られ、SK241を切る。周溝外側で南北6.4m、東西は5.7m以上を測り、検出面の深さは北溝で0.1m、南溝で0.4mである。主体部は検出されていない。

SX203（図版20：写真図版18・19）

調査区北端近くで検出した。四隅が切れる方形周溝墓である。北東隅は調査区外に伸びる。SH201、SX202を切り、南溝がSK203に切られる。周溝外縁で南北約8.0m、東西6.1mを測り、周溝の深さは0.35～0.5mである。周溝埋土は黒色細砂質シルトが主体となる。主体部は検出されていない。西周溝南端部から広口壺、直口壺、短頸壺などの壺類（77～81）、東周溝中央部から短頸壺（75）と広口壺（76）が出土している。

SX204（図版22・23：写真図版20・21）

調査区中央南部で検出した。SX205とSX210の北側に位置する方形周溝墓である。SX210を切っており、南側の区画はSX205と周溝を共有あるいはSX205によって切られる。南北約5.7m、東西約6.1mを測る。SD201に切られる。主体部は検出されていない。周溝の幅は約0.8～0.9m、深さは約0.2～0.35m、埋土は黒色シルトが主体である。西周溝から直口壺と壺底部（64～66）、東周溝から壺・鉢類（67～70）が出土している。

SX205（図版22・23：写真図版21）

調査区中央南部で検出した。SX207とSX210の間に位置する。SX207に切られ、SX210を切る。北周溝はSX204と共有あるいはSX204を切って掘られている。南北約5.2mを測り、東西の区画溝については不明である。主体部は検出されていない。周溝の幅は約0.5～0.7m、深さは約0.3～0.4m、埋土は黒色細砂質シルトが主体となる。南周溝から広口壺（71）が出土している。

SX206（図版23・24：写真図版21）

調査区南部中央で検出した。SX206の南に位置する弧状の溝で区画された部分である。南北の残存径は約4.9m、周溝の幅約0.8m、深さは約0.3m．埋土は黒褐色シルト（中砂・細砂混じり）である。SX210との切り合いは不明で、SD202に切られる。後述するSK207が主体部の残欠である可能性が考えられる。SX205南溝を周溝墓の区画溝と考えなければ、SX205と合わせて径10.2m程度の円形周溝墓と捉えることもできる。

SX207（図版22・23：写真図版22）

調査区南部西端で検出した。四隅が切れる方形周溝墓である。検出されたのは３辺のみで西辺は調査区外に当たる。南北幅は約8.5m、東西の残存幅は7.5m、周溝の深さは0.4から0.55m、埋土は黒色シルト（中砂・細砂混じり）である。主体部は検出されていない。東周溝から広口壺（52・53）、北周溝から壺（54）、無頸壺（55）、甕（56～58）、南周溝から壺の口縁と底部（59～63）が出土している。

SX208（図版25）

調査区南西隅で一部だけ検出した。隅が切れる方形周溝墓である。主体部は検出されていない。東西の幅約7.2mを測る。北周溝で幅約0.8m、深さ約0.15m、埋土は黒色シルト質細砂・黒褐色シルト混じり細砂である。北周溝から広口壺（74）が出土している。

SX209（図版20・21）

調査区北端で検出した。溝1条の一部だけだが、SX203北周溝を共有する方形周溝墓の南西隅と判断した。ほとんどの部分が調査区外に当たる。検出できた溝の幅が約1.3m、深さは約0.4mで、埋土は黒色細砂質シルトである。

SX210（図版24）

調査区南半部東端で検出した円形周溝墓である。検出したのは１／３程度で大半は調査区外に伸びる。検出長が南北方向で約13.4mとなっており、今回検出した中では最大の周溝墓である。SX205、SD202によって切られる。主体部は検出されていない。周溝の幅は1.7～2.2m、深さは0.25mで、埋度は黒色細砂質シルトと黒褐色細砂質シルトである。西周溝から壺の底部（98）が出土している。

SX211（図版25）

調査区南東隅で検出した弧状の溝である。SX208の東側に位置し、遺物は出土していないが、円形周溝墓の一部と判断した。幅0.5m、深さは0.6mを測り、埋土は黒色細砂質シルトと褐灰色シルト質細砂である。

SX212（図版22）

調査区中央東端で検出した溝である。広口壺、直口壺、台付き長頸壺、把手付鉢などの供献土器と考えられる弥生土器（82～97）が大量に出土していることから、方形周溝墓の一部であると判断した。残存部分の幅は約1.0m、深さは約0.4mを測る。埋土は黒色シルトである。

SX213（図版24）

調査区中央で検出した弧状の短い溝である。SX204の北西側に位置する。加飾された広口壺（99・100）が出土していることから、周溝墓の一部と判断した。溝の残存幅は最大で0.5m、深さは0.05mである。

木棺墓

SK201（図版19）

調査区北端で検出した長方形の土坑である。SX201の南に位置し、SX201の周溝を切っていた可能性がある。長軸で約2.7m、幅約1.0mを測り、深さは約0.1mである。両端に小口板痕跡が認められることから、木棺墓と考えられる。

SK242（図版19）

調査区北端で検出した長方形の土坑である。SX201の南に位置する。長軸で約1.85m、幅約0.6mを測り、深さは約0.3mである。内側に長さ1.8m、幅0.45mの木棺痕跡があり、木棺墓と考えられる。

SK203（図版20・21）

調査区北端付近で検出した長方形の土坑である。SH201とSX203の一部を切る。長軸で約1.65m、幅約0.95mを測り、深さは約0.2mである。木棺墓と考えられる。

SK232（図版20・21）

調査区北端付近で検出した長方形の土坑である。SX203の南側直近に位置する。長軸で約2.5m、幅約1.0mを測り、深さは約0.3mである。木棺墓の可能性がある。

土器棺墓

SK238（図版20・21）

調査区北端付近で検出した隅丸長方形の土坑である。SX203の西溝と南溝の間に位置する。長軸で約0.8m、幅0.5mで、深さは0.2mである。古式土師器の広口壺（107・108）と大型鉢（109）が横位置で

埋納されていた。土器棺墓と考えられる。

SK239（図版20・21）

調査区北端付近で検出した歪な円形の土坑である。SX202に南東隅に近接する。径約0.35m、深さは約0.2mを測る。弥生土器の壺体部（115）が縦位置に埋納された状態で出土した。土器棺墓と考えられる。

SK213（図版24：写真図版）

調査区中央東端で検出した歪な円形の土坑である。SK280とSK215の間に位置する。径約0.9m、深さは約0,4mを測る。頸部以下のみが残存した弥生土器の壺（106）が横位置で埋納されていた。土器棺墓と考えられる。

SK214（図版22）

調査区中央東端で検出した歪な円形の土坑である。SK213の東に隣接する。径約0.5m、深さは約0.2mである。上部が削平されているが、弥生土器の壺（114）が横位置で埋納されていた。土器棺墓と考えられる。

SK14（図版24）

調査区南部中央で検出した。SX206南溝に接する歪な円形の土坑である。径約0.55m、深さは約0.2mである。壺底部（116）が正位置に据えられた状態で出土していることから、土器棺墓と考えられる。

土坑

SK202（図版26：写真図版）

調査区中央で検出した不定形の土坑である。SK231に切られる。東西約5.8m、南北約3.4mを測り、深さは約0.15mである。埋土は黒色細砂質シルトである。

SK204（図版28）

調査区南部中央で検出した楕円形の土坑である。SX207とSX206の間に位置する。南北約0.95m、東西約1.25mを測る。深さは約0.2mで、埋土は黒色細砂質シルトと黒褐色細砂質シルトである。

SK205（図版28）

調査区南部東端で検出した歪な円形の土坑である。SX206南周溝に切られる。径約1.2mを測り、深さは約0.2mで、埋土は黒色細砂質シルトである。

SK206（図版28）

調査区南部東端で検出した歪な長楕円形の土坑である。SK205とSX210周溝に切られる。残存長約1.3m、幅0.8mを測り、深さは約0.1mである。

SK207（図版24）

調査区南部中央で検出した。隅丸長方形を呈する土坑である。SD202に切られる。幅約0.6～0.7m、残存長約2.0mを測り、深さは0.2mで、埋土は褐灰色シルト質細砂とにぶい黄褐色シルト質細砂である。底面が平らではないが、位置的にはSX206の主体部である可能性を持つ。

SK208（図版27）

調査区中央東端で検出した長楕円形の土坑である。南北約0.65m、東西約1.4mを測る。深さは約0.35mで、埋土は黒色細砂質シルトと褐灰色細砂質シルトである。直口壺（101）が出土している。

SK209（図版27）

調査区中央東端で検出した長楕円形の土坑である。SK211の南側に接する。南北約0.5m、東西約1.3

mを測る。深さは約0.35mで、埋土は黒色細砂質シルトと褐灰色細砂質シルトである。直口壺の口縁部片（103）が出土している。

SK210（図版27）

調査区中央東端で検出した長楕円形の土坑である。SK211に切られる。南北約0.65m、東西約1.65mを測る。深さは約0.25mで、埋土は黒色細砂質シルトと褐灰色細砂質シルトである。

SK211（図版27）

調査区中央東端で検出した隅丸長方形の土坑である。SK211を切る。南北約0.65m、東西約1.65mを測る。深さは約0.15mである。

SK212（図版27）

調査区中央東端で検出した隅丸長方形の土坑である。SK210の北側に位置し、調査区外に延びる。残存長約1.05m、幅約0.5mを測る。深さは約0.15mである。

SK215（図版27）

調査区中央で検出した長楕円形の土坑である。SD201に切られている。南北約0.85m、東西約2.2mを測る。深さは約0.3mで、埋土は黒褐色細砂質シルトと灰黄褐色細砂質シルトである。

SK216（図版27）

調査区中央東端で検出した長楕円形の土坑である。SD201に切られて、調査区外に延びる。残存長約1.7m、幅約1.1m、深さ約0.35mを測る。

SK217（図版27）

調査区中央東端で検出した長楕円形の土坑である。一部を攪乱に切られ、SK218を切る。南北約0.95m、東西約0.4mを測る。深さは約0.2mで、埋土は黒色細砂質シルトと黒褐色シルト質細砂である。

SK218（図版27）

調査区中央東端で検出した隅丸長方形の土坑である。SK217に切られる。南北約0.95m、東西約0.8mを測る。深さは約0.25mである。

SK231（図版26）

調査区中央で検出した歪な楕円形の土坑である。SK202を切る。長径約1.45m、短径約1.0mを測る。深さは約0.3mで、埋土は黒色細砂質シルトおよび黒褐色細砂質シルトである。直口壺（102）が出土している。

SK233（図版26）

調査区中央で検出した隅丸長方形の土坑である。SX202とSK202の間に位置する。長さ約1.3m、幅約0.5mを測り、深さは約0.2mで埋土は黒褐色細砂質シルトと暗褐色細砂質シルトである。

SK234（図版26）

調査区中央で検出した歪な隅丸長方形の土坑である。長さ約1.15m、幅約0.55mを測り、深さは約0.2mで埋土は黒褐色細砂質シルトである。

SK235（図版26）

調査区中央で検出した長方形の土坑である。SX202南周溝を切る。長さ約1.25m、幅約0.5mを測り、深さは約0.1mで埋土は黒褐色細砂質シルトである。

SK236（図版26）

調査区中央で検出した楕円形の土坑である。SX202の南に位置する。長径約1.15m、短径約0.7mを

測る。深さは約0.2mで、埋土は黒色細砂質シルトおよび黒褐色細砂質シルトである。

SK237（図版26）

調査区中央西端で検出した隅丸方形の土坑である。南北約1.4m、東西約1.25mを測り、深さは約0.1m、埋土は黒色細砂質シルトである。

SK240（図版26）

調査区北半中央で検出した隅丸長方形を呈する土坑である。SX202東周溝に切られる。残存長約1.6m、幅約0.8mを測る。深さは0.25mで埋土は黒色細砂質シルトと褐灰色細砂質シルトである。

SK241（図版26）

調査区北半中央で検出した長楕円形を呈する土坑である。SX202北周溝とピットに切られる。長径約1.35m、短径約0.8mを測る。深さは0.35mで埋土は黒色細砂質シルトを主体とする。

SK243（図版19）

調査区北端で検出した不定形土坑である。SX201第一主体部を切る。長さは最大で約1.6m、幅約１.１mを測り、深さは0.3mである。埋土は黒褐色細砂質シルトである。

(3) 上層遺構（図版30：写真図版23）

溝、掘立柱建物跡、柱穴・土坑を多数検出している。調査時点では明確な建物跡を抽出できなかったが、報告書作成過程で複数の建物跡を抽出した。

溝

SD201・SD202（図版29）

中世の包含層の下から検出された遺構である。ともに幅40～50 cm、深さ30～40 cmの箱掘りの溝で、ほぼ南北方向に併行して走る。SD201はほぼ直線的に走るのに対して、SD202はややカーブを描いて走るので両者の間隔は最も接近する箇所で約２m、離れるところで約７mある。SD202からは8世紀代の杯破片が出土している。SD201から8世紀代の須恵器杯Bのほか土師器の糸切り小皿や片口鉢の体部と思われる破片も出土しているが、後者の土器については混入の可能性が高く、SD202・201ともに8世紀代に機能していた溝の可能性が高い。ただし、両者が併存していたかどうかは不明である。仮に同時期のものではないとしても、断面の形状や埋土等からみてそれほど時間的な差はないものと思われる。

SD204（図版29）

調査区北部中央付近で検出した短い溝である。SK232に切られる。検出長3.5m、幅0.8m、深さは約0.3mである。埋土は黄灰色細砂質シルト、黒色細砂質シルトである。

SD205（図版29）

調査区北部西端で検出した溝である。調査区外に延びる。検出長5.0m、幅0.75m、深さは約0.3mである。埋土は黄灰色細砂質シルト、黒褐色細砂質シルトである。

掘立柱建物跡

SB101（図版32）

最も北に位置する。南の柱列側の２間のみの検出であるが、掘立柱建物跡と判断した。柱間は2.3mを測る。南に隣接するSB102と並びを同じくする。柱穴からは遺物の出土はなかったので、時期は特定できない。

SB102（図版32）

梁行２間、桁行３間の掘立柱建物である。桁行は３間以上の可能性もなくはないが、他の建物例から

みて３間が妥当であろう。東側に間仕切りと思われる柱列がある。柱間は桁行側が広く2.3m～2.5mを測り、梁行側は1.8mである。柱穴からは遺物の出土はなかったので、時期の特定はできない。

SB103（図版32）

桁行３間、梁行２間の総柱掘立柱建物である。桁行のいずれも柱間は1.1m前後であるが、梁行は東端梁行の柱穴Ｐ256とＰ530の柱間が0.9mであるの対して、西端梁行の柱穴Ｐ527とＰ521の柱間および柱穴Ｐ521とＰ523の柱間が1.1mと広い。柱穴からは遺物の出土はなかったので、時期の特定はできない。

SB104-1･2（図版33）

同じ位置で柱の位置をわずか東にずらして建て替えを行っており、建て替え前の建物をSB104-1とし、建て替え後の建物をSB104-2とする。ともに桁行２間、梁行２間の掘立柱建物である。西側に間仕切りの柱列がある。梁行の柱間は1.0m～1.1mであるのに対して、桁行は北側の柱穴Ｐ501とＰ77、南側の柱穴Ｐ505とＰ112の柱間は1.5m～1.6mと広い。但し、北桁行の柱穴Ｐ77とＰ73間、南桁行の柱穴Ｐ112とＰ111間の柱間は0.65m～0.7mと狭くなっている。なお、建て替え後の建物をSB104-2の柱穴Ｐ77・Ｐ508・Ｐ96・Ｐ504には10㎝前後の根石が据えられている。柱穴Ｐ71・110・111・96・113から遺物SK13出土の土師器杯と同じ破片が出土している。

SB105-1･2（図版33）

同じ位置で柱の位置をわずか東にずらして建て替えを行っており、建て替え前の建物をSB105-1とし、建て替え後の建物をSB105-2とする。ともに桁行２間、梁行２間の掘立柱建物である。西側に間仕切りの柱列がある。柱間は1.0～1.1mを測る。柱穴Ｐ79・81・99には10㎝前後の根石が据えられている。柱穴Ｐ62・63・98・99・95・90・114から遺物SK13出土の土師器杯と同じ破片が出土している

SB106（図版32：写真図版25）

１間×１間の掘立柱建物である。柱間は2.8m～3.0mである。掘り方0.5m前後である。各柱穴からの遺物はない。周囲が柵（SA101）で囲まれていた可能性がある。

土坑

SK13（図版31：写真図版25）

長径3.9m、短径2.3mの不定形の土坑である。深さは0.2mで底面はほぼ平らである。埋土は黒褐色のシルト混じり細砂で、炭化物および地山のブロック土を含んでいる。比較的まとまった量の遺物が出土した。

SK10（図版31：写真図版24）

長径3.9m、短径2.3mの不定形の土坑である。深さは0.2mで底面はほぼ平らである。埋土は黒褐色のシルト混じり細砂で、炭化物および地山のブロック土を含んでいる。比較的まとまった量の遺物が出土した。

SK01（図版31）

調査区中央西側で検出した不定形の土坑である。南北2.3m、東西1.55m、深さ0.4mを測る。埋土は黒褐色シルト質細砂～シルト混じり細砂を主体とする。

その他の遺構

P517（図版32：写真図版24）

SK01ともう一つのピットに切られた浅いピットである。宋銭５種８枚（M9～M16）が重なった状態

で出土している。

2　2区の遺構（図版34：写真図版26）

溝（SD201・ SD202）やピット群を検出した。ピット群は調査区の北端と中央東に分かれて検出された。北端のピット群はSD01溝の埋没後に掘り込まれたもので底に根石が据えられており、掘立柱建物の柱穴の可能性が高い。中央東のピット群についても掘立柱建物の柱穴の可能性が高い。

溝

SD201（図版36：写真図版27）

調査区の北端部の旧地形は西北方向に傾斜しており、弥生土器を包含した黒褐色シルト層が堆積しており、この黒褐色シルト層を開削して、幅約1.5m、深さ約0.5mの東西方向に走る溝が検出されている。埋土は灰褐色シルトで8世紀代の土器を包含している。

SD202・203（図版36）

南東方向から北東方向に走る幅0.9m、深さ0.2m前後の溝である。202と203は本来1つの溝で、上面が削平されたために、途中途切れた状態で検出されたものと思われる。土師器の高台付椀を含む破片が出土している。

掘立柱建物跡

SB201（図版36：写真図版27）

調査区北西隅で検出された2間以上×2間以上の掘立柱建物跡である。南北2間とすると南列のP02に対応する北列の柱穴が検出されていないので、北にもう1間分の柱列が存在している可能性が高く、この場合、東西2間以上南北3間以上の掘立柱建物跡ということになる。柱穴P201・204には根石が据えられている。柱間は0.9mである。柱穴からは遺物の出土はなく、時期の特定はできない。

SB202（図版36）

東西方向に4つのピットが並び、その間隔は1.4m前後である。これに対応する柱列が検出されていないので、建物跡かどうかは不明である。柱穴から遺物の出土はなく、時期の特定はできない。

3　3区の遺構（図版35：写真図版28）

調査区北端には幅3m前後、深さ0.2m前後の浅い窪地状の溝が南東方向から北西方向に走る。弥生時代後期の土器を包含しており、東の調査区外に同時代の集落が存在しているものと思われる。

掘立柱建物跡

SB301（図版36）

東西の柱間2.0m、南北の柱間3.5mの南北に長い1間×1間の掘立柱建物跡である。柱穴301から弥生土器と思われる砂粒を多く含んだ土器が出土しているが、建物時期を特定できる遺物ではない。

4　4区の遺構（図版35：写真図版28）

土坑

SX01（図版36：写真図版29）

掘り方2.5mの方形土坑が検出され、中から石材が出土した。石材は0.8mの角柱状のものであるが、加工痕跡は認められず、また、遺物も出土していないことから、その性格、時期とも不明である。

5　5区の遺構（図版35）

掘立柱建物跡

SB501（図版36：写真図版29）

調査区北端で検出された2間以上×2間以上の掘立柱建物跡である。東西の柱間3.0m、南北の柱間1.2～1.4mで、東西の柱間の方が広い。柱穴からは遺物の出土はなく、時期の特定はできない。

6　6区・7区の遺構（図版37：写真図版29）

周溝墓

SX601（図版38：写真図版30・31）

調査区南半西端で検出した。わずかに弧状を呈する溝が残存するだけだが、周溝墓の一部であると判断した。最大幅1.2m、深さ0.4mを測り、埋土は黒色及び黒褐色シルトである。遺物の出土は認められなかった。

SX602（図版38：写真図版32）

調査区南半東橋で検出した隅丸長方形の周溝墓である。南北約7.5m、東西約6mを測る。周溝は完周せず、東側と南西隅に切れ目がある。周溝の幅は約0.6m、深さは最大で0.22mを測り、埋土は黒色及び暗灰褐色シルトである。周溝の北西隅から小型の壺（133）が出土している。

ほぼ中心に長さ約3.2m、幅約1.4m、深さ5cmの長方形を呈する土坑があり、主体部の痕跡であると考えられる。

SX603（図版39：写真図版34・35）

調査区ほぼ中央で検出された周溝墓である。周溝が途切れていることに加え、北側がSX604、南東隅がSX602に切られているため、平面形は明瞭ではないが、隅丸方形を呈していた可能性が高い。東西で幅約6.8mを測り、周溝の幅は残りが良い部分で0.8m、深さは0.4m、埋土は黒色および黒褐色シルトである。

北東・南西に軸線を持ち、平行に並んだ主体部が2基検出されている。いずれも組み合わせ式木棺が埋納されていたと考えられる。東側に位置する第1主体部は長さ1.7m、幅0.7mを測る。著しく削平されているが、最大深度16cmの小口板の痕跡が両端で認められる。西側の第2主体部は長さ1.62m、幅0.7mを測る。著しく削平され、長側板と小口板の痕跡だけが残る。深さは最大で20cmである。

SX604（図版39：写真図版36）

調査区北側中央で検出された方形周溝墓である。SX603北周溝を切る。著しい削平を受け、周溝は断続的で東辺を欠く。南北8.6mを測り、東西幅は不明、周溝の深さは最大でも10cm、埋土は黒褐色シルトである。主体部は検出されていない。

掘立柱建物跡

SB601（図版40：写真図版30）

南北方向に桁行をとる掘立柱建物である。西側の桁行柱列が検出されていないので、調査区外にもう1間分梁行が延びるものと思われ、梁行3間、桁行は4間の規模の建物になると思われる。南側に間仕切りの柱列が存在する。また、東の桁行のうちP619とP679の間に柱穴が欠如しているが、この間に3個の小さなピット3個が直線上に並ぶので入り口の扉の可能性が高い。

なお、このＳＢ601の東側に多数のピットが集中しているが、この1棟以外に建物を復元することは

できなかった。

土坑

SK601（図版40）

SB601と向きが揃った土坑が建物の中央付近で検出されているが、建物との関係は不明である。南北1.7m、東西1.1mの隅丸長方形を呈し、深さは0.2mである。

SK602（図版40）

調査区中央東端で検出された円形の土坑である。底部が平坦であることから、桶状のものが埋置されていた可能性がある。直径0.7m、深さ8cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

SK603（図版40）

調査区中央東端で検出された円形の土坑である。一部が調査区外に伸びる。底部が平坦であることから、桶状のものが埋置されていた可能性がある。直径0.7m、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

SK607（図版40）

調査区北端で検出された楕円形の土坑である。南北1.34m、東西1.9m、深さ0.3mを測る。埋土は黒色から黒褐色シルトである。

SK608（図版40）

調査区北端で検出された隅丸方形の土坑である。一部が調査区外に伸びる。幅1.5m、残存長1.4m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色シルトが主体で、一部地山ブロックが混じる。

SK609（図版40）

調査区北端で検出された長楕円形の土坑である。SK608、SK610と柱穴に切られる。幅0.95m、長さ3.3m、深さ0.18mを測る。埋土は黒色から黒褐色シルトである。

SK610（図版40）

調査区北端で検出された長楕円形の土坑である。SK609を切る。幅0.38m、長さ1.62mを測る。

SK613（図版40）

調査区中央部、SX604と重なって検出された楕円形の土坑である。

7　8区の遺構（図版41：写真図版37）

SX801（図版42：写真図版40・41）

調査区北端で検出した方形周溝墓である。検出された周溝は著しく削平を受け、北側と東側の周溝は特に残りが悪いが、四隅が切れる形態であったと考えられる。南北約8.6m、東西約6.6mを測り、周溝の最大幅は1m、深さは20cm、埋土は黒褐色シルトである。西周溝から弥生土器の壺体部（134・135）が出土している。

SR801（図版45：写真図版42）

調査区南端で検出した流路である。蛇行しながら東西に走る。最大幅は5.2m、深さ0.3mを測る。埋土は灰黄褐色シルトからシルト質細砂で弥生土器の壺、鉢など（136～157）が含まれていた。

SB801～SB806

調査区北半に1棟（SB801）、南半に5棟（SB 802～SB 806）検出された。SB802、803、805は弥生時代後期の埋没流路（SR801）の上に構築されている。6棟は建物方向をほぼ同じくする。

SB801（図版43：写真図版38）

2間×2間の掘立柱建物であるが、桁行の柱間が2.9～3.0mであるのに対して、梁行が1.8m～1.5mと狭いので南北に細長い建物となっている。時期の限定は現時点では難しいが、周辺の出土土器から奈良時代から平安時代のものと推定される。

SB802（図版43：写真図版37･38）

3間×2間の南北に桁行をとる掘立柱建物である。柱間1.8m～2.0m。掘り方03m。P815から須恵器壺破片、P810から糸切り小皿破片、P818から土師器片が出土している。

SB803（図版44：写真図版37･39）

2間×2間の掘立柱建物である。柱間1.8m～1.9m。掘り方03m～0.4。P01とP02の柱間を広くとったためにP01とP04・P06の北側の柱列は一直線に並んでいない。P01から弥生土器・土師器片が出土している。

SB804（図版44：写真図版37･39）

2間×2間の掘立柱建物である。P826とP827の間の柱穴はSK810により失われている。北側の柱列の柱間隔が広いために、平面形態は台形状に開く。柱穴掘り方から輪高台付の椀の破片が出土している。

SB805（図版42：写真図版37）

東側の2間分の柱穴のみ検出されており、全体規模は不明である。柱間は1.65～1.8mを測る。

SB806（図版42：写真図版37）

2間×2間以上の掘立柱建物である。P839とP840の間の柱穴は攪乱土坑により失われている。柱間は2.0m～2.1mを測る。

SK802（図版44：写真図版41・42）

検出面から約0.3m掘りこまれた穴に据え付けられた状態で検出された須恵器の埋め甕である。地中に据えられた底部分および体部片のみが残存し、上半部は失われている。内部から土師器高杯も出土している。

SK801・SK803～SK817（図版44・45）

直径1.5m、深さ1m前後の円形土坑が主だが、なかには楕円形で深さ0.2mと浅いもの（SK813・814・817）も検出された。円形のものは野井戸もしくは肥溜め等の可能性が高い。埋土に江戸期の染付磁器、瓦などを包含している。

8　9区の遺構（図版46～48：写真図版43～45）

神子曽遺跡の最南端にあたる調査区である。黄褐色土の基盤層の上に奈良時代の灰色包含層が堆積していた。ピット群や土坑群が検出されたが、これらの遺構から建物遺構を復元することはできなかった。

溝

SD903（図版47：写真図版44）

調査区南半の遺構集中箇所で検出した東西に走る短い溝である。残存長5.6m、最大幅1.3、深さ0.2mを測る。埋土は黄灰色極細砂質シルトとにぶい黄色シルト混じり極細砂である。

柱穴

P926（図版47）

調査区南西部の遺構集中箇所で検出した。直径約60cm、深さ40cmを測る柱穴である。

P931（図版47）

調査区南西部の遺構集中箇所で検出した。直径約50cm、深さ20cmを測る柱穴である。

P934（図版47）

調査区南西部の遺構集中箇所で検出した。直径約55cm、深さ10cmを測る柱穴である。

P935（図版47）

調査区南西部の遺構集中箇所で検出した。直径約55cm、深さ25cmを測る柱穴である。

土坑

SK901（図版47）

調査区北東端で検出された円形の土坑である。径0.85m、深さ15cmを測り、埋土はにぶい黄色極細砂質シルトである。

SK902（図版47：写真図版45）

調査区北東端で検出された楕円形の土坑である。長径1.2m、短径0.95m、深さ40cmを測り、埋土はにぶい黄色極細砂質シルトである。30cm角で厚さ15cmの板状の石が重ねて埋納されていた。

SK903（図版47：写真図版45）

調査区北東端で検出された楕円形の土坑である。長径1.2m、短径0.95m、深さ40cmを測り、埋土はにぶい暗褐色極細砂質シルトである。15cm角で厚さ10cmの板状の石が埋納されていた。

SK907（図版47）

調査区中央部で検出された長楕円形の土坑である。長径1.65m，短径0.95m、深さ17cmを測る。埋土は固くしまった褐灰色シルトである。

SK908（図版48）

調査区南半の遺構集中箇所で検出した不定形の土坑である。南北0.7m、東西0.95m、深さ35cmを測る。埋土は黄灰色から暗灰黄色極細砂混じりシルトである。

SK909（図版48：写真図版45）

調査区南半の遺構集中箇所で検出した円形の土坑である。径1.0m、深さ30cmを測る。埋土は灰黄色シルト質極細砂である。

SK910（図版48：写真図版45）

調査区南半の遺構集中箇所で検出した円形の土坑である。径1.15m、深さ25cmを測る。埋土は黒色から黄灰色極細砂混じりシルトである。

SK918（図版48）

調査区南半の遺構集中箇所で検出した円形の土坑である。SK920に切られる。径1.35m、深さ13cmを測る。埋土は黄灰色極細砂質シルトである。

SK919（図版48）

調査区南半の遺構集中箇所で検出した土坑である。一部が調査区外に伸びる。南北1.05m、深さ17cmを測る。埋土は黄灰色極細砂質シルトである。

SK920（図版48）

調査区南半の遺構集中箇所で検出した楕円形の土坑である。SK918を切る。長径1.1m、短径0.9m、深さ10cmを測る。埋土はSK918のものよりやや暗い黄灰色極細砂質シルトである。

第３節　遺物

神子曽遺跡は広大な面積の調査を実施したため、縄文時代・弥生時代・古代を中心に、縄文時代から中世に至る遺物が出土した。また遺物の種類も土器と石製品、石器、金属器関連資料など多種な遺物が出土した。

遺物の出土状況は第2節の遺構の説明で述べたため、本節では時代ごとの土器と石製品、石器、金属器関連資料について種類ごとに成果を述べる。

１　縄文土器

縄文土器は中期の縄文土器が、1区の土坑を中心に出土している。

1）１区

土坑

SK15（図版49：写真図版46・47）

1は波状口縁の深鉢で、口縁内面に段状肥厚帯を作り、キザミを付加する。外面は縄文を地文とし、波頂部から垂下する隆帯両脇に半截竹管を沿わせ、口縁に沿った部分および、垂下隆帯から斜行する半截竹管の平行沈線文を施文する。

2・3は内弯する波状口縁の深鉢で、口縁内面の段状肥厚帯にはキザミを付加する。外面は縄文を地文とし、半截竹管の平行沈線文を施文する。4は内傾する波状口縁の深鉢で、口縁端部が肥厚し、端部に縄文を付加する。外面は口縁に沿った半截竹管の平行沈線文を施文する。5は外傾する平口縁の深鉢で、口縁端部は内面が肥厚し、端部に縄文を付加する。体部外面は縄文を施文するが、ナデ消しているため不明瞭である。6は直線的に外傾する平口縁の深鉢で、口縁端部に縄文を付加する。7は外反する波状口縁の深鉢である。口縁端部は波頂部に向かって肥厚し、端部に縄文を付加する。体部外面は細かい縄文を施文する。8は縄文を地文とし、頸体部界を半截竹管の平行沈線文で区切る。体部は斜め方向の半截竹管隆帯を施文する。9は縄文を地文とし、頸体部界を半截竹管の刺突で区切る。体部は斜め方向に荒く竹管状文を施文する。10は深鉢の体部で、球形を呈する。縄文を地文とし、頸体部界直下を半截竹管の平行沈線文で区切る。体部は半截竹管の三角形文と半円形文を施文する。

11は内弯気味に直立する平口縁の深鉢である。外面は縦方向の半截竹管条痕で調整している。12はくびれが緩いキャリパー形の深鉢で、口縁形態は平縁を呈する。縦位の縄文地に口縁部のみ、半截竹管工具による連弧文を施文する。内面は横方向の調整を行う。他地域の胎土である。

13・14は深鉢の底部で、円形凹底で、底部中央部は厚く内面に突出している。体部の底面付近まで縄文を施文している。13は体部が底部から3cmほどの所で水平に擬口縁状に割れている。

15は土器片を加工した直径6.5cmの土製円板である。太めの縄文を施文する体部の破片を打ち欠き、側面を荒く研磨して、円形に整えている。

SK230（図版50・51：写真図版47～50）

16はくびれが緩いキャリパー形の深鉢で、口縁端部と底部を欠くが、中心部分は全周する。頸体部界で径43.4cm、現状の高さ42.6cmを測る。全体に縦位の太めの縄文を地文とし、半截竹管工具による施文を行う。頸体部界を画する横位の直線文帯に、7単位の縦位の直線文帯で区画し、間に上下に対向する三角形文帯を描く。三角形文帯内はU字形文帯を交互に対向させている。奇数であるため、U字形開放部を対向させる施文形態のほうが多い。縦位の直線文帯は横位の施文で区画している。下端はU字形

に閉じている。頸体部界直上に1箇所、一対の補修孔が存在する。容量は57.90リットル以上である。

17～21は地文の太い縄文のみが認められるものであり、17は口縁部付近、18はくびれ部から体部、19･20は体部である。17～20は同一個体と考えられる。21の縄文は幅が広い。

22～28は内弯する口縁である。縄文地に半截竹管工具により、口縁部に沿う平行沈線文と連弧文を施文する。29～33は縄文地に半截竹管工具により、連弧文を施文する。34・35はくびれが緩いキャリパー形の深鉢で、縄文地に口縁部外面のみ半截竹管工具により、連弧文を施文する。

36は波状口縁深鉢の波頂部付近の破片と考えられる。

SK06（図版52：写真図版51）

37は内弯する波状口縁の深鉢で、口縁部に半截竹管刺突と半截竹管刺突隆帯で三角形および菱形文を施文する。38は内弯する波状口縁の深鉢で、口縁内面の段状肥厚帯にはキザミを付加する。縄文を地文とし、波頂部に半截竹管隆帯を貼り付ける。39は内弯する波状口縁の深鉢である。素隆帯で三角形文を施文する。40はくびれが緩いキャリパー形の平口縁の深鉢で、縦位の太い縄文のみの施文である。内面は横方向の調整を行う。41はヘラ状工具によりキザミを加える。42は縦位に縄文を施文する。

SK205（図版52：写真図版51）

43は内弯する波状口縁の深鉢である。波頂部から垂下する素隆帯を円形に囲み、両脇には半截竹管工具による沈線を沿わす隆帯で施文する。

SK11（図版52：写真図版51）

44は内弯する平口縁の鉢である。口縁直下に素隆帯を貼り付ける。

包含層（図版52：写真図版51）

遺構から遊離した状態で出土した土器には深鉢（45～51）がある。

45は内弯する平口縁の深鉢である。口縁内面の段状肥厚帯には縄文を付加する。縄文を地文とし、半截竹管工具による平行沈線文で施文する。46は外反する平口縁の深鉢である。口縁内面の段状肥厚帯は縄文を付加する。縄文を地文とし、半截竹管工具による平行沈線文での施文が見られる。47は縄文を地文とし、半截竹管工具による連弧文を施文する。48は縄文を地文とし、頸体部界に半截竹管工具による連弧文を施文する。49は体部の破片で、縦位の縄文を施文している。50は内弯する平口縁の深鉢である。素隆帯により区画を作る。51は深鉢で口縁部はやや外方に開き、口縁端部は折り返し口縁で端部に押圧によるキザミを施す。

2　弥生時代から古墳時代初頭の土器

弥生時代から古墳時代初頭の土器は、1区・3区・6区・8区から出土しており、ほとんどが1区からである。出土した遺構は、方形周溝墓・円形周溝墓・竪穴住居・土坑・溝・落ち込みなどがある。

1）1区

方形周溝墓・円形周溝墓

SX207北周溝（図版53：写真図版52）

壺（52・53）が出土している。52は広口壺の口縁部である。大きく外反する口縁部の上下に突帯を貼り付け、端部にクシ描直線文を施文する。口縁部内面にはクシ描文を施文する。

53は直口壺で口縁部を欠く。体部は縦長で、底部は平底である。直立する頸部が付き、頸部下端に2条の突帯を貼り付ける。外面は全体にハケ調整の後、体上半部はクシ描直線文と波状文を交互に施文し

ている。クシ描文は切り合い関係から見ると上から順に施文している。最大径部は横方向のミガキ、下半部は縦方向のミガキを行う。肩部に覆接触黒斑が存在する。体部の容量は6.89リットルである。

SX207東周溝（図版53：写真図版52）

壺（54）、鉢（55）、甕（56～58）が出土している。54は細頸壺で口頸部を欠く。体部は球形で、底部は平底である。体上半部はクシ描直線文と波状文を施文し、下半部は縦方向のミガキを行う。体部下半に接地黒斑が存在する。体部の容量は1.63リットルである。55は尖底の底部に1孔を有する砲弾形の有孔鉢で、口縁部に紐かけの双孔を開ける。土器の容量は0.11リットルである。

56～58は甕である。56・57は口縁部で直線的に立ち上がる体部から口縁部を外反させる。58は体部下半から底部で、底部は突出している。体部下半は縦方向のケズリを行う。体部下半に接地黒斑が存在する。

SX207南周溝（図版53：写真図版52）

壺（60）と甕（59・61～63）が出土している。壺60は底部で、平底である。甕59は口縁部で、外方に屈曲し、端部にキザミを付加する。他地域の胎土である。61～63は甕の底部である。61は平底で、62・63は上げ底であり、61・62の底部は未調整である。63の体部外面には縦方向のハケ調整が残る。

SX204西周溝（図版53：写真図版53）

壺（64・65）が出土している。64は直口壺である。体部は縦長で、底部は平底である。直立する口頸部が付き、口縁部はヨコナデを行い、端部に面を作る。体部の最大径部は横方向のミガキ、下半部は斜め方向のミガキを行う。底部から体部下半にかけて接地黒斑が存在する。他地域の胎土である。土器全体の容量は7.43リットル、体部の容量は6.72リットルである。65は壺の底部で平底である。SX205北周溝から出土した破片と接合している。調整は摩滅のため不明である。他地域の胎土である。

SX204東周溝（図版53：写真図版53）

壺（66～68）と甕（69・70）が出土している。66～68は壺底部である。66はSX204の西周溝と東周溝とSX205南周溝から出土した破片が接合していることから、本来SX204に供えられた土器が周溝に転落し、SX205の墳丘造成時に周溝を掘削した時に、盛土の中に入り、最終的にSX205南周溝に転落したと考えられる。大型壺の平底の底部で、体部は縦方向のハケ調整を行い、下部は横方向のミガキを行う。他地域の胎土である。67・68は突出した壺の底部である。

69・70は甕である。69は体部上半部が大きく外方に開き、口縁部は屈曲して折り曲げる。体部上半部には回転の遅い、クシ描直線文を重複して3帯と波状文を施文する。他地域の胎土である。70は平底の底部で厚く、体部は直線的に外方に開く。底面に接地黒斑が存在する。

SX205南周溝（図版54：写真図版53）

71は広口壺の口頸部から肩部である。頸部下端に2条の突帯を貼り付ける。

SX201北周溝（図版54：写真図版53）

壺（72）と甕（73）が出土している。72は直口壺で、口頸部から肩部が残る。やや外傾する口頸部から体部にかけてクシ描直線文を施文し、最下端に波状文が残る。73は甕口縁部で、大きく外反し、端部をきざむ。他地域の胎土である。

SX208北周溝（図版54：写真図版53・56）

74は広口壺で体部は球形で、底部は平底である。頸部は不明である。口縁部は下方に拡張し、口縁端部に凹線文を巡らし、クシでキザミ、細かい円形浮文を貼り付ける。口縁内面にはヘラ描斜格子文を施文する。体部上半部はクシ描の直線文３帯・２本のクシ描斜格子文・直線文、列点文で飾る。体部下半

は横方向と縦方向のミガキを行う。内面下半部は縦方向のハケ調整を行う。底部から体部下半にかけて接地黒斑が存在する。体部の容量は5.34リットルである。

SX203東周溝（図版54：写真図版54）

壺（75・76）が出土している。75は短頸壺で、球形の体部に短く外反する口頸部が付く。内面はハケ調整、外面は体部下半に縦方向のミガキが残る。土器全体の容量は0.74リットル、体部の容量は0.70リットルである。76は体部が球形で、底部は平底である。口頸部は外方に開き、頸部下端に2条の突帯を貼り付ける。口縁端部は上下に拡張し、端面に列点文をきざむ。体部の最大径部にはクシ描列点文を施文する。体部下半は縦方向のミガキを行う。土器全体の容量は6.86リットル、体部の容量は5.95リットルである。

SX203西周溝（図版54：写真図版53・54）

壺（77～81）が出土している。77は広口壺の口縁で、口縁端部は拡張し、ヘラ描き斜格子文を施文する。78は直口壺の体部である。縦長の体部に平底である。体部表面には被熱剥離がみられる。体部の容量は0.44リットルである。79は直口壺の口頸部から肩部である。直立する口頸部の外面に縦方向のハケ調整が残る。口縁部はヨコナデを行い、端部に面を作る。口縁部に接地黒斑が存在する。80は無頸壺で、底部を欠く。球形の体部に平底の底部が付くタイプである。口縁部は「く」字に外反し、屈曲部に押圧突帯を貼り付ける。口縁端部は拡張させ、キザミを付ける。体部外面にはハケ調整が残る。体部下半にススが付着する。81は大型壺の体部下半部である。球形の体部に平底である。内外面の一部に縦方向のハケ調整が残り、外面底部付近には縦方向のケズリが残る。

SX212西周溝（図版55・56：写真図版55～59）

壺（82～96）と鉢（97）が出土している。82～87・93～95は広口壺で、頸部に断面三角形突帯を貼り付けるもの（82～84）と、頸部に押圧突帯を貼り付けるもの（85）と、頸部に突帯を貼り付けないもの（86・87）と、底部（93～95）とに分けられる。

82は頸部下端に3条の突帯を巡らし、2本6単位の棒状浮文を貼り付けている。頸部は外方に開き、口縁部は斜下外反させ、内面に2条の突帯を巡らす。端部はキザミと円形浮文で飾る。体部上半部はクシ描の直線文、波状文、斜格子文で飾り円形浮文を貼り付ける。体部下半は縦方向のミガキを行う。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。土器全体の容量は推定で14.41リットル、体部の容量は推定で13.36リットルである。

83は体部が球形で、底部は平底である。口頸部は外方に開き、頸部下端に2条の突帯を貼り付ける。口縁部は斜下拡張し、口縁端部にクシ描波状文を施文する。口縁内面にはクシ描円形文を施文する。体上半部はクシ描の波状文、斜格子文、直線文で飾る。体部下半は横方向と縦方向のミガキを行う。土器全体の容量は7.00リットル、体部の容量は6.50リットルである。

84は体部下半を欠く。口頸部は外方に開き、頸部下端に2条の突帯を貼り付ける。口縁部は斜下拡張し、口縁端部に凹線文を巡らし、キザミを加える。口縁部内面はクシ描斜格子文を施文する。体部上半は草本科のクシ状工具による列点文を2帯施文する。

85は体部が球形で、底部は平底である。口頸部は外方に開き、頸部下端に押圧突帯を貼り付ける。口縁部は斜下拡張し、口縁端部に列点文をきざむ。口縁部内面はクシ描斜格子文を施文する。体部上半は草本科のクシ状工具による列点文を施文する。体部下半は横方向と縦方向のミガキを行う。底部に籾の圧痕が残る。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。土器全体の容量は3.87リットル、体部の容量

は3.65リットルである。

86は体部が縦長で、底部は平底である。口頸部は外方に開き、口縁部は斜下拡張し、口縁端部に凹線文を巡らし、綾杉状のキザミを加える。口縁部内面はクシ描波状文で飾る。体部上半はクシ描直線文を6帯施文し、各文様間はミガキを施す。体部下半は横方向と縦方向のミガキを行う。体部下端には直径2.5cm前後の焼成後の穿孔がある。黒斑は存在しない。土器全体の容量は2.20リットル、体部の容量は2.02リットルである。

87は体部がやや縦長で、底部は平底である。体部上半部はクシ描直線文と波状文を交互に施文する。下半部は縦方向のケズリの後、縦方向のミガキを行う。内面はハケ調整が残る。体部の容量は4.05リットルである。

93～95は広口壺の底部で、体部外面は縦方向のミガキを行う。95は底面全体と体部の一部にかけて接地黒斑が存在する。96は細頸壺などの底部である。上げ底で、体部外面は縦方向のミガキを行う。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。

88～91は直口壺である。88は体部が縦長で、底部は平底である。直立する口頸部が付き、口縁部はヨコナデを行い、端部に面を作る。外面は縦方向のハケ調整を行い、下半部は縦方向のミガキを行う。外面は被熱による剥離が認められる。底部から体部にかけて小さな接地黒斑が存在し、対する内面に熾溜黒斑が存在する。土器全体の容量は3.71リットル、体部の容量は3.00リットルである。89は口縁部でやや外傾する口縁端部外面に突帯を貼り付け、縦方向にキザミを付ける。90・91は直口壺の底部である。体部外面は、90が縦方向のミガキを行い、91が縦方向のケズリを行う。92は細頸壺で、低い脚台が付く。体部は算盤玉形で、口頸部はやや外方に開く。口縁端部はやや内傾し、凹線文を施し、列点文を施文する。頸部はクシ描直線文を、体部上半部はクシ描直線文と波状文を交互に施文する。体部のクシ描文間にはミガキを施す。最大径部は横方向のミガキ、下半部は縦方向のミガキを行う。脚部内面に接地黒斑が、肩部と口縁部にかけて覆接触黒斑が存在する。土器全体の容量は2.07リットル、体部の容量は1.77リットルである。97は把手付鉢である。口径と高さがほぼ同一の小型品で、平底である。側面には断面が長方形の把手を嵌入している。土器の容量は0.26リットルである。

SX210西周溝（図版56：写真図版59）

98は平底の底部で段を作っている。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。

SX213北周溝（図版56：写真図版58・59）

壺（99・100）が出土している。99は広口壺の頸部から体部上半部で、球形の体部の上半部にクシ描直線文と斜格子文と波状文を施文する。肩部に覆接触黒斑が存在する。100は平底の底部で、体部外面は横方向のナデを行う。99と同一個体の可能性が高い。

土坑（図版57・58：写真図版60～62）

SK208

101は直口壺である。体部は縦長で、底部は平底である。直立する口頸部が付き、口縁部はヨコナデを行い、端部に面を作る。外面は縦方向のハケ調整を行い、下半部は縦方向ケズリの後、ミガキを行う。内面は下半部が縦方向、上半部が斜め方向のハケ調整を行う。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。土器全体の容量は4.07リットル、体部の容量は3.73リットルである。

SK231

102は直口壺で、口縁部を欠く。縦長の体部で、外面は縦方向のハケ調整を行い、下半部は縦方向の

ミガキを行う。体部下半に接地黒斑が存在する。体部の容量は6.48リットルである。

SK209

103は直口壺の口頸部である。直立する口頸部の外面に縦方向ハケ調整を行う。口縁部はヨコナデを行い、端部に面を作る。

SK13

104は広口壺の口縁部である。大きく外反し、口縁端部はヨコナデ後、クシ描列点文を施文する。

SK213

106は大型の壺で口頸部を打ち欠いている。体部はやや縦長で、底部は平底である。体部外面は下半下部が縦方向、上部が横方向、上半部が縦方向のミガキを行う。肩部内面には粘土紐接合痕跡が残る。他地域の胎土である。体部の容量は73.82リットルである。

SK238

壺（107・108）と鉢（109）が出土している。107～109は胎土・調整・焼成が同一で、107・108の施文工具および施文方法が同一のため、同一工人によるものと考えられる。107は広口壺で、球形の体部に小さな平底を有する。頸部は上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は拡張し、端面にヘラ描き斜格子文を充填する鋸歯文を施文する。口縁上端はキザミを加える。体部外面はタタキ後、縦方向のミガキを行い、内面は横方向のハケ調整を行う。頸部内面は横方向のミガキを行う。底部から体部にかけて接地黒斑が存在し、対する内面に熾溜黒斑が存在する。土器全体の容量は15.27リットル、体部の容量は14.26リットルである。108は二重口縁壺で、球形の体部に小さな平底を有する。頸部は短く上方に立ち上がり、屈曲して口縁部を作る。口縁端部は拡張し、端面にヘラ描き斜格子文を充填する鋸歯文を施文する。口縁上端にはキザミを加える。体部外面はタタキ後、縦方向のミガキを行い、内面は横方向のハケ調整を行う。底部から体部にかけて接地黒斑が存在し、対する内面に熾溜黒斑が存在する。土器全体の容量は15.05リットル、体部の容量は14.35リットルである。

109は最大径が上部にある体部に小さな平底を有する。口縁部は大きく外反し、口縁端部は体部に小さな平底を有する。体部外面はタタキ後、縦方向のミガキを行い、肩部から口縁部にかけては横方向のミガキを行う。内面は下半を縦方向、上半を横方向のミガキを行う。体部中央部に分割整形の接合痕がある。体部下半に接地黒斑が存在し、対する内面に熾溜黒斑が存在する。土器全体の容量は8.64リットル、体部の容量は6.55リットルである。

SK243

甕（110）と鉢（111）が出土している。110は外反する甕の口縁部で、調整が荒く歪んでいる。111は鉢の底部で丁寧にナデて仕上げている。

SK216

甕（112）と鉢（113）が出土している。112は口縁部の破片であり、口縁部外面は横方向、内面は横方向のハケ調整が残り、ヨコナデは弱い。113は口縁部から体部にかけての破片であり、く字に大きく外反している。口縁部内面には横方向のハケ調整が残り、ヨコナデは弱い。体部に黒斑が存在する。

SK214

114は壺の体部から底部である。内外とも縦方向のハケ調整を行う。底部から体部にかけてわずかに接地黒斑が存在する。

SK239

115は壺の底部で偏球形を呈し、小さな平底である。体部外面はハケ調整後、タタキを行い、下半部は縦方向のミガキを行い、最大径部は横方向のミガキを行う。内面は下半部を縦方向のハケ調整を行い、最大径部は横方向のハケ調整を行う。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。

SK14

116は大型壺の底部でわずかな稜線を有する平底気味の丸底である。外面は縦方向のハケ調整を行い、内面はケズリを行い薄く仕上げている。他地域の胎土である。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。

竪穴住居（図版57：写真図版60）

SH201

105は直口壺の口頸部である。直立する口頸部の内外ともに縦方向のハケ調整を行う。口縁部はヨコナデを行い、端部に面を作る。

溝（図版59：写真図版60）

SD202

117・118がある。117は広口壺の口頸部で口縁端部を欠く。外方に大きく開き、内面にヘラ描きの斜格子文を施文する。118は平底の鉢の底部で、内面には工具の痕跡が残る。

包含層（図版59：写真図版60）

遺構から遊離した土器には119～121がある。119は大型壺の体部下半で、体部は球形で底部は平底である。体下部に縦方向のミガキが残る。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。120は大型壺の底部で平底である。体部外面は縦方向にミガキを行う。121は高坏で、半球状の小型の坏部に脚柱部が付きそのまま脚裾部に向かって広がる。脚裾部は4方向に円孔を開ける。口縁部は凹線文を巡らす。体部外面は横方向、内面は口縁部が横方向、底面が縦方向にミガキを行う。脚部外面は縦方向のミガキを行う。坏部の容量は0.40リットルである。

柱穴（図3：写真図版59）

J1は緑色凝灰岩製の管玉で、明るい緑灰色を呈する。全長13.9mm、直径3.0ｍｍ・2.8mmと細い。両面穿孔で孔径は異なり、直径2.0ｍｍ・1.4mmである。径が大きい側の摩耗が著しい。

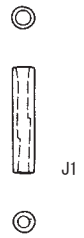


図３ 出土玉

2） ３区（図版59：写真図版62）

落ち込み

122～130が出土している。122は壺の底部で体部に縦方向のミガキを行う。底部から体部にかけて接地黒斑が存在し、内面には熾溜黒斑が残る。123は甕の底部で、上げ底である。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。124～129は鉢の底部である。124～127は上げ底で、128は窪みがあり、129は平底である。129の体部にはタタキ痕跡が残る。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。130は高坏の脚部で坏部は剥離している。

包含層

131・132が出土している。131は小型の蓋が伴う壺の底部で、2孔1対の紐穴を開ける。132は甕の底部で上げ底である。

3） 6 区（図版59：写真図版62）

墓

SX602

133は口頸部を欠く小型の壺である。底部は平底で厚く、ハケ調整痕が残る体部に、クシ描の波状文・直線文・横位の囲文を上から順に施文している。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。体部の容量は0.19リットルである。

4） 8 区（図版59：写真図版62・63）

墓

SX801

壺底部（134・135）が出土している。134は平底で、135は突出した底部で厚い。

流路

SR801

136～157が出土している。壺（136・137）は、136が口縁部、137が底部である。136は拡張した口縁端部に凹線を巡らし、上端部に逆C形のキザミを付け、円形浮文を貼り付ける。137は底部中央部が窪んでおり未調整である。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。

甕（138～147）は口縁部（138・139）と底部（140～147）とがある。138・139は口縁部がく字に外反する。磨滅が著しい。140は平底で木葉の葉脈の圧痕が残る。141～147はわずかに上げ底である。140～143はタタキ調整を行う。143・145は底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。

鉢（148～156）はいずれも底部で、148・149は上げ底、150～154は平底である。156は低い脚台を付ける。154はタタキ調整を行う。148・150の内面はハケ調整を行う。148・149・154は底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。154・155は内面に熾溜黒斑が残る。

157は有孔鉢で、平底の底部に1孔を開ける。側面に接地黒斑が存在する。（篠宮）

3　石器

1）縄文時代の遺構出土の石器（図版66・67、72～74：写真図版70・71、75～77）

1区SK06・11・15・230という4つの土坑から出土している。剥片石器はすべてサヌカイト製、台石を中心とした礫石器には砂岩が主として用いられている。

石鏃（S 1～S 5）

すべてSK15から出土している。S 1 ～ S 4 は埋土の土壌洗浄により回収できたもので、こうしたサイズの資料の取り上げは手掘りでは容易でないことを物語る。凹基式が4点、平基式が1点みられる。凹基式はいずれも長さが2㎝未満で、重量も最大で6 gであるのに対して、平基式は長さが3.5㎝、重量も3 gを超え、弥生時代の石鏃かと思わせるものである。凹基式ではS1のように素材面を大きく残し、粗雑な調整剥離のものと、S 4のように素材面を残さず丁寧に仕上げたものとがみられる。S 5は全面に調整剥離が及び丁寧に仕上げられている。

石匙（S 6）

縦長剥片を素材とした縦型石匙で、素材の末端側に小さな摘みを丁寧に作り出す。背面側には主剥離面と直交する大きな剥離面が残り、剥片剥離の際に打面を90度回していることがうかがえる。刃部は平

坦な調整剥離で一側縁に設けられている。

削器（Ｓ７～Ｓ９）

Ｓ７は小片ながら平坦な調整剥離が見られるので削器とした。Ｓ８は半分以上を欠損するが、おそらく小型の打製石包丁に類似した形態となると予想される。素材剥離面の構成も弥生時代の打製石包丁に近似している。石核底面と考えられるような平坦な剥離面を有する横長剥片の末端に両面からの平坦な調整剥離で刃部を作り出す。同様な石器は同じ淡路島にある佃遺跡（縄文時代後期）からも出土している。Ｓ９は急角度で直線的な刃部をもつもので、刃部はやや鋸歯状となる。上端にも抉り入状の刃部を１カ所作り出している。

楔形石器（Ｓ10～Ｓ13）

Ｓ10は楔形石器の削片（スポール）である。Ｓ11～Ｓ13は一側縁に明瞭な潰れ状の階段状剥離をもつので、楔形石器と判断した。

二次加工のある剥片（Ｓ14）

不定形な剥片の打面部分を直線的にカットするように調整剥離が施されている。

剥片（Ｓ15～Ｓ17）

いずれも背面は多方向からの剥離面をもち、Ｓ17では打面が右回りで移動している。

凹石・台石類（Ｓ78～Ｓ92）

一般に、手に持てるぐらいの円礫や楕円礫の一部に敲打によって凹部が形成されている石器は凹石と呼ばれる。凹部だけではなく、側面や端部、表裏面などに敲打痕や磨面が併存することも多く、どれに重点を置くかで磨石や敲石と呼ばれることもある。神子曽遺跡の出土品で敲打による凹部をもつ石器はほとんどが大型品で、手に持って使用したとは考え難い。地面に置いて、何らかの作業用台としての使用が想定されるものが大半で、これを台石と呼ぶこととする。大半は砂岩質の石材が選ばれており、敲打面を上に向けると、据わりがよく安定感のある亜角礫が用いられている。台石には敲打痕は認められるものの明瞭な凹部が形成されていないものも含まれる。磨面が併存するものはＳ82の１点のみで、他は磨くあるいは擦るといった作業を行ったような痕跡は認められない。

ＳＫ06出土の６点（うち２点は凹石）、ＳＫ15出土の６点、ＳＫ230出土の２点を図示する。

敲打痕や敲打による凹部の形成状況は同一ではなく、資料によってかなりの違いがある。ここでは、以下のように分類する。

ａ類：　明瞭な凹部は形成されず、浅い敲打部が部分的あるいは面的に広がるもの。

ａ１類：敲打痕が部分的あるいは散漫に広がるもの。

ａ２類：敲打痕が面的な広がりをもつもの。

ｂ類：浅い線状の凹部が形成されるもの。

ｃ類：深い凹部が形成されるもの。

ｃ１類：凹部の平面形が円形もしくは不整な円形で、鉢状に窪むもの。

ｃ２類：凹部の平面形が楕円形もしくは紡錘形で、薬研状に窪むもの。

このような凹部は一つの個体に対して１種類に限定されるのではなく、複数が組み合ったり、異なる面では異なる凹部が形成されたりする場合がある。

ａ１類にはＳ83、Ｓ85、Ｓ86がある。Ｓ83の敲打痕は小さく散漫で、一部にかすかな磨面が伴う。Ｓ85は他とは異なり火山岩系の石材が使用されている。一見、扁平な円礫で磨石のようにも思えるが、明

確な磨面は認められない。片面にごく浅い敲打痕が散漫に残る。S86は割れているものの十分手に持てる大きさの亜円礫である。敲打痕は浅い。

a２類にはS79、S80、81がある。S79は台形状の断面をしたすわりの良い礫の上面ほぼ全域に敲打痕が広がっている。敲打面は小さな凹凸があり、場所によっては少し深く窪んでいるものの、全体としてはほぼ平坦である。S80も安定感のある礫の上面に敲打痕が広がるが、中央付近にかけて径４㎝ほどの緩やかな凹部が形成されているところが、S79との大きな違いである。徐々に窪んでゆくことからｃ１類とはしなかった。S81は一抱えもある大きな亜角礫の平坦な上面に敲打痕が集中し、あばた状となっている。ｂ類の線状凹部や小さく鉢状に窪むｃ１類の凹部も数カ所併存している。

ｂ類にはS82、S84、S88、S89、S91がある。S88が最も顕著で、ほぼ同様な方向に連なる敲打痕が幾筋も見られる。S88の場合、敲打痕がある範囲に集合しているという点ではａ２類と同様であるが、明らかな方向性をもつ点でａ２類とは大きく異なる。S82やS84、S89、S91ではS88のような敲打痕の集中はみられない。散在しているような状況であるが、それぞれの方向性は似通っているものが多い。S84は太い円柱状礫のごく一部に線状凹部が認められる。表面には白っぽく帯状ラインが観察されるが、使用にかかわるものではなく、石材の質の違いが反映されたものである。SK15に投げ込まれた数多くの礫の中では特異な形状をしており、他とは異なる意図をもって持ち込まれたものと考えられる。S91は緑色片岩の柱状礫を素材としている。本来は石棒などの素材として遺跡に持ち込まれたものと考えられるが、これを素材として何らかの石器を製作しようとした痕跡は認められない。片面の中央付近に長軸に対して斜行する線状の敲打痕が数条認められる。また、反対側の面には小さなｃ１類の凹部も認められる。

ｃ１類にはS78、S87、S90がある。S78では不整形な多面体の礫の４面に各種の敲打痕や凹部が認められる。破損しており、本来の形状は分からないが、それぞれの面のほぼ中央に単独で敲打痕や凹部がある。ｃ１類の凹部は２面に認められ、そのうち１面を図示している。深さが３～４㎜の明瞭な凹部である。他の２面はｂ類とｃ２類である。それぞれが単独で、各面の中央付近に形成されている。S87は受熱による破損や欠けが多い。深さ２～３㎜のしっかりした凹部が２カ所並んでいる。S90では厚みのある長方形状の礫のほぼ中央に５㎝×３㎝、深さ６㎜ほどのしっかりとした凹部が形成されている。同じ面にはｂ類の線状敲打痕が端近くにあり、反対側の面にはａ２類とｂ類の敲打痕が混在する。

ｃ２類にはS92があり、ｃ１類に分類したS78にも見られる。S92は丸みのある扁平礫の片面中央付近に凹部が形成されている。凹部は深くないが断面形では中央に谷部をもつ。周辺には若干の敲打痕も見られる。他に比べると小型ではあるが、扁平な形であるため手には持ちにくい。S78の凹部は自然の凹部を利用している可能性がある。

2)　弥生時代の遺構出土の石器（図版67：写真図版71）

ここでは円形竪穴住居跡（ＳＨ201）や方形周溝墓など弥生時代の遺構から出土しているものをとりあげるが、磨製石包丁や太型蛤刃石斧など明らかに弥生時代に帰属する石器が皆無であるため、多くは縄文時代のものが混入していると考えられる。剥片石器はいずれもサヌカイト製である。

石鏃（S18）

周辺部のみを急角度の調整剥離で成形した粗雑なつくりの石器である。石鏃先端部であろう。ＳＨ201の中央土坑から出土しており、混入の可能性は低いだろう。

石匙（S19）

大型の横長剥片の一端に曖昧ながら丸みのある摘みを作り出しているので石匙とした。素材剥片の末端側辺に平坦な調整剥離で緩く内弯する刃部を設け、打面側は丸みをもたせるような調整剥離を施す。方形周溝墓（SX206）付近から出土しており、帰属時期は判断しがたい。

削器（S20・S21）

両者とも剥片の末端に直線的な刃部を作る。S20では打面側は山形に整えている。

楔形石器（S22～S24）

上下方向から対になる打撃痕をもつ典型的な楔形石器である。S22は断面が凸レンズ状をしており、打製尖頭器の基部を思わせる。縞状模様が観察されることから金山産サヌカイトとみて間違いないであろう。

剥片（S25）

背面に円礫面を有する剥片で、礫面の状況から岩屋産サヌカイトと考えられる。

3） 包含層ほか出土の石器（図版68～71、74・75：写真図版72～75、77～79）

神子曽遺跡では明瞭な遺物包含層は存在しないが、ここでは、機械掘削や人力掘削、遺構面精査時に出土した石器や、奈良時代など後世の遺構から出土した石器を一括して扱う。剥片石器では石鏃と楔形石器が最も目につくが、石錐は1点に留まる。S53、S71～S77以外はすべてサヌカイト。

石鏃（S26～S40）

基部形態が判明するものはすべて凹基式である。長さ1～2㎝の小型品が主であるが、S34は3㎝を超える。基部の抉りは浅いものが多い。個々を見れば、基部端や側縁の形態に差があり、特定の形態へのまとまりは感じさせないが、S36～S38は抉りが浅く細身で調整剥離が粗雑な一群ととらえうる。

石錐（S41）

厚みのある剥片の尖った一端に若干の調整剥離を加えて錐部としたものである。神子曽遺跡の石器で石錐とみなしうるものはこれ1点のみで、細長い錐部を作り出したものは出土していない。

削器（S42～S51）

小型品（S42～S46、S50・S51）と大型品（S47～S49）がある。素材や形態、刃部の調整剥離と形状など個体差が大きくまとまりはない。S42やS44、S48、S49では風化度の異なる剥離面が存在したり、稜線が白っぽくなっていたりしており、後世にキズを受けたことがうかがえる。

小型品で比較的まとまった調整剥離による刃部をもつものはS43とS46、S51がある。S43はごく緩やかな凹刃、S46は両面からの調整剥離で直刃、S51は凸刃である。

大型品3点も個体差が大きい。S47は滑らかな石肌をもっており、二上山産のサヌカイトの可能性がある。素材の末端に礫面を取り込んで剥離されており、右側縁に見られる比較的大きな平坦剥離を刃部調整の剥離とみなしたが、上下は対になって小剥離で潰れており、楔形石器にも分類しうる。S48とS49は横長剥片を素材とする。S49の刃部調整剥離は粗い階段状の剥離で、鋸歯状の刃部を作り出している。

楔形石器（S52～S69）

すべてが対になる潰れ状あるいは階段状の剥離痕を有するわけではなく、形状と剥離の状況から楔形石器と判断したものを含む。また、S52は両極打撃によって剥離された剥片、S61は削片（スポール）である。なお、S53は剥片石器の中では唯一のチャート製のものである。楔形石器としたが、火打石の

ようなものかもしれない。

小型品は２㎝程度、最大でも長さ６㎝強で、最大長が３～４㎝のものが主を占める。楔形石器の一部から石鏃のような小型剥片石器用の素材剥片を獲得しようとする際、大きさの面では不可能でない。Ｓ66では素材剥片の腹面中央から比較的大きな薄い剥片が剥離されている状況がうかがえる。

形態は方形に近いものが多いが、Ｓ56やＳ69のように縦長のもの、Ｓ55やＳ68のように横長のものなど様々である。

Ｓ59では背面側に残る自然面から原石が円礫と判断でき、淡路産サヌカイトが使用されている可能性が高い。

剥片（Ｓ70～Ｓ73）

剥片は多数出土しているが、多くは打点が線状であったり、ハジケ飛んでいたりしている小型剥片で、楔形石器からの剥離されたことが想定されるものである。ここではそうした剥片とは異なった剥離の状況が見られるものをとりあげておく。

Ｓ70は縦長剥片であるが背面には左右両方向からの剥離痕が見られる。打面部はハジケて残っていない。Ｓ71は神子曽遺跡の剥片の中では最も大きい部類に属するもので、厚さは４㎜と薄い。背面は１枚の平坦な大剥離面でほぼ占められている。打面は自然面である。Ｓ72は背面に残る自然面から素材が円礫と推定されるもので、淡路産サヌカイトであろうと思われる。Ｓ73は小さな剥片であるが、背面には主剥離面と逆方向からの剥離痕が見られる。これらの剥片から打面を不規則に移動する剥片剥離技術の存在がうかがえるが、そうした残核は出土していない。

石棒関連資料（Ｓ74～76）

結晶片岩製の石塊や石片が出土している。結晶片岩類が産するのは島内では沼島だけなので、石棒のようなものを製作する素材として持ち込まれたものの一部であろう。Ｓ74とＳ75は棒状となった石材の一部であるが、はっきりと加工痕と判断できるものは見られない。Ｓ76は剥片で、一端に若干の打撃痕が見られる。

叩石（Ｓ77）

小さな円礫の一端とその側両面に敲打痕が見られる。一部が赤変しており、受熱によると思われる。

凹石・台石類（Ｓ93～Ｓ96）

Ｓ93とＳ94は凹石と呼びうる大きさで、ｃ１類の凹部がそれぞれ1カ所認められる。Ｓ95は人頭大ほどある円礫の両面にｂ類とｃ１類の凹部が認められる。ｂ類の凹部は両面に、ｃ１類の凹部はｂ類と重なるように片面のみに認められる。ｂ類の凹部は深さがあり、はっきりとしている。

Ｓ96は亜円礫の一面に５㎝×2.5㎝、深さ10㎜の明瞭な断面Ｖ字形の凹部が形成されている。ただし、凹部の底はやや丸みをもつ。反対側の面にはｂ類とｃ１類の敲打痕も認められる。手に持って使うことができる大きさであり、置いて使うにはどちらの面にしても安定は悪い。

砥石（Ｓ97）

直方体状の礫をそのまま利用している。砥面は極めて不明瞭である。

敲石（Ｓ98）

一端がすぼまる楕円形礫の端部が敲打によって平坦な面を成す。敲石と呼びうる石器はこの１点のみである。

石皿（Ｓ99～Ｓ101）

Ｓ99とＳ100は平盤な礫に一面に磨面が認められるものである。破損が著しいものの、裏面はほぼ平坦で据わりが良い。Ｓ99では中央に向かって緩やかに厚みを減じており、「有縁石皿」呼びうるかもしれない。Ｓ100では磨面は中央ではなく端に偏る。

Ｓ101は板状礫に径約８㎝、深さ約2.5㎝の大きな凹部が形成されている石器である。凹部には横方向の擦痕が認められる。（藤田）

４　古代以降の土器

1）　1区

土坑

SK01（図版60：写真図版64）

須恵器

158・159は杯Ｂである。158は高台径8.2㎝、高台高0.6㎝、体部は高台脇より直線的に斜め上方に立ち上がる。

159は高台9.0㎝、高台高0.6㎝を測る。体部は高台脇より直線的に斜め上方に立ち上がる。底部外面に自然釉がかかり、窯壁の小粒が付着する。

161は片口鉢の口部のみの小片で、口径は不明である。口縁部の断面は三角形状を呈する。口縁部外面には重ね焼きによる黒色帯が巡る。

土師器

160は杯である。口径14.0㎝。口縁部は歪む。器壁は２ミリ前後と薄い。底部を欠くが、SK13出土の162と同じ形態の土師器である。

SK13（図版60：写真図版64）

土師器

162～168は杯である。口径11.9～12.1㎝、底径5.2～7.4㎝、高さ3.0～3.8㎝。器壁を薄く、仕上げる。底部の切り離しは回転糸切りによるもので、体部と底部の境は丸い。163は灰白色を呈し、胎土は精良である。また、丁寧な調整を行っている。165の底部外面には糸切り後に板状工具で整形した痕跡が残る。166は口径12.1㎝、器高3.8㎝、底径6.3㎝で、他に比べてやや深く、体部と底部の境が明瞭である。切り離しは回転糸切りによる。色調は内外面ともやや黒化している。

170も杯である。口径21.6㎝、底径6.2㎝、高さ16.6㎝。口縁部外面に２条の沈線を施す。外面は磨滅しているが、ヘラ磨きが施されている可能性が高い。内面には放射状の暗文を施す。胎土も精良である。

須恵器

169は片口鉢の小片である。口径24.0㎝。口縁部端部外面が丸みをもち、口縁部外面には重ね焼きによる黒色帯が巡る。

171は丸瓦である。外面に縄目叩き、内面に布目痕を残す。

SK09（図版60）

土師器

172は杯である。底径7.0㎝で、底部外面には糸切り後に板状工具で整形した165と同様の痕跡が残る。

SK10（図版60：写真図版64）

須恵器

173は鉢である。口径26.8cm、器高10.8cm、底9.4cm。口縁部端部外面が丸みをもつ。底部の切り離しは回転糸切りである。底部内面に使用痕跡があり、底部外面周縁部にも擦れた痕跡が認められる。

174は甕である。口径43.0cm。口頸部「く」の字状に外反し、口縁端面は平坦に仕上げる。体部外面は格子状叩き、内面同心円状当て具痕が残る。

周溝墓上層

SX205（図版61）

土師器

175は甕である。口径26.4cm。口頸部は「く」の字状に屈曲する。口頸部から肩部にかけて縦方向のハケ目調整、体部外面は斜め方向のハケ目を施す。口縁部内面は横方向のハケ目調整を施す。

SX207（図版61：写真図版65）

土師器

176は小皿である。完形品。口径7.5cm、底径5.4．器高1.1cm。底部の切り離しは回転糸切りによる。内外面回転ナデ調整を行い、器壁は薄く仕上げる。

178～181は杯である。口径12.0～12.2cm、底径7.2～8.2．器高3.4～3.5cm。底部の切り離しは回転糸切りによるが、181の底部外面には糸切り後に板状工具で整形した165と同様の痕跡が残る。

瓦質土器

177は内外面とも器面は黒色炭化している。口縁部を欠くが、杯であろう。底部外面は磨滅して不明であるが、糸切りの可能性が高い。

柱穴

ピット群（図版61：写真図版65）

須恵器

182・183は杯Ｂ蓋である。182はP30出土。口径15.8cm。扁平な笠形を呈し、口縁端部は短く屈曲する。183はP39出土。口径16.6cm。縁端は屈曲する。縁部外面に重ね焼きの痕跡を残す。

土師器

184・185は小皿である。184はP13出土。口径7.25cm、高さ1.45cm、底径5.0cm。底部の切り離しは回転糸切りによる。完形品。185はP217出土。完形品で、口径8.3cm、高さ1.4cm、底径6.0cmを測る。体部は短く立ち上がる。

186～195は杯である。186はP447出土。口径11.3cm。高さ2.95cm。底径6.4cm。口縁部に歪がある。底部の切り離しは回転糸切りによるが、165と同様の糸切り後に板状工具で整形した痕跡が残る。

187はP406出土。口径12.0cm、高さ3.2cm、底径7.8cm。口縁部に歪があり、底部の切り離しは回転糸切りによる。

188はP440出土。口径12.2cm、高さ3.25cm、底径6.85cm。底部の切り離しは回転糸切りによる。

189はP371出土。口径11.9cm、高さ3.1cm。底径6.9cm。器壁は薄く仕上げ、底部の切り離しは回転糸切りによる。

190はP301出土。口縁部は歪があり、底部の切り離しは回転糸切りによる。口径14.2cm、高さ3.0cm、底径8.0cm。

191はP211出土。口径14.0cm、高さ3.5cm、底径8.0cm。器壁は薄く仕上げる。

192はP376出土。口径12.3cm、高さ3.0cm、底径6.6cm。底部の切り離しは回転糸切りによる。

193（P56出土）・194（P55出土）・195（P61）はいずれも口縁部片のみで、底部を欠く。口径はそれぞれ13.4cm、13.3cm、14.5cmである。

鍋（196）

P18出土。口径26.0cm。口縁部は内傾し、逆「く」の字状を呈する。外面は斜め方向の叩き、内面は横方向のハケ目調整を施す。外面に煤が付着している。

羽釜（197）

P217出土。口径18.4cm。口は大きく内側に傾き、短い鍔を付ける。外面は指押さえ、内面は横方向のハケ調整を行う。

中世ピット（図版61：写真図版65）

須恵器

198は稜椀である。口径15.8cm。口縁部は外反し、内外面ともヘラ状工具で器面を調整している。

199は片口鉢である。口径27.8cm。口縁部外面が丸みをもつが、下端部は稜をもつ。包含層からの出土品である。

溝

SD201（図版62）

土師器

200は杯である。口径13.8cm。口縁部外面はヘラ状工具によって薄く仕上げる。

SD202（図版62：写真図版66）

土師器

201・202は杯である。201は口径13.8cm、器高3.9cm、底径8.9cm。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。底部外面はヘラ削り調整を行う。202は口径13.8cm、器高3.9cm、底径8.9cm、形態・調整とも201と同じである。

須恵器

203は壺底部である。内面はナデ調整を施しており、広口壺の可能性が高い。高台は断面方形で外側に踏ん張る。

包含層等出土（図版62：写真図版66・67）

須恵器

204・205・207は杯Ｂ蓋である。204は縁部径17.5cm。天井部は平坦で縁部はわずかに屈曲する。つまみは偏平な宝珠形を呈し、天井部はヘラ削り調整を施す。

205は口径13.2cm。天井部はヘラ削り調整を行う。縁部はわずかに屈曲する。

207は口径14.4cm。偏平な平蓋で、縁部の折り返しはほとんどない。天井部はヘラ削り調整を行う。

206は稜椀蓋である。口径17.6cm。縁部はわずかに屈曲する。天井部はヘラ削り調整を行う。

208～210は杯Ｂである。208は口径11.3cm。体部はやや斜めに立ち上がる。底部外面はヘラ切り後にナデ調整を施すのみである。209は口径13.0cmで、底部を欠く。210は口径13.3cm、器高3.7cm、底径9.0cm。高台は小さく、体部は高台脇から斜め方向に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。

211は杯Ａである。底径8.2cm・底部ヘラ切り後ナデ調整を行う。

212は壺である。底径 11.9cm。外面ヘラ削り調整、内面ナデ調整を施す。

213は甕である。体部の小片で、全体的な形態は不明である。

土師器

214・215は杯である。ともに第2遺構面からの出土で、底部の切り離しは回転糸切りによる。214は口径12.3cm・器高3.1cm・底径8.0cm、215は口径12.8cm・器高3.2cm・底径8.3cmである。

216・217は小皿である。216は口径6.9cm・器高1.2cm・底径4.25cmを測り、底部の切り離しは回転糸切りによる。

217は第2面遺構面出土。内外面とも磨滅し、調整痕は不明であるが、底部の切り離しは回転糸切りである。

218は製塩土器である。口径14.7cm。口縁部は内側に傾く。体部外面に押圧痕が残る。

219杯はである。SX207東周溝から出土した。口径15.0cm・器高2.6cm・底径9.8cm。底部の切り離しは回転糸切りである。

青磁

220は13世紀前半の龍泉窯の鎬蓮弁文椀の口縁部破片である。

2) 2区（図版62：写真図版67）

土師器

221は皿である。口径21.5cm、器高1.75cm、底径36.5cm、内外面とも磨滅により調整不明。

須恵器

222は杯Bである。口径12.2cm、器高3.7cm、高台径8.0cmを測る。高台は外方に踏ん張り、底部の周縁部に付く。口縁部はわずかに外反する。

3) 3区（図版63）

須恵器

223は杯Bである。高台径10.8cm。高台低く外方に踏ん張る。

4) 6区（図版63：写真図版67）

土坑

SK601

黒色土器

224は椀である。SK601出土。高台径5.5cm。全体磨滅し、黒化層は剥落している。

SK605

須恵器

225は片口鉢である。出土。口径33cmで、口縁部は内側に屈曲するが、端部を欠く。口縁部外面には重ね焼きによる黒色帯が巡る。体部の器壁は薄いが外面に成形時の段が顕著である。

ピット群

土師器

226は鍋である。「く」の字状に外反する。口縁部内面横方向のナデを施す。胎土の色調は暗褐色を呈する。

227は鍔釜である。直立する体部に短い鍔を設ける。外面に煤が付着する。内外面ともに板ナデ調整を行う。

228は軟質の甕の体部片である。外面は矢羽状の叩き痕を残すが、内面は削り調整を施す。

須恵器

229は片口鉢である。口縁部を欠くが、赤褐色の硬質の鉢である。底部内面に使用痕跡が認められる。

5) 8区（図版64・65：写真図版68・69）

土坑

SK802

土師器

231は高杯脚である。皿部を欠くが、脚底径11.1cm、脚高6.8cmの大型の高杯である。

232は土錘である。長さ3.7cm、径1.1cmを測る。外面ヘラ状工具による仕上げが施されている。

須恵器

233は甕である。外面に並行叩き、内面に同心円の当て具痕を残す。底部外面に3か所の焼成時の支えの痕跡と思われる窪みが残されている。

SK803

土師器

234は鍋である。受け口状の口縁部をもつ。口径35.8cm。体部外面には縦方向のハケ目調整を施す。口縁部外面に煤が付着する。内面は横方向のハケ目調整を施す。

SK805

染付磁器

235・236は染付磁器である。235は口径9.2cm、高さ3.0cm、高台径5.7cmの肥前径青磁の椀蓋である。内面は外縁部に四方襷文、見込み部分に2本の圏線を巡らし、こんにゃく印判の五弁花文を配する。体部外面は明オリーブ灰の青磁釉、内面およびつまみ内面は透明釉をかける。つまみ端部は露胎となっている。236は口径8.9cm、高さ3.1cm、高台径5.7cmの肥前径青磁の椀蓋である。

白磁

237は口径4.9cm、高さ1.5cm、底径1.6cmの型押しの紅皿である。内面全体と体部外面上部に透明釉がかかる。外面に焼成時の付着物が付く。

陶器

238はすり鉢である。口径24.0cm。口縁部外面に2条の沈線。内面に11単位のおろし目を施す。赤褐色を呈する。口縁部に粘土の積み上げ痕が残る。明石焼と考えられる。

SK806

染付磁器

239・240はともに肥前系磁器である。239は生がけの染付椀である。いずれも湾曲した体部をもち体部外面に紅葉文のコンニャク印判を押す。9.9・4.9・3.4cm。240は見込みに2本の圏線を巡らその内側は幅1.5cm釉剥ぎとする。見込みに花文のコンニャク判を押す。外面は青磁釉をかける。11.1・5.5・4.0cm。235・236と同じ。

陶器

241は白備前の壺である。外面は白釉をかける。内面は無釉である。底径8.0cm。

242は須恵器系の甕破片である。

土師器

243は皿である。口径8.6㎝、器高2.5、底径4.6・糸きり。

染付磁器

ともに肥前系磁器である。244は外面に紅葉文を配する。245は体部外面に窓文を配し、見込み内面には2本の圏線、中央に寿文を配する。

SK807

陶器

246は瀬戸・美濃系の水鉢である。口縁部は平坦で、端部は内側に突出する。外面は緑釉がかかるその一部は口縁部内面に流れ、タンパ状となる。内面は灰釉がかかる。口縁外面に雷文帯が巡る。

247は炮烙である。口径31.7㎝。体部は直立し、底部は湾曲する。内外面に煤が付着する。

250は丹波焼の甕である。外面はハケ塗りの赤ドベ地に飴釉をひしゃくがけする。内面は灰釉がかかる。口径29.0㎝、高さ38.5㎝、底径18.5㎝。口縁部は内外に突出する。

248は瓦質の短頸の二耳壺である。肩部外面に紅葉のスタンプ文を配する。葉茶壺か。口径13.8cm。

249は茶釜である。瓦質で、両端に飾りの耳を付す。体部外面は叩き、内面にハケ目の痕を残す。口径18.4cm。

染付磁器

251は碗である。体部外面に雪輪の高台側面に２重の圏線を施す。高台裏には雁がね文を施す。口径10.0cm、高さ5.0cm、底径3.9cm。

6） 9区（図版63）

溝

SD902

須恵器

230は壺である。輪高台は底部周縁に付く。底部内面は不調整である。底径10.0㎝。（森内）

5　金属器と鍛冶関連遺物

(1) 金属器（図版76：写真図版80）

鉄釘7点と刀子が土抗・ピット・包含層より出土しているほか、銅銭８枚をはじめ多量の椀形鉄滓等が出土している。

鉄釘（M1～M7）

M1・M2は、1区SK10上層より大量の椀形鉄滓とともに出土した。断面は四角形を呈し、身の一部及び頭部を欠く。M1は残存する長さ4.5㎝、厚さは最大部で0.6㎝。M2は残存する長さ3.5㎝、厚さは最大部で0.6㎝である。M3～M6はピット内上層より出土している。M3は1区P107上層より出土した。断面は四角形で、残存する長さは3.4㎝、厚さは最大部で0.5㎝である。M4は頭巻きの鉄釘で、未使用である。1区P112上層より出土している。断面は四角形で、残存する長さは2.6㎝、厚さは最大部で0.5㎝

である。M5は完形の細身の釘である。頭巻きの頂部で断面は四角形である。長さは4.0㎝、厚さは最大部で0.3㎝である。M6は出土した鉄釘のなかでは大型の釘で、頭部は頭巻きで、先端部を欠く。6区P618内より出土している。断面は四角形を呈し、残存する長さは6.0㎝、厚さは最大で0.7㎝である。M7は6区包含層より出土した頭巻きの鉄釘である。身の一部を欠くが、ほぼ全体を復元できる。断面は四角で、全長6.8㎝、厚さは最大0.5㎝である。

刀子（M8）

SK802出土の甕内より出土した。背部分に関をもつ片関の刀子である。身部と茎部の一部が遺存している。残存長5.8㎝、幅1.3㎝、厚さは最大で0.6㎝である。

銅　銭（M9～M16：M13～M16は写真のみ掲載）

SK01北西端に張り出した窪み内より宋銭が出土した。出土状況からSK01とは別の遺構の可能性が考えられる。3枚から4枚単位で近接して積み上げられ、ほぼ完形の状態で一括して出土した。銭緡の痕跡は確認できなかった。

M9・M10は熙寧元寶（始鋳：1068年）でM9が直径2.45㎝、重さ2.3g、M10は直径2.5㎝、重さ3.4ｇである。M11・M13・M14は元豊通寶（始鋳：1078年）で、M11は直径2.45㎝、重さ2.8g、M13が直径2.35㎝、重さ1.8gである。M14は直径2.53㎝、重さ3.0ｇを測る。M12は元祐通寶（始鋳：1086年）で直径2.46㎝、重さ2.7gである。M15は皇宋通寶（始鋳：1039年）で、全体の3/4程度が復元できた。直径2.53㎝、重さ1.6ｇである。M16の政和通寶（始鋳：1111年）も同様で、全体の3/4程度復元できた。直径2.2㎝、重さ1.5ｇを測る。

(2) 鍛冶関連遺物（図版77～80：写真図版81～82）

ここで扱う鍛冶関連遺物は、羽口、椀形鉄滓および鉄滓である。これらの遺物は、鍛冶操業後の廃棄用土坑と考えられる1区SK10をはじめ、柱穴や包含層中より出土している。鉄滓は、ほとんどが椀形鉄滓で、それ以外に鉄塊状のものガラス化が顕著な滓が少量混在する。

1) 羽口(H1～H13)

羽口は1区SK10およびP366・367、P440の遺構より、図化できなかった細片を含めると19点出土している。今回は、遺構から出土した羽口のうち図化可能な13点についてその概要を報告する。

H1～H10はSK10から出土した羽口である。いずれもガラス化した先端部付近の破片で、全体の形状が明らかなものはない。外面には、指押さえとナデの痕跡が認められ、胎土は極細砂を少量含む。

外径は5.5㎝～8.8㎝で、7～8㎝のものが多い。孔径は3㎝前後とほぼ一定である。H1～H3の先端部の形状が比較的良く残っている羽口をみると、先端部が角ばったH1・H3と尖り気味のH2に分かれ、先端部の形状に相違がみられる。

H1は椀形鉄滓に溶着した羽口で、炉内への装着状況がわかる資料である。溶着した椀形鉄滓は、8.5×8.1の大きさで1方向が切断されている。厚さは2.8㎝である。羽口はこの滓に対して33度の角度で溶着しており、炉内への装着角度を示している。滓の厚さは2.8㎝であることから、羽口の先端部は炉床より３㎝ほど上に装着されていたと理解できる。また先端部から胴部にかけて比較的残存状況が良好なH6では、ガラス化した部分が3㎝程度、灰白色（還元化）部分が4.5㎝の変化がみられる。

H11はP366内上層、H12はP367上層、H13はP440上層より出土している。H11は今回出土した羽口のなかでは最も遺存状況の良好な羽口である。全長14.5㎝、外径が先端部で5.5㎝、基部側7㎝と外形は細長い台形状を呈している。孔径は先端部で2.8㎝、基部側で2.2㎝と基部側が細くなっている。外面の調

整は指押さえとナデである。先端部は比較的ガラス化が少なく、炉内からの熱を受けた部分は先端部から3.5㎝程度である。また、灰白（還元化）部分は5㎝～6㎝である。

H12は先端部の破片でガラス化が顕著である。H13は羽口基部の破片である。外面には指押さえが顕著で、基部の端部は平坦である。

出土した羽口のなかでも、SK10から出土したH1は注目されるべき資料である。椀形鉄滓と溶着した羽口は、鍛冶炉操業時の姿を残している。羽口の据え付け角度、羽口先端部と炉床との距離をこの資料から具体的に得ることができた。また、H6・H11の羽口からは、炉内での羽口の露出範囲や炉壁の厚みなどを検討する資料が得られた。

2）椀形鉄滓

鉄滓は154点出土し、うち鍛冶段階で生成される椀形鉄滓と識別できたものが147点である。これ以外にガラス化が顕著な滓(M52)や鉄塊状のものも含まれる。ここでは椀形鉄滓と識別可能な147点のうち、遺存状況の良好な63点（M18～M51・M53～M57他※17点を抽出し、大きさと残留鉄分の視点からその傾向にについて述べる。

大きさ（長さ・幅・厚さ）の傾向

椀形鉄滓の大きさの傾向を探る上で、指標となるのが切断の痕跡が認められず、ほぼ完全な形状をもつM20・M21・M25・M38および処理番号43、同番号74の滓である。

M20：長さ6.4㎝・幅5.3㎝・厚さ2.4㎝。

処理番号43：長さ6.8㎝・幅5.1㎝・厚さ1.7㎝。

M21：長さ5.4㎝・幅4.5㎝・厚さ2.0㎝。

M25：長さ6.8㎝・幅6.3㎝・厚さ2.0㎝。

処理番号74：長さ8.0㎝・幅3.5㎝・厚さ2.1㎝。

M38：長さ9.7㎝・幅9.4㎝・厚さ1.7㎝。

これら以外にM47の下段の滓は、長さ15㎝前後、幅12㎝前後、厚さが４㎝前後と出土した椀形鉄滓のなかで最大の大きさを測る。完形の滓からみると、長さ５㎝～10㎝前後・幅４㎝～9㎝前後・厚さ２㎝前後のサイズと、長さ・幅ともに12㎝、厚さ4㎝を超える大型サイズのものに分かれる。

図４は出土した椀形鉄滓の大きさ(長さ・幅・厚さ)をグラフ化したものである。上記の滓以外は１方向から３方向の切断が行われており、当初の大きさを示すものではないが、全体的な傾向の判断資料として提示した。このなかでM47の数値が大きいのは、上下2段に生成された滓を合わせた数値で表記しているためで、先にのべたように下段のサイズは長さ15㎝前後・幅12㎝前後・厚さが４㎝前後で、大型サイズの滓は厚さが4㎝前後と厚い点が特徴である。この視点から大型サイズの滓はM47下段の滓、M30・M36・M40・M43・処理番号44の6点が該当する可能性がある。これら以外は長さ５㎝～10㎝前後・幅４㎝～9㎝前後・厚さ２㎝前後のサイズに収まると考えられる。

残留鉄分(密度)の傾向

椀形鉄滓中に残る残留鉄分を表す指標として、重量(ｇ)／体積(㎤)を採用した。すなわち１㎤あたりの重量である。椀形鉄滓の成分のうち鉄の比重は7.85と大きく、鉄滓の重量を構成している主要な要素と理解した。残留鉄分を知るためには各鉄滓の比重を算出することが必要であるが、比重を算出するための体積の計測が困難であるため、簡便な方法として純水の入った円柱状のビーカー（内径面積：86㎤・56.9㎤・16.32㎤）に鉄滓をいれ高さを計測し、体積を求めた。上記の計算により１㎤あたりの重量を求め、比重に代わる指標とした。計測精度の点から比重に代わるものとして「密度」と呼称する。

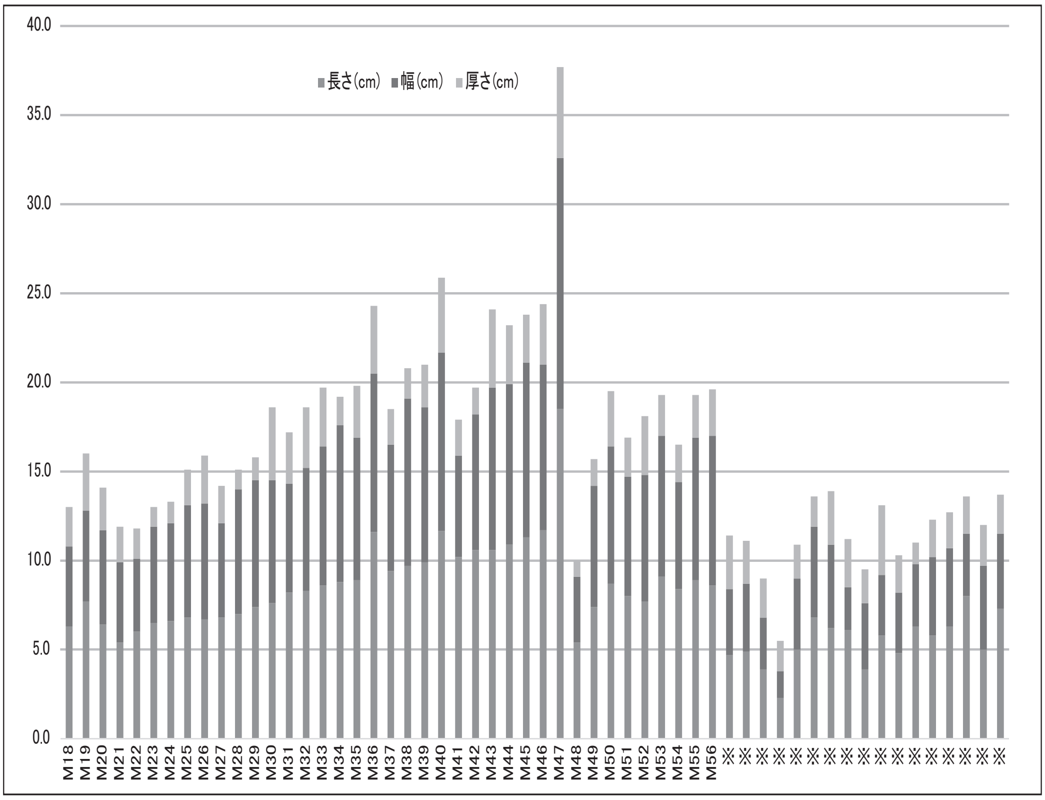


図４　椀形鉄滓の大きさ（長さ・幅・厚さ）の傾向

図５は、各椀形鉄滓の「密度」を表したグラフである。グラフ中の空白部分は、密度の数値が12以上を超えたため、計測エラーと判断し、グラフから除外した。また密度が8以上を超えるM49・M53についても、鉄の比重値を超えており計測エラーと判断すべきであるが、その数値がおおきく逸脱していないことから、誤差の範囲とした。

椀形鉄滓の密度の傾向をみると以下のとおりである。

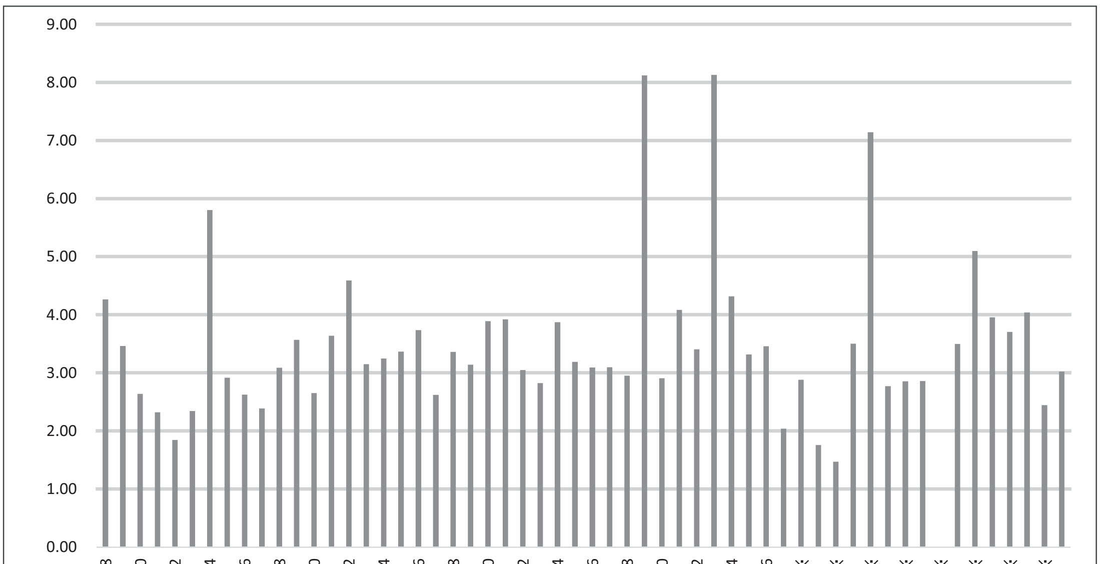


図５　椀形鉄滓の密度（g/㎤）

密度が

5以上の一群(M24・M49・M53・処理番号43)：4／62（6%）

2以下の一群(M22・処理番号ー20－1・4・5)：4／62（6%）

2～4前後の一群（上記以外）：54/62（88%）

に大別できる。数値的には2～4の一群はさらに細分されるかもしれないが、簡便な密度算定であるため、大きな目安程度に留めたい。

椀形鉄滓のうち、密度2～4前後の滓が最も多く標準的な残留鉄分を含む滓と理解できる。また残留鉄分の多い滓と理解できる密度5以上の滓、残留鉄分が少ない密度2以下の滓が少数ながら存在することがわかった。

分析調査結果について

今回報告した椀形鉄滓のうちM24(分析：KMK-3)・M40(分析KMK-１)・M45(分析：KMK-2)・M49(分析：KMK-4)の4点について、九州テクノリサーチ・TACセンター（大澤正己・鈴木瑞穂）に科学分析をお願いした。その詳細は第７章３節「神子曽遺跡出土鉄滓の分析調査」を参照いただきたい。ここでは、大きさや残留鉄分の計測結果と分析結果との照合を試みる。

1区SK10出土椀形鉄滓

M40（大型サイズ・密度2～4の一群）⇔KMK-1(FeO＋SiO_2主体)・砂鉄起源鉄素材・鍛錬鍛冶滓

M45（標準サイズ・密度2～4の一群）⇔KMK-2(FeO＋SiO_2主体)・砂鉄起源鉄素材・鍛錬鍛冶滓

M24（標準サイズ・密度5以上の一群)⇔KMK-3(SiO_2の割合が高い）砂鉄起源鉄素材・鍛錬鍛冶滓

1区P119出土椀形鉄滓

M49（標準サイズ・密度5以上の一群)⇔KMK-4(SiO_2の割合が高い）砂鉄起源鉄素材・鍛錬鍛冶滓

分析サンプルの抽出にあたっては、精錬鍛冶段階の椀形鉄滓の可能性をもったM40のように大型サイズのものや、標準のサイズでもずっしりと重いもの(M24・M49)とそうでないもの（M45）を念頭においた。

それは、鍛冶工程のうち精錬鍛冶段階で生じる滓も含まれると考えていたが、分析の結果はすべて鍛錬鍛冶段階で生じる鍛錬鍛冶滓であるとの判定であった。分析サンプルについては、事前にサイズや残留鉄分を視野にいれ抽出しており、4点のサンプルではあるが、神子曽遺跡で精錬段階の鍛冶が行われていなかった可能性は高い。

また、椀形鉄滓にMnO・TiO_2・Vといった砂鉄に由来する成分が微量ながら含まれる点から、鍛錬鍛冶に用いた鉄素材は砂鉄を原料としたとの見解である。鉄素材については砂鉄由来成分が極めて微少な点から、鉄器再利用の可能性を示唆されている点は興味深い。

次にサイズと残留鉄分の視点から述べる。

長さと幅が10㎝を超える大型サイズのM40は分析の結果、鍛錬鍛冶段階で生成されたとの分析結果である。このような大型の滓は全体の9%と占める割合は少ない。鍛錬鍛冶段階で生じた鉄滓という前提にたてば、量的には少ないが大型の製品をつくるため長時間の操業をおこなった可能性も考えられる。

また、M24・M49のように標準サイズではあるが、残留鉄分の多い鉄滓については、鍛冶操業時の炉内の高温化が原因と考えられる。炉内温度の高温化により鉄素材からの鉄分の流出と分析結果にもあるように、炉内壁の溶融が促進された可能性がある。この類の鉄滓は全体の6%程度でありその数は少ない。この鉄滓の成因については、炉内温度を上げすぎた失敗事例か、あるいは高温処理を必要とする高

純度の鉄素材（鉄器再利用）を加工した産物とも理解できるが確定はできない。筆者は失敗事例の可能性を考えている。

KMK1～３は、鍛冶関連遺物（羽口・椀形鉄滓）を一括廃棄した土抗であることを考えると、神子曽遺跡の鍛冶工房で使用された鉄素材は、すでに精錬鍛冶段階を経た素材であった可能性は高い。神子曽遺跡では、精錬鍛冶を経た鉄素材を入手し、鉄器を製作していたことになる。また、その鉄素材は砂鉄を原料とした素材であった。以上、13世紀後半から14世紀前半に営まれた神子曽遺跡の鍛冶関連遺物について報告する。（村上泰樹）

第４節　小結

神子曽遺跡では縄文時代、弥生時代、奈良時代、中世の遺構と遺物が確認された。

縄文時代の遺構としては食物残滓等を投棄した土坑などが認められ、そこから縄文土器が出土した。出土した土器は、地文に縄文を施した上に半截竹管文を配するもので、キャリパー形の器形を持つ深鉢が多い。文様と形態の特徴から、西日本に広く分布する縄文時代中期前半の船元Ⅲ式に属するものと考えられる。

弥生時代の遺構には住居師の他、周溝墓をはじめとする埋葬遺構、土坑などが認められる。周溝墓群は竪穴住居後を切って営まれており、集落内での土地利用の変化を伺うことができる。また、周溝墓から出土している供献土器群については、クシ描文を多用した壺が多く含まれている。口縁内突帯の有無、口縁端部の形態と凹線文の有無、頸部貼付突帯と文様構成の点から、時期的な変遷が認められる。これらの土器群は古いものは第Ⅲ様式段階に位置付けられ、新しいものは第Ⅳ様式段階に属するものである。これまで南あわじ地域では中期後葉の資料が多く見つかっているものの、中期中葉のまとまった資料が報告されるのは当遺跡が初めてである。（鐵）

歴史時代の遺構では、1区では多数のピットが検出されたが、方形周溝墓の周溝部上にあるピットは周溝埋土との識別が難しく、検出できなかったものも少なからず存在する。従って、復元できた掘立柱建物跡は7棟であるが、ピットの数からみて、まだ複数棟の掘立柱建物跡の存在が想定できる。

このうち中央のSB104－１・2およびSB105－１・2は、ほぼ同じ位置で建て替えを行っている掘立柱建物である。まず、SB04の段階で同じ位置での建て替えを1回行い（SB104－１からSB104－2へ）、その後、南西方向に位置をずらして、SB105の建物を建てている。SB105においても同じ位置での建て替えを1回行っている（SB105－１からSB05－2へ）。SB104・105はいずれも間仕切りをもつ規模の小さな建物である。これらの掘立柱建物の柱穴掘り方からは中世の遺物が出土している。建物周辺からSK10・12・13など鍛冶関係の遺構が集中しており、SB104・105は14世紀末から15世紀にかけての鍛冶関連工房の建物の可能性が高い。なお、遺跡の所在地名は賀集鍛治屋（「じ」は「治」を用字としている）であり、周辺の遺跡から今後鍛冶関連の遺構が発見されれば、地名の由来が中世まで遡る可能性がある。なお、当該遺跡の東に所在する久保ノカチ遺跡では垣根と考えられる一直線に並ぶピット列が存在しており、当該遺跡においても一列に並ぶピット列がいくつか存在しており、垣根が設けられていた可能性が高い。

また、北のSB101～103・SB106の柱穴掘り方には遺物が含まれていないことから、北の建物群は中央のSB104・SB105構築以前の建物群であることはほぼ確実である。１区においては８世紀代と14世紀末

から15世紀にかけての年代を中心とする２つの遺物群がある。このことから北の建物群が8世紀代まで遡る可能性もあるが、現段階では断定は難しい。

３・５区で発見されている建物については、小規模かつ単独であり、時期も不明である。周囲にもピット・土坑もほとんどなく、遺物もほとんど出土していないので、生活関連の建物ではない可能性もある。これに対して、６区においても建物跡は1棟しか発見されていないが、周辺では多数のピット・土坑が検出されており、西側に建物群が広がる可能性が高い。また、８区では側柱の６棟の掘っ立て柱建物が発見されているが、柱穴掘り方に遺物を含んでいない。遺物包含層の存在がないので、時期の特定が難しいが、甕が据えられた平安前期ころのSK802および中世の遺物が出土しているSK803から平安前期もしくは中世のいずれかの時期の建物群であろう。

1区から９区までの内、遺物包含層が認められるのが1区のみで他区は水田耕作等により当時の遺構面は削平され、かつ包含層も残存していないが、全体を通して歴史時代の遺物をみると、８世紀から９世紀の遺物群と14世紀～15世紀代の２つの年代の遺物層群からなる。これは、才門遺跡・石田遺跡を含めても同様である。（森内）

参考文献

的崎薫・定松佳重「淡路島南西部の弥生集落とその動態」（2012）
『菟原Ⅱ－森岡秀人さん還暦記念論文集－』菟原刊行会
南あわじ市教育委員会『久保ノカチ遺跡』（2012）
南あわじ教育委員会『久保ノカチ遺跡Ⅱ』（2014）

表４　神子曽遺跡　土器一覧(1)

報告番号	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	分析	調査番号	実測番号
1	49	46	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK15		－	4.3+	－					2004216	M157
2	49	46	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK15		－	3.7+	－					2004216	M156
3	49	46	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK15		－	4.0+	－					2004216	M160
4	49	46	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK15		－	2.7+	－					2004216	M170
5	49	46	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK15		－	4.8+	－					2004216	M169
6	49	46	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK15		－	3.7+	－					2004216	M155
7	49	46	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK15		－	4.4+	－					2004216	M162
8	49	46	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK15		－	7.1+	－					2004216	M163
9	49	46	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK15		－	5.5+	－					2004216	M168
10	49	46	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK15		－	16.5+	－					2004216	M167
11	49	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK15		(18.6)	11.7+	－					2004216	M166
12	49	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK15		(36.7)	20.0+	－					2004216	M171
13	49	46	縄文土器	深鉢	底部	1区	SK15		－	2.7+	8.0					2004216	M164
14	49	46	縄文土器	深鉢	底部	1区	SK15		－	4.4+	8.5					2004216	M165
15	49	46	縄文土器	土製円板		1区	SK15					6.4	6.3	0.9		2004216	M158
16	50	48・49	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	42.6+	－				胎土分析	2004216	M173
17	50	50	縄文土器	深鉢	口縁部付近	1区	SK230		－	7.1+	－					2004216	M288
18	50	50	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	27.9+	－					2004216	M291
19	50	50	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	11.2+	－					2004216	M292
20	50	50	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	9.1+	－					2004216	M290
21	50	50	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	6.4+	－					2004216	M289
22	51	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK230		－	5.3+	－					2004216	M277
23	51	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK230		－	3.7+	－					2004216	M274
24	51	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK230		－	6.3+	－					2004216	M276
25	51	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK230		－	4.6+	－					2004216	M278
26	51	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK230		－	2.8+	－					2004216	M275
27	51	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK230		－	3.6+	－					2004216	M273
28	51	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK230		－	4.0+	－					2004216	M279
29	51	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK230		－	5.3+	－					2004216	M280
30	51	50	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	3.3+	－					2004216	M281
31	51	50	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	3.9+	－					2004216	M284
32	51	50	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	3.4+	－					2004216	M285
33	51	50	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	3.0+	－					2004216	M282
34	51	50	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	14.2+	－					2004216	M286
35	51	50	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK230		－	19.9+	－					2004216	M172
36	51	47	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK230		－	3.3+	－					2004216	M287
37	52	51	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK06		－	6.3+	－					2004216	M154
38	52	51	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK06		－	3.3+	－					2004216	M153
39	52	51	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK06		－	3.6+	－					2004216	M148
40	52	51	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK06		－	16.2+	－					2004216	M152
41	52	51	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK06		－	3.4+	－					2004216	M149
42	52	51	縄文土器	深鉢	体部	1区	SK06		－	4.6+	－					2004216	M150
43	52	51	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SK205		－	5.5+	－					2004216	M151
44	52	51	縄文土器	鉢	口縁部	1区	SK11		－	2.2+	－					2004216	M159
45	52	51	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SX207	東周溝	－	3.8+	－					2004216	M177
46	52	51	縄文土器	深鉢	口縁部	1区	SX211		－	4.6+	－					2004216	M175
47	52	51	縄文土器	深鉢	体部	1区	SX211		－	7.2+	－					2004216	M174
48	52	51	縄文土器	深鉢	体部	1区	SX201の北		－	7.4+	－					2004216	M176
49	52	51	縄文土器	深鉢	体部	1区			－	4.9+	－					2004216	M178
50	52	51	縄文土器	深鉢	口縁部	1区			－	5.0+	－					2004216	M179
51	52	51	縄文土器	深鉢	口縁部	1区			－	5.2+	－					2004216	M180
52	53	52	弥生土器	広口壺	口縁部	1区	SX207	北周溝内 中世pit	(23.4)	2.5+	－					2004216	M146
53	53	52	弥生土器	直口壺	頸部～底部	1区	SX207	北周溝	－	37.3+	7.4				胎土分析	2004216	M226
54	53	52	弥生土器	細頸壺	体部～底部	1区	SX207	東周溝	－	17.1+	5.7					2004216	M228
55	53	52	弥生土器	有孔鉢	口縁部～底部	1区	SX207	東周溝	4.9	9.2	0.7					2004216	M225
56	53	52	弥生土器	甕	口縁部	1区	SX207	東周溝	(20.8)	4.4+	－					2004216	M223
57	53	52	弥生土器	甕	口縁部～体部	1区	SX207	東周溝	(23.8)	13.4+	－					2004216	M224
58	53	52	弥生土器	甕	体部～底部	1区	SX207	東周溝	－	19.6+	7.0					2004216	M227
59	53	52	弥生土器	甕	口縁部	1区	SX207	南周溝	(16.7)	1.7+	－					2004216	M102
60	53	52	弥生土器	壺	底部	1区	SX207	周溝内側	－	3.6+	9.0					2004216	M220
61	53	52	弥生土器	甕	底部	1区	SX207	南周溝	－	4.2+	6.8					2004216	M222
62	53	52	弥生土器	甕	底部	1区	SX207	南周溝	－	5.4+	(6.8)					2004216	M100
63	53	52	弥生土器	甕	底部	1区	SX207	南周溝	－	4.9+	6.4					2004216	M099
64	53	53	弥生土器	直口壺	口縁部～底部	1区	SX204	西周溝	12.55	図上復元 41.2	6.3				胎土分析	2004216	M214
65	53	－	弥生土器	壺	底部	1区	SX204	西周溝	－	13.4+	4.9					2004216	M207

表５　神子曽遺跡　土器一覧(2)

報告番号	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	分析	調査番号	実測番号
66	53	53	弥生土器	壺	底部	1区	SX204	東周溝	－	8.4+	7.8					2004216	M211
67	53	53	弥生土器	壺	底部	1区	SX204	東周溝	－	7.2+	7.3					2004216	M209
68	53	53	弥生土器	壺	底部	1区	SX204	東周溝	－	3.2+	6.8					2004216	M210
69	53	53	弥生土器	甕	口縁部	1区	SX204	東周溝	(22.8)	7.0+	－					2004216	M206
70	53	53	弥生土器	甕	底部	1区	SX204	東周溝	－	5.4+	7.4					2004216	M208
71	54	53	弥生土器	広口壺	口縁部～肩部	1区	SX205	南周溝	－	10.4+	－					2004216	M213
72	54	53	弥生土器	直口壺	口縁部～底部	1区	SX201	北周溝	(12.9)	15.8+	－					2004216	M202
73	54	53	弥生土器	甕	口縁部	1区	SX201	北周溝	(17.0)	2.6+	－					2004216	M201
74	54	53・56	弥生土器	広口壺	口縁部・体部～底部	1区	SX208	北周溝	(16.8)	図上復元28.5+	6.6					2004216	M230
75	54	54	弥生土器	短頸壺	口縁部～底部	1区	SX203	東周溝	(13.4)	1.4+	－					2004216	M199
76	54	54	弥生土器	壺	口縁部～底部	1区	SX203	東周溝	18.1	32.0	7.4				胎土分析	2004216	M203
77	54	53	弥生土器	広口壺	口縁部	1区	SX203	西周溝	(7.1)	13.6+	4.6					2004216	M200
78	54	54	弥生土器	直口壺	体部～底部	1区	SX203	西周溝	－	12.4+	4.5					2004216	M198
79	54	53	弥生土器	直口壺	口縁部～肩部	1区	SX203	西周溝	(12.3)	14.7+	－					2004216	M197
80	54	54	弥生土器	無頸壺	口縁部～体部	1区	SX203	西周溝	20.8	22.1+	－					2004216	M205
81	54	54	弥生土器	壺	体部～底部	1区	SX203	西周溝	－	19.4+	8.4					2004216	M204
82	55	55	弥生土器	広口壺	口縁部～底部	1区	SX212	西周溝	19.5	図上復元44.8+	8.4				胎土分析	2004216	M240
83	55	57	弥生土器	広口壺	口縁部～底部	1区	SX212	西周溝	26.6	30.7	7.6					2004216	M236
84	55	55	弥生土器	広口壺	口縁部～体部	1区	SX212	西周溝	21.5	24.5+	－				胎土分析	2004216	M235
85	55	57	弥生土器	広口壺	口縁部～底部	1区	SX212	西周溝	(16.4)	26.0	6.6					2004216	M234
86	55	56	弥生土器	広口壺	口縁部～底部	1区	SX212	西周溝	12.9	23.3	6.4				胎土分析	2004216	M245
87	56	58	弥生土器	広口壺	頸部～底部	1区	SX212	西周溝	－	24.7	7.2					2004216	M239
88	56	58	弥生土器	直口壺	口縁部～底部	1区	SX212	西周溝	12.8	21.5	7.2					2004216	M238
89	56	59	弥生土器	直口壺	口縁部	1区	SX212	西周溝	(13.2)	2.4+	－					2004216	M250
90	56	59	弥生土器	直口壺	底部	1区	SX212	西周溝	－	8.3+	6.3					2004216	M243
91	56	59	弥生土器	直口壺	底部	1区	SX212	西周溝	－	9.4+	(7.4)					2004216	M241
92	56	58	弥生土器	細頸壺	口縁部～底部	1区	SX212	西周溝	9.0	27.0	8.0				胎土分析	2004216	M244
93	56	59	弥生土器	広口壺	底部	1区	SX212		－	3.3+	7.8					2004216	M253
94	56	59	弥生土器	広口壺	底部	1区	SX212	西周溝	－	6.1+	6.6					2004216	M104
95	56	59	弥生土器	広口壺	底部	1区	SX212	西周溝	－	5.7+	9.2					2004216	M248
96	56	59	弥生土器	細頸壺	底部	1区	SX212か?	東周溝	－	2.3+	3.7					2004216	M252
97	56	59	弥生土器	把手付鉢	口縁部～底部	1区	SX212	西周溝	(9.2)	7.4	(5.2)					2004216	M249
98	56	59	弥生土器	壺	底部	1区	SX210	西周溝	－	2.3+	5.8					2004216	M231
99	56	58	弥生土器	広口壺	頸部～体部	1区	SX213(SD203)		－	16.1+	－					2004216	M233
100	56	59	弥生土器	壺	底部	1区	SX213(SD203)		－	2.8+	(5.6)					2004216	M237
101	57	60	弥生土器	直口壺	口縁部～底部	1区	SK208		(10.0)	32.1	5.8					2004216	M193
102	57	60	弥生土器	直口壺	頸部～底部	1区	SK231		－	32.3+	6.4					2004216	M192
103	57	60	弥生土器	直口壺	口縁部～頸部	1区	SK209		12.6	4.6+	－					2004216	M185
104	57	60	弥生土器	広口壺	口縁部	1区	SK13		13.1	1.5+	－					2004216	M118
105	57	60	弥生土器	直口壺	口縁部	1区	SH201周辺	SK203か?	(11.6)	9.8+	－					2004216	M191
106	57	61	弥生土器	壺	体部～底部	1区	SK213		－	45.6+	6.9				胎土分析	2004216	M196
107	58	61	土師器	広口壺	口縁部～底部	1区	SK238		20.1	35.4	3.6					2004216	M183
108	58	61	土師器	二重口縁壺	口縁部～底部	1区	SK238		17.8	37.1	3.4				胎土分析	2004216	M184
109	58	61	土師器	鉢	口縁部～底部	1区	SK238		(29.3)	24.7	3.1					2004216	M182
110	58	62	弥生土器	甕	口縁部	1区	SK243		(15.4)	3.2+	－					2004216	M187
111	58	62	弥生土器	鉢	底部	1区	SK243		－	3.4+	4.6					2004216	M188
112	58	62	土師器	甕	口縁部	1区	SK216		(19.1)	2.5+	－					2004216	M186
113	58	62	土師器	鉢	口縁部～体部	1区	SK216		－	4.0+	－					2004216	M105
114	58	61	弥生土器	壺	体部～底部	1区	SK214		－	27.0+	9.2					2004216	M181
115	58	61	土師器	壺	体部～底部	1区	SK239		－	22.2+	3.2					2004216	M195
116	58	61	土師器	壺	底部	1区	SK14		－	10.8+	5.9					2004216	M194
117	59	60	弥生土器	広口壺	口縁部	1区	SD202		－	4.7+	－					2004216	M145
118	59	60	土師器	鉢	底部	1区	SD202		－	1.9+	2.3					2004216	M147
119	59	60	弥生土器	壺	体部～底部	1区			－	20.1	4.6					2004216	M258
120	59	60	弥生土器	壺	底部	1区			－	4.4+	(4.5)					2004216	M256
121	59	60	弥生土器	高坏	口縁部～脚部	1区			15.1	11.9	15.9					2004216	M257
122	59	62	土師器	壺	底部	3区北	弥生落込み		－	3.0+	4.5					2004216	M65
123	59	62	土師器	甕	底部	3区北	弥生落込み		－	2.5+	3.9					2004216	M62
124	59	62	土師器	鉢	底部	3区北端	弥生落込み		－	2.9+	3.9					2004216	M59
125	59	62	土師器	鉢	底部	3区北端	弥生落込み		－	1.9+	3.0					2004216	M56
126	59	62	土師器	鉢	底部	3区北端	弥生落込み		－	1.7+	4.3					2004216	M58
127	59	62	土師器	鉢	底部	3区北	弥生落込み		－	3.6+	3.5					2004216	M63
128	59	62	土師器	鉢	底部	3区北端	弥生落込み		－	1.8+	3.1					2004216	M57
129	59	62	土師器	鉢	底部	3区北端	弥生落込み		－	4.0+	2.9					2004216	M60
130	59	62	土師器	高坏	脚部	3区北	弥生落込み		－	3.4+	－					2004216	M64

表６　神子曽遺跡　土器一覧(3)

報告番号	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	分析	調査番号	実測番号
131	59	62	土師器	壺	底部	3区			－	1.8+	5.0					2004216	M55
132	59	62	土師器	甕	底部	3区			－	3.2+	4.3					2004216	M54
133	59	62	弥生土器	壺	体部～底部	6区	SX602	北周溝	－	9.5+	4.8					2004216	M02
134	59	62	弥生土器	壺	体部～底部	8区	SX801		－	10.6+	6.8					2004216	M08
135	59	62	弥生土器	壺	体部～底部	8区	SX801		－	18.2+	8.9					2004216	M09
136	59	63	土師器	壺	口縁部	8区	SR801西半		(18.0)	2.0+	－					2004216	M14
137	59	63	土師器	壺	底部	8区	SR801		－	3.0+	4.5					2004216	M27
138	59	63	土師器	甕	口縁部	8区	SR801西半		(17.2)	3.3+	－					2004216	M25
139	59	63	土師器	甕	口縁部	8区	SR801		(19.0)	3.0+	－					2004216	M31
140	59	63	土師器	甕	底部	8区	SR801西半		－	3.1+	3.0					2004216	M15
141	59	63	土師器	甕	底部	8区	SR801西半		－	2.7+	2.6					2004216	M17
142	59	63	土師器	甕	底部	8区	SR801西半		－	3.3+	3.4					2004216	M24
143	59	63	土師器	甕	底部	8区	SR801		－	3.6+	(3.0)					2004216	M28
144	59	63	土師器	甕	底部	8区	SR801西半		－	2.7+	3.2					2004216	M22
145	59	63	土師器	甕	底部	8区	SR801西半		－	2.9+	3.0					2004216	M20
146	59	63	土師器	甕	底部	8区	SR801西半		－	2.0+	3.0					2004216	M18
147	59	63	土師器	甕	底部	8区	SR801東半		－	3.8+	3.0					2004216	M26
148	59	63	土師器	鉢	底部	8区	SR801		－	3.2+	2.6					2004216	M29
149	59	63	弥生土器	鉢	底部	8区	SR801		－	3.2+	3.0					2004216	M32
150	59	63	土師器	鉢	底部	8区	SR801西半		－	2.6+	2.6					2004216	M13
151	59	63	土師器	鉢	底部	8区	SR801西半		－	2.2+	2.4					2004216	M16
152	59	63	土師器	鉢	底部	8区	SR801西半		－	2.5+	3.0					2004216	M19
153	59	63	土師器	鉢	底部	8区	SR801西半		－	3.0+	2.8					2004216	M11
154	59	63	土師器	鉢	底部	8区	SR801西半		－	3.5+	2.0					2004216	M12
155	59	63	土師器	鉢	底部	8区	SR801		－	3.8+	体部との境が不明瞭					2004216	M30
156	59	63	土師器	鉢	体部	8区	SR801西半		－	3.4+	3.6					2004216	M23
157	59	63	土師器	有孔鉢	底部	8区	SR801西半		－	5.0+	3.4					2004216	M21
158	60	64	須恵器	杯B	底部	1区	SK01		－	－	(8.2)					2004216	M122
159	60	64	須恵器	杯B	底部	1区	SK01		－	－	(9.0)					2004216	M120
160	60	－	土師器	杯	口縁部	1区	SK01		(14.0)	－	－					2004216	M119
161	60	－	須恵器	片口鉢	口縁部	1区	SK01		－	－	－					2004216	M121
162	60	64	土師器	杯	口縁部～底部	1区	SK13		(12.0)	3	(5.2)					2004216	M108
163	60	64	土師器	杯	口縁部	1区	SK13		(11.5)	－	－					2004216	M109
164	60	64	土師器	杯	口縁部～底部	1区	SK13		(12.0)	3.3	(6.9)					2004216	M110
165	60	64	土師器	杯	口縁部～底部	1区	SK13		(11.9)	3.2	7.4					2004216	M113
166	60	64	土師器	杯	口縁部～底部	1区	SK13		(12.1)	3.8	6.3					2004216	M115
167	60	64	土師器	杯	底部	1区	SK13		－	－	(7.2)					2004216	M114
168	60	64	土師器	杯	底部	1区	SK13		－	－	(5.3)					2004216	M116
169	60	－	須恵器	片口鉢	口縁部	1区	SK13		(24.0)	－	－					2004216	M117
170	60	64	土師器	杯	口縁部～体部	1区	SK13		(21.6)	－	(16.7)					2004216	M112
171	60	64	瓦	丸瓦	一方の側面を含む小片	1区	SK13			－		(6.5)	(10.1)	1.9		2004216	M107
172	60	－	土師器	杯	底部	1区	SK09		－	－	(7.0)					2004216	M123
173	60	64	須恵器	鉢	口縁部～底部	1区	SK10		(26.8)	10.8	(9.4)					2004216	M125
174	60	64	須恵器	甕	口縁部～頸部	1区	SK10	上層	(43.0)	－	－					2004216	M111
175	61	－	土師器	甕	口縁部	1区	SX205	北周溝	(26.4)	－	－					2004216	M212
176	61	65	土師器	小皿	口縁部～底部	1区	SX207	墳丘上面	7.5	1.1	5.4					2004216	M221
177	61	－	瓦質土器	杯	底部	1区	SX207	北周溝	－	－	(3.8)					2004216	M216
178	61	65	土師器	杯	口縁部～底部	1区	SX207	周溝内側	(12.0)	3.4	7.2					2004216	M229
179	61	－	土師器	杯	口縁部～底部	1区	SX207	北周溝	(12.2)	3.5	(8.2)					2004216	M215
180	61	－	土師器	杯	口縁部	1区	SX207	主体部	(13.0)	－	－					2004216	M217
181	61	－	土師器	杯	底部	1区	SX207	北周溝	－	－	6.8					2004216	M218
182	61	－	須恵器	杯B蓋	口縁部	1区	P30		(15.8)	－						2004216	M137
183	61	－	須恵器	杯B蓋	口縁部	1区	P39		(16.6)	－						2004216	M138
184	61	65	土師器	小皿	口縁部～底部	1区	P131		7.3	1.5	5.0					2004216	M136
185	61	65	土師器	小皿	口縁部～底部	1区	P217		8.2	1.4	6.0					2004216	M127
186	61	65	土師器	杯	口縁部～底部	1区	P447		(11.3)	3	6.4					2004216	M96
187	61	－	土師器	杯	口縁部～底部	1区	P132		(12.0)	3.2	(7.8)					2004216	M135
188	61	65	土師器	杯	口縁部～底部	1区	P440		(12.2)	3.3	6.9					2004216	M94
189	61	65	土師器	杯	口縁部～底部	1区	P371		11.9	3.1	6.9					2004216	M97
190	61	65	土師器	杯	口縁部～底部	1区	P301		(14.2)	3	(8.0)					2004216	M95
191	61	－	土師器	杯	口縁部	1区	P211		(14.0)	3.5	(8.0)					2004216	M129
192	61	－	土師器	杯	口縁部～底部	1区	P376		(12.3)	3	(6.6)					2004216	M98
193	61	－	土師器	杯	口縁部	1区	P56		(13.4)	－	－					2004216	M132
194	61	－	土師器	杯	口縁部	1区	P55		(13.3)	－	－					2004216	M131
195	61	－	土師器	杯	口縁部	1区	P61		(14.5)	－	－					2004216	M134

表７　神子曽遺跡　土器一覧(4)

報告番号	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径 (cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	分析	調査番号	実測番号
196	61	65	土師器	鍋	口縁部	1区	P18		(26.0)	－	－					2004216	M133
197	61	65	土師器	羽釜	口縁部	1区	P217		(18.4)	－	－					2004216	M128
198	61	－	須恵器	稜椀	口縁部	1区	中世Pit		(15.8)	－	－					2004216	M126
199	61	65	須恵器	片口鉢	口縁部	1区	上層		(27.8)	－	－					2004216	M74
200	62	－	土師器	杯	口縁部	1区	SD201		(13.8)	－	－					2004216	M139
201	62	66	土師器	杯	口縁部～底部	1区	SD202		(13.8)	3.9	(8.9)					2004216	M141
202	62	66	土師器	杯	口縁部～底部	1区	SD202		(13.8)	3.9	(8.8)					2004216	M142
203	62	－	須恵器	壺	高台	1区	SD202		－	－	(9.4)					2004216	M140
204	62	66	須恵器	杯B蓋	口縁部　つまみ	1区			(17.5)	－						2004216	M70
205	62	66	須恵器	杯B蓋	口縁部	1区	下層		13.0	－						2004216	M84
206	62	66	須恵器	稜椀蓋	口縁部	1区			(17.6)	－						2004216	M73
207	62	66	須恵器	杯B蓋	口縁部	1区	下層		(13.2)	－						2004216	M85
208	62	66	須恵器	杯B	底部	1区			－	－	(11.3)					2004216	M69
209	62	－	須恵器	杯B	口縁部	1区			(13.0)	－	－					2004216	M72
210	62	66	須恵器	杯B	口縁部～底部	1区			13.3	3.7	9.0					2004216	M86
211	62	－	須恵器	杯A	底部	1区			－	－	8.2					2004216	M89
212	62	66	須恵器	壺	底部	1区			－	－	(11.9)					2004216	M76
213	62	－	須恵器	甕	体部	1区			－	－	－					2004216	M75
214	62	66	土師器	杯	口縁部～底部	1区	下層		(12.3)	3.1	8.0					2004216	M82
215	62	66	土師器	杯	口縁部～底部	1区	下層		(12.8)	3.2	8.3					2004216	M83
216	62	67	土師器	小皿	口縁部～底部	1区			6.9	1.2	4.3					2004216	M77
217	62	－	土師器	小皿	口縁部～底部	1区	下層		(9.6)	2	6.3					2004216	M88
218	62	66	土師器	製塩土器	口縁部	1区			(14.7)	－	－					2004216	M71
219	62	67	土師器	杯	口縁部～底部	1区	SX207	東周溝	15.0	2.6	9.8					2004216	M67
220	62	67	青磁	碗	口縁部	1区	下層		－	－	－					2004216	M90
221	62	67	土師器	皿	口縁部～底部	2区北			21.5	1.8	16.4					2004216	M68
222	62	67	須恵器	杯B	口縁部～底部	2区			(12.2)	3.7	(8.0)					2004216	M66
223	63	－	須恵器	杯B	底部	3区北端	弥生落込み		－	－	(10.8)					2004216	M61
224	63	－	黒色土器	椀	体部～底部	6区	SK601		－	－	(5.5)					2004216	M49
225	63	67	須恵器	片口鉢	体部	6区	SK605		－	－	－					2004216	M7
226	63	67	土師器	鍋	口縁部	7区？	P702		(24.8)	－	－					2004216	M1
227	63	67	土師器	鍔釜	口縁部	6区	P637		(23.9)	－	－					2004216	M3
228	63	67	土師器	甕	体部	6区	P617		－	－	－					2004216	M5
229	63	－	須恵器	片口鉢	体部	6区	P638		－	－	－					2004216	M6
230	63	－	須恵器	壺	底部	9区	SD902		－	－	(10.0)					2004216	M4
231	64	68	土師器	高杯	口縁部～底部・脚部	8区	SK802		－	－	－					2004216	M40
232	64	68	土師器	土錘	管部の両側ほぼ欠損	8区	SK802	甕の中				(3.7)	1.1	1.1		2004216	M48
233	64	68	須恵器	甕	底部	8区	SK802	甕の中	－	－	－					2004216	M259
234	64	68	土師器	鍋	口縁部	8区	SB803 P03		(35.8)	－	－					2004216	M10
235	64	68	染付磁器	碗蓋	口縁部～底部	8区	SK805		9.2	3						2004216	M45
236	64	－	染付磁器	碗蓋	口縁部～底部・高台	8区	SK805		8.9	3.1						2004216	M44
237	64	68	白磁	紅皿	口縁部～底部	8区	SK805		4.9	1.5	1.6					2004216	M47
238	64	68	明石焼	すり鉢	口縁部	8区	SK805		(24.0)	－	－					2004216	M46
239	65	－	染付磁器	碗	口縁部～底部	8区	SK806		(9.9)	4.9	3.4					2004216	M42
240	65	69	染付磁器	碗	口縁部～底部	8区	SK806		(11.1)	5.5	4.0					2004216	M41
241	65	－	備前焼	壺	口縁部～底部	8区	SK806		－	－	8.0					2004216	M43
242	65	－	須恵器系	甕	口縁部	8区	SK810		－	－	－					2004216	M34
243	65	69	土師器	小皿	口縁部～底部	8区	SK810		8.6	2.5	4.6					2004216	M33
244	65	－	染付磁器	碗	口縁部～底部	8区	SK808		(9.9)	5	(3.4)					2004216	M36
245	65	－	染付磁器	碗	底部	8区	SK808		－	－	(4.5)					2004216	M35
246	65	－	施釉陶器	水鉢	口縁部	8区	SK807		(33.5)	－	－					2004216	M38
247	65	69	土師器	炮烙	口縁部～底部	8区	SK807		(31.7)	－	(31.1)					2004216	M39
248	65	69	瓦質土器	壺	口縁部～頸部	8区	SK807		(13.8)	－	－					2004216	M52
249	65	69	瓦質土器	茶釜	口縁部～体部	8区	SK807		18.4	13.0+	－					2004216	M51
250	65	69	丹波焼	甕	口縁部～体部	8区	SK807		(29.0)	38.5	18.5					2004216	M53
251	65	69	染付磁器	碗	口縁部～体部	8区	SK807		10.0	5	3.9					2004216	M37

表8　神子曽遺跡　石器一覧(1)

報告番号	図版No.	写真図版No.	種別	器種	調査区	遺構	遺構2	長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	重量(g)	石材	備考1	備考2	調査番号	実測番号
S1	66	70	石器	石鏃	1区	SK15		18.2	11.6	2.1	0.3	サヌカイト			2004216	MS47
S2	66	70	石器	石鏃	1区	SK15南下半		15.6	13.9	2.5	0.4	サヌカイト			2004216	MS46
S3	66	70	石器	石鏃	1区	SK15北半		18.5	16.5	3.3	0.4	サヌカイト			2004216	MS45
S4	66	70	石器	石鏃	1区	SK15		19.8	16.2	3.0	0.6	サヌカイト			2004216	MS48
S5	66	70	石器	石鏃	1区	SK15南半		35.0	18.3	5.7	3.1	サヌカイト			2004216	MS36
S6	66	70	石器	石匙	1区	SK15		77.7	20.6	6.0	10.6	サヌカイト			2004216	MS35
S7	66	70	石器	削器	1区	SK15南半		32.5	14.6	4.5	2.1	サヌカイト			2004216	MS41
S8	66	70	石器	削器	1区	SK15		37.0	42.2	5.9	12.3	サヌカイト			2004216	MS44
S9	66	70	石器	削器	1区	SK11		46.5	38.0	8.0	15.2	サヌカイト			2004216	MS30
S10	66	70	石器	楔形石器剥片	1区	SK15南半		16.9	28.6	7.6	3.2	サヌカイト			2004216	MS40
S11	66	70	石器	楔形石器	1区	SK06		24.0	33.5	9.5	7.2	サヌカイト			2004216	MS26
S12	66	70	石器	楔形石器	1区	SK15南半		47.2	27.1	8.0	10.0	サヌカイト			2004216	MS42
S13	66	70	石器	楔形石器	1区	SK15南半		36.8	45.3	10.0	16.0	サヌカイト			2004216	MS37
S14	67	71	石器	二次加工のある剥片	1区	SK15		50.6	45.4	5.0	14.6	サヌカイト			2004216	MS38
S15	67	71	石器	剥片	1区	SK15		26.7	46.8	4.3	4.0	サヌカイト			2004216	MS39
S16	67	71	石器	剥片	1区	SK11		28.0	23.0	3.0	1.4	サヌカイト			2004216	MS31
S17	67	71	石器	剥片	1区	SK15南半		39.0	27.7	7.2	7.7	サヌカイト			2004216	MS43
S18	67	71	石器	石鏃	1区	SH201	中央土坑	15.0	15.5	3.0	0.5	サヌカイト			2004216	MS69
S19	67	71	石器	石匙	1区	SX206	南周溝	83.9	38.0	10.0	33.0	サヌカイト			2004216	MS59
S20	67	71	石器	削器	1区	SX205	南周溝	20.5	28.0	7.0	3.8	サヌカイト			2004216	MS58
S21	67	71	石器	削器	1区	SX202	北周溝	38.0	34.0	6.5	7.0	サヌカイト			2004216	MS57
S22	67	71	石器	楔形石器	1区	SX210	西周溝	26.0	34.5	11.0	11.2	サヌカイト			2004216	MS62
S23	67	71	石器	楔形石器	1区	SH201	SK203か?	35.0	16.5	8.5	6.2	サヌカイト			2004216	MS70
S24	67	71	石器	楔形石器	1区	SX207	南周溝	36.5	18.5	5.0	3.9	サヌカイト			2004216	MS60
S25	67	71	石器	剥片	1区	SX207	北周溝	32.5	22.0	8.5	6.2	サヌカイト			2004216	MS61
S26	68	72	石器	石鏃	分布調査No.6地点			11.1	12.6	3.0	0.3	サヌカイト			2004216	MS1
S27	68	72	石器	石鏃	1区	SK247		12.0	14.0	2.0	0.3	サヌカイト			2004216	MS52
S28	68	72	石器	石鏃	1区	SK247		13.0	17.5	2.5	0.6	サヌカイト			2004216	MS53
S29	68	72	石器	石鏃	1区			16.0	19.0	3.0	0.8	サヌカイト			2004216	MS6
S30	68	72	石器	石鏃	1区	SK01		18.5	22.0	5.5	2.3	サヌカイト			2004216	MS23
S31	68	72	石器	石鏃	1区 縄文トレンチ4			13.2	11.4	2.2	0.27	サヌカイト			2004216	MS3
S32	68	72	石器	石鏃	1区	SK01		10.5	14.5	2.5	0.5	サヌカイト			2004216	MS24
S33	68	72	石器	石鏃	1区	SK13		18.5	15.5	3.5	0.7	サヌカイト			2004216	MS32
S34	68	72	石器	石鏃	1区南端			31.0	29.5	5.0	2.7	サヌカイト			2004216	MS19
S35	68	72	石器	石鏃	1区北半			29.0	20.5	5.5	1.8	サヌカイト			2004216	MS11
S36	68	72	石器	石鏃	2区			26.1	15.0	3.5	1.5	サヌカイト			2004216	MS78
S37	68	72	石器	石鏃	1区	P12		26.5	14.0	4.0	1.2	サヌカイト			2004216	MS71
S38	68	72	石器	石鏃	1区	SX210周辺		23.0	14.5	4.0	1.3	サヌカイト			2004216	MS63
S39	68	72	石器	石鏃	1区 縄文トレンチ4			21.1	15.3	2.9	0.7	サヌカイト			2004216	MS2
S40	68	72	石器	石鏃	1区	SD201		20.0	14.0	3.5	0.1	サヌカイト			2004216	MS65
S41	68	72	石器	石錐	1区	P18		32.5	24.5	11.5	6.6	サヌカイト			2004216	MS72
S42	68	72	石器	削器	1区	SK10		38.5	29.0	6.0	6.7	サヌカイト			2004216	MS29
S43	68	72	石器	削器	1区南端			23.5	22.5	4.0	2.3	サヌカイト			2004216	MS18
S44	68	72	石器	削器	1区 上層			38.0	28.0	11.0	9.1	サヌカイト			2004216	MS22
S45	68	72	石器	削器	1区 上層			38.8	37.1	6.6	9.6	サヌカイト			2004216	MS21
S46	68	72	石器	削器	1区			24.5	21.0	3.5	2.1	サヌカイト			2004216	MS9
S47	69	73	石器	削器	1区北半			72.5	82.0	8.5	66.2	サヌカイト			2004216	MS12
S48	69	73	石器	削器	1区	P298		105.5	56.5	13.5	60.7	サヌカイト			2004216	MS74
S49	69	73	石器	削器	21T　確認調査GL-30			78.4	36.2	16.7	37.1	サヌカイト			2003165	MS80
S50	69	73	石器	削器	1区	SX210周辺		25.5	26.0	7.0	3.8	サヌカイト			2004216	MS64
S51	69	73	石器	削器	1区北半			32.0	17.0	7.0	4.0	サヌカイト			2004216	MS14
S52	69	73	石器	楔形石器	1区	SK247		13.5	17.0	1.0	0.6	サヌカイト			2004216	MS55
S53	69	73	石器	楔形石器	1区			16.5	17.5	9.0	3.0	青灰色チャート			2004216	MS10
S54	69	73	石器	楔形石器	1区	SK247		18.5	20.0	4.0	1.6	サヌカイト			2004216	MS54
S55	69	73	石器	楔形石器	1区南半			19.5	24.5	6.0	2.7	サヌカイト			2004216	MS17
S56	69	73	石器	楔形石器	1区			36.0	18.0	6.0	5.3	サヌカイト			2004216	MS8
S57	70	74	石器	楔形石器	1区	SK10		23.5	22.0	4.5	2.6	サヌカイト			2004216	MS28

表9　神子曽遺跡　石器一覧(2)

報告番号	図版No.	写真図版No.	種別	器種	調査区	遺構	遺構2	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考1	備考2	調査番号	実測番号
S58	70	74	石器	楔形石器	1区北半			30.5	18.5	9.5	6.3	サヌカイト			2004216	MS13
S59	70	74	石器	楔形石器	1区			30.0	33.0	9.0	9.5	サヌカイト			2004216	MS7
S60	70	74	石器	楔形石器	1区	SK01		26.0	23.5	5.5	3.4	サヌカイト			2004216	MS25
S61	70	75	石器	楔形石器削片	1区 縄文トレンチ4			29.0	23.8	7.0	2.5	サヌカイト			2004216	MS4
S62	70	74	石器	楔形石器	1区	SK07		44.0	30.5	6.5	9.1	サヌカイト			2004216	MS27
S63	70	74	石器	楔形石器	1区 縄文トレンチ4			18.8	29.7	4.8	2.9	サヌカイト			2004216	MS5
S64	70	74	石器	楔形石器	1区	SK202		38.5	19.0	12.0	8.9	サヌカイト			2004216	MS50
S65	70	74	石器	楔形石器	1区	SD202	SX206あたり	29.0	33.0	5.0	5.5	サヌカイト			2004216	MS68
S66	70	74	石器	楔形石器	1区南端			47.0	41.0	10.0	19.1	サヌカイト			2004216	MS20
S67	70	74	石器	楔形石器	1区南半			35.5	38.5	7.0	9.8	サヌカイト			2004216	MS16
S68	70	74	石器	楔形石器	1区	P56		30.5	54.0	16.5	31.5	サヌカイト			2004216	MS73
S69	70	74	石器	楔形石器	1区	SD201		63.0	28.0	7.0	15.1	サヌカイト			2004216	MS67
S70	71	74	石器	剥片	1区	SK13		59.5	21.0	8.0	7.5	サヌカイト			2004216	MS34
S71	71	74	石器	剥片	1区南端			53.5	50.5	4.0	12.6	サヌカイト			2004216	MS15
S72	71	75	石器	剥片	1区	SK202		28.5	19.5	6.0	4.2	サヌカイト			2004216	MS51
S73	71	75	石器	剥片	1区		中世Pit	31.0	22.0	4.5	3.6	サヌカイト			2004216	MS77
S74	71	75	石製品またはその素材	石棒関連資料	1区	P374		89.7	53.3	29.3	146.5	結晶片岩			2004216	MS76
S75	71	75	石製品またはその素材	石棒関連資料	1区	P374		75.0	49.2	22.0	110.3	結晶片岩			2004216	MS75
S76	71	75	石製品またはその素材	石棒関連資料	1区	SD201		56.5	34.5	7.0	22.3	結晶片岩			2004216	MS66
S77	71	75	石器	叩石	1区	SK13		49.0	50.5	41.5	131.5	砂岩		赤変	2004216	MS33
S78	72	75・79	石器	凹石	1区	SK15		105.5	108.5	100.0	1282.0	砂岩	b/c1/c2		2004216	MS88
S79	72	75・79	石器	台石	1区	SK15		212.3	144.5	110.0	4160.0	砂岩	a2		2004216	MS90
S80	72	76	石器	台石	1区	SK15		289.8	176.2	137.0	7740.0	砂岩	a2		2004216	MS91
S81	72	76	石器	台石	1区	SK15		475.0	263.0	189.6	28200.0	砂岩	a2･(b･c1)		2004216	MS92
S82	73	76	石器	台石	1区	SK15		255.2	167.5	80.0	4770.0	砂岩	b		2004216	MS89
S83	73	76	石器	台石	1区	SK15		263.3	185.2	58.3	4120.0	砂岩	a1		2004216	MS87
S84	72	76	石器	台石	1区	SK15		309.8	130.0	129.0	7360.0	砂岩	b		2004216	MS94
S85	73	77	石器	磨石	1区	SK06		126.4	83.6	35.3	5644.0	砂岩？	a1	赤変	2004216	MS84
S86	73	77	石器	凹石	1区	SK06		59.8	72.0	61.0	2903.0	砂岩	a1		2004216	MS82
S87	73	77	石器	台石	1区	SK06		180.0	137.8	114.0	3350.0	砂岩	c1	赤変	2004216	MS81
S88	73	77・79	石器	台石	1区	SK06		206.0	159.2	62.5	2700.0	砂岩	b		2004216	MS83
S89	73	77	石器	台石	1区	SK06		265.5	219.8	90.3	6680.0	砂岩	b		2004216	MS85
S90	73	77・79	石器	台石	1区	SK06		197.3	129.2	74.0	3300.0	砂岩	c1/b･a2	赤変	2004216	MS86
S91	74	78	石器	台石	1区	SK230		394.7	129.6	61.6	5200.0	緑色片岩	b/c1		2004216	MS93
S92	74	77	石器	台石	1区	SK230周辺		170.0	115.5	60.7	1330.0	砂岩	c2		2004216	MS100
S93	74	77	石器	凹石	1区	SK230周辺		129.6	101.2	52.0	720.0	砂岩	c1		2004216	MS99
S94	74	77	石器	凹石	1区	SK230周辺		119.5	93.0	68.5	985.0	砂岩	c1	赤変	2004216	MS98
S95	74	78	石器	台石	1区	P362		221.2	159.3	121.1	5560.0	砂岩	b/b･c1		2004216	MS104
S96	75	78	石器	台石	1区 縄文トレンチ4			137.5	118.5	79.4	1565.0	砂岩	c2/b･c1	赤変	2004216	MS103
S97	75	78	石器	砥石	1区	SK10北半		169.0	83.0	54.0	1220.0	砂岩		黒変	2004216	MS96
S98	75	78	石器	敲石	1区	P267		162.0	94.6	81.2	1728.0	？			2004216	MS102
S99	75	78	石器	石皿	1区	SX212	西周溝	89.5	150.5	68.3	940.0	砂岩		赤変	2004216	MS101
S100	75	78	石器	石皿	1区	SK10北半		190.3	114.0	55.0	1560.0	砂岩			2004216	MS95
S101	75	78	石器	石皿	1区	P47		134.7	126.0	56.3	820.0	砂岩		黒変	2004216	MS97

神子曽遺跡　玉類

報告番号	挿図No.	写真図版No.	種別	器種	調査区	遺構	遺構2	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	調査番号	実測番号
J1	3	59	石製品	管玉	1区	P271		13.9	3.0 2.8	2.0 1.4	0.2	2004216	MS79

表10　神子曽遺跡　金属器一覧

報告番号	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調査番号	実測番号	備考
M1	76	80	鉄製品	釘	胴部	1区	SK10		(4.5)	0.8 0.4	0.6 0.3		2004216	MM27	
M2	76	80	鉄製品	釘	胴部	1区	SK10		(3.5)	0.6	0.6		2004216	MM28	
M3	76	80	鉄製品	釘	体部～脚部	1区	P107		(3.4)	0.5	0.5		2004216	MM10	
M4	76	80	鉄製品	釘	頭部～胴部上半	1区	P112		(2.6)	0.6	0.5		2004216	MM9	
M5	76	80	鉄製品	釘	頭部～脚部	1区	P169		4.0	0.3	0.3		2004216	MM11	
M6	76	80	鉄製品	釘	頭部～胴部	6区	P618		(6.0)	0.7 0.4	0.7 0.4		2004216	MM12	
M7	76	80	鉄製品	釘	頭部　胴部 脚部	6区			(6.8)	0.7 0.4	0.5 0.4		2004216	MM81	
M8	76	80	鉄製品	刀子	刃部～茎	8区	SK802	甕の中	(5.8)	1.3 1.3	0.5 0.6		2004216	MM13	
M9	76	80	銅製品	銭（熙寧元寶）		1区	SK01		2.45	2.5	0.1	2.3	2004216	MM01	報告No.M9～M16一括
M10	76	80	銅製品	銭（熙寧元寶）		1区	SK01		2.5	2.5	0.12	3.4	2004216	MM04	報告No.M9～M16一括
M11	76	80	銅製品	銭（元豊通寶）		1区	SK01		2.45	2.4	0.11	2.8	2004216	MM05	報告No.M9～M16一括
M12	76	80	銅製品	銭（元祐通寶）		1区	SK01		2.46	2.46	0.1	2.7	2004216	MM03	報告No.M9～M16一括
M13	-	80	銅製品	銭（元豊通寶）		1区	SK01		2.35	2.4	0.11	1.8	2004216	MM02	報告No.M9～M16一括
M14	-	80	銅製品	銭（元豊通寶）		1区	SK01		2.53	2.5	0.12	3.0	2004216	MM06	報告No.M9～M16一括
M15	-	80	銅製品	銭（皇宋通寶）		1区	SK01		2.53	(2.3)	0.09	1.6	2004216	MM07	報告No.M9～M16一括
M16	-	80	銅製品	銭（政和通寶）		1区	SK01		(2.2)	2.44	0.1	1.5	2004216	MM08	報告No.M9～M16一括

表11　神子曽遺跡　鍛冶関連遺物(羽口・鍛冶滓他)一覧(1)

報告番号	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	長さ(cm)	外径(cm)	厚(cm)	重量(g)	孔径(cm)	調査番号	実測番号	備考
H1	77	81・82	土製品	羽口	先端	1区	SK10	(7.0)	(7.9)	1.7		3.35	2004216	M265	報告No. M17の鉄滓が付着
H2	77	81	土製品	羽口	先端～筒部	1区	SK10	(7.9)	(7.8)	2.8		2.7	2004216	M267	
H3	77	81	土製品	羽口	先端～筒部	1区	SK10	(7.8)	(6.7)	2.1		2.9	2004216	M260	
H4	77	81	土製品	羽口	先端	1区	SK10	(6.0)	(5.5)	2.5		-	2004216	M261	
H5	77	81	土製品	羽口	先端	1区	SK10南半	(5.0)	(7.0)	2.6		2.8	2004216	M262	
H6	77	81	土製品	羽口	先端～筒部	1区	SK10	(11.7)	(8.2)	2.5		3.15	2004216	M264	
H7	77	81	土製品	羽口	先端	1区	SK10	(8.1)	(7.8)	1.7		-	2004216	M269	
H8	77	81	土製品	羽口	筒部	1区	SK10	(6.7)	(8.5)	2.1～3.2		3.0	2004216	M268	
H9	77	81	土製品	羽口	筒部	1区	SK10	(7.8)	(7.8)	1.9～2.8		3.0	2004216	M266	
H10	77	81	土製品	羽口	先端	1区	SK10	(9.8)	(8.8)	2.7		2.8	2004216	M263	
H11	80	82	土製品	羽口	先端	1区	P366	(14.5)	(8.2)	(2.5)		2.65	2004216	M270	
H12	80	82	土製品	羽口	先端～筒部	1区	P367	(9.0)	(4.6)	2.7		-	2004216	M271	
H13	80	82	土製品	羽口	筒部	1区	P440	(11.9)	(9.0)	2.6		(3.4)	2004216	M272	

報告番号	処理番号	処No. 枝番	図版番号	写真図版	掲載有無	種別	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	切断の箇所	体積(cm³)	重量(g)	密度(g/cm³)	表面観察	備考
M17			77	81･82	○	椀形鉄滓	1区　SK10	8.5	8.1	2.8	-	-	-	-		H1の羽口に付着
M18	24		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	6.3	4.5	2.2	3	22.8	97.0	4.26	多孔質　表・底面：皺状　底面：炭片痕	
M19	31		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	7.7	5.1	3.2	3	59.7	206.9	3.46	多孔質　表面：平滑　底面：皺状　部分的に錆化	
M20	18		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	6.4	5.3	2.4	0	31.3	82.5	2.64	多孔質　底面皺状　表・底面　部分的に錆化　ほぼ完形	
M21	19		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	5.4	4.5	2.0	1	22.8	52.8	2.32	ほぼ完形　多孔質　底面：皺状　錆化顕著	
M22	35		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	6.0	4.1	1.7	2	31.3	57.7	1.84	多孔質　表面：部分的に錆化　底面：皺状	
M23	23		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	6.5	5.4	1.1	-	25.6	60.0	2.34	多孔質　表面：平滑　底面：皺状　表・底面：錆化顕著	
M24	59		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	6.6	5.5	1.2	2	9.9	57.4	5.80	多孔質　表面・底面錆化顕著（特に底面）	分析KMK-3
M25	17		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	6.8	6.3	2.0	0	37.0	107.9	2.92	多孔質　表面：平滑　底面：皺状　表・底面：部分的に錆化　ほぼ完形	
M26	54		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	6.7	6.5	2.7	3	54.1	141.9	2.63	表面：酸化鉄被膜　多孔質　底面：酸化鉄層・炉底粘土（酸化）	
M27	33		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	6.8	5.3	2.1	1	37.0	88.2	2.38	多孔質　表面：平滑　底面：皺状　表・底面：部分的に錆化	
M28	42		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	7.0	7.0	1.1	1	31.3	96.6	3.09	多孔質　表・底面：粘土付着	
M29	55		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	7.4	7.1	1.3	-	34.1	121.8	3.57	表・底面：皺状　錆化顕著　炭化物付着	
M30	30		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	7.6	6.9	4.1	-	81.7	216.6	2.65	多孔質　底面：炭混じり炉床粘土（酸化）	
M31	32		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	8.2	6.1	2.9	1	56.9	207.0	3.64	多孔質　表面：酸化鉄被膜　底面：錆化顕著	
M32	41		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	8.3	6.9	3.4	1	42.7	195.8	4.59	細長　多孔質　表面：部分的に錆化　底面：皺状	
M33	22		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	8.6	7.8	3.3	1	86.0	270.7	3.15	多孔質　表面：部分的に錆化　底面：炉床粘土（小石混じり）付着（酸化）	
M34	15		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	8.8	8.8	1.6	2	81.7	265.2	3.25	多孔質　中央窪む　底面：皺状　炉床粘土（部分的に付着）　表・底面：部分的に錆化	
M35	39		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	8.9	8.0	2.9	2	73.1	246.1	3.37	多孔質　底面：錆化顕著	
M36	21		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	11.6	8.9	3.8	1	129.0	481.9	3.74	2個の滓合体　下段滓の中央の窪み部分に上段滓が付着　上・下段の滓：多孔質　上・下段滓とも部分的に錆化　下段の滓：底面皺状	
M37	52		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	9.4	7.1	2.0	1	47.3	123.9	2.62	多孔質　表・底面錆化顕著	
M38	16		78		○	椀形鉄滓	1区　SK10	9.7	9.4	1.7	0	107.5	361.4	3.36	完形　多孔質　表面：平滑　底面：瘤状　底面：炉床粘土部分的に付着（錆化）	
M39	38		79		○	椀形鉄滓	1区　SK10	9.9	8.7	2.4	1	81.7	256.7	3.14	多孔質　表面：平滑　底面：皺状　部分的に錆化	

表12　神子曽遺跡　鍛冶関連遺物(羽口･鍛冶滓他)一覧(2)

報告番号	処理番号	処No.枝番	図版番号	写真図版	掲載有無	種別	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	切断の箇所	体積(㎤)	重量(g)	密度(g/㎤)	表面観察	備考
M40	14		79	82	○	椀形鉄滓	1区　SK10	11.7	10.0	4.2	1	105.6	410.9	3.89	2個の滓合体　下段の滓：底面皺状　　上段の滓：多孔質　表面部分的錆化	分析:KMK-1
M41	53		79		○	椀形鉄滓	1区　SK10	10.2	5.7	2.0	-	34.4	134.8	3.92	長楕円形　表・底面:錆化顕著(底面の一部に炉床粘土付着)	
M42	40		79		○	椀形鉄滓	1区　SK10	10.6	7.6	1.5	-	60.2	183.4	3.05	多孔質　表面：平滑　表・底面：錆化顕著	
M43	47		79		○	椀形鉄滓	1区　SK10	10.6	9.1	4.4	2	103.2	291.3	2.82	表面:酸化鉄被膜　　多孔質　底面:酸化鉄皮膜層　炉床粘土(酸化)付着	
M44	51		79		○	椀形鉄滓	1区　SK10	10.9	9.0	3.3	2	103.2	399.5	3.87	表･底面一部錆化	
M45	50		79		○	椀形鉄滓	1区　SK10	11.3	9.8	2.7	-	138.2	440.8	3.19	多孔質　表面中央大きく窪む　底面:皺状　錆化顕著	分析KMK-2
M46	29		79		○	椀形鉄滓	1区　SK10	11.7	9.3	3.4	1	124.7	385.5	3.09	多孔質　表・底面部分的に錆化　底面：炭付着	
M47	49		79	82	○	椀形鉄滓	1区　SK10	18.5	14.1	5.1	下段滓1･上段滓1	428.5	1327.0	3.10	不整円形　2個鉄滓溶着　下段の滓:表面錆化顕著､底面炉床粘土(還元)付着　上段の滓：表･底面錆化顕著　羽口片付着	炉床形状良好
M48	61		80		○	椀形鉄滓	1区　SX207	5.4	3.7	0.9	3	8.5	25.2	2.95	多孔質　底面炉底粘土(還元)付着	
M49	63		80		○	椀形鉄滓	1区　P119	7.4	6.8	1.5	3	15.4	125.0	8.12	多孔質　表面・底面錆化顕著(特に底面)　底面:皺状	分析KMK-4
M50	64		80		○	椀形鉄滓	1区　P178	8.7	7.7	3.1	-	73.1	212.6	2.91	多孔質　底面：皺状　錆化顕著	
M51	65		80		○	椀形鉄滓	1区　P353	8.0	6.7	2.2	1	19.9	81.3	4.08	多孔質　表・底面：錆化顕著　底面：皺状	
M52	68		80		○	滓	1区　P374	6.2	6.2	1.5	2	19.9	50.0	2.51	ガラス化顕著　炉内滓	
M53	67		80		○	椀形鉄滓	1区　P374	7.7	7.1	3.3	1	39.8	135.6	3.40	多孔質　表・底面:皺状部分的に錆化　小石付着	
M54	73		80		○	椀形鉄滓	1区　P374	9.1	7.9	2.3	1	19.9	161.9	8.13	多孔質　表・底面：部分的錆化　底面：皺状	
M55	72		80		○	椀形鉄滓	1区　P374	8.4	6.0	2.1	2	39.8	172.0	4.32	多孔質　表・底面：部分的錆化　底面：皺状	
M56	66		80		○	椀形鉄滓	1区　P374	8.9	8.0	2.4	2	94.6	313.6	3.32	多孔質　部分的錆化	
M57	78		80		○	椀形鉄滓	1区　P421	8.6	8.4	2.6	1	77.4	267.7	3.46	多孔質　表・底面：部分的錆化　底面：皺状	
※	20	1			×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.7	3.7	3.0	3	14.2	29.0	2.04	多孔質　表面：ガラス化瘤状　底面　切断面錆化	
※	20	2			×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.9	3.8	2.4	-	11.4	32.8	2.88	多孔質　表面瘤状　底面：皺状　部分的錆化	
※	20	4			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.9	2.9	2.2	2	17.1	30.0	1.76	多孔質　表面瘤状　部分的錆化　底面：皺状	
※	20	5			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.3	1.5	1.7	3	3.3	4.8	1.47	多孔質　表面瘤状　部分的錆化 底面:皺状 部分的錆化	
※	26	12			×	鉄塊状？	1区　SK10	1.9	1.9	1.6	-	4.9	6.5	1.33	球状　全面錆化	
※	36				×	滓	1区　SK10	4.2	3.5	3.3	-	3.0	45.5	15.17		
※	37	1			×	椀形鉄滓	1区　SK10	5.0	4.0	1.9	-	8.4	29.4	3.50	多孔質　表面・底面錆化顕著(特に底面)	
※	43				×	椀形鉄滓	1区　SK10	6.8	5.1	1.7	完形	8.6	61.4	7.14	全面錆化顕著　多孔質表面：瘤状　底面：瘤状	
※	44				×	椀形鉄滓	1区　SK10	6.2	4.7	3.0	4	28.5	78.8	2.77	表面：瘤状　底面：皺状部分的に錆化	
※	45				×	椀形鉄滓	1区　SK10	6.1	2.4	2.7	1	17.2	49.1	2.85	多孔質　ガラス化顕著　底面：炉床粘土付着	
※	46	1			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.9	3.7	1.9	2	5.7	16.3	2.86	多孔質　表・底面:錆化顕著　底面:炉床粘土付着	
※	56				×	椀形鉄滓	1区　SK10	5.8	3.4	3.9	2	4.0	49.8	12.45	多孔質　底面：皺状　全面部分的錆化	
※	57				×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.8	3.4	2.1	1	11.4	39.8	3.50	全面に錆化顕著　表面：瘤状　底面：瘤状	
※	58				×	椀形鉄滓	1区　SK10	6.3	3.5	1.2	2	5.7	29.0	5.10	多孔質　全面錆化顕著　表面：瘤状　底面：皺状	
※	69				×	椀形鉄滓	1区　P374	5.8	4.4	2.1	2	17.1	67.5	3.95	表面：錆化顕著　底面：皺状　部分的錆化	
※	70				×	椀形鉄滓	1区　P374	6.3	4.4	2.0	2	17.1	63.2	3.70	多孔質　表面　剥離状部分的錆化　底面皺状部分的錆化	
※	74				×	椀形鉄滓	1区　P374	8.0	3.5	2.1	完形	17.2	69.5	4.04	表面　多孔質　部分的錆化　底面　皺状	
※	75				×	椀形鉄滓	1区　P374	5.0	4.7	2.3	2	22.8	55.6	2.44	表面：瘤状　底面：皺状錆化顕著	
※	79				×	椀形鉄滓	1区　P444	7.3	4.2	2.2	1	22.8	68.8	3.02	多孔質　部分的に錆化表面：瘤状　底面：皺状	
※	80				×	鉄塊状？	1区　P444	2.6	2.3	2.2	-	5.7	15.6	2.74	球状　全面錆化	

表13　神子曽遺跡　鍛冶関連遺物(羽口･鍛冶滓他)一覧(3)

報告番号	処理番号	処No.枝番	図版番号	写真図版	掲載有無	種別	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	切断の箇所	体積(㎤)	重量(g)	密度(g/㎤)	表面観察	備考
	20	3			×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.8	4.4	2.6	4	17.1	50.6	2.96	切断片	
	20	6			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.3	2.0	1.1	-	2.4	4.2	1.72		
	20	7			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.6	1.0	0.4	-	0.1	0.7	7.00		
	25				×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.9	3.3	3.1	-	17.1	81.6	4.78		
	26	1			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.8	2.1	1.8	-	4.9	5.7	1.16		
	26	2			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.8	1.7	1.4	-	3.3	6.1	1.87		
	26	3			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.7	1.5	1.3	5	4.9	11.1	2.27		
	26	4			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.5	1.9	1.2	-	3.3	3.5	1.07	切断片	
	26	5			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.1	1.5	1.7	-	3.3	4.7	1.44		
	26	6			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.9	2.3	1.5	-	3.3	7.5	2.30		
	26	7			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.2	2.3	1.7	-	3.1	3.6	1.16		
	26	8			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.7	2.4	1.6	-	4.9	12.4	2.53		
	26	9			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.8	2.5	1.6	1	4.9	13.3	2.72		
	26	10			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.7	1.2	1.0	-	1.6	1.2	0.74		
	26	11			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.5	1.4	1.2	-	3.3	3.2	0.98		
	26	13			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.2	1.9	1.3	-	1.6	3.0	1.84		
	26	14			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.4	1.1	1.2	-	3.3	3.8	1.16		
	26	15			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.4	1.6	1.3	-	3.3	5.6	1.72		
	26	16			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.8	2.0	1.3	-	3.3	7.8	2.39	切断片	
	26	17			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.8	1.9	1.2	-	3.3	4.5	1.38		
	26	18			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.0	1.7	1.3	-	3.3	3.3	1.01		
	26	19			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.8	1.9	1.2	-	3.3	5.8	1.78		
	26	21			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.4	1.7	1.4	-	3.3	4.7	1.44		
	26	22			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.8	1.6	1.8	1	3.3	5.4	1.65		
	26	24			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.0	1.1	0.8	-	1.6	0.9	0.55		
	26	25			×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.8	1.7	1.9	-	6.5	10.0	1.53		
	26	26			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.5	1.3	0.8	-	1.6	1.4	0.86	切断片	
	26	27			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.7	1.1	0.8	1	1.6	2.3	1.41		
	26	28			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.9	1.1	1.0	-	2.0	1.3	0.65		
	26	29			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.5	1.1	0.7	-	1.0	0.6	0.60		
	34				×	椀形鉄滓	1区　SK10	6.8	5.3	3.9	3	39.8	118.1	2.97		
	37	2			×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.1	2.9	1.6	-	3.6	17.4	4.83	切断片	
	37	3			×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.6	2.0	1.7	-	2.3	8.5	3.70		
	37	8			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.8	2.5	1.5	-	3.1	5.2	1.68	切断片	
	37	9			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.8	2.0	1.5	-	2.0	10.5	5.25		
	37	11			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.5	2.1	1.7	-	0.9	3.1	3.44		
	37	12			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.1	1.7	1.6	-	1.0	6.3	6.30	切断片	
	37	13			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.3	1.9	1.6	-	0.6	3.0	5.00		
	37	15			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.8	2.3	1.7	-	2.3	9.6	4.17		
	37	16			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.3	2.4	1.6	-	2.5	10.8	4.32		
	37	17			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.6	1.9	1.5	-	0.1	3.2	32.00		
	37	18			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.0	1.3	1.3	-	0.1	1.7	17.00		
	37	19			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.4	1.1	1.1	-	0.1	1.9	19.00	切断片	
	37	20			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.1	0.8	0.5	-	0.1	1.1	11.00		
	37	21			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.6	1.4	0.8	-	0.1	1.7	17.00		
	37	22			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.3	1.0	0.6	-	0.1	0.5	5.00		
	37	23			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.9	1.3	1.1	-	0.1	1.2	12.00		
	37	24			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.0	1.2	0.8	-	0.1	1.9	19.00		
	46	2			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.9	2.6	1.6	-	0.5	8.1	16.20		
	46	3			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.3	1.6	1.5	-	1.4	10.3	7.36		
	46	4			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.7	0.8	0.7	-	0.1	0.8	8.00		
	46	5			×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.1	1.7	1.6	-	4.5	11.6	2.58	切断片	
	46	6			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.2	2.6	2.3	2	5.9	23.4	3.97		
	46	7			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.8	2.3	1.9	-	2.2	7.8	3.55		
	46	8			×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.3	2.4	2.4	-	7.0	21.5	3.07		

表14　神子曽遺跡　鍛冶関連遺物(羽口・鍛冶滓他)一覧(4)

報告番号	処理番号	処No.枝番	図版番号	写真図版	掲載有無	種別	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	切断の箇所	体積(㎤)	重量(g)	密度(g/㎤)	表面観察	備考
	46	9			×	滓	1区　SK10	5.0	2.9	2.5	-	6.0	14.7	2.45	ガラス化顕著	
	46	10			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.1	2.0	1.5	-	2.1	5.3	2.52	切断片	
	48	1			×	椀形鉄滓	1区　SK10	5.3	3.6	2.8	-	10.8	31.7	2.94		
	48	2			×	滓	1区　SK10	2.9	2.2	1.9	-	1.2	7.1	5.92	ガラス化顕著	
	48	3			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.9	1.6	1.2	-	-	-	-	切断片	
	48	4			×	滓	1区　SK10	1.3	1.0	0.9	-	-	-	-		
	60	1			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.2	2.8	1.5	-	1.8	6.7	3.72		
	60	2			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.3	1.8	0.4	-	0.1	1.2	12.00		
	60	3			×	椀形鉄滓	1区　SK10	4.0	1.7	2.7	-	5.5	19.2	3.49		
	60	4			×	椀形鉄滓	1区　SK10	3.8	2.0	1.8	-	1.1	6.6	6.00		
	60	5			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.8	1.0	0.8	-	0.1	1.5	15.00		
	60	6			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.3	0.8	0.6	-	0.1	0.6	6.00		
	60	7			×	椀形鉄滓	1区　SK10	2.1	0.9	1.2	-	0.1	2.4	24.00		
	60	8			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.6	1.0	0.8	-	0.1	1.6	16.00	切断片	
	60	9			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.8	1.5	0.7	-	0.1	1.7	17.00		
	60	10			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.5	0.9	1.0	-	0.1	1.8	18.00		
	60	11			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.4	0.9	0.8	-	0.1	1.2	12.00		
	60	12			×	椀形鉄滓	1区　SK10	1.2	0.9	0.7	-	0.1	0.6	6.00		
	62	1			×	椀形鉄滓	1区　SX207	4.1	1.2	1.8	-	3.2	10.5	3.28		
	62	2			×	椀形鉄滓	1区　SX207	2.9	1.4	1.7	-	2.4	6.4	2.67		
	62	3			×	椀形鉄滓	1区　SX207	1.2	1.1	1.0	-	0.1	0.8	8.00		
	62	4			×	椀形鉄滓	1区　SX207	1.6	0.9	0.6	-	0.2	0.7	3.50		
	71	2			×	椀形鉄滓	1区　P374	3.8	3.7	2.4	1	9.5	34.6	3.64		
	71	3			×	椀形鉄滓	1区　P374	2.2	1.4	1.1	2	0.8	5.8	7.25	切断片	
	71	4			×	椀形鉄滓	1区　P374	2.7	2.3	1.3	-	0.6	4.6	7.67		
	71	6			×	椀形鉄滓	1区　P374	1.5	1.0	0.7	-	0.1	1.3	13.00		
	71	8			×	椀形鉄滓	1区　P374	2.3	2.0	1.7	-	2.8	9.8	3.50	切断片	
	71	9			×	椀形鉄滓	1区　P374	2.5	2.2	1.6	3	2.8	13.8	4.93		
	76	1			×	椀形鉄滓	1区　P374	3.3	2.9	2.2	3	4.9	11.6	2.37		
	76	2			×	椀形鉄滓	1区　P374	3.3	2.4	1.5	3	4.9	18.6	3.80		
	76	3			×	椀形鉄滓	1区　P374	4.1	2.6	2.3	3	8.2	25.1	3.08		
	76	4			×	椀形鉄滓	1区　P374	3.7	2.9	2.1	-	6.5	11.0	1.69		
	76	5			×	椀形鉄滓	1区　P374	2.9	1.6	1.2	-	3.3	4.3	1.32		
	76	6			×	椀形鉄滓	1区　P374	2.6	2.3	1.5	-	3.3	5.6	1.72	切断片	
	76	7			×	椀形鉄滓	1区　P374	2.2	2.1	1.5	4	3.3	10.4	3.19		
	76	8			×	椀形鉄滓	1区　P374	2.8	1.7	1.8	2	4.9	12.6	2.57		
	76	9			×	椀形鉄滓	1区　P374	1.9	1.5	2.0	-	3.3	8.1	2.48		
	76	10			×	椀形鉄滓	1区　P374	2.3	1.7	1.9	1	4.9	6.6	1.35		
	77				×	椀形鉄滓	1区　P416	3.1	2.1	1.8	-	3.3	15.4	4.72		

※報告文中で使用する各種グラフデータとして採用
網掛は観察表のみで報告

第６章　曽根遺跡

第１節　概要（遺構の概要と層序）

当遺跡の本発掘調査は平成９年度と平成10年度の2回にわたり、合計３地区で実施された。本書では平成９年度の調査区をA・B地区、平成10年度の調査区をC地区として報告する（図６）。

A・B地区では圃場整備の盛土により地形の改変が認められるものの、主として東西に走る溝と土坑を検出している。現在のコンクリート舗装と圃場整備時の盛土の下に旧耕作土と床土があり、その下に平安時代の遺物包含層であるオリーブ黒色細砂層が薄く堆積している。この層の下に灰オリーブ極細砂で構成される地山層があり、遺構はその上面で検出した。

C地区では水田の造成により遺構面が削平され、包含層は残されていなかったが、北西から南東へ流下する旧河道とピットを検出した。基本的な堆積状況はA・B地区と同じである。（鐵）

第２節　遺構

１　A・B地区（図５～７）

この両地区は一連のものとして報告する。複数の溝と土坑を検出した。

溝

SD01

A地区からB地区にかけて検出された東から西へ流れる溝である。調査区外へ延びる。SD04を切り、SD05に切られる。幅約0.35m、深さ約0.15mを測り、埋土は黒褐色から褐灰色極細砂である。平安時代の須恵器椀（1）が出土している。

SD02

A地区で検出された南北方向の溝である。検出長約3.2mでSK02に切られる。

SD03

A地区で検出された東西方向の溝である。検出長約6mでSD01に平行しており、ほぼ同時期のものと考えられる。

SD04

B地区で検出された東から西へ流れる溝である。幅約1.0m、深さ0.5mを測り、埋土は黄灰色から灰白色極細砂を主体とする。SD01とSD05の双方に切られる。出土遺物には土師器細片があったが、残存状況が悪く、取り上げることができなかった。古墳時代以前の遺構と考えられる。

SD05

B地区で検出された東から西へ流れる溝である。流水の痕跡が明瞭で、江戸時代の水田に伴う用水路と考えられる。図示はしていないが、16世紀後半から18世紀にかけての土師器や陶磁器類が出土している。また、サヌカイト製のナイフ形石器やチップが混入していた。

土坑

SK01

A地区東端で検出された土坑で、一部は調査区外に延びる。残存長約1.3mを測る。

SK02

A地区中央北端で検出された土坑で、一部は調査区外に延びる。SD02を切っている。検出長約3.5m

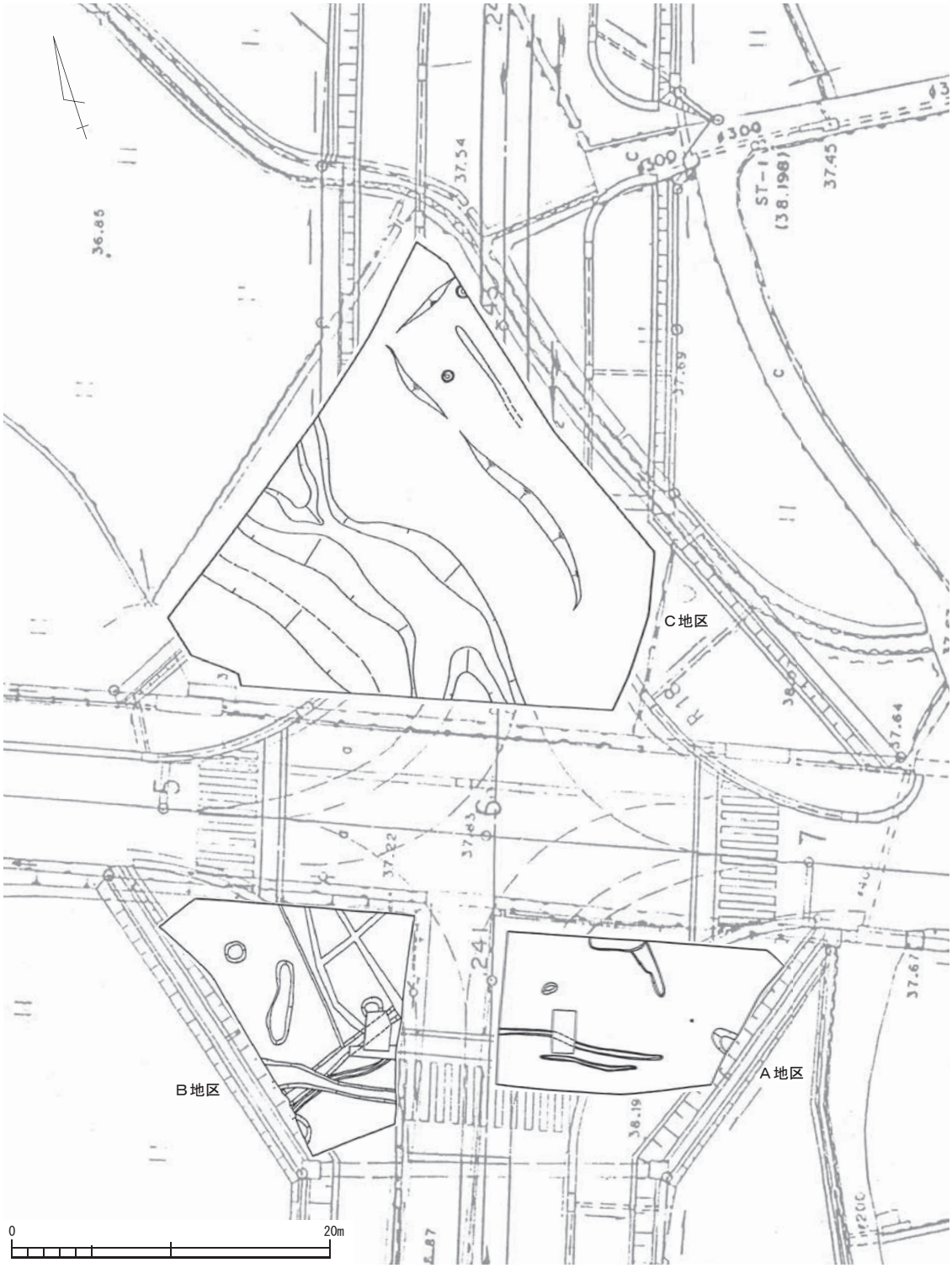


図５　曽根遺跡　調査区配置図

を測る。

SK03

A地区西部で検出された楕円形を呈する土坑である。長径約1m、短径約0.5mを測る。

SK04

B地区西部で検出された南北に長い土坑である。長さ約5.3m。最大幅約1.4mを測る。

これらの土坑はSD01と同様の埋土を持つことから、平安時代のものと考えられる。

2　C地区（図８）

北から南に傾斜する丘陵地に当たり、検出された遺構には旧河道、溝、ピットがある。

溝

SD01

東寄りに蛇行しながら、調査区の南部を北から南に走る旧河道である。最大幅約3.20m、最深部で0.65mを測り、底面は凹凸が激しい。西側の肩部はゆるやかに傾斜しており、本来は更に広い流れであったと考えられる。埋土は粗砂から中砂で、人頭大の円礫も含まれている。河道内からは摩耗の著しい土師器・須恵器片が出土したが、器種・時期を特定することはできなかった。

SD02

調査区北部を南北に走る溝である。検出長は約6.8m、幅約0.5m、深さ0.3mの素掘り溝である。18世紀後半以降の所産と考えられる陶磁器細片が出土している。

柱穴

P01・P02

P01は調査区壁に半分かかる形で検出した。直径0.7m、深さ0,3mを測る。P02は直径0.43mのほぼ正円形で、深さ0.2mを測る。いずれも遺物は出土していないが、埋土がSD02のものと酷似しているため、同時期のものである可能性が高い。（鐵）

第３節　遺物

1　旧石器（図９：写真図版）

包含層の人力掘削時や後世の遺構から若干の石器が出土している。すべてサヌカイトである。風化の著しい１点（Ｓ１）を除いて、石肌は滑らかであり、肉眼で見る限り二上山産のサヌカイトと判定した。

ナイフ形石器（Ｓ１・Ｓ２）

Ｓ１は国府型ナイフ形石器である。素材剥片は先行剥離面が２面認められるものの、ポジティブな石核底面を大きく取り込んでおり、形の整った翼状剥片であると言える。模式化されたものではないものの、瀬戸内技法第２工程の存在が十分に想定しうる。調整剥離は打面側に対してのみ急角度な調整が施され、一端が尖り、もう一端は素材の形状に即して方形の仕上げとなっている。明らかに尖頭部と基部を意識した形態である。他の資料と比べると風化が著しく進んでいる。

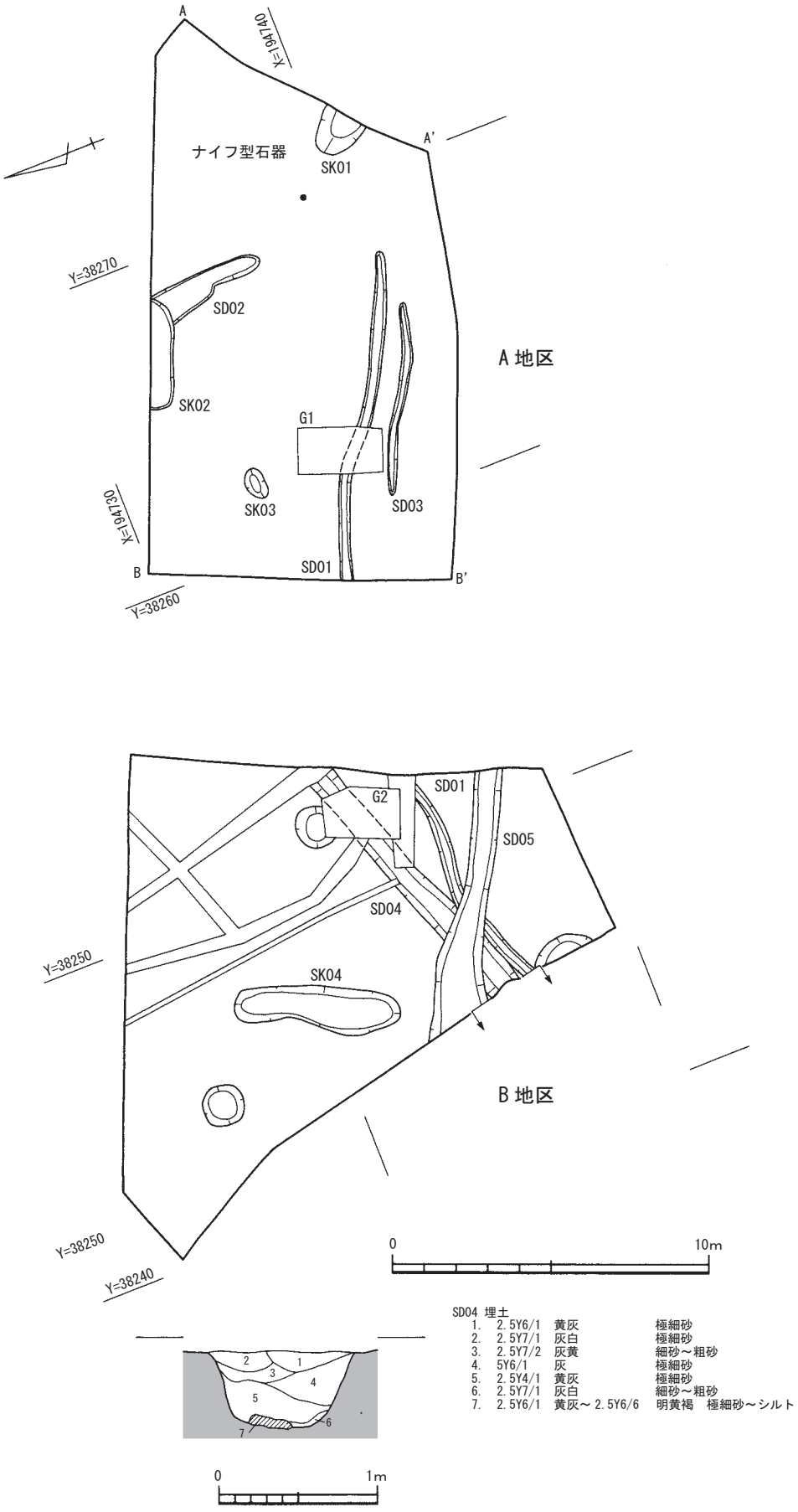


図6　曽根遺跡　A・B地区遺構平面図

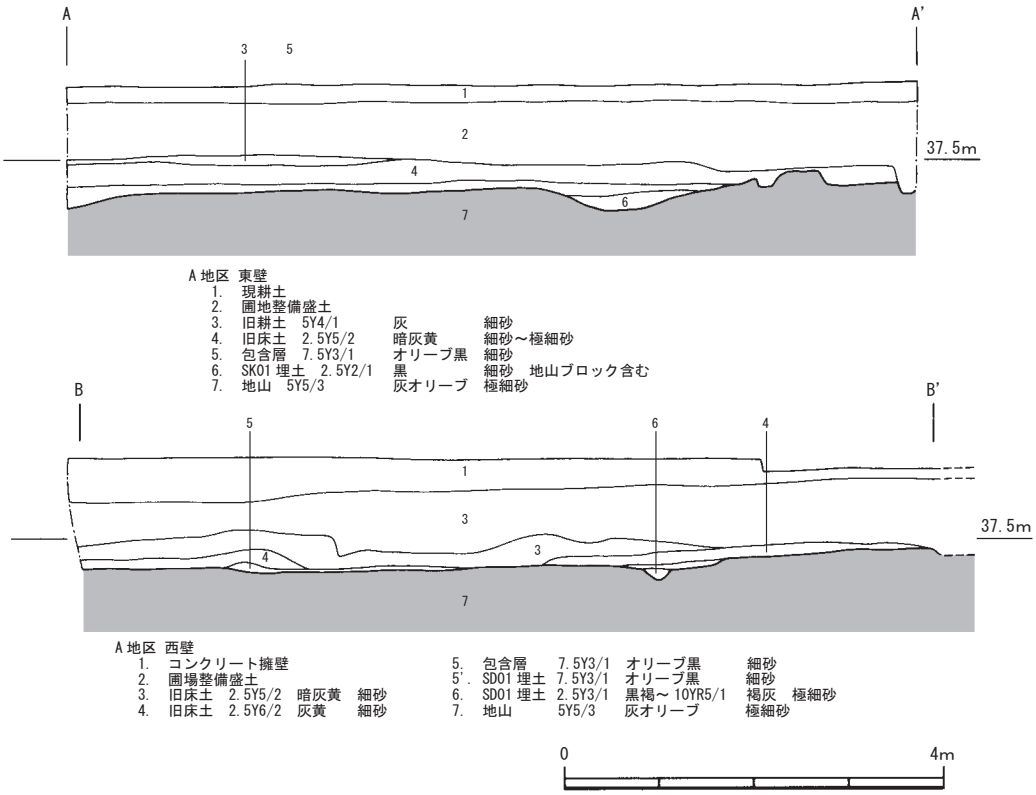


図７　曽根遺跡　土層断面図

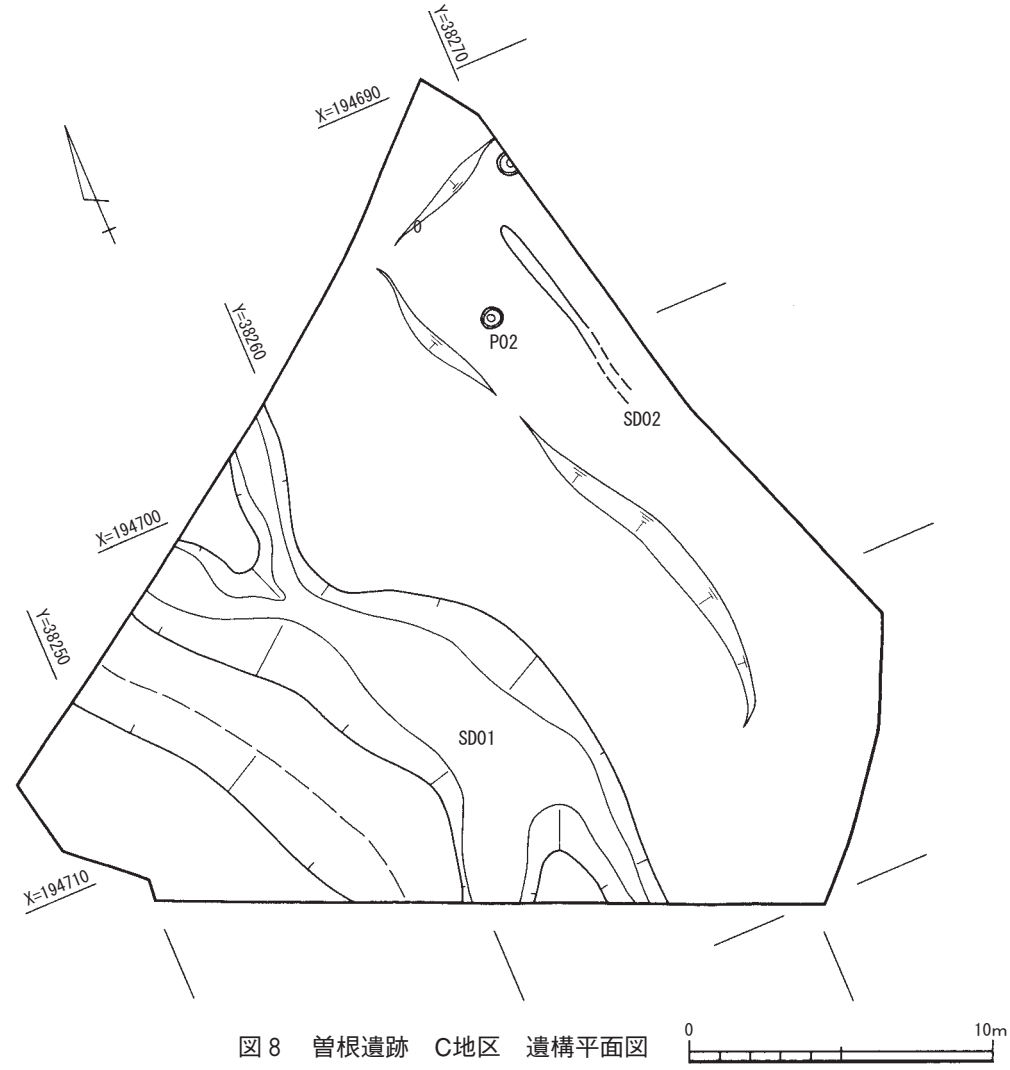


図８　曽根遺跡　C地区　遺構平面図

Ｓ２の素材剥片では先行剥離面が３面認められる。ポジティブな石核底面を大きく取り込み、かつ、石核底面と作業面の関係が維持されているとは言え、先行剥離面では打点を横方向へ大きく移動させている。調整剥離は一側縁と両端に認められ、打面側は急角度、末端側は腹面に対しての平坦剥離を施す。一端は小さく折れているが、基部と尖頭部が作り出されていたものと考えたい。また、尖頭部側には一筋の樋状剥離が見られることから、彫刻刀形石器と言えなくもないが、国府系石器群に普遍的な器種ではないため、ナイフ形石器の範疇でとらえておきたい。

翼状剥片（Ｓ３）

細かな調整剥離で山形に整えられた打面の頂部に打撃を加え、ポジティブな石核底面を取り込んで剥離された剥片である。打点は正確に頂部を捉えているものの、左右のバランスが悪く、片側は剥離が伸びずに短く終わってしまっている。したがって、作業面と石核底面には少なくとも各２面の剥離痕が残されたはずである。また、底面には横方向から剥離も認められる。石核の作業面に複数の剥離面を残しつつも、ポジティブな石核底面を大きく取り込んで剥片を進行させるような剥片剥離の手法は、Ｓ１やＳ２のナイフ形石器の素材剥片の剥離状況と整合する。

使用痕のある剥片（Ｓ４）

薄手の縦長剥片の末端部と側縁に微細な剥離痕が連続して認められる。この２辺はともに直線的で刃角も鋭い。（藤田）

２　土器（図９）

○はSD01から出土した須恵器椀の底部である。回転ナデによる成形の後、接地部が丸みを帯びた高台を貼り付けている。やや摩耗しているものの焼成は良好で平安時代に属するものと考えられる。（鐵）

第４節　小結

調査の結果、平安時代と近世の遺構が検出された。平安時代の溝と土坑は直接生活の痕跡を示すものではないが、調査地点の付近に集落が営まれたことを示している。また、江戸時代の溝及び旧河道が検出されたことにより、江戸時代以降の水田造成の一端を読み取ることができる。

遺物の面ではナイフ形石器が出土したことが特筆される。今回報告する資料によって、瀬戸内海最東端にあり、また、最大の島でありながら、これまで旧石器時代資料の出土例が少なかった淡路島に新たな資料が加わることとなった。また、国府系石器群としても、北端の淡路市まるやま遺跡でサヌカイト製ナイフ形石器が１点出土しているだけであったが（兵庫県教育委員会2002）、曽根遺跡の資料は国府型ナイフ形石器のみならず翼状剥片も含んでおり、また、島の南端近くに位置していることからも、島内における瀬戸内技法及び国府系石器群の展開を考える上で極めて貴重な資料であるといえる。

（藤田・鐵）

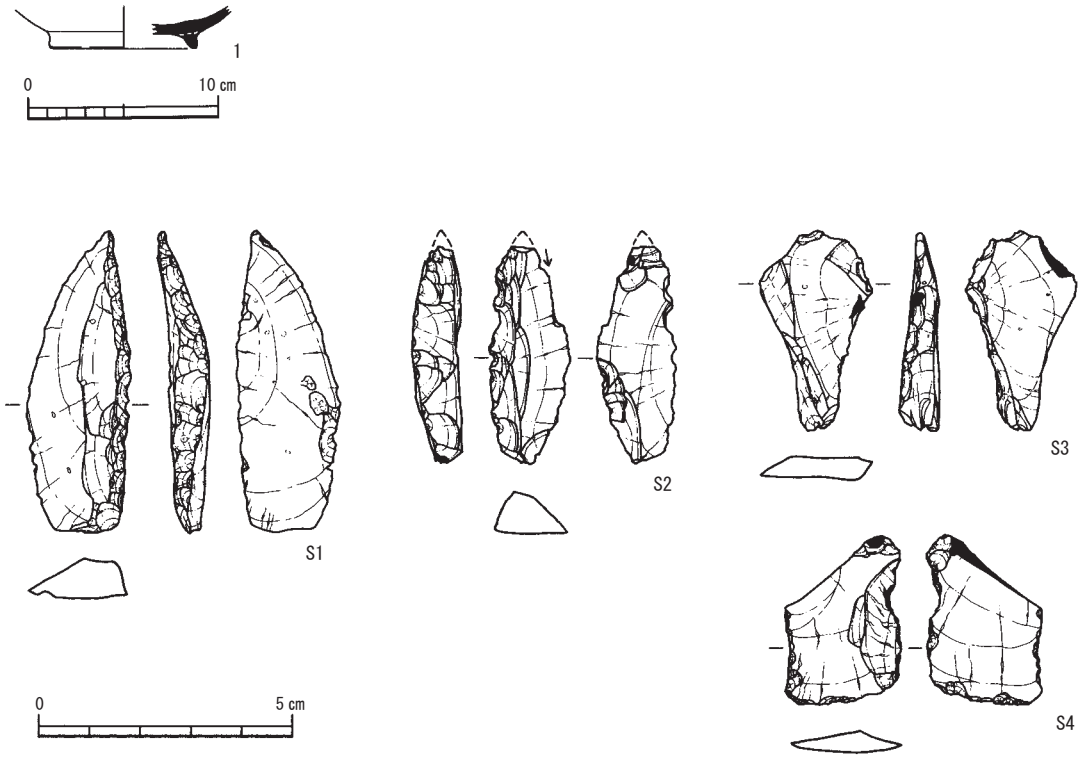


図９　曽根遺跡　出土遺物

表15　曽根遺跡遺物一覧

報告番号	挿図No.	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	重量(g)	石材	調査番号	実測番号
1	10		84	須恵器	杯B	底部			-	(2.3)	(7.6)						970389	N 1
S1	10		84	石器	ナイフ形石器		B 地区	旧水路				59.0	20.5	8.0	8.7	サヌカイト	970389	N 2
S2	10		84	石器	ナイフ形石器		A 地区					42.6	16.2	9.3	6.0	サヌカイト	970389	N 3
S3	10		84	石器	翼状剥片		B 地区	旧水路				39.3	22.0	4.6	4.9	サヌカイト	970389	N 5
S4	10		84	石器	使用痕のある剥片		A 地区	包含層				22.7	33.0	4.3	3.5	サヌカイト	970389	N 4

第7章　自然科学的調査

第1節　神子曽遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、淡路島南部諭鶴羽山地西部の北側に広がる沖積低地に位置する神子曽遺跡から出土した縄文土器、弥生土器、土師器の各土器について、その材質(胎土)の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、神子曽遺跡から出土した10点の土器片である。試料には、No.1～No.10までの番号が付されている。これらのうち、No.1は縄文土器、No.2～No.8の7点は弥生土器、No.9とNo.10の2点は土師器とされている。縄文土器は深鉢とされ、土坑から出土している。弥生土器の器種は、直口壺2点、広口壺4点、細頸壺1点であり、いずれも弥生時代中期とされた方形周溝墓から出土している。土師器は2点ともに広口壺であり、土器棺から出土している。

各試料には実測番号や出土遺構などが付されており、これらを一覧表にして表16に示す。

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

表16　試料一覧および胎土分類結果

No.	報告番号	種別	器種	ネーミング番号	出土地区	出土遺構		出土年月日	胎土分類		
									鉱物・岩石	粒径組成	砕屑物量
1	16	縄文土器	深鉢	286	1区	土坑	SK230	2005.01.21	C7	1	Ⅰ
2	53	弥生土器	直口壺	329	1区	方形周溝墓	SX207北周溝	2005.01.27	E2	1	Ⅰ
3	64	弥生土器	直口壺	319	1区	方形周溝墓	SX204西周溝	2005.01.27	E2	1	Ⅰ
4	76	弥生土器	広口壺	284	1区	方形周溝墓	SX203東周溝	2005.01.21	A1	1	Ⅰ
5	82	弥生土器	広口壺	466	1区	方形周溝墓	SX212西周溝	2005.03.10	A1	2	Ⅰ
6	84	弥生土器	広口壺	466	1区	方形周溝墓	SX212西周溝	2005.03.10	A1	2	Ⅱ
7	86	弥生土器	広口壺	466	1区	方形周溝墓	SX212西周溝	2005.03.10	A1	3	Ⅰ
8	92	弥生土器	細頸壺	466	1区	方形周溝墓	SX212西周溝	2005.03.10	A1	2	Ⅱ
9	106	土師器	広口壺	219	1区	土器棺	SK213	2005.01.13	C1	4	Ⅰ
10	108	土師器	広口壺	290	1区	土器棺	SK238	2005.01.21	A1	3	Ⅱ

3. 結果

観察結果を表17･18、図11～13に示す。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A類からP類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類によって細分もしている。今回の結果も、その基準に従って分類する。

鉱物片および岩石片の組成をみると、縄文土器、弥生土器、土師器のそれぞれで異なる組成の状況を呈している。縄文土器は1点のみであるが、鉱物片は石英、カリ長石、斜長石のみであり、これらの3者間では、石英、斜長石、カリ長石の順に多い。岩石片は、多結晶石英と花崗岩類が主体であり、他に極めて微量の砂岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイトが含まれる。凝灰岩と流紋岩・デイサイトは結晶質である。岩石片の組成が花崗岩類を主体とする分類はC類に相当するが、細分した組成では、極めて微量の凝灰岩あるいは流紋岩・デイサイトを含むという特徴からC7類に分類される。

弥生土器の試料のうち、直口壺とされたNo. 2とNo. 3を除く5点と土師器試料のうちのNo. 10については、ほぼ共通した鉱物・岩石組成を認めることができる。鉱物組成は、石英が多く、次いで斜長石を多く含み、少量または微量のカリ長石を伴う。これら3者以外の鉱物片はほとんど含まれず、試料によっては極めて微量の角閃石が含まれている。岩石片では、チャート、頁岩、砂岩の堆積岩類と、凝灰岩および流紋岩・デイサイトの火砕岩・火山岩類と、花崗岩類の3者を主体とし、試料によっては微量または少量の変質岩や火山ガラスを含んでいる。このような特徴は、これまでの分類ではAl類に相当する。

直口壺とされた弥生土器の2点の試料の鉱物・岩石組成は、上述したAl類の組成とは大きく異なる。鉱物組成では、石英が多い傾向にあり、斜長石を伴い、試料によっては微量のカリ長石、緑廉石、白雲母、黒雲母などが含まれる。岩石片では、ホルンフェルスと粘板岩の多いことが特徴であり、これらに加えて、チャートと頁岩の堆積岩類、多結晶石英と花崗岩類、さらに脈石英や変質岩を少量伴っている。A1類の特徴の一つである火砕岩・火山岩類は含まれていない。これまでの分類では、花崗岩類とホルンフェルスを主体とし、堆積岩類を少量伴うという組成でE類を設定していたが、今回の組成は、これらに加えて粘板岩も特徴とされることから、ここではE2類とする。

No. 9の土師器の鉱物・岩石組成は、鉱物片では斜長石が多く、次いで石英が多く含まれ、少量の角閃石と微量のカリ長石を伴う組成であり、岩石片では花崗岩類を主体とし、微量の多結晶石英と変質岩を伴うのみである。この組成は、花崗岩類を主体とするC類の中でも角閃石を比較的多く伴うC1類に分類される。

次に各試料の砂分全体の粒径組成では、モードを示す粒径をみると、粗粒砂をモードとする縄文土器のNo. 1、弥生土器のNo. 2～No. 4、中粒砂をモードとする弥生土器のNo. 5、No. 6、No. 8、細粒砂をモードとする弥生土器のNo. 7、土師器のNo. 10、極細粒砂をモードとする土師器のNo. 9とに分類することができる。ここでは、順に1～4類とする。

砕屑物・基質・孔隙の割合では、砕屑物の割合が15％から20数％までのものがほとんどであるが、弥生土器のNo. 6、No. 8、土師器のNo. 10は15％未満である。ここでは、これら3点をⅡ類とし、他の試料をⅠ類とした。

以上に述べた各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成および砕屑物量における各分類結果は、一覧にして表16に併記する。

表17　薄片観察結果(1)

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																																		合計
			鉱物片										岩石片																		その他								
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	スコリア	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	酸化鉄結核	粘土塊	砂泥じりシルト塊	植物珪酸体							
No.1 (報No.16)	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂	3	1	1													1		1	1																8
		粗粒砂	8	4	6										1					3	6				1												29
		中粒砂	2	3	2												1			2	5																15
		細粒砂	1		2																																3
		極細粒砂	5		2																																7
		粗粒シルト	1		1																																2
		中粒シルト																																			0
	基質																																				266
	孔隙																																				16
	備考		基質は褐色粘土鉱物、炭質物などで埋められ、暗褐色を示す。POあり。凝灰岩・流紋岩は結晶質。角閃石は未酸化。																																			
No.2 (報No.53)	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂	1										1							3			4	3	1												13
		粗粒砂	8	1									2	2						11	1		10	3	3	1											42
		中粒砂	10										1	2						6	1		7		1	1											29
		細粒砂	9	1									2	2						3					1												18
		極細粒砂	5	1	1								2																								9
		粗粒シルト	2		3																																7
		中粒シルト																																			0
	基質																																				544
	孔隙																																				19
	備考		基質は雲母粘土鉱物?で埋められ、褐色を示す。また、基質には酸化鉄が筋状に分布する部分が認められる。粘板岩には珪質粘板岩も含む。変質岩は、緑簾石、石英からなる変質脈とみられる。角閃石は弱酸化。																																			
No.3 (報No.64)	砂	細礫																						3													3
		極粗粒砂				1				1											1		3	11	3	2											22
		粗粒砂	2							1	1		1	1							1		12	20	5	2		2									48
		中粒砂									2									1	1		3	7	4	3		2									23
		細粒砂			1				1	1				1											1												5
		極細粒砂	1		2																																3
		粗粒シルト	5						1																												6
		中粒シルト	1																																		1
	基質																																				432
	孔隙																																				13
	備考		基質は黒雲母質で褐色を示す。花崗岩には、針状の珪線石が含まれる。変質岩は、はんれい岩を原岩とする熱水変質岩など。角閃石は未酸化。																																			
No.4 (報No.76)	砂	細礫																				1															1
		極粗粒砂											4	1								1															6
		粗粒砂	3	1									6		7		5	1																			23
		中粒砂	6										3	1	1		4				1																16
		細粒砂	3		3									1			3										1										11
		極細粒砂	8	1	3												1																				13
		粗粒シルト	3	1	4				1																												14
		中粒シルト	2																																		2
	基質																																				415
	孔隙																																				20
	備考		基質は雲母質な粘土鉱物によって埋められ、淡褐色を示す。また、基質には酸化鉄が筋状に分布する部分が認められる。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩・流紋岩は結晶質。角閃石は弱酸化。																																			
No.5 (報No.82)	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂															1	1			1																3
		粗粒砂	6										7	2	8		5	1			1																30
		中粒砂	7	3	1								14		4		7	2	1	2	3				1	1		2								48
		細粒砂	5	2	2								3	2	1		2	1		1								2								21
		極細粒砂	7	2	3								1				1											5								19
		粗粒シルト	9		6																																15
		中粒シルト	3																																		3
	基質																																				589
	孔隙																																				13
	備考		基質は褐色粘土鉱物(雲母鉱物?)によって埋められる。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩・流紋岩は結晶質。角閃石は未酸化。																																			

表18　薄片観察結果(2)

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																																		合計
			鉱物片											岩石片																		その他						
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	スコリア	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	酸化鉄結核	粘土塊	砂混じりシルト塊	植物珪酸体						
No.6 (報No.84)	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂																																			0
		粗粒砂	1										1				1					1															4
		中粒砂	5										3		3		6	2		3	2						3										27
		細粒砂	6		3								4	1													2										16
		極細粒砂	4		1															1							1										7
		粗粒シルト	8		2																						1										11
		中粒シルト	3																												1						4
	基質																																				391
	孔隙																																				20
	備考		基質は淡褐色粘土鉱物によって埋められ、酸化鉄が筋状～雲状に分布する部分が認められる。角閃石は未酸化。																																		
No.7 (報No.86)	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂																																			0
		粗粒砂	2	1																	1							1									5
		中粒砂	10	1									7	2				1		1	1					1											24
		細粒砂	27	2	2								7	1			3																				42
		極細粒砂	20	1	3								2																								26
		粗粒シルト	20	1	4																																25
		中粒シルト	3																																		3
	基質																																				632
	孔隙																																				24
	備考		基質は褐色粘土鉱物によって埋められ、ややシルト質である。凝灰岩・流紋岩は結晶質である。酸化角閃石あり。																																		
No.8 (報No.92)	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂																																			0
		粗粒砂	3										2	2			5																				12
		中粒砂	4	1	1								4	1	3		5	2		1	1						3										26
		細粒砂	4	1	3		2						1	1			1										6										19
		極細粒砂	2	1	2																																5
		粗粒シルト	9		4																																14
		中粒シルト																																			0
	基質																																				496
	孔隙																																				13
	備考		基質は褐色粘土鉱物によって埋められ、酸化鉄が筋状に分布する部分が認められる。火山ガラスはバブルウォール型。凝灰岩・流紋岩は結晶質。角閃石は未酸化。																																		
No.9 (報No.106)	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂																																			0
		粗粒砂	3	1	1		1													1	12				1											20
		中粒砂	18	1	16	1	1					1								2	3															43
		細粒砂	11	1	39		2																														53
		極細粒砂	13		44		3																														60
		粗粒シルト	7		14		3																														24
		中粒シルト																																			0
	基質																																				710
	孔隙																																				8
	備考		基質は雲母粘土鉱物質で褐色を示す。変質岩としたものは、緑簾石、石英などからなり、花崗岩の変質部の一部とみられる。角閃石は弱酸化。																																		
No.10 (報No.108)	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂											1																								1
		粗粒砂	2	1									1	1							1																6
		中粒砂	7	1	1								1	1			1								1												13
		細粒砂	9	2	3								4	2			6			1					1		2										30
		極細粒砂	5		6												4																				15
		粗粒シルト	6	3	6		1																														17
		中粒シルト																																			0
	基質																																				542
	孔隙																																				6
	備考		基質は淡褐色の雲母粘土鉱物によって埋められ、酸化鉄が筋状に分布する部分が認められる。角閃石は未酸化。																																		

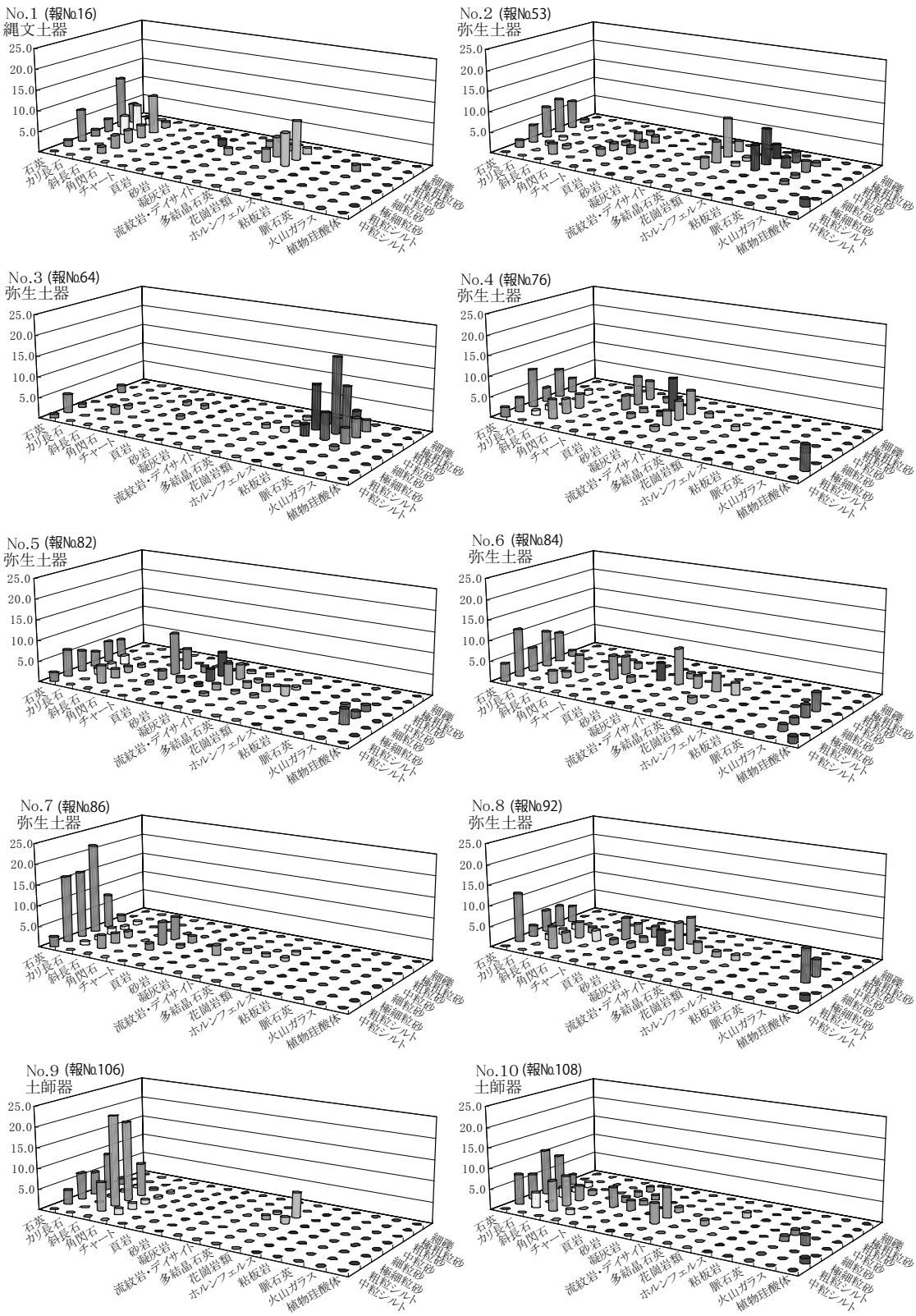


図11　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

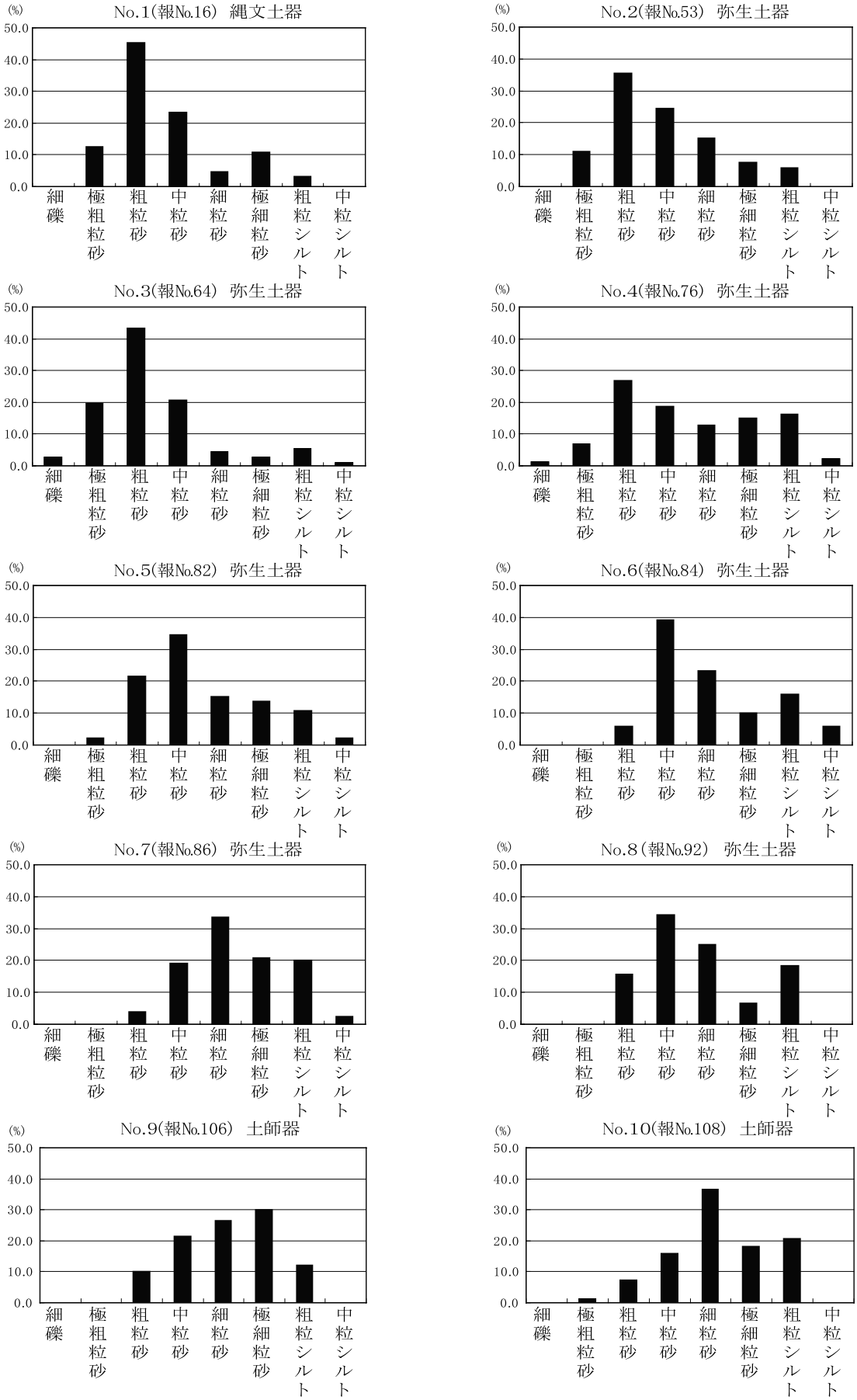

No.1(報No.16) 縄文土器
No.2(報No.53) 弥生土器
No.3(報No.64) 弥生土器
No.4(報No.76) 弥生土器
No.5(報No.82) 弥生土器
No.6(報No.84) 弥生土器
No.7(報No.86) 弥生土器
No.8(報No.92) 弥生土器
No.9(報No.106) 土師器
No.10(報No.108) 土師器
(%)
50.0
40.0
30.0
20.0
10.0
0.0
細礫
極粗粒砂
粗粒砂
中粒砂
細粒砂
極細粒砂
粗粒シルト
中粒シルト

図12　砂の粒径組成

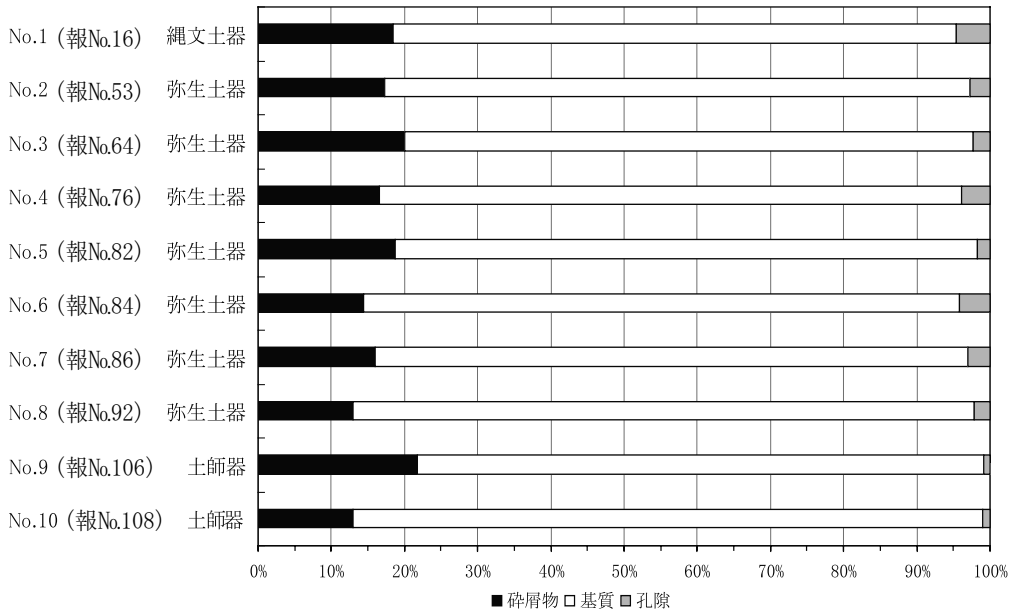


図13　砕屑物・基質・孔隙の割合

4. 考察

淡路島の地質については、水野ほか(1990)、高橋ほか(1992)、牧本ほか(1995) 、日本地質学会編(2009)などに詳細な記載がある。以下はこれらを参照、引用するものである。神子曽遺跡の位置は、淡路島南西部の比較的広い面積を占める三原川とその水系が形成した完新世段丘および沖積低地からなる低地の南西部に相当する。ここを取り囲む山地は、白亜紀後期の主に砂岩泥岩互層からなる和泉層群の中でも主部相とされる北阿万累層により構成されている。したがって、神子曽遺跡の位置する周辺の堆積物を構成する砕屑物の岩石組成は、おそらく砂岩や泥岩などの堆積岩類が卓越していると考えられる。

今回の分析では、縄文土器のNo.1の胎土は、花崗岩類を主体とするC7類の岩石組成を示した。この組成は、上述した神子曽遺跡の地質学的背景とは一致しないことから、神子曽遺跡周辺の堆積物が材料となっている可能性は低いと考えられる。No.1の胎土では、石英、カリ長石、斜長石以外の鉱物片が認められなかったことから、胎土中の花崗岩類の種類を特定することはできないが、カリ長石よりも斜長石の方がやや多い傾向が認められることから、花崗閃緑岩類に由来する可能性があると考えられる。花崗閃緑岩類の分布は、淡路島内でも中部から北部にかけて比較的広く分布している。さらに、C7類の花崗岩類に伴う結晶質な凝灰岩および流紋岩・デイサイトは、淡路島内では中部の倭文土井付近の山地に分布する泉南流紋岩類に認めることができる。この泉南流紋岩類の分布域の北側に接して洲本花崗閃緑岩の分布があることから、C7類の由来を淡路島内に求めるならば、淡路島中部の花崗岩類の分布する山地内の谷の堆積物というような推定ができる。また、淡路島外でも同様な地質学的背景を有する地域として、背後の山地に泉南流紋岩と領家帯の花崗岩類が分布する大阪府の泉南地域の平野があげられる(栗本ほか， 1998)。現時点では、No.1の縄文土器の製作地域を限定することはできないが、淡路島内および泉南地域における縄文土器の胎土の分析事例を蓄積することにより、鉱物・岩石の量比の差や粒径組成などに両地域の胎土の違いが現れてくる可能性がある。

方形周溝墓から出土した弥生土器の試料では、広口壺の4点と細頸壺の1点はいずれもAl類に分類された。おそらく同一地域での製作を示唆していると考えられる。Al類の特徴である堆積岩類、凝灰岩、流

紋岩・デイサイト、花崗岩類について、それぞれ淡路島内の地質に由来を求めるならば、堆積岩類は和泉層群に、凝灰岩および流紋岩・デイサイトはこれも結晶質であることから上述した泉南流紋岩類に、花崗岩類は、斜長石がカリ長石よりやや多い傾向がみられ、角閃石を含む試料のあることから、島内中部や北部に分布する角閃石黒雲母花崗閃緑岩に、それぞれ求めることができる。ただし、これらの地質のうち、泉南流紋岩類は、上述した島内中部の山地と島内南西端の西路から志知川付近の山地に局所的に分布するに過ぎない。島内南西端には花崗岩類は分布しないことから、A1類の由来する地域としては、島内中部の山地を地質学的背景として、その南側に広がる低地を想定することができる。それに相当する低地は、冒頭で述べた三原川とその水系が形成した低地の北半部や山地を挟んで東側に広がる洲本低地などがあげられる。A1類とされた弥生土器は、これらの地域内で作製された可能性が高いと考えられる。より詳細な地域の絞り込みは今後の課題と言える。なお、神子曽遺跡の位置では、おそらく堆積物中の岩石片として花崗岩類や凝灰岩、流紋岩・デイサイトなどが混在する割合が極めて低いと考えられることから、A1類の胎土の土器についても、神子曽遺跡周辺の堆積物は材料として使用されていないと考えられる。

方形周溝墓から出土した弥生土器の試料の中で、直口壺とされた2点は、他の器種の弥生土器とは明瞭に異なる組成であるE2類に分類された。E2類の特徴としたホルンフェルスと粘板岩という2種類の岩石が特に広範に分布するような地質は、淡路島内に認められないことから、これら2点は、淡路島外からの搬入品である可能性が高いと考えられる。ホルンフェルスと粘板岩の由来する地質を淡路島周辺で考えるならば、紀伊半島中部から四国中部を横断する変成岩帯である三波川帯の可能性がある。ただし、E2類には、ホルンフェルスと粘板岩以外に、チャートや頁岩などの堆積岩類と花崗岩類も含まれている。これらの地質に由来するような砕屑物が混在する低地堆積物を想定しなければならないが、現時点では具体的な地域をあげることはできない。今後、これらの直口壷について、考古学上の分布域などの情報と合わせて、地域性を検討する必要があると考えられる。

土器棺から出土した土師器2点のうち、No.10の胎土はA1類に分類された。これについては、上述したA1類の弥生土器と同様の製作事情が考えられる。一方、No.9の胎土は、花崗岩類を主体とするC1類である。その鉱物組成は、斜長石が石英よりも多く、カリ長石は微量であり、角閃石を比較的多く含むという傾向を示している。この傾向からは、花崗岩類のなかでも角閃石石英閃緑石あるいはそれに類する花崗岩類に由来することが示唆される。前述した淡路島内に分布する花崗岩類のほとんどは、角閃石黒雲母花崗岩～花崗閃緑石であり、角閃石石英閃緑岩に類するような岩石の分布は認められない。このことから、C1類とされた土師器は、淡路島外からの搬入である可能性があると考えられる。角閃石石英閃緑岩あるいはそれに類する花崗岩類は、近畿地方に広く分布する領家帯の花崗岩類(淡路島の花崗岩類もそれに含まれるが)の中に産する岩石であるが、現時点では地域的な特定はできない。この土師器についても、考古学上の分布域などを考慮した分析事例の蓄積が必要と考えられる。

なお、胎土の粒径組成および砕屑物の割合については、土器の時期および鉱物・岩石組成の両者とほぼ同調していると言える。縄文土器の粒径組成は粗粒傾向の強い1類であり、弥生土器では、それよりもやや細粒傾向の2類と3類が中心となるが、E2類の胎土は粗粒傾向の強い1類となっている。土師器は、3類と4類に分類されており、弥生土器よりもさらに細粒傾向となっていることが窺える。これらの粒径組成の違いは、縄文土器、弥生土器、土師器という土器の種類の違いにおける材質の違いを客観的に示していると言うことができる。

引用文献

栗本史雄・牧本博・吉田史郎・高橋裕平・駒沢正夫,1998,「20万分の1地質図幅和歌山」,地質調査所

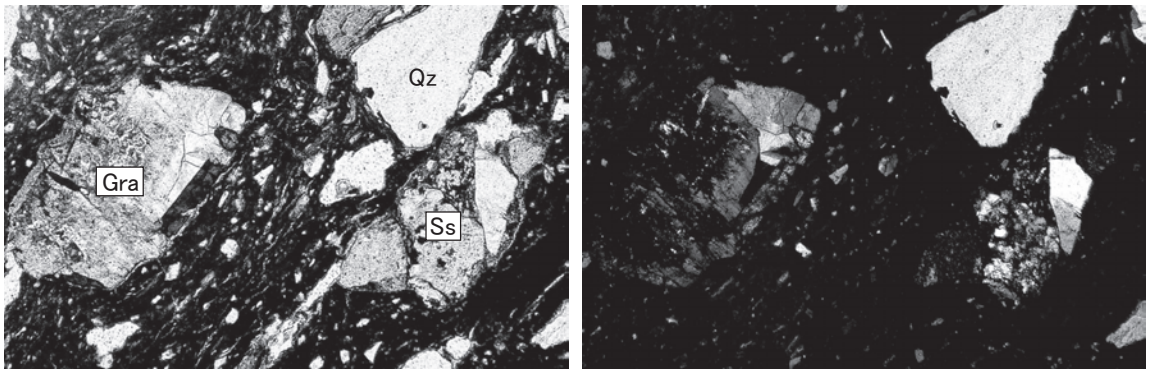
牧本博・利光誠一・高橋浩・水野清秀・駒澤正夫・志和龍一，1995,「20万分の1地質図幅徳島」,地質調査所

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高，1999,「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－」『日本文化財科学会第16回大会発表要旨集』120-121p.

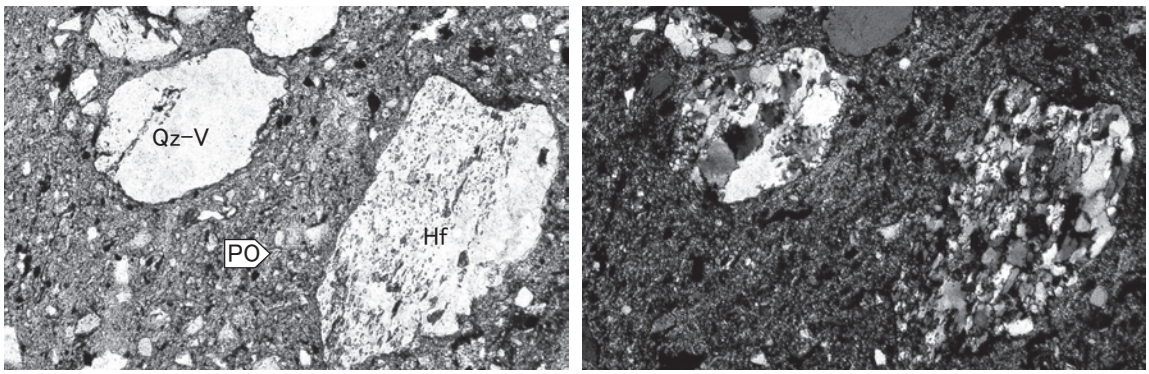
水野清秀・服部仁・寒川旭・高橋浩，1990,『明石地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1図幅)』90p，地質調査所

日本地質学会編，2009,『日本地方地質誌5 近畿地方』朝倉書店，453p.

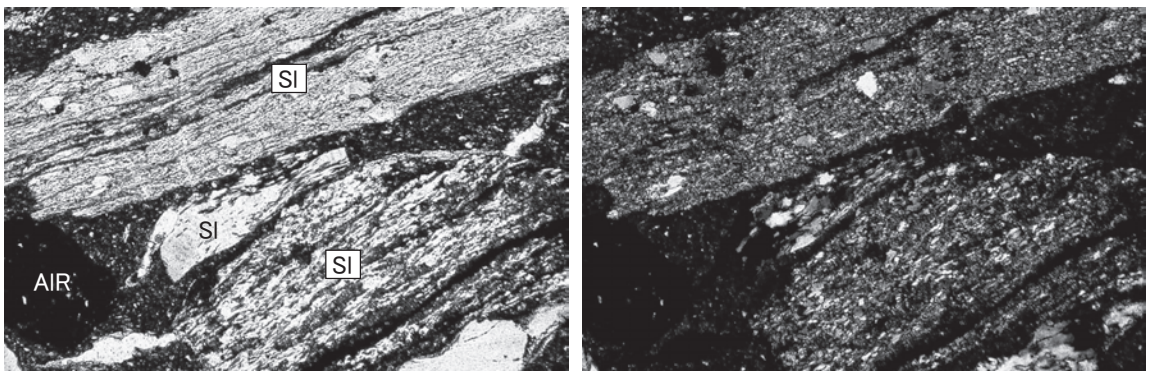
高橋浩・寒川旭・水野清秀・服部仁，1992,『洲本地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1図幅)』107p，地質調査所



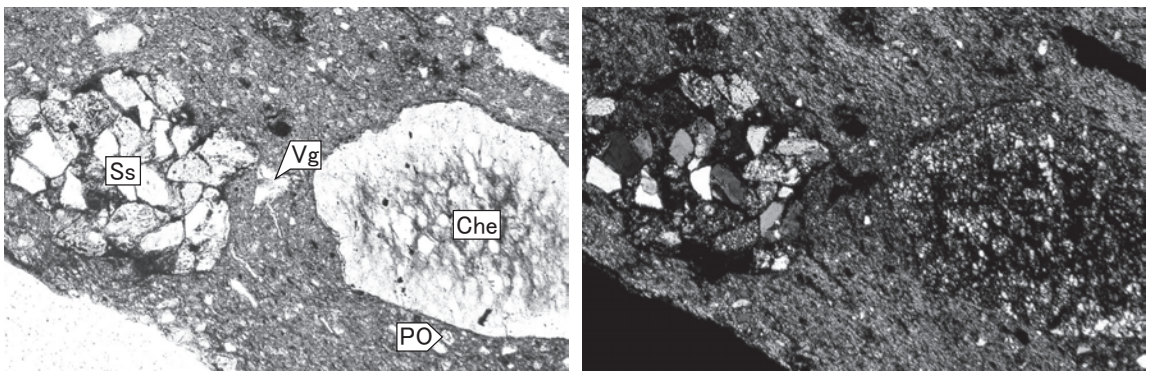
1.No.1　報№.16　縄文土器　深鉢　286　1区　土坑SK230　2005.01.21



2.No.2　報№.53　弥生土器　直口壺　329　1区　方形周溝墓SX207北周溝　2005.01.27



3.No.3　報№.64　弥生土器　直口壺　319　1区　方形周溝墓SX204西周溝　2005.01.27

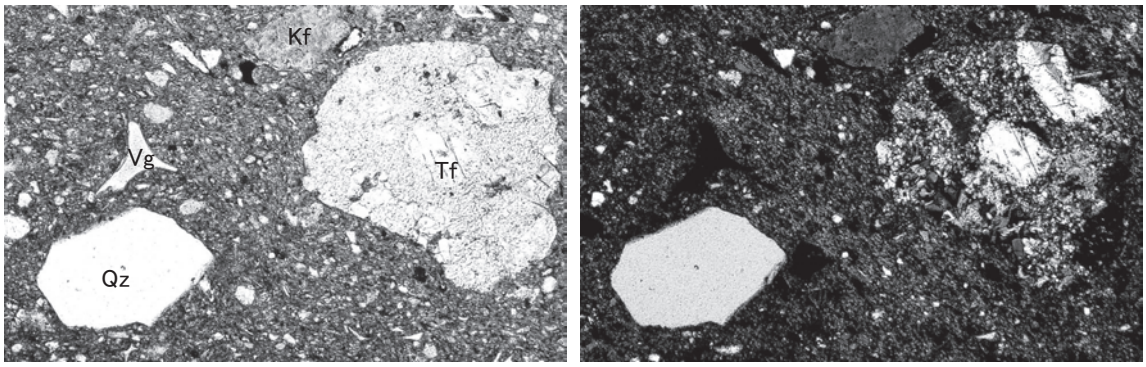


4.No.4　報№.76　弥生土器　広口壺　284　1区　方形周溝墓SX203東周溝　2005.01.21

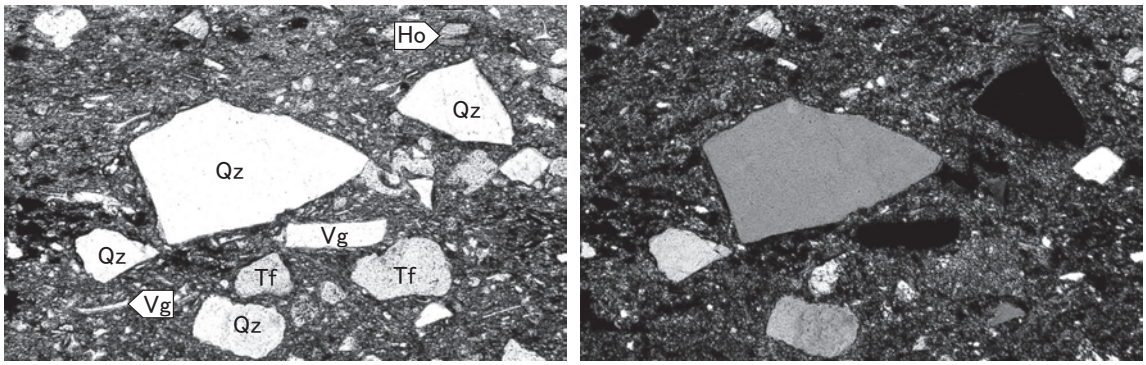
Qz:石英. Che:チャート. Ss:砂岩. Gra:花崗岩. Hf:ホルンフェルス. Sl:粘板岩.
Qz-V:脈石英. AIR:変質岩. Vg:火山ガラス. PO:植物珪酸体.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

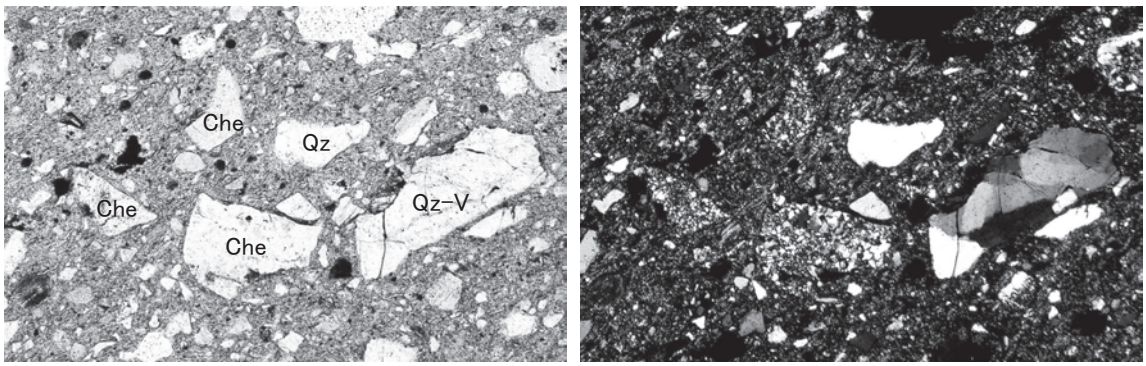
図14　胎土薄片(1)



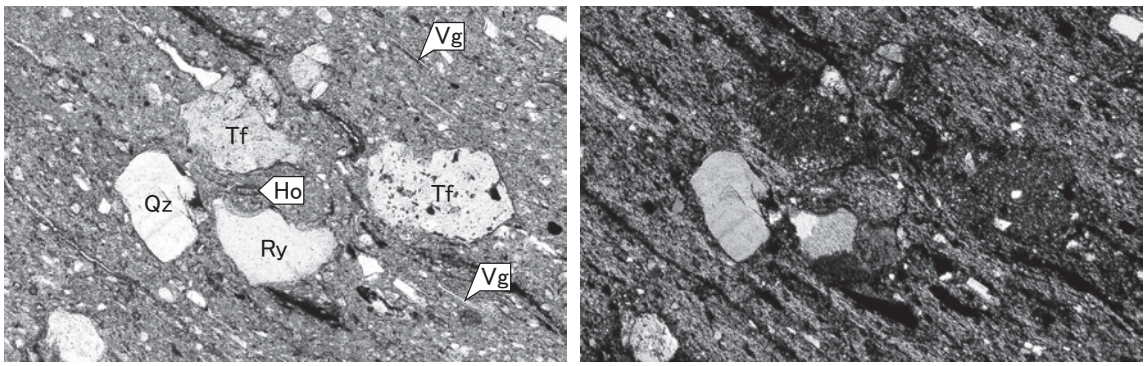
5.No.5　報№82　弥生土器　広口壺　466　1区　方形周溝墓SX212西周溝　2005.03.10



6.No.6　報№84　弥生土器　広口壺　466　1区　方形周溝墓SX212西周溝　2005.03.10



7.No.7　報№86　弥生土器　広口壺　466　1区　方形周溝墓SX212西周溝　2005.03.10

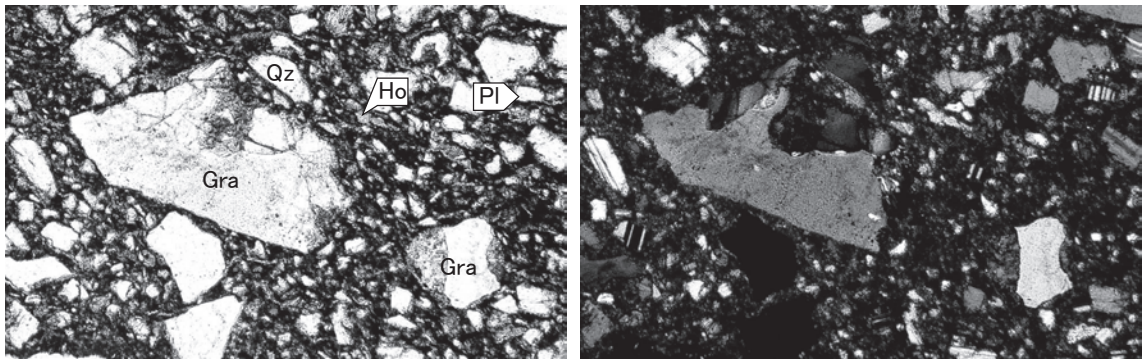


8.No.8　報№92　弥生土器　細頸壺　466　1区　方形周溝墓SX212西周溝　2005.03.10

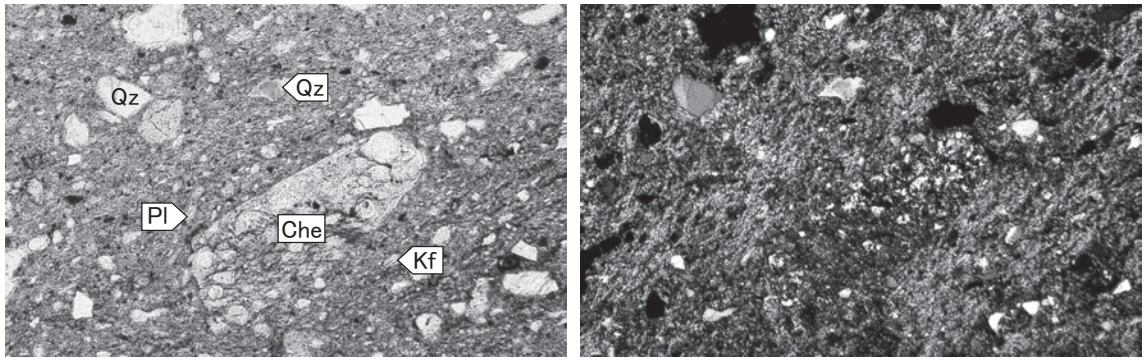
Qz:石英. Kf:カリ長石. Ho:角閃石. Che:チャート. Tf:凝灰岩. Ry:流紋岩.
Qz-V:脈石英. Vg:火山ガラス.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図15　胎土薄片(2)



9.No.9　報№106　土師器　広口壺　219　1区　土器棺SK213　2005.01.13



10.No.10　報№108　土師器　広口壺　290　1区　土器棺SK238　2005.01.21

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Che:チャート. Gra:花崗岩.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図16　胎土薄片(3)

第2節　神子曽遺跡出土サヌカイト製石器の産地推定

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

南あわじ市賀集鍛冶屋に所在する神子曽遺跡から出土した縄文時代中期のサヌカイト製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は神子曽遺跡より出土したサヌカイト製石器10点である（表19）。石器は風化層に覆われていたため、サンドブラストを用いて一部新鮮面を表出させ、測定箇所とした。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法としては、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法（例えば望月2004）を用い、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）とルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計7元素のX線強度（cps; count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

1）Rb分率=Rb強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）

2）Sr分率=Sr強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）

3）Mn強度×100/Fe強度

4）log（Fe強度/K強度）

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn 強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log（Fe強度/K強度）の判別図）を作成し、各地の原石データと石器のデータを照合して、産地を推定する方法である。原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で、分析対象の石器と同様の条件で測定した。表20に各原石の採取地とそれぞれの試料点数を示す。

表19　分析対象一覧

分析No.	ネーミングNo.	地区	遺構	器種	時期	出土年月日	備考
1	S83	1区	SK06	剥片	縄文時代中期	2004.12.20	
2	S92	1区	SK06	楔のスポール	縄文時代中期	2004.12.21	上部
3	S93	1区	SK06	剥片	縄文時代中期	2004.12.21	上部
4	S94	1区	SK06	剥片	縄文時代中期	2004.12.21	上部
5	S95	1区	SK06	剥片	縄文時代中期	2004.12.21	上部
6	S96	1区	SK06	剥片	縄文時代中期	2004.12.21	上部
7	S97	1区	SK06	楔	縄文時代中期	2004.12.21	上部
8	S99	1区	SK06	調整打面をもつ剥片	縄文時代中期	2004.12.21	上部
9	S127	1区	SK06	剥片	縄文時代中期	2004.12.27	
10	S128	1区	SK06	剥片	縄文時代中期	2004.12.27	

表20　原石採取地と判別群名称

エリア	判別群	原石採取地（試料点数）
二上山	春日山	春日山みかん畑内（10）
讃岐	国分台1	自衛隊演習場付近（5）、神谷神社前（13）、高産霊神社谷（12）、国分台下みかん畑（5）、蓮光寺（15）
	国分台2	
	国分台3	
	赤子谷･法印谷	赤子谷第1地点（5）、赤子谷第2地点（5）、法印谷（10）
	金山1	北峰道路脇（10）、金山南麓（10）
	金山2	
	城山	城山南側（5）、城山北側（5）
	雄山･雌山	雄山（5）、雌山（5）
	双子山	双子山南嶺（10）

3. 分析結果

表21に石器の測定値および算出された指標値を、図17と図18に、サヌカイト原石の判別図に石器の分析結果をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

測定した石器のうち、３点が国分台１、１点が国分台３、4点が金山１、１点が双子山の範囲およびその周辺にプロットされた。分析No. 2は合致する判別群がなく、不明であった。表21に産地推定結果を示す。比較対象となる原石産地が少なく、産地が推定できた試料でも他の産地の可能性が無いとは言い切れないが、試料は少なくとも判別図の一致しなかった産地のサヌカイトではないといえる。

表21　分析値および産地推定結果

分析No.	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	$\frac{Mn^{*}100}{Fe}$	Sr分率	$\log\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア
1	215.9	183.4	8226.5	511.6	1363.2	270.1	1596.8	13.67	2.23	36.43	1.58	金山1	讃岐
2	218.5	119.9	5829.6	449.0	1224.5	212.4	1239.2	14.37	2.06	39.18	1.43	不明	―
3	212.3	181.8	8163.6	523.3	1358.2	272.1	1608.9	13.91	2.23	36.10	1.58	金山1	讃岐
4	155.5	139.7	7308.0	351.3	1061.6	198.6	1158.8	12.68	1.91	38.32	1.67	双子山	讃岐
5	237.3	147.1	6626.6	636.8	1525.1	285.5	1715.1	15.30	2.22	36.64	1.45	国分台1	讃岐
6	199.0	172.6	7711.4	488.1	1284.3	254.5	1503.7	13.83	2.24	36.38	1.59	金山1	讃岐
7	250.0	163.0	7766.0	574.5	1561.8	270.1	1576.1	14.43	2.10	39.22	1.49	国分台3	讃岐
8	206.0	123.0	5600.3	523.5	1241.6	230.7	1379.4	15.51	2.20	36.79	1.43	国分台1	讃岐
9	224.9	140.5	6284.8	605.0	1455.4	274.0	1635.7	15.24	2.24	36.66	1.45	国分台1	讃岐
10	234.6	203.4	9252.1	567.8	1474.1	292.4	1727.8	13.98	2.20	36.29	1.60	金山1	讃岐

4. おわりに

神子曽遺跡より出土したサヌカイト製石器10点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、１点は不明であったが、残り9点は讃岐地方産の可能性が高いと推定された。

引用・参考文献

望月明彦(2004)「用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定」かながわ考古学財団編『用田大河内遺跡』:511-517，かながわ考古学財団

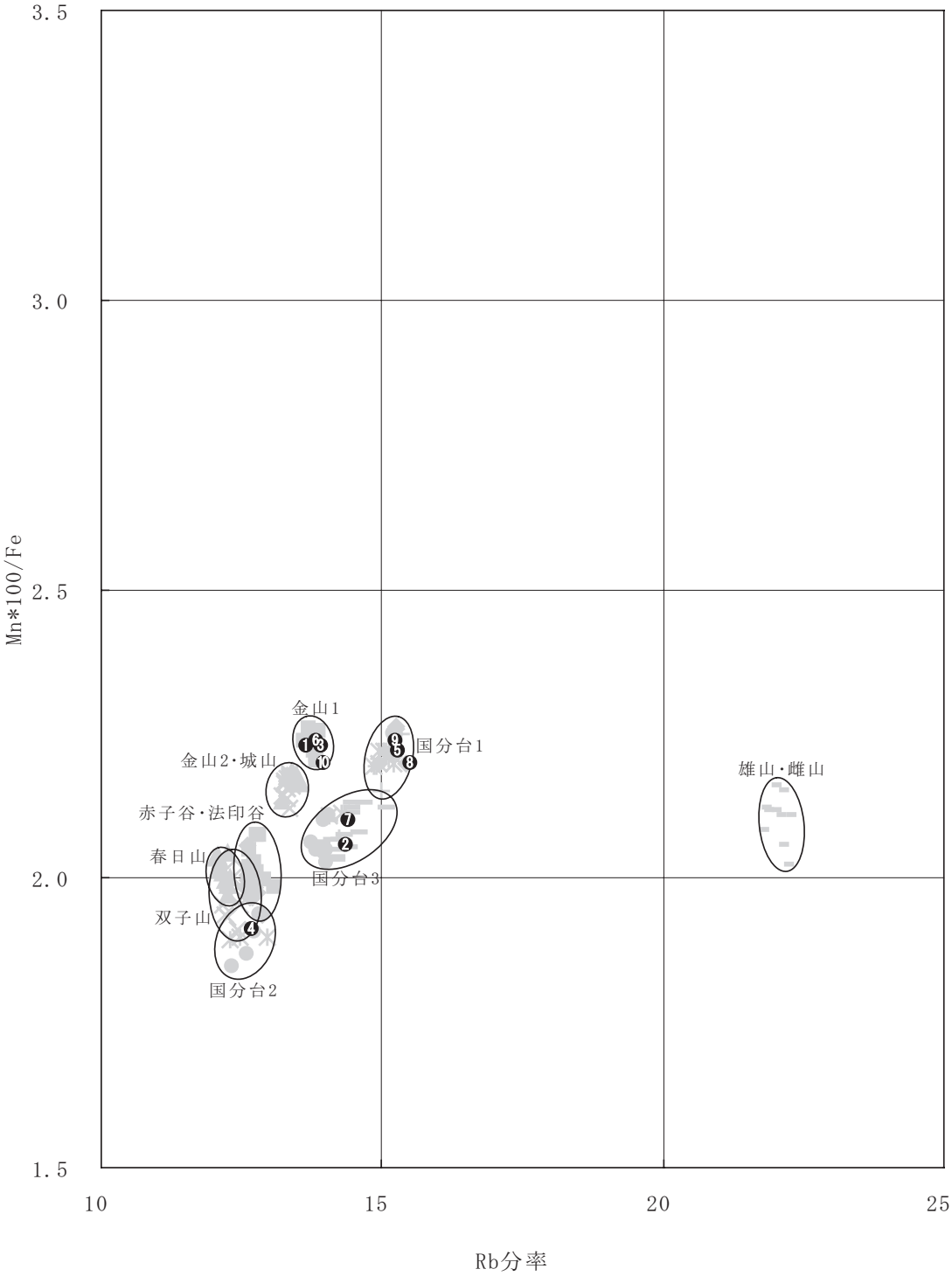


図17　サヌカイト産地推定判別図（1）

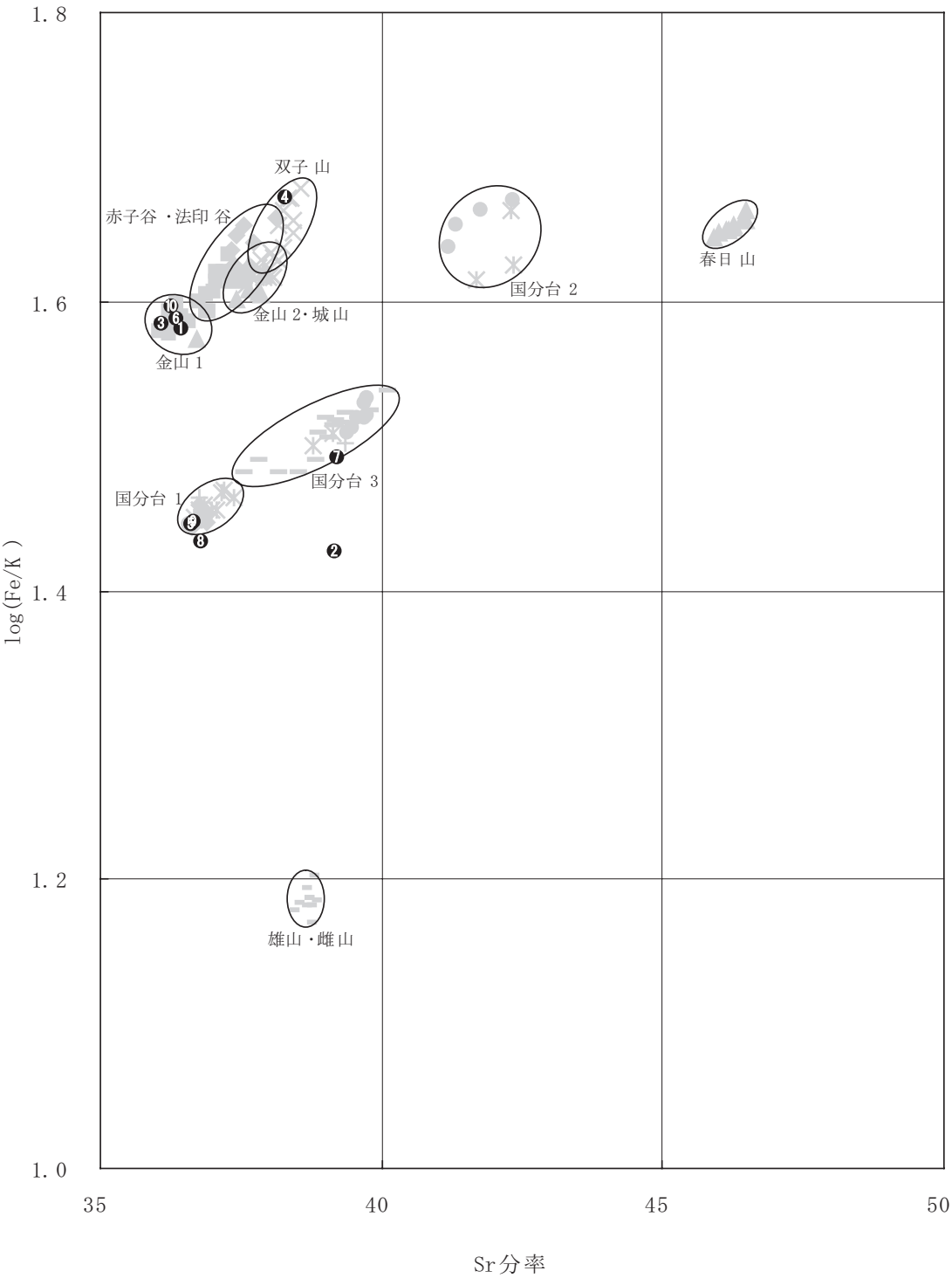


図18　サヌカイト産地推定判別図（2）

第3節　神子曽遺跡出土鉄滓の分析調査

九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤正己・鈴木瑞穂

1.いきさつ

神子曽遺跡は淡路島の南端部に近い、大白川上流の扇状地に位置する。発掘調査に伴い縄文～中世の複合遺跡が確認されている。1区からは中世(13世紀後半から14世紀前半)と推定される、長径約1.3m、深さ約0.6mの楕円状の土坑(SKI0)が検出された。その内部から鉄滓や羽口、焼石などの鍛冶関連遺物が多数出土している。遺跡周辺での鉄器製作の実態を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

2. 調査方法

2 -1.供試材

表22に示す。出土鉄滓4点の調査を行った。

表22 供試材の履歴と調査項目

符号	報告番号	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目							
					大きさ(㎜)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー
KMK-1	M40	1区SK10上層	椀形鍛冶滓	13c後半～14c前半	100×117×42	410.85	なし		○				○		
KMK-2	M45	1区SK10南半	椀形鍛冶滓		113×98×27	440.76	なし		○				○		
KMK-3	M24	1区SK10南半	椀形鍛冶滓		66×55×12	57.37	なし		○				○		
KMK-4	M49	1区P119	椀形鍛冶滓		74×68×15	124.96	なし		○				○		

2 -2. 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の外観上の特徴を簡単に記載した。この所見をもとに分析試料採取位置を決定している。

(2) 顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成、金属部の組織観察や非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μmと1μmで鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、写真撮影を行った。

(3) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO) : 容量法。

炭素(C)、硫黄(S)、:燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素(SiO_2)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K_2O)、酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO_2)、酸化クロム(Cr_2O_3)、五酸化燐(P_2O_5)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO_2): ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法: 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

KMK-1(M40):椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察:比較的大形(410.85g)で、やや偏平な椀形鍛冶滓である。側面1面が直線状の破面で約1/2

破片と推測される。また破面と反対側には椀状の円弧部分から一部突出して、木炭痕による凹凸が著しい流動状の滓部が観察できる。下面は全面細かい木炭痕による凹凸が目立つ。表面は広い範囲で茶褐色の鉄錆化物で覆われる。こうした部分は着磁性も強いが、特殊金属探知機での反応はない。滓部は暗灰色で着磁性はほとんどない。気孔も少なく緻密で重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織:図19① ～③に示す。①②上側の黒色～青灰色部は錆化鉄である。金属鉄組織痕跡は不明瞭であり、鉄中の炭素含有量等を推定するのは困難な状態であった。また①下側は滓部で、③はその拡大である。白色粒状結晶ウスタイト(Wustite:FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite:2FeO・SiO_2)が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(3) 化学組成分析:表23に示す。全鉄分(Total Fe)53.12%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.06%、酸化第1鉄(FeO) 50.29%、酸化第2鉄(Fe_2O_3) 19.97%の割合であった。造滓成分(SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O)24.01%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)1.27%と低い。また主に製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO_2)がO.19%、バナジウム(V) も0.01%と低値である。さらに酸化マンガン(MnO) は0.07%，銅(Cu)も＜0.01%と低値であった。

当鉄滓は鉄分(FeO)および炉材粘土の溶融物(SiO_2主成分)主体の鉄滓であった。製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分(TiO_2、V、MnO)の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

KMK-2(M45):椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察:比較的大形(440.76g)の椀形鍛冶滓である。やや厚手で完形に近い形状と推測される。上面は中央が窪んでおり、下面には一部灰褐色の鍛冶炉床土が付着する。また上下面とも細かい木炭痕による凹凸がみられる。表面は広い範囲で茶褐色の鉄錆化物で覆われる。こうした部分は着磁性も強いが、特殊金属探知機での反応はない。滓部は灰褐色で着磁性はほとんどない。緻密で重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織:図19④～⑥に示す。④左上の黒色部は、滓中に噛み込まれたごく小形の木炭破片である。木口面が観察される。年輪に沿って大導管が分布しており、広葉樹の環孔材と推定される。また④上側右は滓部で⑤はその拡大である。滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。一方④下側の黒色部は下面表層の鍛冶炉床土部分である。⑥はその拡大で、点在するごく微細な明白色粒は金属鉄、青灰色部は錆化鉄である。

(3) 化学組成分析:表23に示す。全鉄分(Total Fe)55.74%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.05%、酸化第1鉄(FeO)42.40%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)32.50%の割合であった。造滓成分(SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O)は17.02%と低めで、塩基性成分(CaO+MgO)も1.59%と低値である。また主に製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO_2)は0.15%、バナジウム(V)は0.01%と低値である。さらに酸化マンガン(MnO)も0.07%、銅(Cu)も＜0.01%と低値である。

当鉄滓もKMK-1(M40)とよく似た鉱物・化学組成であり、鍛錬鍛冶滓に分類される。

KMK-3(M24):椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察:ほぼ完形の小形で(57.37g)偏平な椀形鍛冶滓である。上面には黒色ガラス質滓が付着しており、羽口先端溶融物と推測される。下面には微細な灰褐色の鍛冶炉床土が僅かに付着する。また上下面ともごく小形の木炭痕による凹凸をもつ。表面は広い範囲で茶褐色の鉄錆化物で覆われ、着磁

性も強いが、特殊金属探知機での反応はない。滓部は黒灰色で比較的着磁性が強い。

(2)　顕微鏡組織:図20①～③に示す。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また①右下の暗色部は鍛冶炉床土の溶融物(ガラス質滓)で、内部には炉壁粘土内に混和された砂粒(石英・長石類)が点在する。③右側はその拡大である。

(3)　化学組成分析:表23に示す。全鉄分(Total Fe)45.44%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.07%、酸化第1鉄(FeO)46．41%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)13.29%の割合であった。造滓成分(SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O)36.19 %と高めであるが、塩基性成分(CaO+MgO)は2.34%と低めである。また製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO_2)は0.27%、バナジウム(V)は0.01%と低値であった。さらに酸化マンガン(MnO)も0.08%、銅(Cu)も＜0.01%と低い。

当鉄滓も製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分(TiO_2、V、MnO)の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。またKMK-1(M40)、KMK-2(M45)と比較すると、やや粘土溶融物(SiO_2主成分)の割合が高い滓であった。

KMK-4(M49):椀形鍛冶滓

(1)　肉眼観察:やや小形(124.96g)で、偏平な椀形鍛冶滓である。側面3面が破面。上面には部分的に黒色ガラス質滓が付着しており、羽口先端溶融物と推測される。また下面には一部灰褐色の鍛冶炉床土が付着する。上下面とも細かい木炭痕による凹凸がみられる。表面は広い範囲で茶褐色の鉄錆化物で覆われ、比較的着磁性も強いが、特殊金属探知機での反応はない。破面の気孔は少なく緻密である。

(2)　顕微鏡組織:図20④～⑥に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト、発達した淡灰色盤状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また滓中に散在する、ごく微細な明白色粒は金属鉄である。

(3)　化学組成分析:表23に示す。全鉄分(Total Fe)46.71%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.07%、酸化第1鉄(FeO)46.71%，酸化第2鉄(Fe_2O_3)14.77%の割合であった。造滓成分(Si+Al_2O_3+ CaO+MgO+K_2O+Na_2O)は33.56%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は3.67%とやや高めであった。また製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO_2)は0.21%、バナジウム(V)が0.01%と低い。さらに酸化マンガン(MnO)は0.07%、銅(Cu)も＜0.01%と低値であった。

当鉄滓もKMK-3(M24)とよく似た鉱物・化学組成であり、鍛錬鍛冶滓に分類される。

表23　供試材の化学組成

符号	報告番号	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metalic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	※ 二酸化珪素 (SiO_2)	※ 酸化アルミニウム (Al_2O_3)	※ 酸化カルシウム (CaO)	※ 酸化マグネシウム (MgO)	※ 酸化カリウム (K_2O)	※ 酸化ナトリウム (Na_2O)	※ 酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	Σ ※ 二酸化ジルコニウム (ZrO_2)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe
KMK-1	M40	1区 SK10 上層	椀形鍛冶滓	13c後半～14c前半	53.12	0.06	50.29	19.97	18.70	2.99	0.94	0.33	0.69	0.36	0.07	0.19	0.02	0.014	0.15	0.23	0.01	<0.01	<0.01	24.01	0.452	0.004
KMK-2	M45	1区 SK10 南半	椀形鍛冶滓		55.74	0.05	42.40	32.50	12.18	2.48	1.26	0.33	0.54	0.23	0.07	0.15	0.02	0.011	0.36	0.52	0.01	<0.01	<0.01	17.02	0.305	0.003
KMK-3	M24	1区 SK10 南半	椀形鍛冶滓		45.44	0.07	46.41	13.29	27.34	4.54	1.76	0.58	1.27	0.70	0.08	0.27	0.02	0.022	0.19	0.18	0.01	<0.01	<0.01	36.19	0.796	0.006
KMK-4	M49	1区 P119	椀形鍛冶滓		46.71	0.07	46.71	14.77	24.13	4.20	3.18	0.49	1.03	0.53	0.07	0.21	0.02	0.029	0.30	0.24	0.01	<0.01	<0.01	33.56	0.718	0.004

※は造滓成分

4. まとめ

神子曽遺跡から出土した中世(13世紀後半から14世紀前半)と推定される鉄滓のうち、今回調査を実施した鉄滓(椀形鍛冶滓)4点は、すべて鍛錬鍛冶滓に分類される。酸化物と炉材粘土または鍛接材(粘土汁・藁灰等)の溶融物(SiO_2主成分)主体の滓であり、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分(TiO_2、V、MnO)は低減傾向が著しい。

製鉄原料起源の不純物(製錬滓～精錬鍛冶滓)が除去され、ある程度鍛打成形された状態の鉄素材(軟鉄～鋼)、または廃鉄器(鍛造・鋳造)が鍛冶原料であり、熱間で鍛打加工して鉄器を製作していたものと推定される。

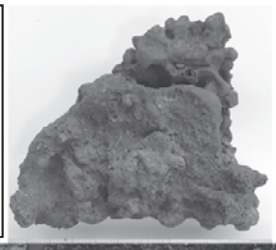
また椀形鍛冶滓KMK-2(M45)中の微細な木炭破片から、広葉樹の環孔材の黒炭を鍛冶炭に用いていたことも明らかとなった。

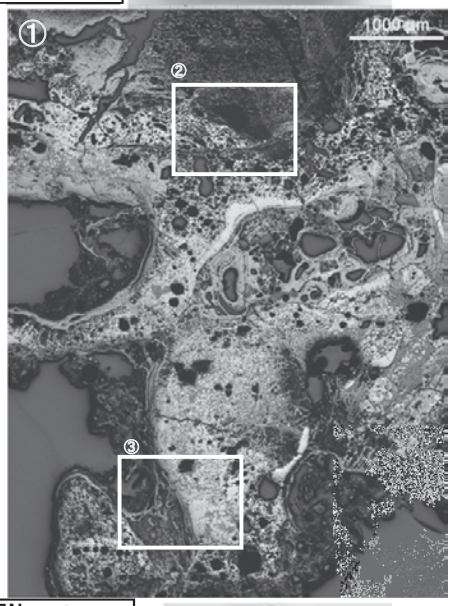
表24　出土遺物の調査結果のまとめ

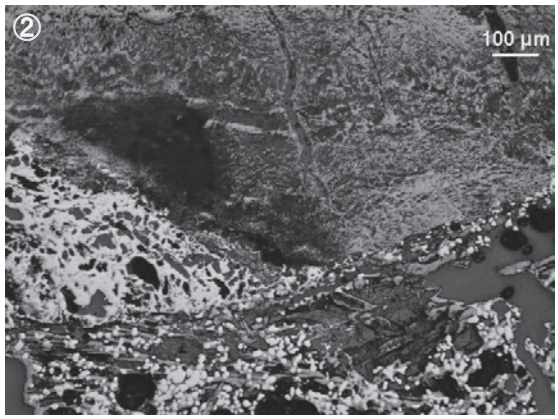
符号	報告番号	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	
KMK-1	M40	1区 SK10上層	椀形鍛冶滓	13c後半～14c前半	滓部:W+F、錆化鉄部:金属組織痕跡不明瞭	53.12	19.97	1.27	0.19	0.01	0.07	24.01	<0.01	鍛錬鍛冶滓
KMK-2	M45	1区 SK10南半	椀形鍛冶滓		滓部:W+F、木炭破片:広葉樹環孔材、鍛冶炉床土（微小金属鉄･錆化鉄散在）	55.74	32.50	1.59	0.15	0.01	0.07	17.02	<0.01	鍛錬鍛冶滓
KMK-3	M24	1区 SK10南半	椀形鍛冶滓		滓部:W+F、ｶﾞﾗｽ質滓（鍛冶炉床土溶融物、石英･長石粒散在）	45.44	13.29	2.34	0.27	0.01	0.08	36.19	<0.01	鍛錬鍛冶滓
KMK-4	M49	1区 P119	椀形鍛冶滓		滓部:W+F、微小金属鉄粒	46.71	14.77	3.67	0.21	0.01	0.07	33.56	<0.01	鍛錬鍛冶滓

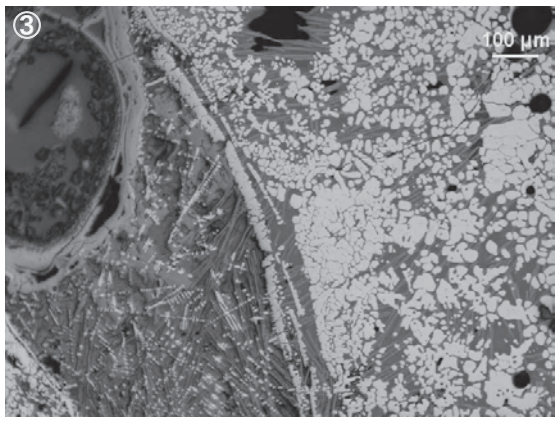
W:Wustite(FeO)、F:Fayalite($2FeO \cdot SiO_2$)

KMK-1　報No.M40
椀形鍛冶滓
①黒色～青灰色部:錆化鉄(金属組織痕跡不明瞭)滓部:ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ
②錆化鉄部拡大
③滓部拡大

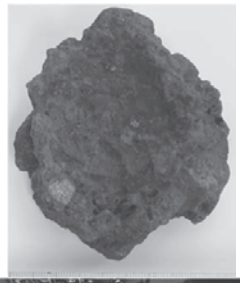


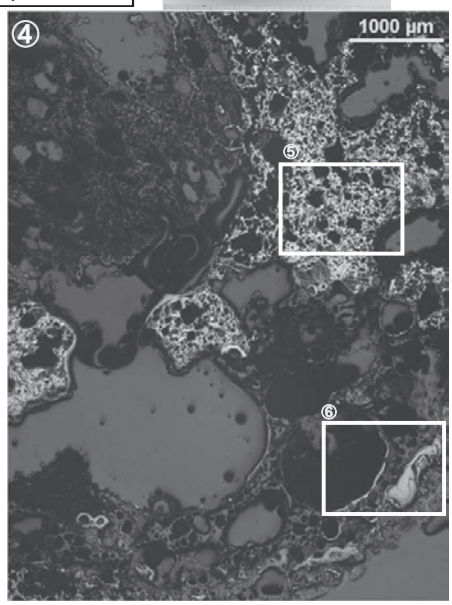


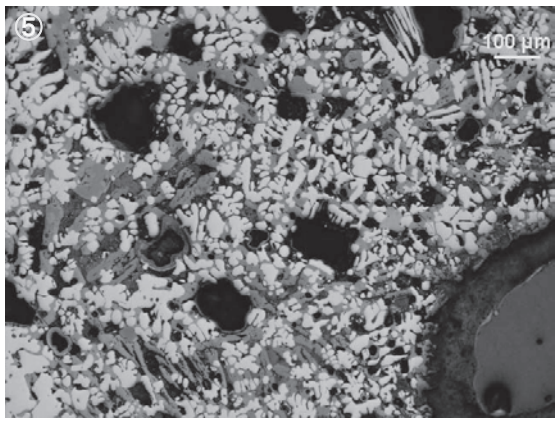




KMK-2　報No.M45
椀形鍛冶滓
④左上黒色部:木炭破片、広葉樹環孔材、滓部:ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ、炉床部:ｶﾞﾗｽ質滓、微小金属鉄･錆化鉄粒(金属組織痕跡不明瞭)
⑤滓部拡大、
⑥炉床部拡大







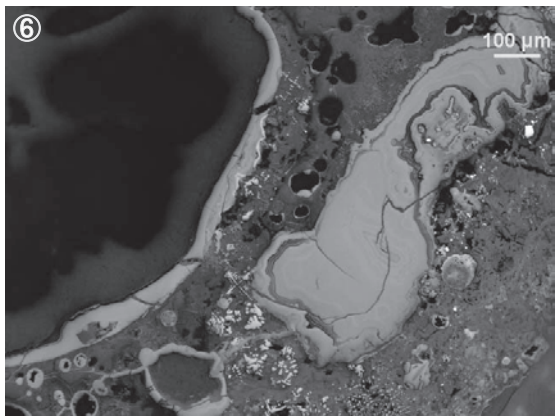


図19　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(1)

KMK-3　報No.M24
椀形鍛冶滓
①滓部:ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ、右下暗色部:ｶﾞﾗｽ質滓（鍛冶炉床土溶融物か）
②滓部拡大
③滓部およびｶﾞﾗｽ質滓（被熱砂粒混在）拡大

KMK-4　報No.M49
椀形鍛冶滓
④～⑥滓部:ｳｽﾀｲﾄ･ﾌｧﾔﾗｲﾄ、微小明白色粒:金属鉄、青灰色部:錆化鉄

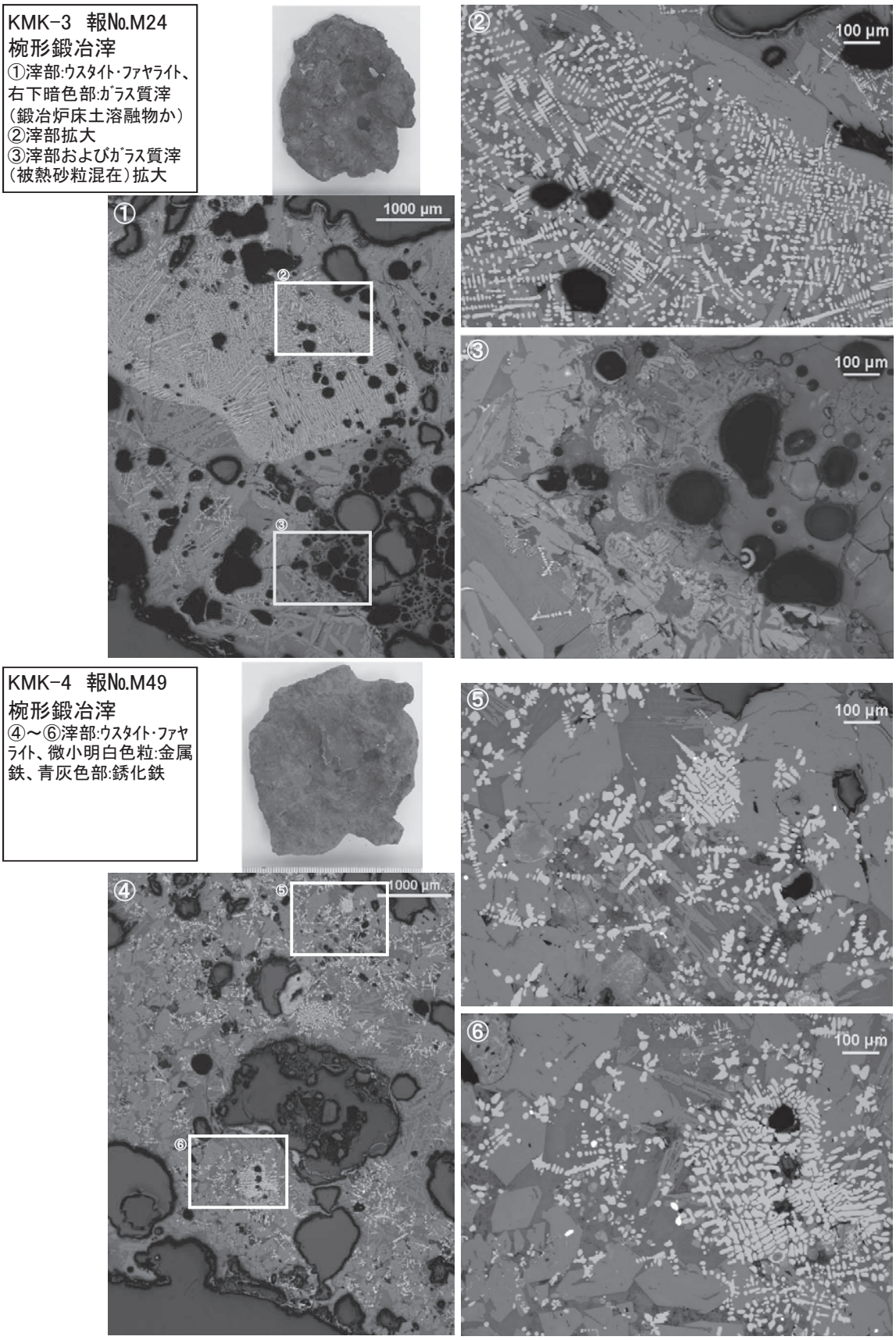


図20　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(2)

第4節　神子曽遺跡土壌洗い出し微細遺物の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、神子曽遺跡(南あわじ市賀集鍛冶屋)の発掘調査で検出された方形周溝墓の周溝堆積物を対象として、洗い出しによる種実遺体などの微細遺物の抽出と同定を実施する。

1．試料

試料は、神子曽遺跡の１区で検出された方形周溝墓の周溝より採取された土壌3点である(No.1～3)。No. 1は、SX212西周溝の下より15～30cm上、No. 2は、SX212西周溝の下より約15cm(最下層より若干上)で採取されており、黒褐色の粘土質シルトである。No. 3は、SD202の東壁断面より採取されており、黒褐色の極細粒砂～シルト主体で、黄灰褐色の砂質シルト質の土塊を含む。

2．分析方法

堆積物から種実遺体などを分離・抽出するために、試料200cc(364～372g)を水に浸して粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の水洗済試料をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定可能な種実遺体や炭化材(主に径4mm以上)、土器片などの遺物を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑類を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体を容器に入れ、約70%のエタノール溶液による液浸保存処理を施して返却する。炭化材は、常温乾燥後の重量と最大径を記録し、容器に入れて返却する。土器片は、個数と常温乾燥後の重量と径を記録し、容器に入れて返却する。分析残渣は、40℃48時間乾燥後の重量を記録し、チャック付ポリ袋に入れて保管する。

3．結果

結果を表25に示す。試料は細粒のため、殆どが粒径0.5mmの篩を通り抜けた。種実遺体は、No. 1から草本のカラムシ属の果実が１個検出された。その他に、炭化材がNo. 1から0.02g、No. 2、No. 3から0.01g未満が検出され、最大径はNo. 2で3.0mmを測る。土器片は、No. 3から１個(0.81g)検出され、径は1.8cmを測る。分析残渣は、砂礫主体で少量(1.8～3.5g)である。

表25　土壌洗い出し・種実同定結果

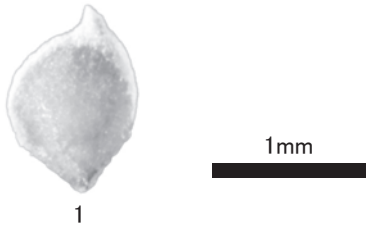
種類名	No.1 1区 SX212 西周溝 下より 15～30cm上	No.2 1区 SX212 西周溝 下より約15cm (最下層より若干上)	No.3 1区 SD202 東壁 断面より	備考
種実				
カラムシ属 果実	1	-	-	個数
炭化材	0.02 2.9	<0.01 3.0	<0.01 1.9	乾燥重量(g) 最大径(mm)
土器片	-	-	1	個数,0.81g,径1.8cm
分析残渣(砂礫主体)	3.5	1.8	3.5	乾燥重量(g)
分析量	200 364	200 372	200 366	容積(cc) 湿重(g)

種実遺体で確認されたカラムシ属は、山野の林内や林縁などに生育する草本である。以下に、形態的特徴を記す。

・カラムシ属(*Boehmeria*) イラクサ科

果実は灰褐色、長さ1.2mm、幅0.8mm、厚さ0.5mmのやや偏平な非対称広倒卵体。頂部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。

果皮表面は粗面。



1．カラムシ属 果実
(No.1;1区 SX212 西周溝
下より15～30cm上)

図21 種実遺体

4．考察

弥生時代中期とされている方形周溝墓の溝より採取された土壌試料の洗い出しの結果、SX212の西周溝から、カラムシ属の果実と炭化材、SD202から炭化材と土器片が確認された。カラムシ属は、山野の林内や林縁などに生育する草本である。当時の調査区周辺に生育していた可能性がある。各試料から微量ながら確認された炭化材は、当時の本遺跡周辺域の森林に生育していた樹種に由来すると推定される。

引用文献

石川茂雄，1994，『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志，2000，『日本植物種子図鑑』東北大学出版会，642p.

第５節　才門（さいかど）遺跡、石田遺跡、及び神子曽（みこそ）遺跡の地形環境

青　木　哲　哉（立命館大学非常勤講師）

１．はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復原し、その変化を辿ることができる。しかも、堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復原された地形環境の時期はそれを通して明確にすることが可能となる。同時に調査区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも考察できるのである。

本稿では、才門遺跡、石田遺跡、及び神子曽遺跡における地形環境を明らかにし、それと人間活動との関係について考察したい。調査では、3遺跡の調査区付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、20,000の1空中写真を判読し、調査区周辺の地形面を区分するとともに、5,000分の1空中写真の判読と現地踏査によって調査区付近における微地形の分類を行った。堆積物に関しては、主に調査区での地質断面を詳細に観察した。堆積物の観察は、遺構検出面より上位だけでなく、才門遺跡、石田遺跡１区・２区、ならびに神子曽遺跡2区・３区・８区・９区において掘削したトレンチ断面で遺構検出面以深についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査地区付近における地形環境、及びそれと人間活動との係わりを考察した。

２．調査区付近の地形分布

(1) 調査区周辺の地形面について

才門遺跡、石田遺跡、及び神子曽遺跡の調査区は淡路島南西部にみられる三原平野の南部に位置する。調査区の東には大日川が北西へ流れ、西にはその支流である山路川が北流している。調査区はこれらの河川上流部に形成された平野に位置し、それは東、南、ならびに西の三方を標高200～300mの山地に囲まれる。そこでの平野は約3km四方の小規模なもので、独立丘陵が数ヶ所に散在する。調査区の北側にみられる淳仁天皇陵はこうした独立丘陵を利用してつくられたものである。

調査区が位置する平野には、完新世段丘、現氾濫原、及び支流性扇状地が認められる（図22）。これらの特徴は次のとおりである。

〔完新世段丘〕　この段丘は、平野の多くを占め、最もよく発達している。これは大日川などによって形成された扇状地が段丘化したもので、段丘面のほとんどは北西または西へ傾斜する。段丘崖は、大日川と山路川に沿ってみられ、50cm～1mの比高をもつ。才門遺跡、石田遺跡、及び神子曽遺跡の調査区はともにこのような完新世段丘に位置する。

〔現氾濫原〕　これは最も低い地形面で、洪水による冠水の危険性が高い。この地形面は大日川と山路

図22　調査区周辺の地形分類図

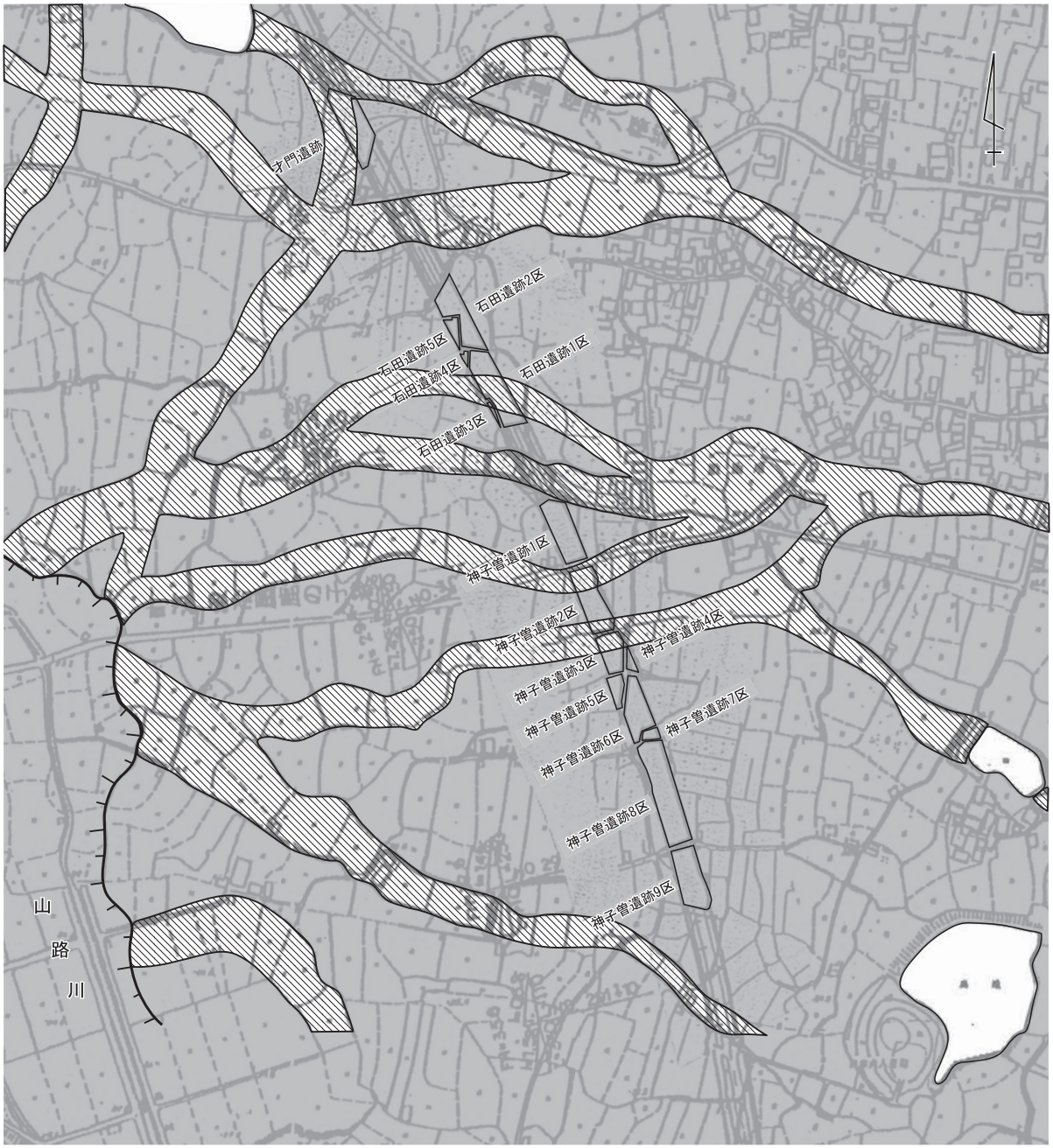


図23　調査区付近の完新世段丘における微地形分布

川に沿って分布し、そこには扇状地が発達する。幅は大日川沿いで200～300m、山路川沿いで150m以下しかなく、狭長である。

〔支流性扇状地〕　この扇状地は山麓に点々と認められる。これらは、背後の山地から堆積物が供給されてできたもので、山地を刻む谷の中から発達する。それぞれは小規模で、地表傾斜が10～20％と急である。これらは、完新世段丘と傾斜変換線で接し、現氾濫原とは比高数十cmの崖で境される。調査区の近辺では、とくに西側の山麓に多くみられる。

(2) 調査区付近の微地形について

調査区が位置する完新世段丘には、埋没した扇状地が認められる。調査区付近では、扇状地の多くが大日川によって形成されたものであり、地表が西または北西へ傾斜する。ただし、才門遺跡の西側では地表が北北西へ高度を下げており、そこでの扇状地形成には山路川も関与したことが知られる。調査区付近には、このような埋没扇状地が存在するため、扇状地の微地形にあたる旧中州と旧河道が埋没した状態で認められる（図23）。各遺跡の調査区付近では、次のように微地形が分布する。

〔才門遺跡〕　埋没旧中州が調査区の南東部に分布し、それ以外の範囲には埋没旧河道がみられる。埋没旧中州は東から発達する小規模なもので、調査区南東部はその末端に位置する。埋没旧河道は、山路川の流路跡にあたり、調査区を南から北へやや屈曲して延びる。調査区では、居住や墓に係わる遺構が認められず、奈良時代の溝とそれより古い時期の流路跡が検出されている。この流路跡は、埋没している旧河道の上にみられ、それとほぼ同じ方向に延びる。これは浅く、旧河道の埋没後にそれに沿って形成されたものである。

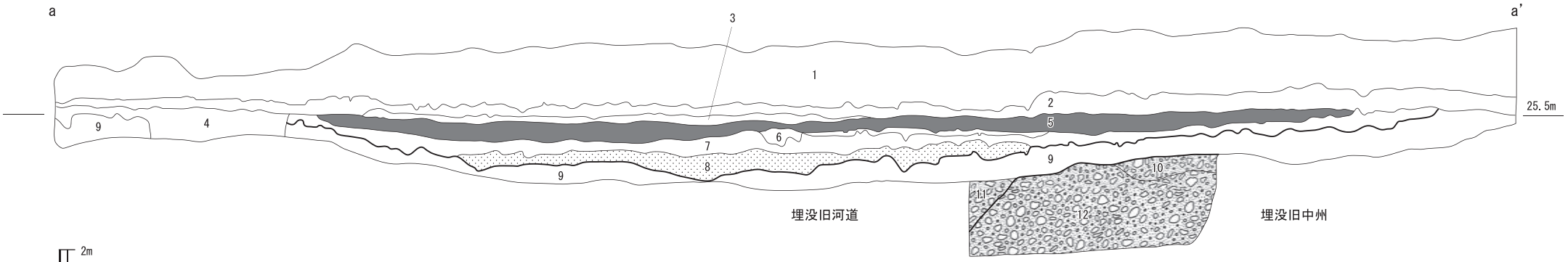
〔石田遺跡〕　埋没旧中州が2区から１区の北端にかけてと１区の南端に分布する。これらのうち１区の北端から２区に分布する埋没旧中州上は、東西に延びる比較的大規模なもので、上面はほぼ西へ高度を下げる。そこでは、主に８世紀の掘立柱建物跡が2棟と土坑が数基検出されている。埋没旧河道は１区の中央付近を東から西へ横断する。これは大日川の流路跡にあたる。これと同様の埋没旧河道は、才門遺跡の調査区と石田遺跡2区の間、及び石田遺跡１区と神子曽遺跡１区の間にも認められる。

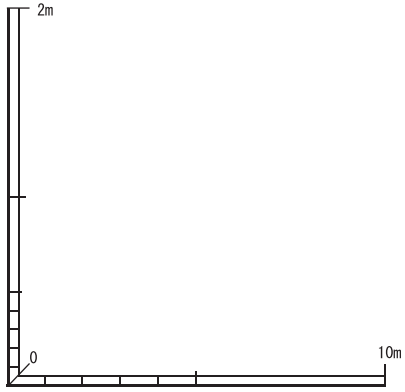
〔神子曽遺跡〕　埋没旧中州が1区、2区中央部、及び３区南半部から９区にかけてみられる。これらは、それぞれ東から西へ長く延び、同方向へ傾斜する。１区の埋没旧中州上では、縄文時代中期の土坑、弥生時代中期の方形周溝墓群と竪穴住居跡、８世紀の掘立柱建物跡、ならびに14～15世紀の掘立柱建物跡と鍛冶関連遺構などが検出されている。また、３区南半部から９区に分布する埋没旧中州上では、６区で弥生時代中期の方形周溝墓群と8世紀と推定される掘立柱建物跡、８区で弥生時代中期の方形周溝墓と8～9世紀の掘立柱建物跡、９区で8世紀と推定される土坑が認められる。そこでは、他にも時期の特定できない掘立柱建物跡が3区と５区で検出されている。埋没旧河道は２区北部と２区南部から３区北部にみられる。これらは、石田遺跡と同様で東から西へ延びる大日川の流路跡に相当する。

３．調査区における堆積物の特徴

(1) 才門遺跡の堆積物について

調査区では、基本的に砂礫とその上位に位置する細粒堆積物が観察される（図24）。砂礫は、旧中州堆積物に相当し、暗灰色の砂礫（図24の堆積物12）と黄褐色のシルト質砂礫（同図の堆積物10）に分けられる。下位に位置する暗灰色の砂礫（同図の堆積物12）は60cm以上の厚さをもつ。礫は径1～9cmの亜角礫～亜円礫を主体とする。黄褐色のシルト質砂礫（同図の堆積物10）はこれを約10cmの厚さで覆

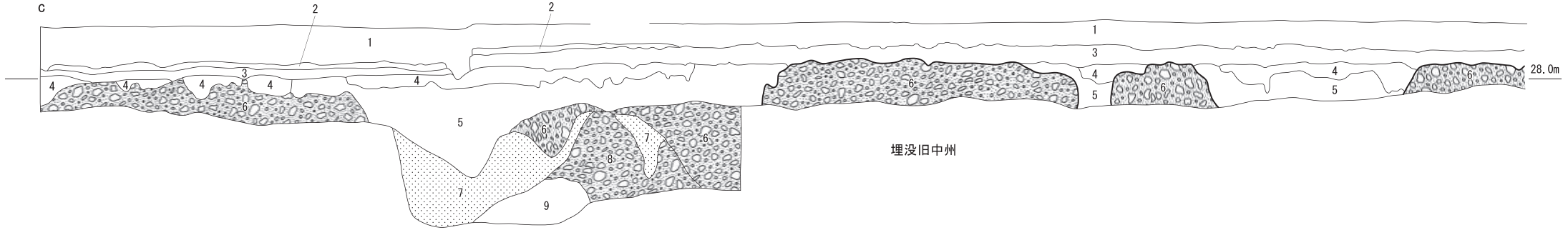


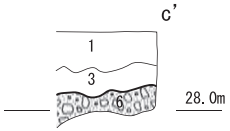


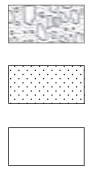
砂礫・シルト質砂礫
シルト質砂
砂質シルト・シルト
黒褐色のシルト

1．耕土
2．黄灰色　シルト:砂が若干混入
3．褐灰色　シルト:砂が若干混入
4．暗灰色　シルト:明黄褐色のマッドボールが多数混入
5．黒褐色　シルト
6．黄灰色　砂質シルト
7．黄灰色　砂質シルト
8．灰黄食　シルト質砂
9．にぶい黄色　砂質シルト
10．黄褐色　シルト質砂礫:径5～12cmの亜角礫～亜円礫主体
11．暗黄灰色　シルト質砂礫:径3～8cmの亜円礫主体
12．暗灰色　砂礫:径1～9cmの亜角礫～亜円礫主体

図24　才門遺跡における地質断面図







1．耕土
2．黄灰色　シルト:砂が若干混入
3．明黄灰色　シルト:砂が若干混入
4．灰黄色　シルト:砂が若干混入
5．にぶい黄色　砂質シルト
6．暗灰色　砂礫:径3～15cmの亜角礫～亜円礫主体
7．暗灰色砂　砂
8．暗灰色　砂礫:径4～15cmの亜角礫～亜円礫主体
9．黄灰色　砂質シルト

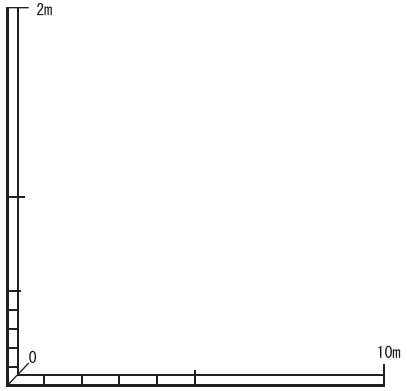
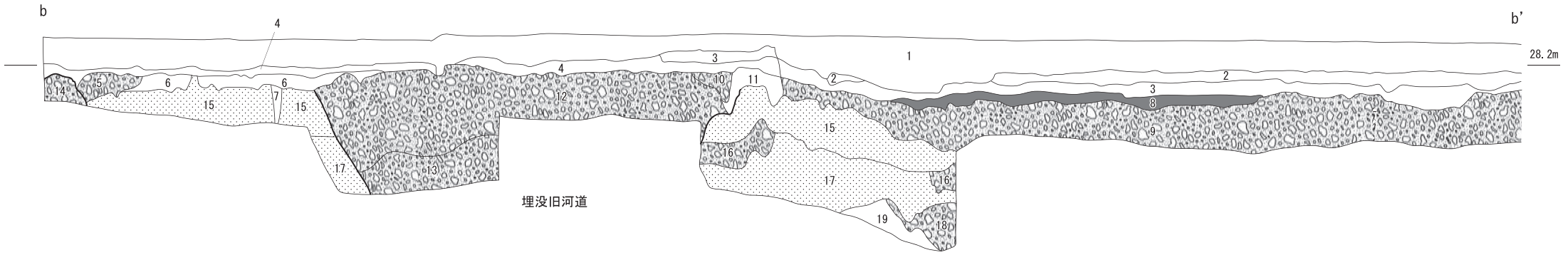
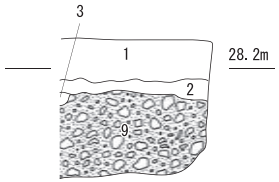
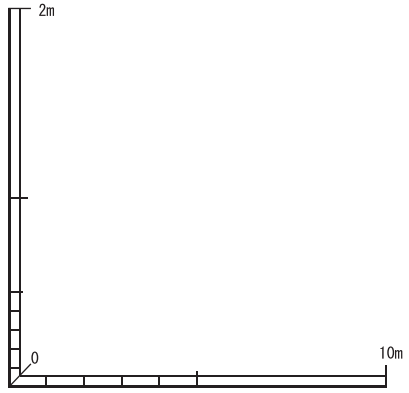
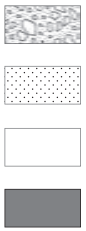


図25　石田遺跡2区における地質断面図









1．耕土
2．暗灰黄色　シルト
3．灰黄色　砂質シルト
4．明黄灰色　シルト:砂が若干混入
5．黄灰色　シルト質砂礫:径5～12cmの亜角礫～亜円礫主体
6．灰黄色　シルト:砂が若干混入
7．暗灰黄色　シルト(遺構埋土)
8．黒褐色　砂質シルト
9．褐灰色　シルト質砂礫:径1～5cmの亜角礫～亜円礫主体
10．褐灰色　シルト質砂礫:径3cm以下の亜角礫～亜円礫主体
11．灰黄色　シルト:砂が若干混入
12．黄灰色　シルト質砂礫:径3～19cmの亜角礫～亜円礫主体
13．褐色　砂礫:径6～13cmの亜角礫～亜円礫主体
14．褐灰色　シルト質砂礫:径10cm以下の亜角礫～亜円礫主体
15．にぶい黄色　シルト質砂
16．黄灰色　シルト質砂礫:径3～6cmの亜角礫～亜円礫主体
17．黄灰色　シルト質砂
18．灰色　シルト質砂礫:径3～8cmの亜角礫～亜円礫主体
19．灰色　砂質シルト

図26　石田遺跡1区における地質断面図

い、主体となる礫は5～12cmの亜角礫～亜円礫である。

砂礫の上位にみられる細粒堆積物はにぶい黄色の砂質シルト（同図の堆積物9）と黄灰色のシルト（同図の堆積物2）に細分される。これらはともによく連続し、20～30cmの厚さで旧中州堆積物を覆う。黄灰色のシルト（同図の堆積物2）下面からは８世紀の溝などが検出されている。

調査区に分布する埋没旧河道は、おおむね同じ位置に上下2本認められる。これらはそれぞれ暗灰色の砂礫（同図の堆積物12）とにぶい黄色の砂質シルト（同図の堆積物9）を切る。暗灰色の砂礫（同図の堆積物12）を切る旧河道は扇状地形成期の流路跡に該当する。これは山路川の流路跡で、旧河道堆積物は暗黄灰色のシルト質砂礫（同図の堆積物11）である。ただし、その一部がトレンチ断面で観察されるだけであるため、規模については明らかでない。他方、にぶい黄色の砂質シルト（同図の堆積物9）を切る旧河道は、13m以上の幅に対して深さが約40cmの浅い流路跡にあたる。旧河道堆積物は下位から灰黄色のシルト質砂（同図の堆積物8）、黄灰色の砂質シルト（同図の堆積物6・7）、及び黒褐色のシルト（同図の堆積物5）である。各堆積物は数cm～十数cmの厚さでみられ、とくに黒褐色のシルトは低湿な環境下で生成された土壌に相当する。

(2) 石田遺跡の堆積物について

１区と２区における堆積物は主に砂礫とそれを覆う細粒堆積物である（図25・図26）。砂礫は、旧中州堆積物にあたり、上面が２区南端から1区にかけて高くなる。これは暗灰色を呈する2つの砂礫に細分される。下位の砂礫（図25の堆積物8）は主に径4～15cmの亜角礫～亜円礫、また上位の砂礫（図25の堆積物6、図26の堆積物14）はそれよりやや小さい径3～15cmの亜角礫～亜円礫からなる。砂礫の間には、暗黄灰色の砂（図25の堆積物7）がレンズ状に挟まれる。

細粒堆積物は5～20cmの厚さで旧中州堆積物を被覆する。これは下位からにぶい黄色の砂質シルト（図25の堆積物5）、灰黄色のシルト（図25の堆積物4）、明黄灰色のシルト（図25の堆積物3、図26の堆積物4）、灰黄色の砂質シルト（図26の堆積物3）、ならびに黄灰色～暗黄灰色のシルト（図25の堆積物2、図26の堆積物2）に分けられる。これらのうち、下部にみられるにぶい黄色の砂質シルト（図25の堆積物5）と灰黄色のシルト（図25の堆積物4）は旧中州の上面が低い箇所に分布し、明黄灰色のシルト（図25の堆積物3、図26の堆積物4）は旧中州上を比較的連続して認められる。灰黄色のシルト（図25の堆積物4）上面では、8世紀の掘立柱建物跡や土坑などが検出されている。

なお、１区で観察される灰色の砂質シルト（図26の堆積物19）、灰色のシルト質砂礫（図26の堆積物18）、黄灰色のシルト質砂（図26の堆積物17）、黄灰色のシルト質砂礫（図26の堆積物16）、にぶい黄色のシルト質砂（図26の堆積物15）、褐灰色のシルト質砂礫（図26の堆積物9）、及び黒褐色の砂質シルト（図26の堆積物8）は旧河道堆積物である可能性が高い。ただし、その詳細は不明である。

１区の中央部を東西に通過する埋没旧河道は、このような堆積物のうちにぶい黄色のシルト質砂（図26の堆積物15）を切る。これは大日川の流路跡にあたり、約16mの幅と1m以上の深さをもつ。旧河道堆積物は褐色の砂礫とその上位に位置する黄灰色のシルト質砂礫で、それぞれ径6～13cmと3～19cmの亜角礫～亜円礫を主体とする。

(3) 神子曽遺跡の堆積物について

１区から９区では、基本的に砂礫とその上位に位置する細粒堆積物が認められる。砂礫は旧中州堆積物に該当する。その上面は、2区中央部と3区南半部から9区にかけて高く、現地表下5～40cmにみられる。砂礫は1m以上の厚さで観察され、さらに細かく分けられる。間には、シルト質砂や砂質シルトな

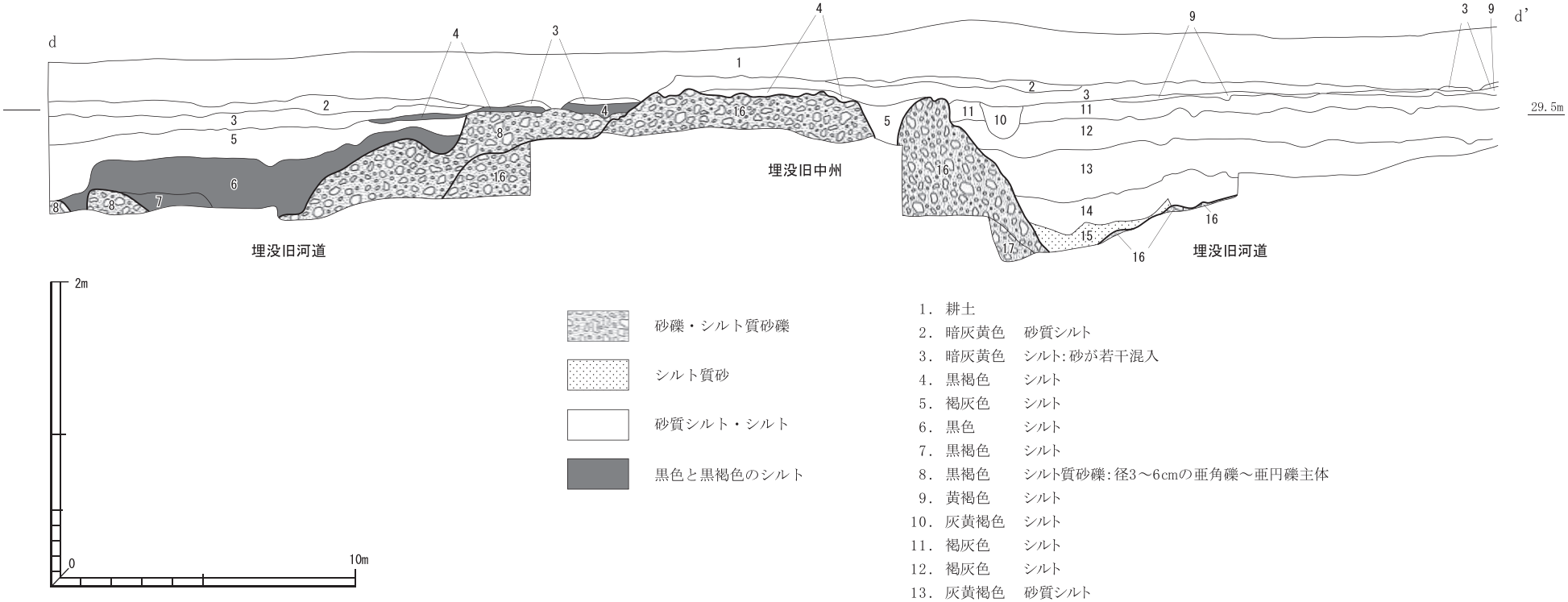


図27　神子曽遺跡2区における地質断面図

どを挟むことが多い。

２区と３区では、この砂礫が暗褐灰色や暗黄灰色の砂礫（図27の堆積物17、図28の堆積物15）とその上にのる黒灰色や暗黄灰色のシルト質砂礫（図27の堆積物16、図28の堆積物14）に細分される。これらのうち、3区の最下位でみられる暗黄灰色の砂礫（図28の堆積物15）は径5～27cmの比較的大きい亜角礫～亜円礫を主体とし、２区と３区のシルト質砂礫（図27の堆積物16、図28の堆積物14）は径4～12cm程度の亜角礫～亜円礫からなる。３区では、砂礫とシルト質砂礫の間に黄灰色の砂質シルトがレンズ状に挟まれる。

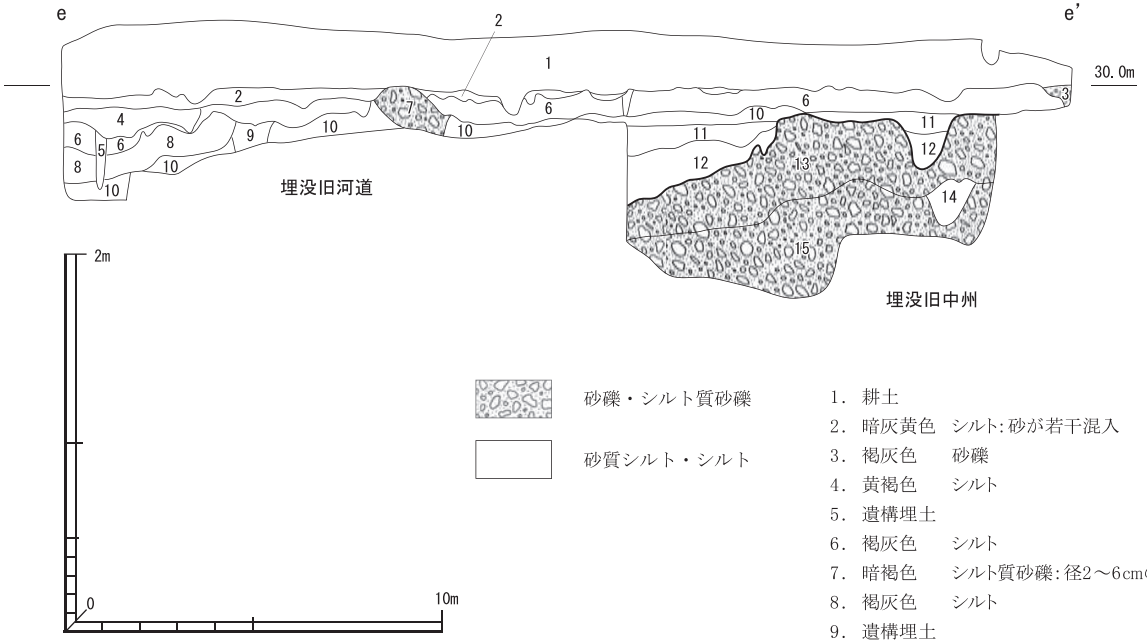
８区と９区における砂礫はそれぞれ6つ及び2つに分けられる（図29・図30）。これらの調査区でも、3区と同様の傾向が2つ認められる。一つは下部の砂礫（図29の堆積物24・26）やシルト質砂礫（図30の堆積物12）が径5～25cmくらいの大きい礫によって構成されることで、他のひとつは最上部に暗褐色や灰色のシルト質砂礫がみられることである。最上部のシルト質砂礫は径2～13cm程度の亜角礫～亜円礫を主体とする。こうした砂礫やシルト質砂礫の間には、黄灰色や暗黄灰色などのシルト質砂、砂質シルト、ならびにシルトが挟まれる。これらは、２区と３区に比して厚く、最大で30cmの厚さを有する。なお、神子曽遺跡9区では旧中州堆積物の下位に非常によく締まった堆積物（図30の堆積物13～18）が観察される。これらは大阪層群に相当する堆積物と考えられる。

細粒堆積物は、5～80cmの厚さで砂礫を覆い、砂質シルトとシルトなどに細分される。１区で観察される細粒堆積物は、下位から黄灰色の砂質シルト、黒色のシルト、黒褐色のシルト、暗灰黄色のシルト、ならびに黄褐色のシルトである。これらのうち、黄褐色の砂質シルトと黒色のシルトは比較的よく連続する。黒色のシルトは土壌化が著しく進んでおり、下面からは縄文時代中期の土坑や弥生時代中期の掘立柱建物跡と方形周溝墓、8世紀の掘立柱建物跡が検出されている。また、その上面では14～15世紀の掘立柱建物跡と鍛冶関連遺構が認められる。

２区と３区の細粒堆積物は下位から褐灰色のシルト（図28の堆積物6）、黄褐色のシルト（図27の堆積物9、図28の堆積物4）、暗灰黄色のシルト（図27の堆積物3、図28の堆積物2）、及び暗灰黄色の砂質シルト（図27の堆積物2）である。中でも、黄褐色のシルト（図27の堆積物9、図28の堆積物4）と暗灰黄色のシルト（図27の堆積物3、図28の堆積物2）は連続性が比較的よい。３区では、暗灰黄色のシルト（図27の堆積物3、図28の堆積物2）下面で時期不明の掘立柱建物跡が検出されている。

８区と９区では、細粒堆積物がそれぞれ4～6つに分けられる。これらのうち、8区でみられる黄灰色や暗褐灰色の砂質シルト（図29の堆積物12・13・15）と暗黄褐色のシルト（図29の堆積物14）、ならびに9区における黄灰色と灰色のシルト（図30の堆積物6・7）は、細粒堆積物の下部に位置するもので、旧中州上面の低い箇所に堆積する。対照的に、細粒堆積物の上部にみられる暗黄灰色のシルト（図29の堆積物4・図30の堆積物3）は比較的広範囲で観察される。８区では、このシルトの下位に位置する黒褐色のシルト（図29の堆積物5）下面で弥生時代中期の方形周溝墓と8～9世紀の掘立柱建物跡が認められる。また9区では、暗黄灰色のシルト（図30の堆積物3）下面から8世紀と推定される土坑が検出されている。

２区北部と２区南部から３区北部に分布する埋没旧河道は、大日川の流路跡であり、旧中州堆積物である砂礫またはシルト質砂礫を切る。2区北部では、2本の旧河道が上下に重なって存在する。下位の埋没旧河道は幅20m以上、上位のそれは幅14m以上で、深さはともに70cm以上である。下位の旧河道堆積物は黒褐色のシルト質砂礫（図27の堆積物8）で、礫は径3～6cmの亜角礫～亜円礫を主体とする。上位の埋没旧河道はこれを切って認められ、その堆積物は黒褐色や黒色、褐灰色を呈するシルト（図27の堆



1．耕土
2．暗灰黄色　シルト:砂が若干混入
3．褐灰色　　砂礫
4．黄褐色　　シルト
5．遺構埋土
6．褐灰色　　シルト
7．暗褐色　　シルト質砂礫:径2～6cmの亜角礫～亜円礫主体
8．褐灰色　　シルト
9．遺構埋土
10．灰黄褐色　砂質シルト
11．黄灰色　　シルト
12．黄灰色　　砂質シルト
13．暗黄灰色　シルト質砂礫:径4～12cmの亜角礫～亜円礫主体
14．黄灰色　　砂質シルト
15．暗黄灰色　砂礫:径5～27cmの亜角礫～亜円礫主体

図28　　神子曽遺跡3区における地質断面図

積物5～7）である。2区南部から3区北部にかけてみられる埋没旧河道は約30mの幅と1m以上の深さをもつ。旧河道堆積物は褐灰色のシルト質砂（図27の堆積物15）とその上のる褐灰色や黄灰色などの砂質シルトやシルト（図27の堆積物11～14・図28の堆積物10～12）である。

これらの他に、８区では他の遺構と同じ層位から小規模な旧河道が検出されている。これは幅が70～80cm、深さ約40cmである。この旧河道は、旧中州上面の低い箇所を東から西へ延び、そこにみられる暗褐灰色の砂質シルト（図29の堆積物12）を切る。旧河道堆積物は暗黄灰色の砂質シルト（図29の堆積物11）と黒褐色や暗灰色のシルト（図29の堆積物8～10）で、これらには主に弥生時代後期の遺物が混入する。

４．調査区付近における地形環境の変遷

調査区付近では、これまでに述べた事柄からみて次のような地形環境の変遷が考察される。

〔ステージ1〕　縄文時代中期以前、調査区付近では主に砂礫とシルト質砂礫の堆積に伴って扇状地が発達し、旧中州が形成された。その際、まず大きい礫からなる砂礫が堆積した。また、細粒堆積物がもたらされる場合もみられた。当時は、大日川が石田遺跡1区中央部や神子曽遺跡2区北部、２区南部から3区北部を西へ流下し、山路川が才門遺跡の調査区を北へ流れた。これらの流路は、それぞれ砂礫または細粒堆積物によって埋積された後、流れを変えて形成されたものであった。

〔ステージ2〕　流路の埋積とほぼ同じ時期あるいはそれ以降、旧中州上に数度の洪水が及んだ。これによって旧中州上面の低い箇所に砂質シルトやシルトが堆積した。旧中州上面の起伏が小さくなると、洪水堆積は旧中州の広い範囲に及ぶようになり、その大半と旧河道が細粒堆積物に薄く被覆された。神子曽遺跡1区では、こうしてできた埋没旧中州上で縄文時代中期に人間活動がみられた。また才門遺跡の調査区では、埋没した旧河道上に再び浅い流路が形成され、これは間もなく洪水堆積によって埋積された。

〔ステージ3〕　調査区付近には、遅くとも縄文時代中期から洪水の及ばない安定した環境が訪れた。この環境下で、神子曽遺跡１区や８区の埋没旧中州上では土壌化の著しいシルトが生成された。こうした環境が続いた弥生時代中期には、埋没旧中州上で人間生活がみられ、方形周溝墓が神子曽遺跡１区・６区・８区で築造された。また、神子曽遺跡１区では竪穴住居が建てられた。

〔ステージ4〕　弥生時代後期ころ、神子曽遺跡８区の埋没旧中州上に小規模な流路が形成された。これは細粒堆積物に埋積された旧中州上面の低い箇所を東から西へ延びるものであった。この流路は弥生時代後期の間に洪水がもたらした砂質シルトやシルトによって埋積された。

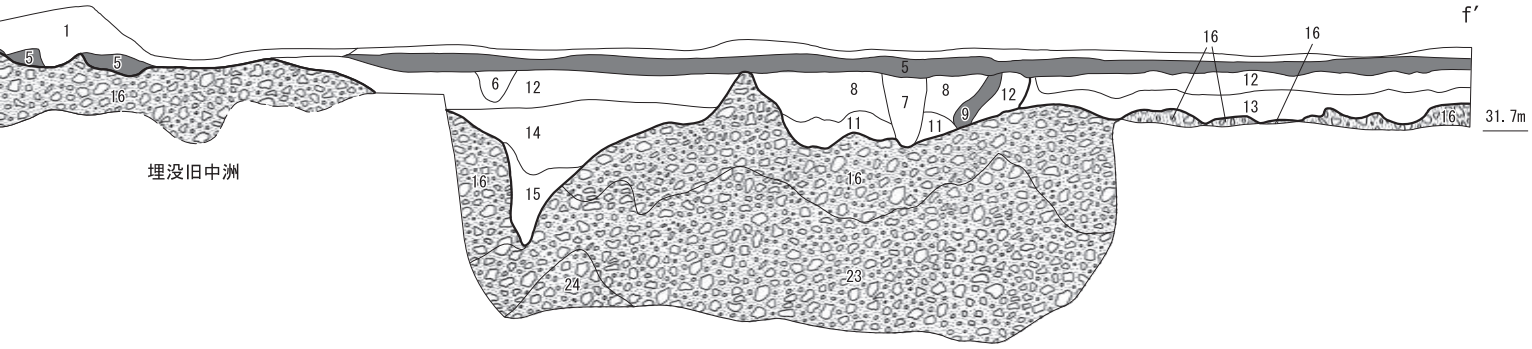
〔ステージ5〕　安定した環境は再び続き、こうした環境の下で8世紀や8～9世紀に掘立柱建物が建てられた。これは石田遺跡1区・2区と神子曽遺跡１区・６区・８区の埋没旧中州上でなされた。

〔ステージ6〕　調査区付近には、9世紀から14世紀までの間に洪水が発生し、シルトが埋没旧中州上や埋没旧河道上に堆積した。その後14～15世紀になると、神子曽遺跡1区の埋没旧中州上では掘立柱建物と鍛冶関連の施設がつくられた。

〔ステージ7〕　神子曽遺跡1区で14～15世紀に人間生活がみられた後、その付近では洪水によってシルトの堆積がなされた。

〔ステージ8〕　大日川と山路川が下方侵食を行い、それに伴って調査区付近の埋没扇状地は段丘化した。その後、洪水は河川沿いに形成された段丘崖下で発生し、現氾濫原が発達していった。

図 29　神子曽遺跡8区における地質断面図



砂礫・シルト質砂礫

砂質シルト・シルト

黒褐色のシルト

1．耕土
2．暗褐灰色　シルト質砂礫:径2～5cmの亜角礫～亜円礫主体
3．黒褐色　シルト
4．暗黄灰色　シルト
5．黒褐色　シルト
6．黒灰色　シルト(遺構埋土)
7．暗褐灰色　シルト(遺構埋土)
8．暗灰色　シルト
9．黒褐色　シルト
10．暗褐色　シルト:砂が若干混入
11．暗黄灰色　砂質シルト
12．暗褐灰色　砂質シルト
13．黄灰色　砂質シルト
14．暗黄褐色　シルト
15．黄灰色　砂質シルト
16．暗褐色　シルト質砂礫:径2～10cmの亜角礫～亜円礫主体
17．黄灰色　砂礫:径1～3cmの亜角礫～亜円礫主体
18．暗黄灰色　砂質シルト
19．黄灰色　シルト
20．暗黄灰色　シルト質砂礫:径5～9cmの亜角礫～亜円礫主体
21．黄灰色　砂質シルト
22．黄褐色　シルト
23．暗黄灰色　砂礫:径2～15cmの亜角礫～亜円礫主体
24．暗黄灰色　砂礫:径5～22cmの亜角礫～亜円礫主体
25．黄灰色　砂質シルト
26．暗黄灰色　砂礫:径5～25cmの亜角礫～亜円礫主体

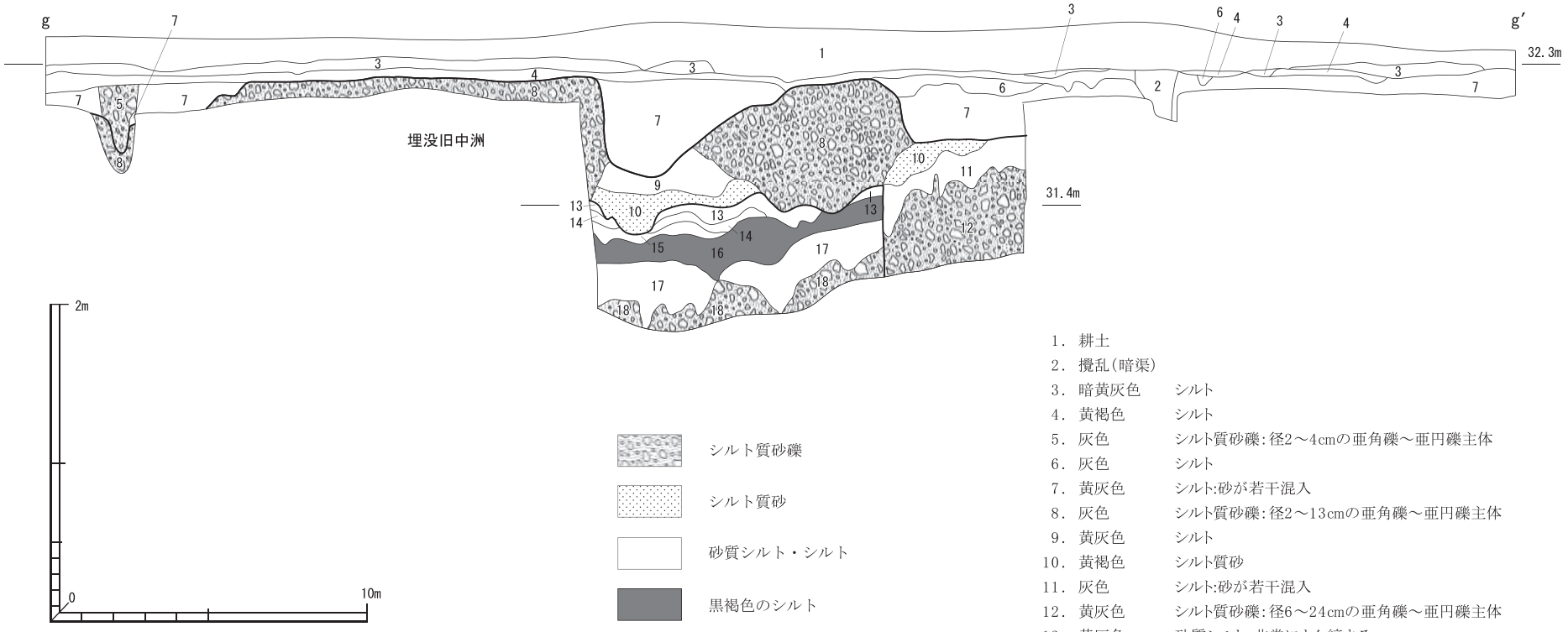
５．おわりに

才門遺跡、石田遺跡、及び神子曽遺跡の調査区は大日川と山路川の上流部に形成された完新世段丘に位置する。この完新世段丘は埋没した扇状地が段丘化したものである。段丘化の時期は9世紀以降と考えられ、15世紀以降の可能性が高い。

調査区付近には旧中州と旧河道が埋没した状態で分布する。埋没旧中州は、6ヶ所に分布し、才門遺跡の調査区南東部、石田遺跡の２区から１区北端と１区南端、ならびに神子曽遺跡の１区、２区中央部、３区南半部から9区で認められる。また埋没旧河道は、南東部を除く才門遺跡調査区、石田遺跡の1区中央付近、神子曽遺跡の２区北部と２区南部から3区北部にみられ、各遺跡の調査区間にも存在する。才門遺跡の調査区を通る埋没旧河道は、南から北へ延びる山路川の流路跡である。他は大日川の流路跡に該当し、東から西へ延びる。このような埋没旧中州と埋没旧河道は、縄文時代中期以前に形成され、そのほとんどが浅く埋没したものである。

調査区付近では、遅くとも縄文時代中期から8世紀ころにかけて洪水のほとんど発生しないほぼ安定した環境が現出していた。この間に起こった地形変化は、弥生時代後期に神子曽遺跡8区で小規模な流路が形成・埋積されたことだけであった。こうした環境下での人間活動は縄文時代中期、弥生時代中期、及び8世紀ころにみられた。とくに、弥生時代中期には神子曽遺跡1区に居住域、また神子曽遺跡の１区・６区・８区に方形周溝墓からなる墓域が形成され、8世紀ころには石田遺跡の１区・２区と神子曽遺跡の１区・６区・８区に居住域がつくられた。これらの人間活動にはいずれも埋没旧中州上が利用された。その主因は、埋没旧中州上が高燥で排水機能に優れていることにあったと考えられる。

９世紀以降、埋没旧中州上に及ぶ洪水が数度発生した。ただし、これらは断続的なもので、14～15世紀にはその間隙に神子曽遺跡1区の埋没旧中州上で掘立柱建物と鍛冶関連の施設がつくられた。この時期における埋没旧中州上の環境は縄文時代中期から8世紀ころまでのものとあまり変わっておらず、人間はそうした地形環境を利用して生活を行った。才門遺跡、石田遺跡、及び神子曽遺跡の調査区では、以上のような地形環境と人間活動の関係が認められるのである。



1．耕土
2．攪乱(暗渠)
3．暗黄灰色　シルト
4．黄褐色　シルト
5．灰色　シルト質砂礫:径2～4cmの亜角礫～亜円礫主体
6．灰色　シルト
7．黄灰色　シルト:砂が若干混入
8．灰色　シルト質砂礫:径2～13cmの亜角礫～亜円礫主体
9．黄灰色　シルト
10．黄褐色　シルト質砂
11．灰色　シルト:砂が若干混入
12．黄灰色　シルト質砂礫:径6～24cmの亜角礫～亜円礫主体
13．黄灰色　砂質シルト:非常によく 締まる
14．灰白色　シルト:非常によく 締まる
15．黄灰白色　砂質シルト:非常によく 締まる
16．黒褐色　シルト:非常によく 締まる
17．黄灰白色　砂質シルト:非常によく 締まる
18．黄灰色　シルト質砂礫:径3～10cmの亜角礫～亜円礫主体,
非常によく 締まる

図 30　神子曽遺跡9区における地質断面図

第８章　総括

本書は県道洲本南淡線の道路改良事業に伴い実施された才門遺跡、石田遺跡、神子曽遺跡、曽根遺跡の発掘調査報告書である。各遺跡の詳細については前章までに記載されているが、記述が重複することをおそれず、簡単にまとめてみたい。

才門、石田、神子曽の３遺跡は大日川の上流部に位置し、大日川が形成した扇状地が山路川により段丘化した地形上に立地している。南北に連なるこれらの遺跡では、谷状の地形を間に挟みながら、微高地状に遺構が営まれている。曽根遺跡についても、上記3遺跡からはやや離れているものの、立地としては同様である。

出土遺物の観点から見れば、第６章でも述べたように曽根遺跡出土の旧石器が特筆される。国府型ナイフ形石器と翼状剥片がともに出土していることから、淡路島南部における瀬戸内技法の展開を考える上で興味深い資料である。

本書で報告された最も古い遺構は神子曽遺跡で検出された縄文時代中期の廃棄土坑である。複数の土坑から土器片、石器、被熱礫、食物残滓が一括して投棄されており、住居跡といった直接居住に関わる遺構は見つかっていないものの、調査地の近傍に当該期の集落が営まれていたことはおおむね間違いないだろう。

これらの遺構から出土している土器はキャリパー形の器形を持ち、縄文を地文に半截竹管で文様を施すものが主体となっており、中期前半の船元Ⅲ式に位置付けられるものである。船元式についてはこれまでも淡路市佃遺跡でも良好な資料が確認されているものの、包含層からの出土であり、今回遺構からまとまって出土した意義は大きいと考える。

続いて集中的に遺構が営まれるのが弥生時代である。神子曽遺跡では複数地区で中期を中心とした遺構が認められる。種類としては周溝墓、木棺墓、土器棺墓といった埋葬遺構が多く、一定の間隔を空けて墓域が営まれている状況が確認できた。また、神子曽遺跡1区では竪穴住居跡を方形周溝墓が切っており、集落の中で居住域が墓域に変化している状況も認められる。また、周溝墓は形態が円形から方形に変化するとともに、出土した供献土器には中期中葉から中期後葉のものが認められることから、一定期間にわたって継続的に営まれた複数の群に分割できる可能性もある。才門遺跡、石田遺跡においても弥生時代の遺物が認められることから、調査区周辺に当該期の居住地点がいくつか営まれていた可能性が指摘できる。なお、これまで南あわじ地域で調査されている弥生時代中期の遺跡には木戸原遺跡、高萩遺跡などが挙げられるが、いずれも中期後葉を中心とするものが中心であり、神子曽遺跡で中期中葉の遺構群がまとまって報告されたことで、この地域の弥生時代社会を考える上で新たな資料を提供することとなった。

なお、調査区内に限れば、弥生時代の遺構には中期と後期の間に断絶があり、後期の遺構としては後期後半から古墳時代初頭に属すると考えられる流路や土器棺墓と思われる土器埋納土坑が散見されるだけとなる。

次に遺構と遺物が認められるのは奈良時代である。検出されている掘立柱建物群の中には、奈良時代のものが含まれている可能性もあるが、明確にはできなかった。遺物については、調査区全体で検出されている。立地の点から見ても、今回の調査区は淡路国府から律令期の大規模建物や製塩関係遺物が多く出土している九蔵遺跡を結ぶ経路上にあり、今後の調査により周辺で奈良時代の遺構が発見される可

能性は高い。

歴史時代の遺構・遺物が最後に集中するのが中世（14世紀～15世紀）である。今回報告する掘立柱建物の多くがこの時期に属すると考えている。神子曽遺跡の東に位置し、近年南あわじ市教育委員会が調査した久保ノカイチ遺跡でも同様に中世の建物群が検出され、この時期に当地域の開発が進んだことが判明している。また、14世紀半ば以降、淡路守護細川氏の尊崇を集めた賀集八幡神社の別当寺であった護国寺に残されている文書には、現在も賀集地内に残る地名が記された田畠の寄進記録が認められ、文献資料の面からも、在地国人層の勢力拡大や当地域の開発状況が伺われる。したがって、今回報告した掘立柱建物群もそうした歴史上の動向を反映して営まれた集落と考えられる。（鐵）

参考文献

南淡町教育委員会『岩谷遺跡発掘調査報告書』（1995）
南あわじ市教育委員会『高萩遺跡』（2011）
南あわじ市教育委員会『久保ノカチ遺跡』（2012）
南あわじ教育委員会『久保ノカチ遺跡Ⅱ』（2014）
間壁忠彦・間壁葭子『里木貝塚』倉敷考古館（1971）
篠宮正「東播磨地域における弥生土器編年」『弥生土器集成と編年－播磨編－』

報告書抄録

ふりがな	みこそいせき・いしだいせき・さいかどいせき・そねいせき
書　　名	神子曽遺跡・石田遺跡・才門遺跡・曽根遺跡
副 書 名	（主）洲本灘賀集線（阿万バイパス）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第468冊
編著者名	鐵 英記・村上 泰樹・森内 秀造・篠宮 正・藤田 淳
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所 在 地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号（兵庫県立考古博物館内） TEL 079－437－5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所 在 地	〒650－8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号 TEL 078－362－3784
発行年月日	平成26（2014）年3月31日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所 在 地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　TEL 079－437－5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
神子曽遺跡	南あわじ市賀集鍛治屋	28224	970067	34° 15′ 30″	134° 44′ 44″	20041124～20050318（2004216） 20031023～20031029（2003165）	4,785㎡ 152㎡	記録保存調査
石田遺跡			970066	34° 15′ 37″	134° 44′ 40″	20041122～20050121（2004217）	1,732㎡	
才門遺跡			970065	34° 15′ 43″	134° 44′ 36″	20041018～20050121（2004218）	824㎡	
曽根遺跡	南あわじ市北阿万筒井		970052	34° 14′ 49″	134° 44′ 45″	19971215～19971222（970389） 19981026～1998103（980170）	326㎡ 470㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神子曽遺跡	集落	縄文時代中期、弥生時代中期～後期、奈良時代、中世前期	廃棄土坑4、住居跡1、周溝墓18、木棺墓4、土器棺墓5、掘立柱建物15、土坑、溝	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄滓、羽口	縄文時代中期前半の集落、弥生時代中期中葉の周溝墓群、中世の鍛冶関連遺物
石田遺跡	集落	奈良時代	掘立柱建物2、溝、土坑	須恵器、土師器	
才門遺跡	集落	奈良時代	流路	須恵器、土師器	
曽根遺跡	集落	旧石器時代、平安時代、近世	溝、柱穴	国府型ナイフ形石器、翼状剥片、須恵器、土師器、陶磁器	国府型ナイフ形石器

要約

曽根遺跡出土の旧石器は、国府型ナイフ形石器と翼状剥片がともに出土していることから、淡路島南部における瀬戸内技法の展開を考える上で興味深い資料である。

神子曽遺跡で検出された縄文時代中期の廃棄土坑から出土している土器はキャリパー形の器形を持ち、縄文を地文に半截竹管で文様を施すものが主体となっており、中期前半の船元Ⅲ式に位置付けられるものである。船元式についてはこれまでも島内で資料が確認されているものの、今回遺構からまとまって出土した意義は大きいと考える。

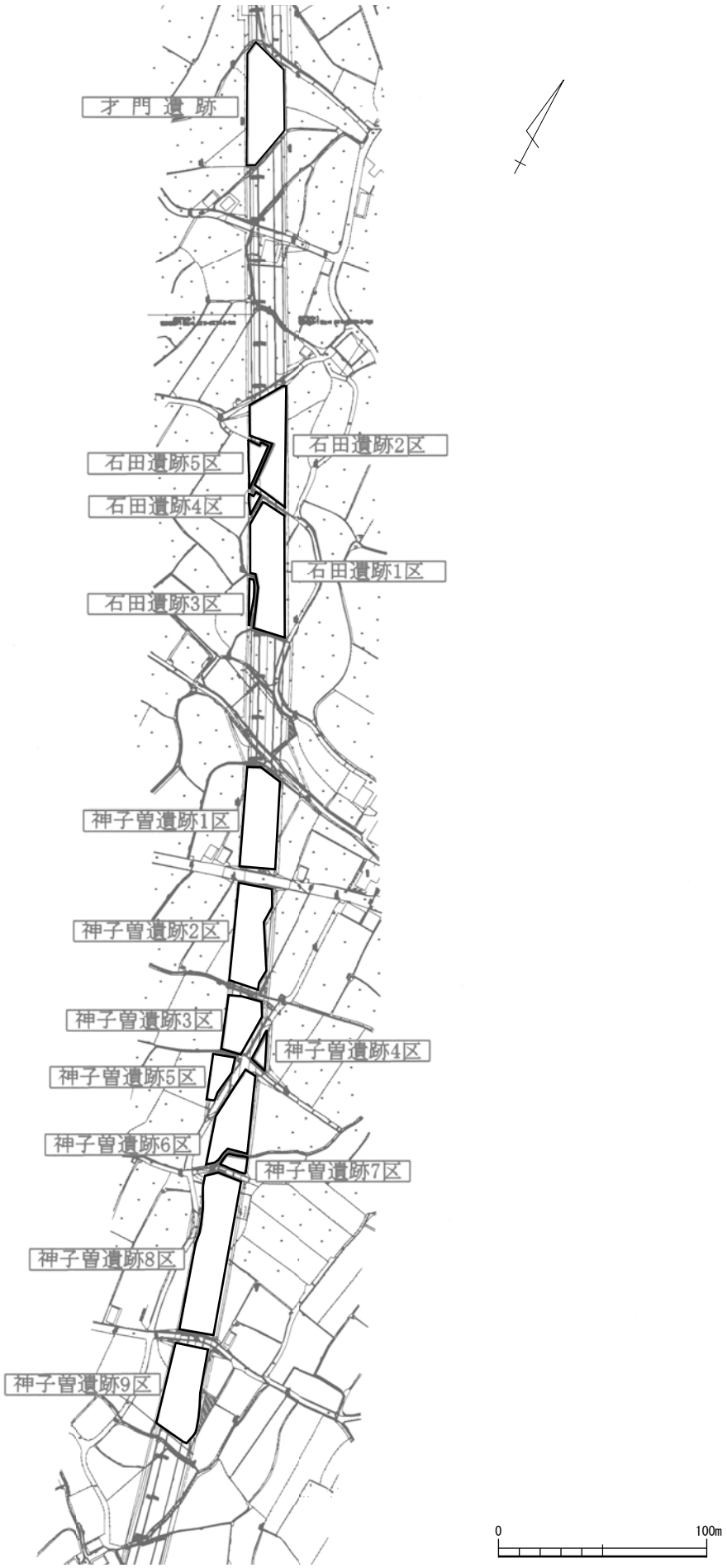
弥生時代では、神子曽遺跡で複数地区で中期を中心とした遺構が認められる。種類としては周溝墓、木棺墓、土器棺墓といった埋葬遺構が多く、集落の中で居住域が墓域に変化している状況も認められる。また、周溝墓から出土した供献土器には中期中葉を中心としており、この地域の弥生時代社会を考える上で新たな資料を提供することとなった。

奈良時代ではいくつか掘立柱建物があり、遺物は各遺跡の調査区全体で検出されている。立地の点から見ても、今回の調査区は淡路国府から律令期の大規模建物や製塩関係遺物が多く出土している九蔵遺跡を結ぶ経路上にあり、今後の調査により周辺で奈良時代の遺構が発見される可能性は高い。

中世（13世紀～14世紀）も遺構が多い。当時、淡路国の守護所は国府周辺に置かれており、三原平野は前代に引き続き淡路の中心であった。また、文献上は南北朝の抗争や在地国人層の勢力拡大が何われる時代であり、今回報告した掘立柱建物群もそうした歴史上の動向を反映して営まれたものであろう。

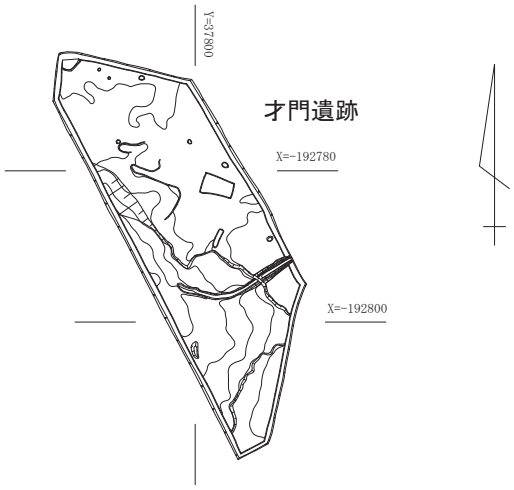
図　　版

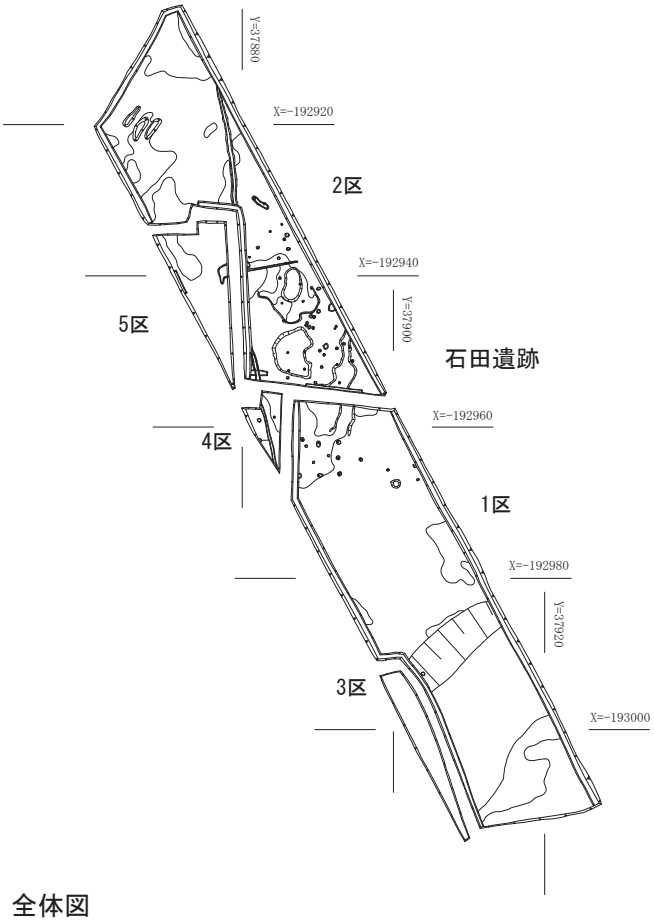
図版1　才門遺跡・石田遺跡・神子曽遺跡



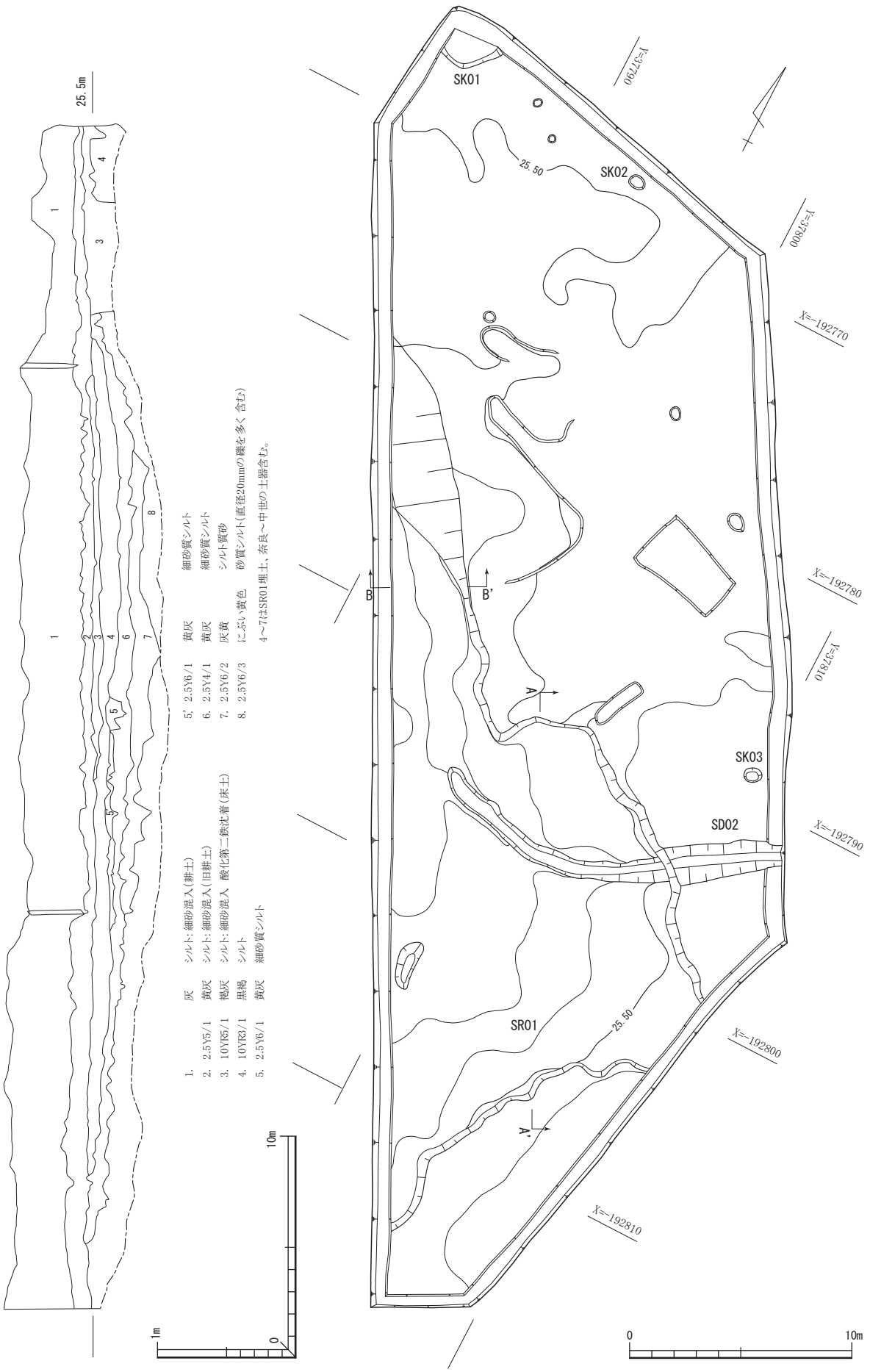
調査区位置図

図版２　才門遺跡・石田遺跡　遺構



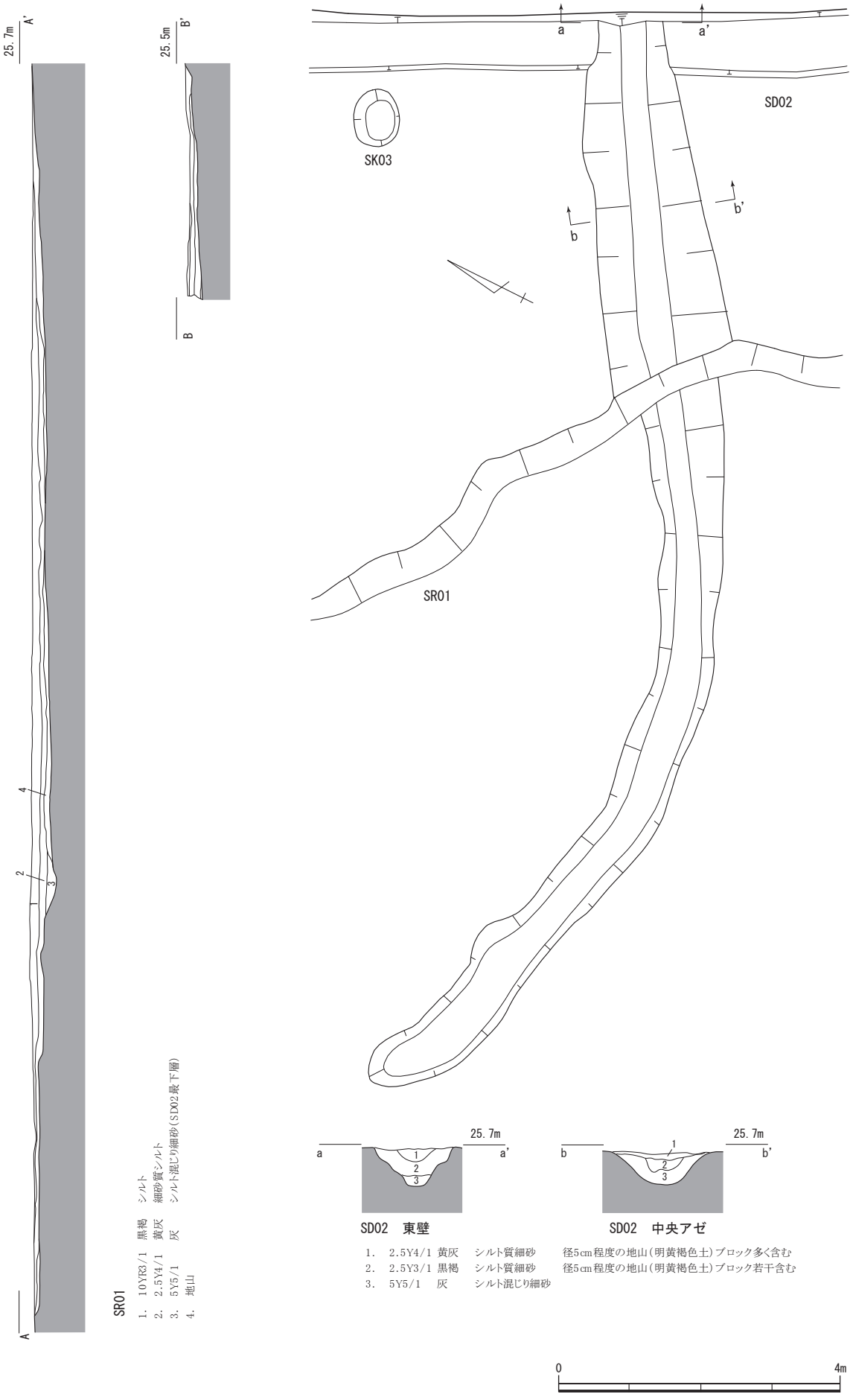


全体図

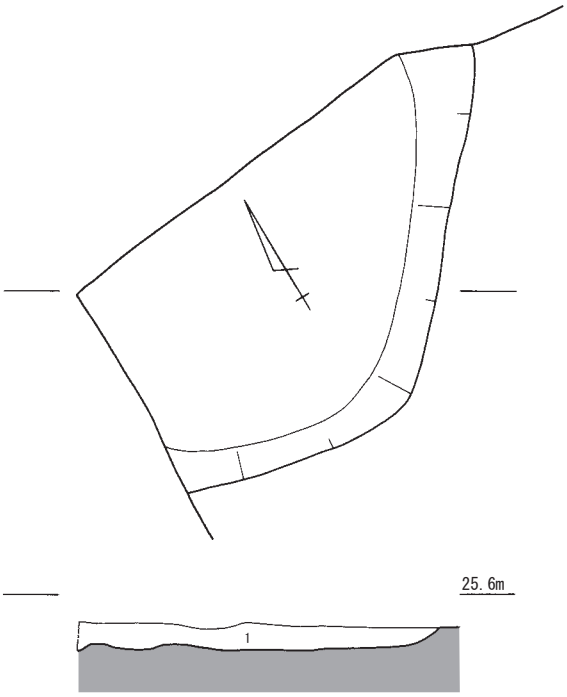


1.　灰　シルト：細砂混入（耕土）
2.　2.5Y5/1　黄灰　シルト：細砂混入（旧耕土）
3.　10YR5/1　褐灰　シルト：細砂混入　酸化第二鉄沈着（床土）
4.　10YR3/1　黒褐　シルト
5.　2.5Y6/1　黄灰　細砂質シルト
5'.　2.5Y6/1　黄灰　細砂質シルト
6.　2.5Y4/1　黄灰　細砂質シルト
7.　2.5Y6/2　灰黄　シルト質砂
8.　2.5Y6/3　にぶい黄色　砂質シルト（直径20mmの礫を多く 含む）
4～7はSR01埋土、奈良～中世の土器含む。

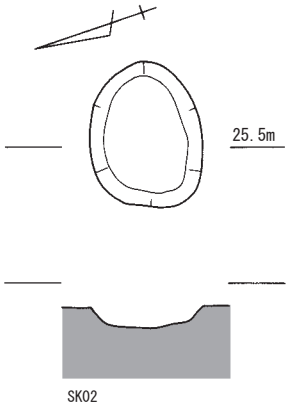
調査区全体図・土層断面図


25.7m
A'
A
25.5m
B'
B
SR01
1. 10YR3/1 黒褐 シルト
2. 2.5Y4/1 黄灰 細砂質シルト
3. 5Y5/1 灰 シルト混じり細砂(SD02最下層)
4. 地山
SK03
SD02
SR01
a
a'
b
b'
25.7m
SD02 東壁
25.7m
SD02 中央アゼ
1. 2.5Y4/1 黄灰 シルト質細砂 径5cm程度の地山(明黄褐色土)ブロック多く含む
2. 2.5Y3/1 黒褐 シルト質細砂 径5cm程度の地山(明黄褐色土)ブロック若干含む
3. 5Y5/1 灰 シルト混じり細砂
0
4m

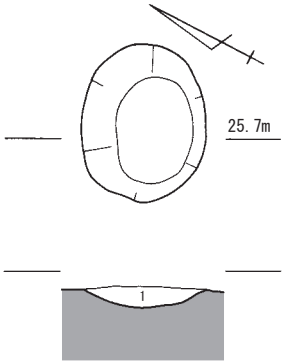
遺構平面図・断面図1



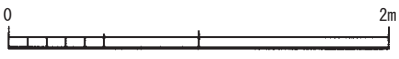
SK01
1. 10YR4/2　灰黄褐　シルト混じり細砂　径5cm程度の地山（明黄褐色土）ブロック含む



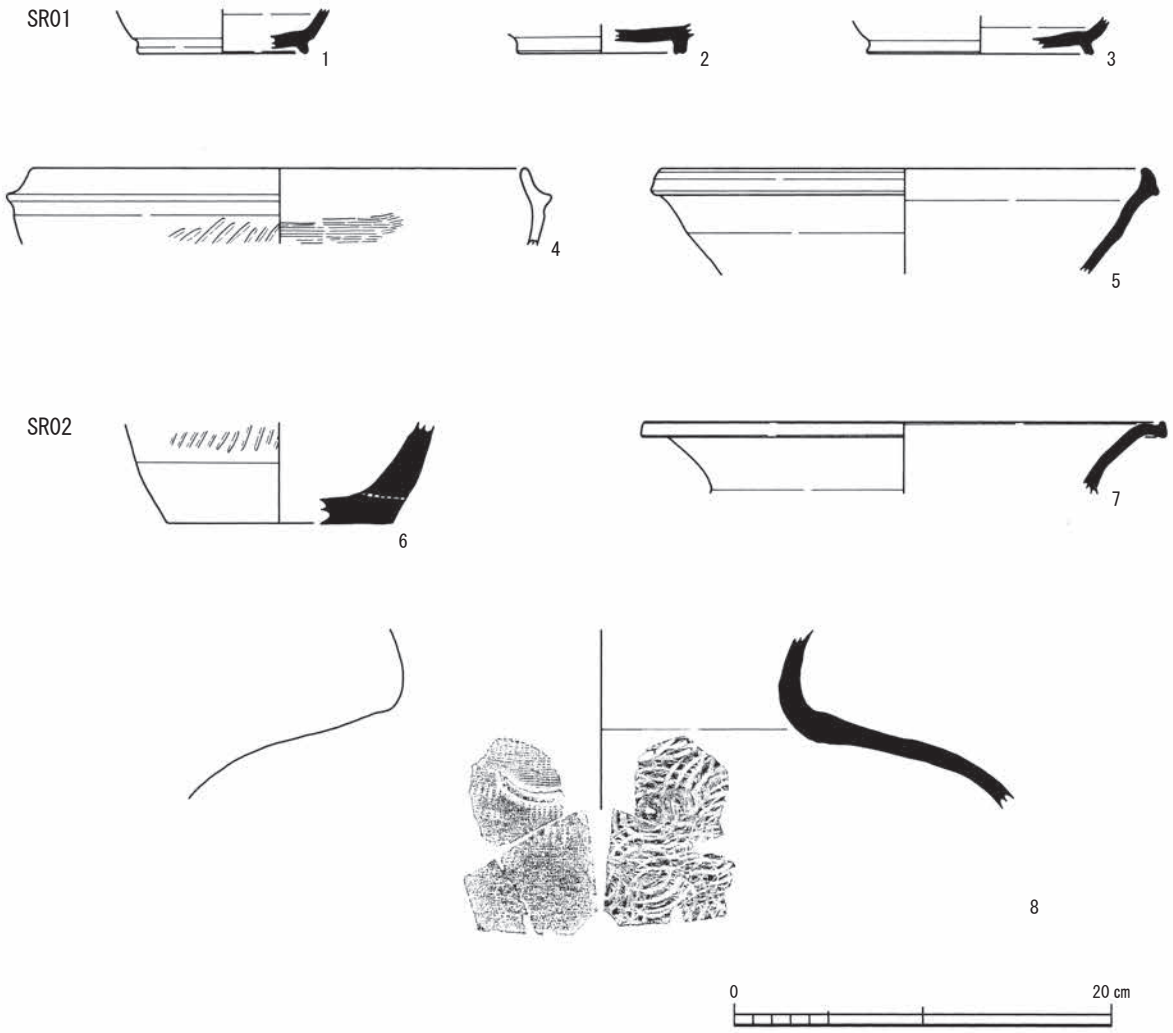
SK02

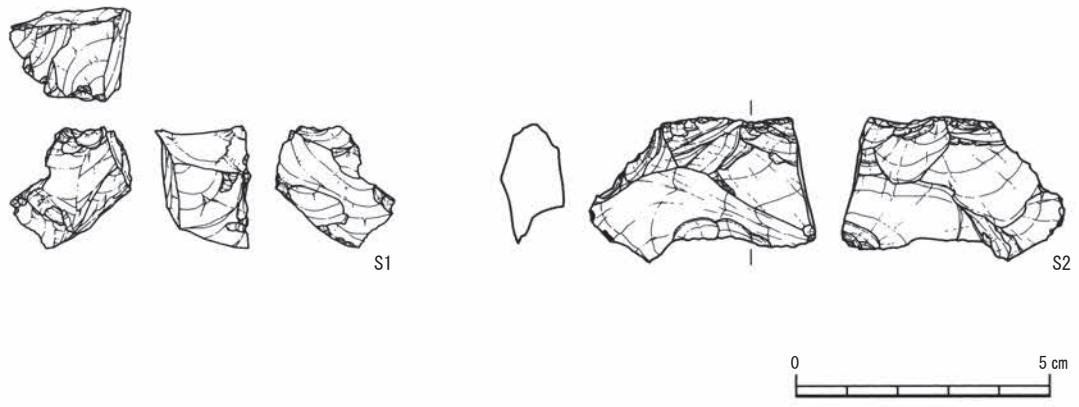


SK03
1. 10YR1.7/1　黒　シルト質細砂（炭・焼土含む）



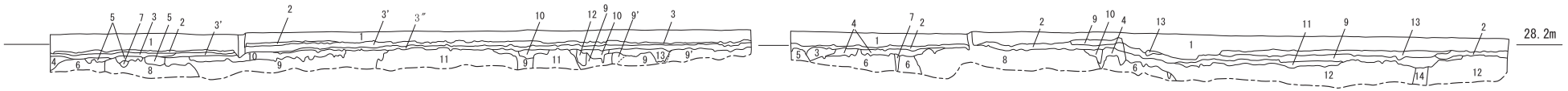
遺構平面図・断面図２





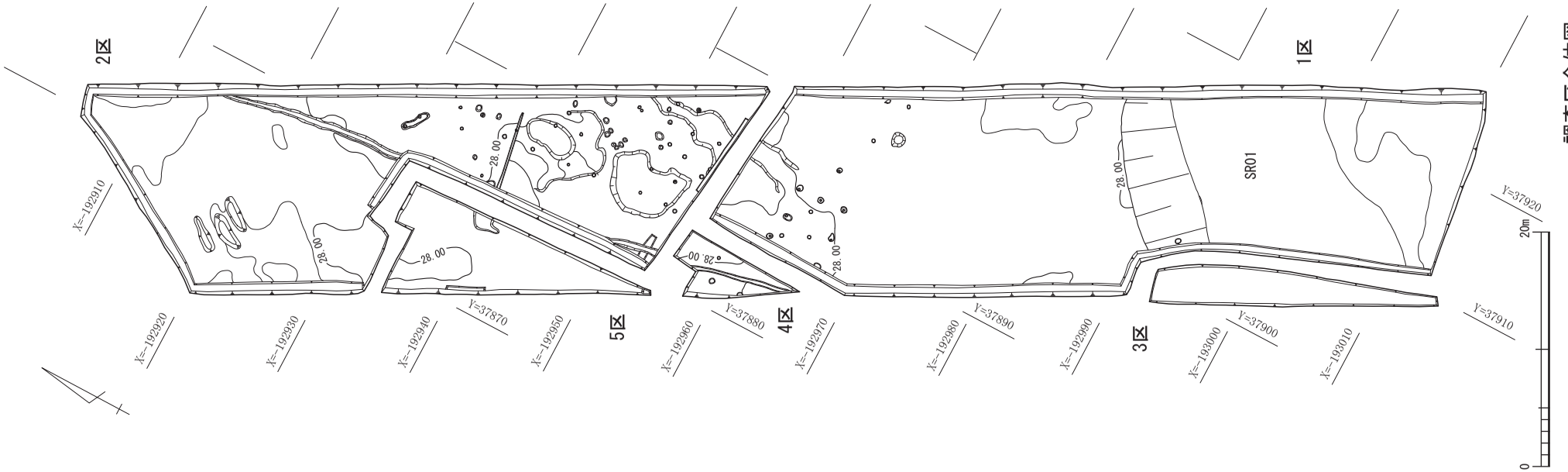
出土遺物

図版7　石田遺跡　遺構

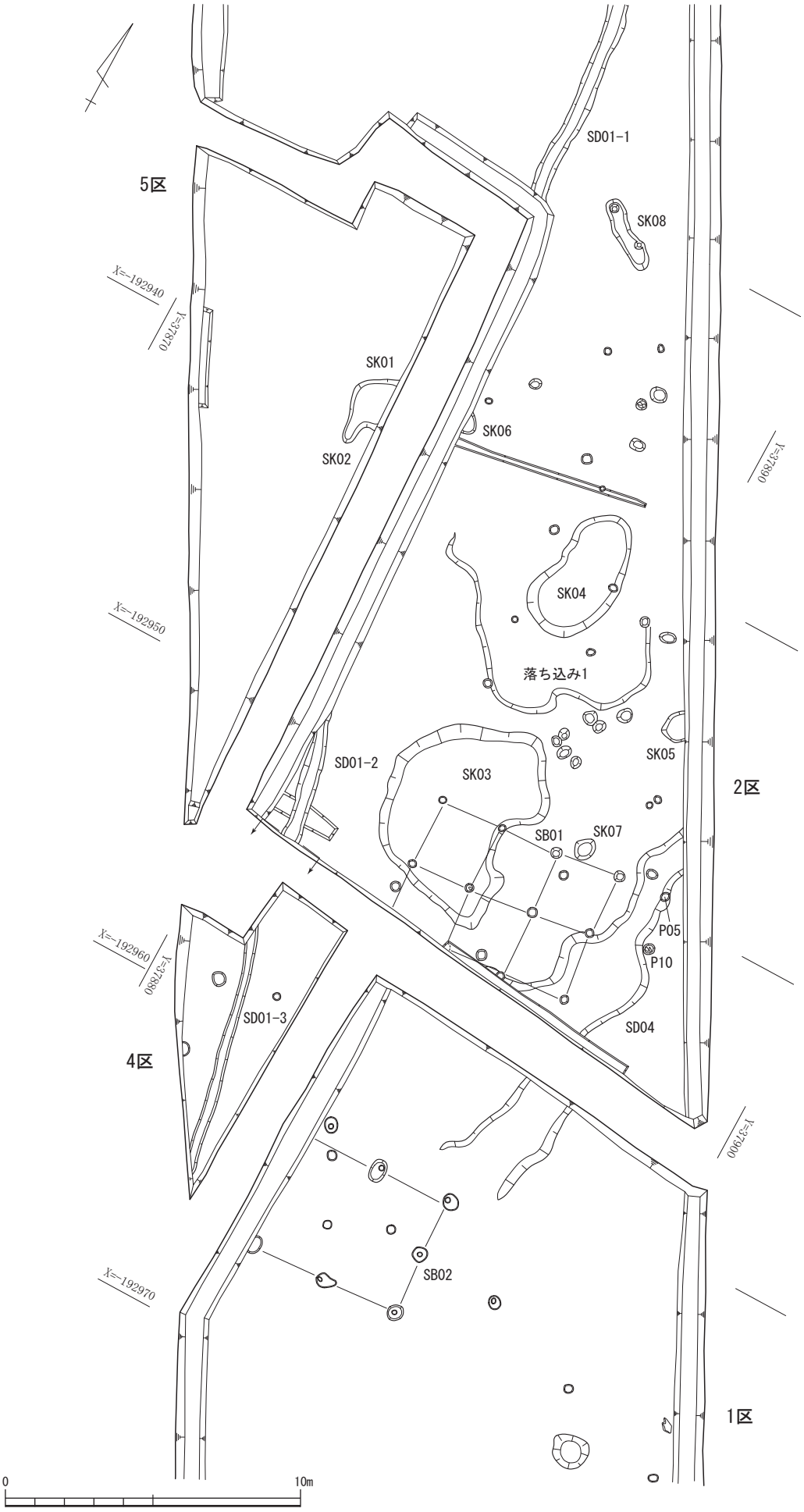


1. 現耕土
2. 2.5Y5/1 黄灰 シルト:細砂混入
3. 2.5Y6/2 灰黄 シルト:細砂混入(酸化第二鉄含む)
3'. 2.5Y6/6 明黄灰 シルト:細砂混入(酸化第二鉄含む)
3''. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト:細砂混入(酸化第二鉄含む)
4. 2.5Y6/2 灰黄 シルト混じり細砂
5. 2.5Y4/1 黄灰 シルト(直径5cm程度の礫を含む)
6. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト混じり砂礫(直径3～10cmの亜円礫・亜角礫が主体、最大23cm)
7. 5Y5/2 灰オリーブ シルト質細砂
8. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混じり砂礫(直径3～10cmの亜円礫・亜角礫が主体、最大23cm)
9. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂質シルト
9'. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混じり砂礫(直径2～9cmの亜円礫・亜角礫が主体、最大17cm)
10. 2.5Y6/2 灰黄 シルト:細砂混入
11. 5Y5/2 灰オリーブ 砂礫(直径3～15cmの亜円礫が主体、最大27cm)
12. 10YR3/1 黒褐 シルト混じり細砂(SK05)
13. 2.5Y7/2 灰黄 シルト:細砂混入

1. 現耕土
2. 10YR6/8 明黄灰 シルト:細砂混入
3. 2.5Y6/1 黄灰 シルト混じり砂礫(直径5～12cmの亜円礫・亜角礫が主体)
4. 2.5Y7/2 灰黄 シルト:砂混入
5. 10YR5/1 褐灰 シルト混じり砂礫(直径10cm以下の礫を含む)
6. 2.5Y4/6 にぶい黄 シルト質細砂
7. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質細砂(炭化物含む、遺構埋土)
8. 2.5Y4/1 黄灰 シルト混じり砂礫(直径3～12cmの亜円礫が主体、最大25cm)
9. 2.5Y6/2 灰黄 砂質シルト
10. 10YR4/1 褐灰 シルト混じり砂礫(直径3cm以下の礫を含む)
11. 10YR3/1 黒褐 砂質シルト(直径3cm以下の礫を含む)
12. 10YR4/1 褐灰 シルト混じり砂礫(直径1～5cmの亜円・亜角礫が主体、最大13cm)
13. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト:細砂混入
14. 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト混じり砂礫(直径1cm以下)

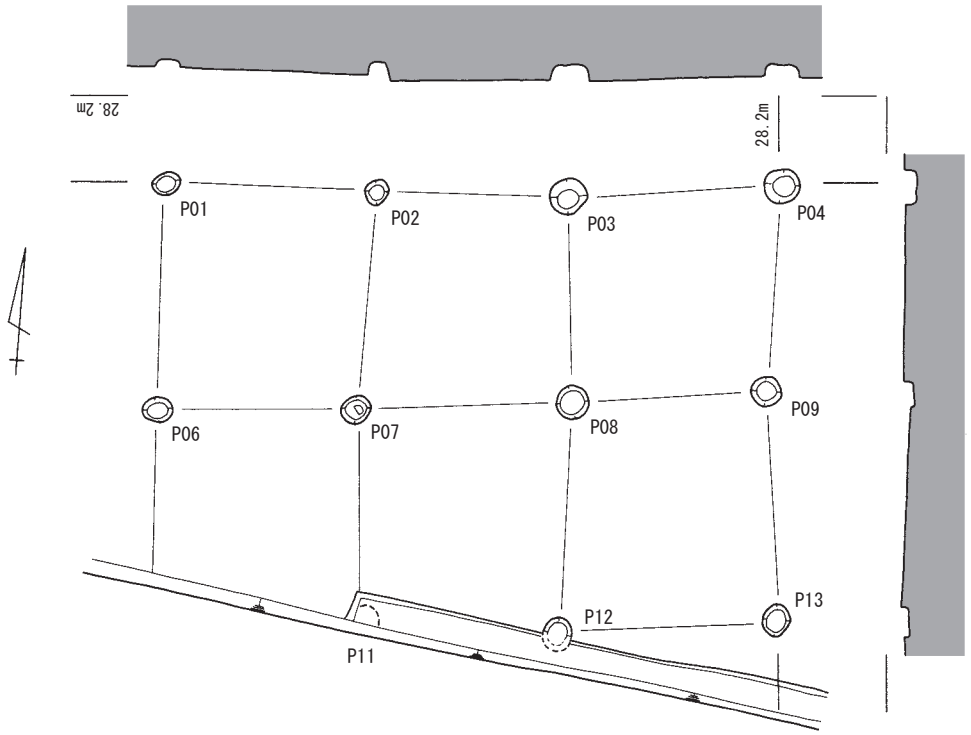


調査区全体図・土層断面図

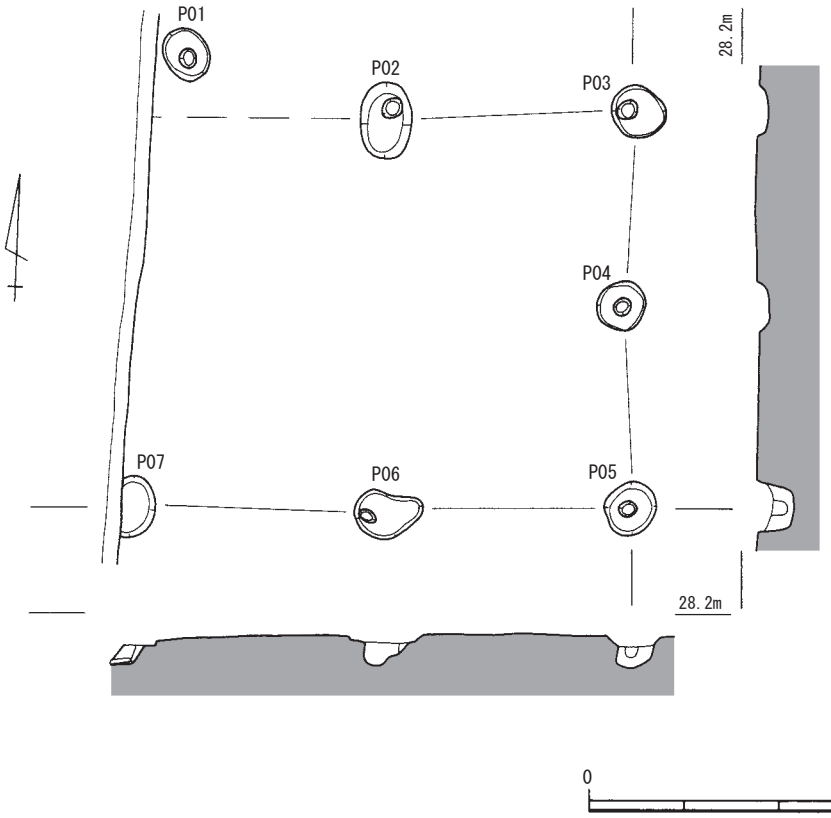

SD01-1
5区
SK08
X=-192940
Y=-37870
SK01
SK06
SK02
Y=-37890
SK04
X=-192950
落ち込み1
SD01-2
SK03
SK05
2区
SB01
SK07
X=-192960
Y=-37880
P05
P10
SD01-3
SD04
4区
Y=-37900
SB02
X=-192970
1区
0
10m

遺構配置図

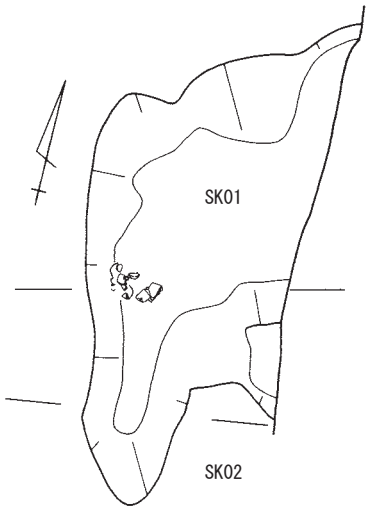
SB01

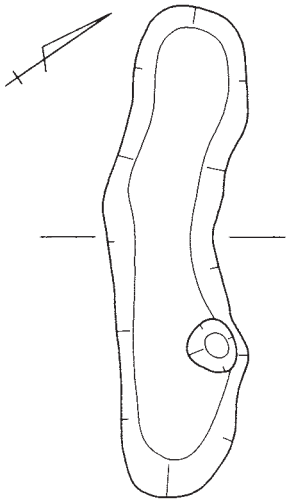


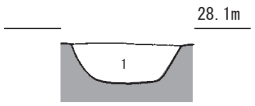
SB02



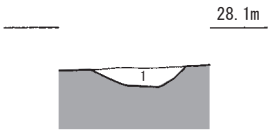
遺構平面図・断面図１



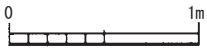


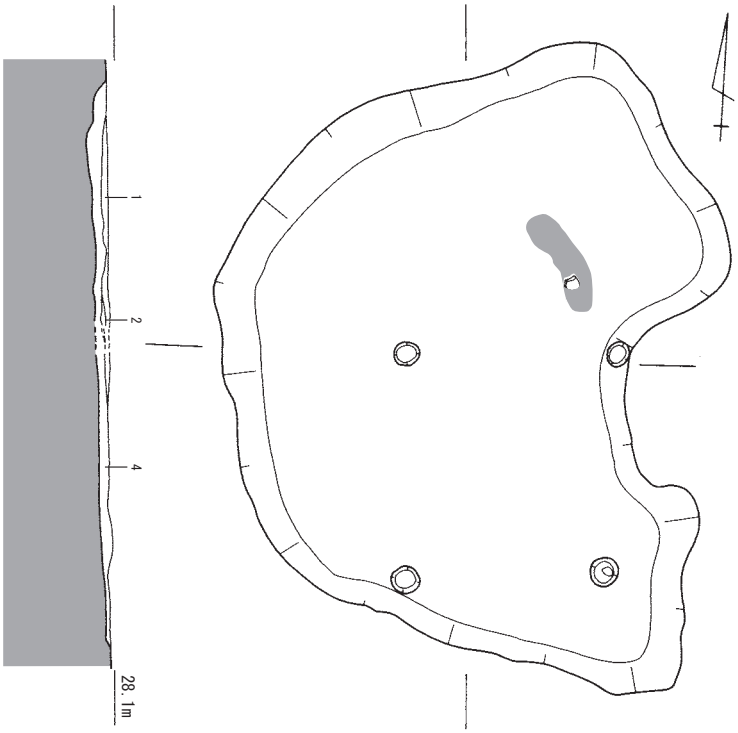


SK08
1.　2.5Y4/2　黄灰　シルト混じり細砂
（直径 5cm 以下の礫を含む）

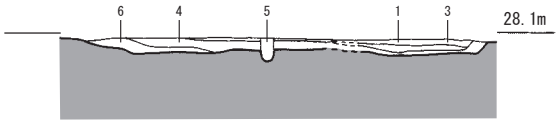


SK02
1.　2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混じり細砂（直径 3cm 程度の礫若干含む）

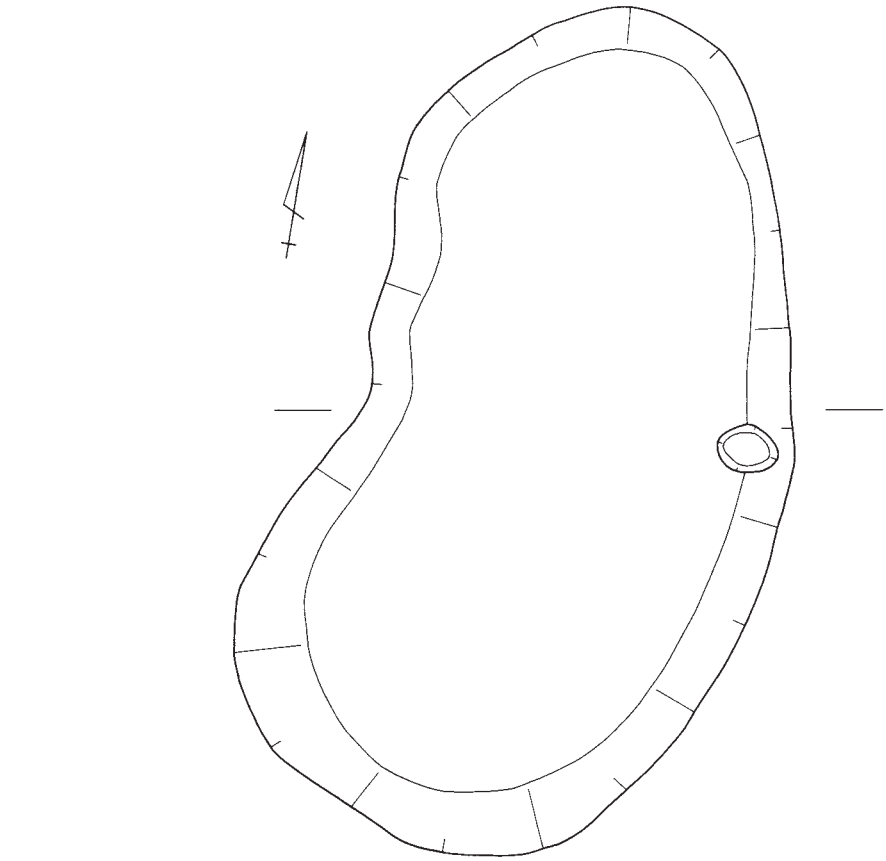




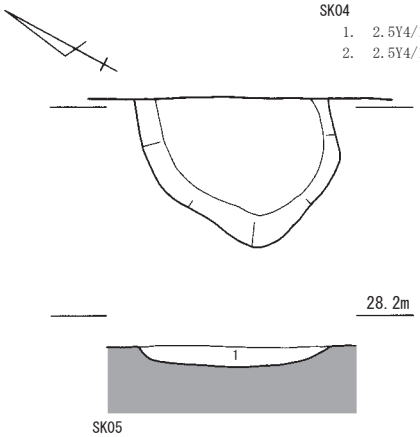
SK03
1.　5Y5/1　灰　シルト混じり細砂
2.　2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混じり細砂（地山の明黄褐色土ブロック含む）
3.　2.5Y4/1　黄灰　シルト混じり細砂（炭化物含む）
4.　2.5Y6/2　灰黄　シルト混じり細砂（直径 5cm 程度の礫若干含む）
5.　5Y4/1　灰　シルト混じり細砂
6.　2.5Y6/2　灰黄　シルト混じり細砂



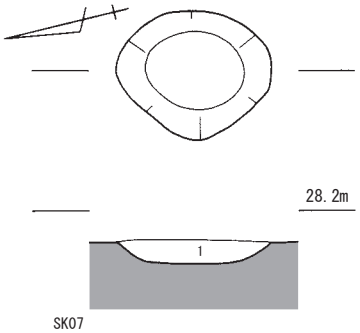
遺構平面図・断面図 2



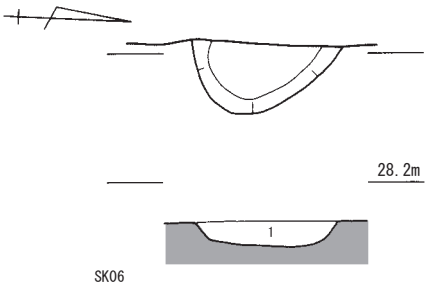
SK04
1. 2.5Y4/1　黄灰　シルト混じり細砂（炭化物若干含む）
2. 2.5Y4/1　黄灰　シルト混じり細砂



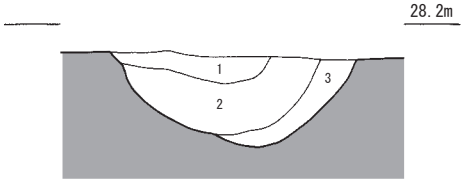
SK05
1. 10YR3/1　黒褐　シルト混じり細砂



SK07
1. 2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混じり細砂



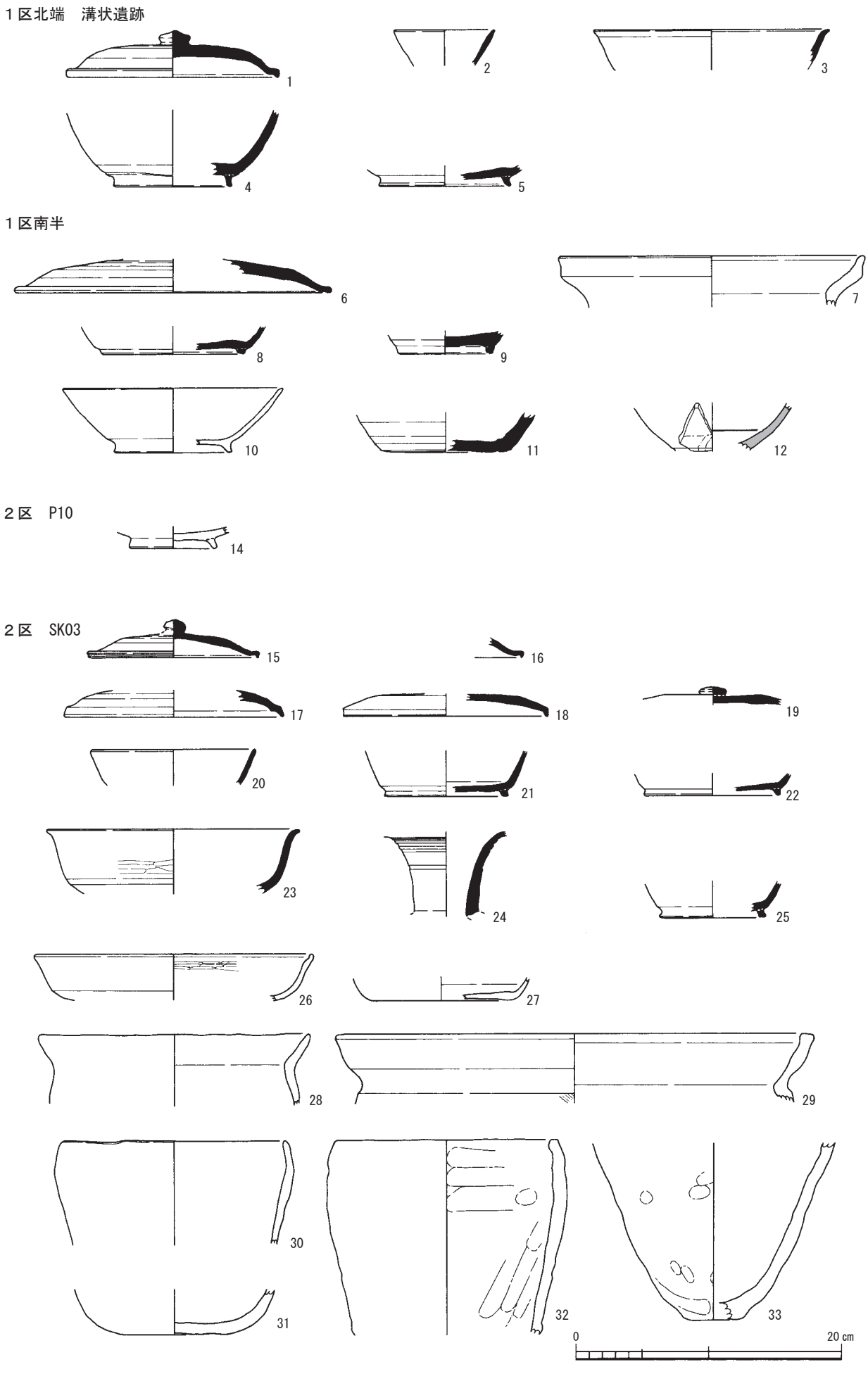
SK06
1. 2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混じり細砂（直径5cm以下の礫を含む）



SD01-2
1. 2.5Y4/1　黄灰　　シルト混じり細砂
2. 10YR3/1　黒褐　　シルト質細砂
3. 2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混じり細砂

遺構平面図・断面図 3

図版12 石田遺跡 遺物



出土遺物１